

# 今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市大字拾六町所在の遺跡群

第 1 集

1 9 7 0

福岡県教育委員会

# 今宿バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

福岡市大字拾六町所在の遺跡群

第 1 集

## 序

この報告書は、一般国道 202 号線今宿バイパス予定路線決定の為に、九州地方建設局から委託を受けて、福岡県教育委員会が行った予備調査の記録である。

車輛渋滞の緩和と福岡市郊外の市街地化を計るための国道建設事業と文化財保護との関連という複雑な問題の間に立って苦慮する現状であり、この報告は決して満足のゆく調査結果を表したものではありませんが、本報告書を通して文化財に対する関心を深める人が一人でもおれば、それは望外の喜びとするものであります。

昭和 45 年 3 月 31 日

福岡県教育委員会教育長

吉 久 勝 美

## 例 言

1. 本書は、昭和44年度8月～10月及び12月に九州地方建設局から委託されて、福岡県教育委員会が、今宿バイパスの路線決定の為に予備調査をした拾六町遺跡群の調査報告書である。
2. 本書の執筆は次のとおりである。

第1	.....	浜田信也
第2	.....	浜田信也
第3	.....	酒井仁夫
第4	.....	浜田信也
第5	.....	副島邦弘
第6	.....	浜田信也

3. 掲載の写真は、すべて松岡史が撮影したものである。なお、実測図の作成は、挿図目次に示すとおりである。製図は執筆担当者がそれぞれ分担した。
4. 本書の編集は、浜田信也が行った。



# 本文目次

第1	序 説	
1	はじめに	2
2	拾六町遺跡群の位置と環境	3
第2	湯 納 遺 跡	5
第3	宮の前遺跡E地点	14
第4	高 崎 古 墳 群	27
第5	大 又 遺 跡	71
第6	総 括	89

## 図 版 目 次

### 湯 納 遺 跡

- 図版 1 1 住居址（東より）  
2 住居址（南より）
- 2 1 ジョッキ形土器及び青銅製鋤先出土状況  
2 左 ジョッキ形土器、右 古式土師器
- 3 1 上段 青銅製鋤先、下段 鉄製手鎌  
2 左及び中 石錘、右 砥石

### 宮 の 前 遺 跡

- 図版 4 1 宮の前遺跡遠望（高崎1号墳より）  
2 宮の前遺跡遠望（西より）
- 5 1 丘陵鞍部の遺構群（西より）  
2 E・Gグリッドの遺構（西より）
- 6 1 H-46・47グリッドの遺構（西北より）  
2 H-49グリッド遺構（西北より）
- 7 1 J-49グリッドの遺構（西北より）  
2 L-49グリッドの遺構（西北より）
- 8 1 P-49グリッドの土器出土状態（東南より）  
2 N-49グリッドの遺構（東南より）
- 9 1 H・N-58・59グリッドの土器出土状況  
2 同 上
- 10 1 L-58グリッド出土の器台  
2 左 P-49出土の高坏、右 L-58出土の器台
- 11 1 左 H-58出土の壺形土器、右 P-49出土の鉢形土器  
2 砥 石
- 12 1 手捏土器  
2 紡錘車
- 13 1 石 錘  
2 石 錘
- 14 1 石 錘

- 2 砥石
- 15 1 右 鉈、左 鉄鍬
- 2 磨製石斧
- 16 1 左 石庖丁、右 スクレイパー
- 2 鉄滓

## 高崎古墳群

- 図版 17 1 高崎古墳群遠景
- 2 高崎1号、2号墳（中央後方が1号墳）
- 18 1 高崎1号墳（南より）
- 2 高崎1号墳石室
- 19 1 高崎2号墳（南より）
- 2 高崎2号墳石室（東より）
- 20 1 高崎2号墳封土の状態と掘り方
- 2 高崎2号墳奥壁側掘り方
- 21 1 高崎2号墳南側掘り方
- 2 高崎2号墳掘り方壁に残る用具の痕跡
- 22 1 高崎2号墳遺物出土状況
- 2 高崎2号墳遺物出土状況（奥壁側より）
- 23 1 高崎2号墳単鳳環頭と切子玉出土状況
- 2 高崎2号墳馬具の出土状況
- 24 1 高崎2号墳出土の杏葉
- 2 高崎2号墳出土の雲珠と辻金具
- 25 1 高崎2号墳出土の轡と鏡板
- 2 高崎2号墳出土の轡と兵庫鎖
- 26 1 高崎2号墳出土の直刀
- 2 高崎2号墳出土の刀子
- 27 1 高崎2号墳出土の鉄鍬
- 2 高崎2号墳出土の鉄鍬
- 28 1 高崎2号墳出土の単鳳環頭
- 2 高崎2号墳出土の耳環、玉類、用途不明金具（中央右）
- 29 1 高崎2号墳出土の鉄鉾、石突、鉄製留金
- 2 高崎2号墳出土の有蓋脚付椀
- 30 1 高崎2号墳出土の有蓋足付壺
- 2 高崎2号墳出土の有蓋脚付埴
- 31 高崎2号墳出土の須恵器

- 32 高崎 2 号墳出土の須恵器
- 33 高崎 2 号墳出土の須恵器
- 34 高崎 2 号墳出土の須恵器
- 35 高崎 2 号墳出土の須恵器
- 36 高崎 2 号墳出土の須恵器
- 37 高崎 2 号墳出土の須恵器
- 38 1 高崎 3 号墳墳丘（北より）  
2 高崎 3 号墳（羨門部より）
- 39 1 高崎 3 号墳羨道部遺物と閉塞石の状況（石室内より）  
2 高崎 3 号墳羨道部遺物出土の状況（石室内より）
- 40 1 高崎 4 号墳の現状  
2 高崎 4 号墳石室（南より）
- 41 1 高崎 4 号墳羨道部遺物出土状況  
2 高崎 4 号墳遺物と閉塞石出土状況
- 42 高崎 3、4 号墳出土の須恵器
- 43 1 高崎 4 号墳石室内出土の玉類  
2 窯状遺構

### 高崎大又遺跡

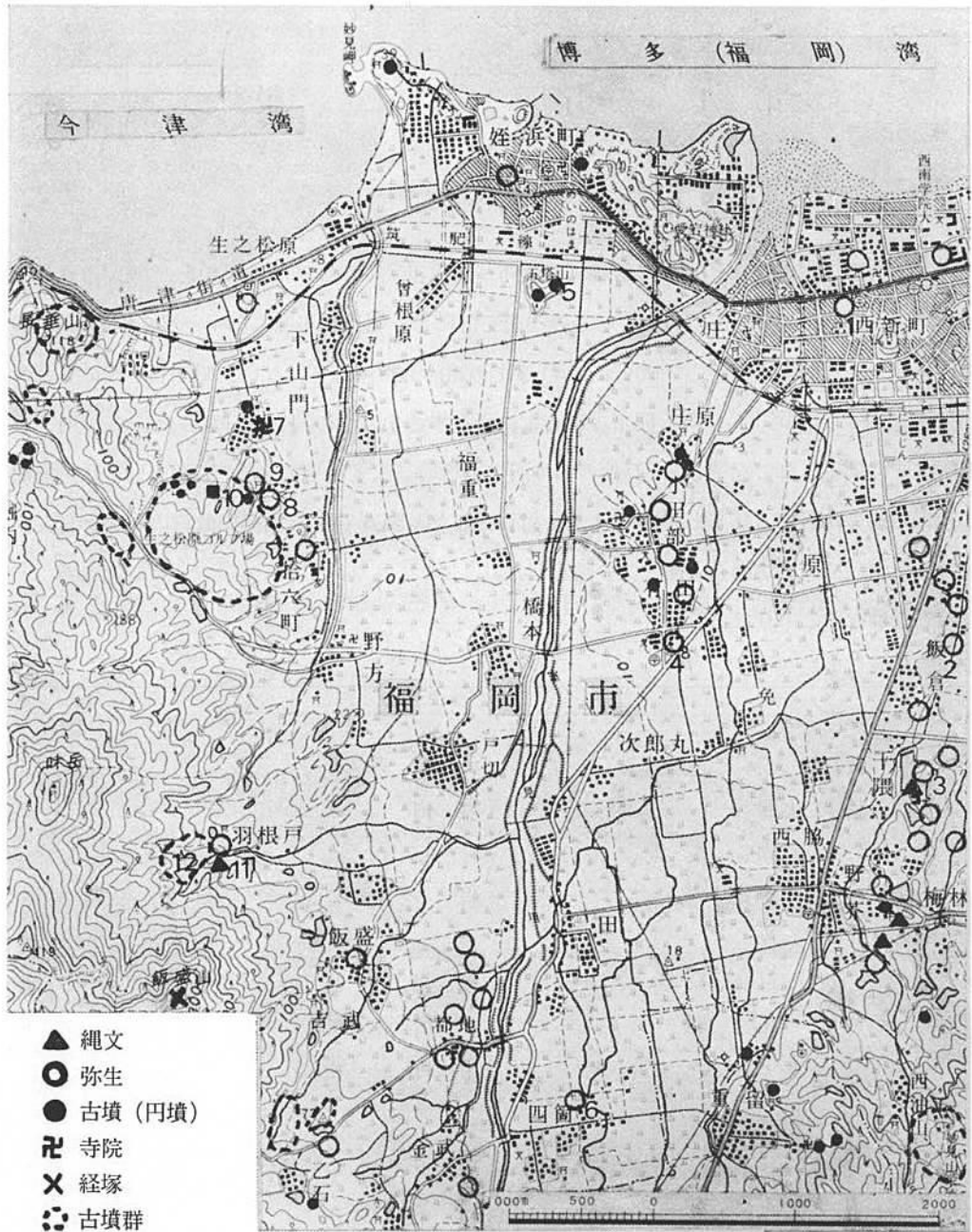
- 図版 44 1 高崎大又遺跡遠景（高崎 2 号墳より）  
2 発掘区全影（高崎 2 号墳より）
- 45 1 遺構を南から（G-7 区より）  
2 遺構を西から（O-16 区より）
- 46 1 第 1 号住居址（東より）  
2 第 1 号住居址断面（東より）
- 47 1 第 2 号住居址（西から）  
2 第 3 号住居址（北から）
- 48 1 第 3 号住居址（南から）  
2 第 3 号炉址東側砥石出土状況
- 49 1 掘立柱出土状況（P-9 区）  
2 遺構及び遺物出土状況（P-14 区）
- 50 1 P-14 区出土遺物  
2 L-7 区溝出土遺物
- 51 1 P-14 区出土遺物  
2 出土遺物 高杯
- 52 1 出土遺物 石器  
2 第 4 号住居址出土の砥石

## 挿 図 目 次

第 1 図	早良平野周辺遺跡分布図（国土地理院地形図 1 : 50,000、浜田作成）	1
第 2 図	調査地点分布図（九州地方建設局地形図 1 : 3,000、酒井 作成）	4
第 3 図	湯納遺跡住居址実測図（酒井、川述 測）	7
第 4 図	湯納遺跡 1 号住居址出土土器片実測図（酒井 測）	8
第 5 図	湯納遺跡出土土器実測図（浜田 測）	8
第 6 図	湯納遺跡出土金属器実測図（浜田 測）	10
第 7 図	湯納遺跡出土石器実測図（浜田 測）	12
第 8 図	宮の前遺跡遺構及び層位図（酒井、川述 測）	15
第 9 図	EH-46・48 グリッド遺構実測図（副島 測）	16
第 10 図	EH-46・47 グリッド遺物実測図（酒井 測）	16
第 11 図	EE・EG-49 グリッド遺構及び遺物実測図（副島、酒井 測）	17
第 12 図	EH-49 グリッド遺構及び遺物実測図（副島、酒井 測）	18
第 13 図	EJ-49 グリッド遺構及び遺物実測図（酒井、光枝 測）	19
第 14 図	鉢実測図（酒井 測）	19
第 15 図	EL-49 グリッド遺構及び遺物実測図（酒井、光枝 測）	19
第 16 図	EL-49 グリッド出土遺物実測図（酒井、光枝 測）	20
第 17 図	EN-49 グリッド遺構実測図（酒井、川述 測）	20
第 18 図	EP-49 グリッド遺構及び遺物実測図（酒井、川述 測）	21
第 19 図	EH-51 グリッド遺構及び遺物実測図（副島、酒井 測）	22
第 20 図	EH~EN-58 グリッド出土遺物実測図（酒井 測）	23
第 21 図	EH~EN-58 グリッド出土遺物実測図（酒井 測）	24
第 22 図	EH~EN-58 グリッド出土遺物実測図（酒井 測）	25
第 23 図	高崎 1、2 号墳地形図（浜田、川述、光枝 測）	30
第 24 図	高崎 3、4 号墳地形図（酒井、川述 測）	31
第 25 図	高崎 1 号墳石室実測図（酒井 測）	32
第 26 図	須恵器実測図（浜田 測）	33

第27図	高崎2号墳墳丘実測図(西谷、松浦、川述 測)	34
第28図	高崎2号墳墳丘各トレンチ土層図(西谷、酒井 測)	折込み34~35
第29図	高崎2号墳掘り方実測図(酒井 測)	36
第30図	高崎2号墳石室実測図(浜田、川述 測)	折込み36~37
第31図	スコップ状用具使用痕模型図(浜田 作製)	37
第32図	高崎2号墳石室内遺物出土状態実測図(酒井、松浦 測)	38
第33図	高崎2号墳石室内遺物出土状態実測図(浜田、酒井、田原、江藤 測)	折込み38~39
第34図	高崎2号石室内出土須恵器実測図(川述 測)	40
第35図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	42
第36図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	43
第37図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	44
第38図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	45
第39図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	48
第40図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	50
第41図	高崎2号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	52
第42図	高崎2号墳出土土師器、青磁実測図(川述 測)	53
第43図	高崎2号墳石室外出土須恵器実測図(川述 測)	54
第44図	高崎2号墳石室内出土杏葉、辻金具実測図(浜田 測)	56
第45図	高崎2号墳石室内出土馬具実測図(浜田 測)	57
第46図	高崎2号墳石室内出土馬具、鉄器実測図(浜田 測)	58
第47図	高崎2号墳石室内出土直刀実測図(浜田 測)	60
第48図	高崎2号墳石室内出土鉄器実測図(浜田 測)	61
第49図	高崎2号墳石室内出土環頭実測図(浜田 測)	61
第50図	高崎2号墳石室内出土鉄鏃実測図(浜田 測)	62
第51図	高崎3号墳石室実測図(酒井、川述 測)	折込み62~63
第52図	高崎3号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	63
第53図	高崎3号墳出土鉄鏃実測図(浜田 測)	64
第54図	高崎4号墳石室実測図(酒井、浜田 測)	折込み64~65
第55図	高崎4号墳石室内出土須恵器実測図(川述 測)	66
第56図	窯状遺構実測図(酒井 測)	67

第57図	遺跡地形図	71
第58図	遺構配置図	73
第59図	層位図(副島 川述 測)	74
第60図	配石遺構(西谷 測)	76
第61図	掘立柱穴実測図(副島 測)	77
第62図	第1号住居址付近図(松岡、酒井 測)	78
第63図	第2号住居址付近図(酒井、浜田、副島 測)	79
第64図	出土石器実測図(副島 測)	80
第65図	住居址内出土遺物(副島 測)	81
第66図	住居址内出土遺物(副島 測)	82
第67図	溝出土遺物(副島 測)	85
第68図	その他の出土遺物(副島 測)	86
第69図	Q-7区Pit内出土遺物(副島 測)	87



第1図 早良平野周辺遺跡分布図

- |          |         |           |
|----------|---------|-----------|
| 1 藤崎遺跡   | 5 五塔山古墳 | 9 宮ノ前遺跡   |
| 2 飯倉原遺跡  | 6 四箇遺跡  | 10 高崎古墳群  |
| 3 熊ソイ池遺跡 | 7 城ノ原廃寺 | 11 羽根戸原遺跡 |
| 4 有田遺跡   | 8 湯納遺跡  | 12 羽根戸古墳群 |



# 第 1 序 説

## 1. はじめに

今宿遺跡群の調査は、国道 202 号線（福岡市～唐津市）の車輛渋滞の緩和と、福岡市郊外の市街地化を計るために同国道のバイパスの建設を計画し、昭和43年度に同予定線を中心に幅100mの範囲で、福岡市福重から今宿（加布里）までの遺跡分布調査を行ない、昭和44年度の8月～10月と12月に、福岡市拾六町と同市今宿青木に所在する7カ所の調査を行なった。この内、一カ所は既に削平されて湮滅し、また他の二カ所は遺物の二次堆積地であった。調査は、弥生後期から古墳期の住居址遺跡3と、古墳4基を対称とした。調査主体を福岡県教育委員会とし、同教育委員会の松岡史が調査主任となり調査した。

調査員は次のとおりである。

### 福岡県教育委員会

#### 総 括

教 育 長

吉 久 勝 美

教 育 次 長

森 田 実

文化課 課 長

杉 原 信 彦

課長補佐

岩 下 光 弘

#### 庶務会計

庶務係長

赤 司 岩 雄

主 事

小 川 浩 一 郎

”

中 村 一 世

#### 発掘調査

課 長  
技術補佐

渡 辺 正 氣

企画主査

藤 井 功

技 師

松 岡 史

”

西 谷 正

”

酒 井 仁 夫

”

浜 田 信 也

”

副 島 邦 弘

なお、拾六町遺跡群の調査には、次の参加協力があった。

福岡教育大学	川述 昭人	光枝 房敏
東京教育大学	松浦宥一郎	
福岡大学	桜井 康治	
別府大学	池辺 元明	
福岡女子大学	田原真理子	江藤 信子

この外に大濠高校歴史部、九州女子高校考古学同好会、福岡女学院高校歴史研究部、福岡双葉高校社会研究部の学生諸君。

そして、宿舎、器材置場として心よく引受けてくれました柴田六郎氏と、終始作業員として参加された拾六町・城の原の方々の援助に対して厚く謝意を表わすものである。

## 2. 拾六町遺跡群の位置と環境

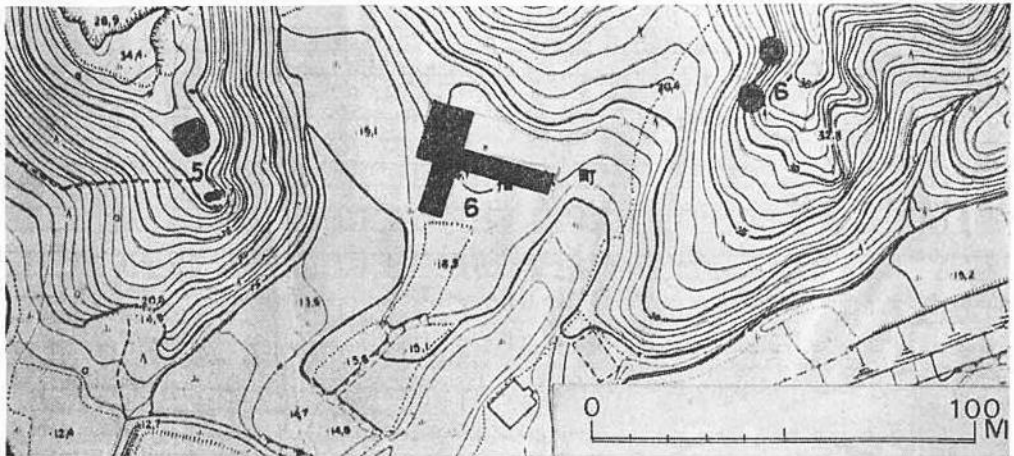
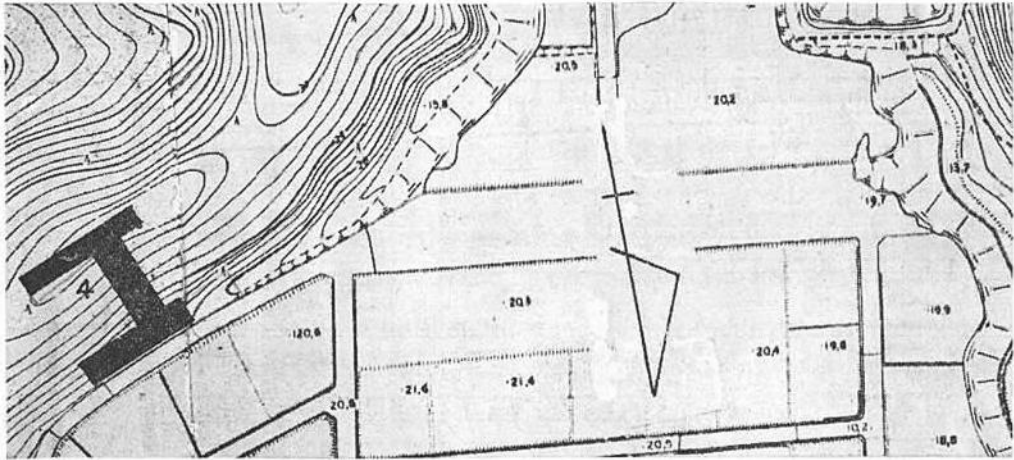
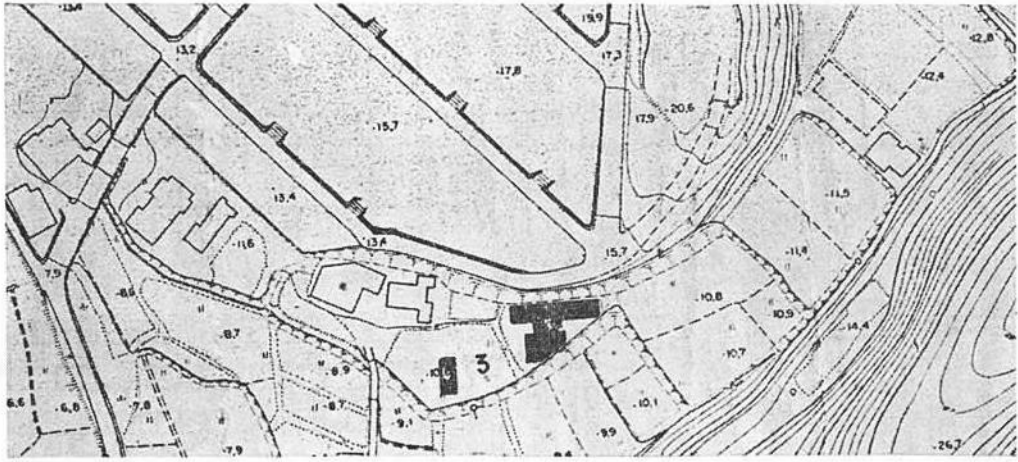
拾六町遺跡群(第2図)は、福岡市大字拾六町、及び大字高崎に所在し、室見川・十郎川をつくる沖積地・早良平野の西側丘陵地に展開する。この早良平野は背振山塊から北へ伸びる飯盛山、長垂山の丘陵によって、西の糸島平野と分けられる。東はやはり北へのびる低丘陵によって、福岡平野と分断される。南は背振山塊が高くせまり、北の今津湾に向け大きく広がる平野である。ことに高崎古墳からの眺めは素晴らしく、早良平野はもとより福岡平野も一望できる。遠く西に四王寺山、宝満山、天拝山等を、すぐ南に飯盛山を見る。

早良平野には、縄文時代からの遺跡地がある。この縄文時代の遺跡は早良平野の奥部や千隈あたりに見られる。弥生時代以降になると早良平野のあちこちに遺跡は所在する。弥生式前期の藤崎遺跡、銅戈出土した有田遺跡があり、又銅剣を出土した飯倉遺跡がある。この他四箇の甕棺遺跡など著名なものが多い。

古墳時代に入ると、まず室見川下流沿いの丘陵に五塔山古墳が出現する。この古墳は円墳で竪穴式石室を持ち、石室内より銅鏡、銅鏃を出す。この古墳の後にはあちこちに古墳が築造され、大古墳群も出現する。羽根戸古墳群、萩原古墳群、長石古墳群、駄ヶ原古墳群が早良平野を包む丘陵上に展開する。高崎古墳群もこれらと同じである。

高崎古墳群の近くには城の原廃寺がある。現在基壇・礎石は現地には見られない。この他、拾六町には条里制址のあることがいわれている。

このように早良平野には古くからの歴史があり、貴重なものが多い。しかしながら福岡市近郊であり、人口の都市集中化の現象も手伝って、早良地区にも開発の手が伸び、このような遺跡地や文化財が徐々に姿を消しつつある。詳しくは福岡市発行の「埋蔵文化財遺跡地名表」及び「有田遺跡」の報告書を参照されるとよい。



第2図 遺跡分布図

## 第 2 湯 納 遺 跡

### 調 査 の 経 過

11月24日 器材搬入、調査地区が広いために一辺 9 m の区画にわけ、各区画を一辺 3 m の区にし、調査はグリッド法式をとる。午後、さっそく S J I 4・5 の発掘に着手。

11月25日 前日に続き S J I 4・5 の調査を行なう。堆積層が厚く、土器の小片が多く出土する。弥生式土器、土師器、須恵器の小片である。湧水が多く、粘土質土層下の発掘は不可能である。又 S L II、S M II・III、S O III の各区にかかるトレンチを設け、発掘を行なう。浅いところは、耕作土下に地山がでる。このトレンチでは遺構を認めえず。

11月26日 S J II 4・5 区の調査を行なう。第 4 層の堆積土面に落ち込みをみとめるも、時期不詳である。S M J II 4・5 区の土層図の作成。B.M の移動。

11月27日 S M II、III 区の調査を行なう。S M II 6 の第 4 層より、完形土師器と銅製鋤先片を発見する。S J II 4・5 の埋めもどし。

11月29日 S M II 5・6 に南北にはしる住居址壁面らしきものを認める。(この住居址と考えられる落ち込み内に土器片等が発見するが時期の判定は難しい。) S M II 2・3 区を拡張。S M II・III の西側セクション図の作成。

12月 1 日 S M II 2・3 の拡張とともに、S M II 8・9 区を拡張。S M II 9 に住居址のコーナーを認める。

12月 2 日 住居址に発見順に番号をつける。1号住居址のほかにも 2つの住居址を認める。又、離れて 1号の東にも住居址と思われる落ち込みを発見(2号)。午後より雨がはげしくなり、遺物の水洗いを行なう。

12月 3 日 1号住居址に重複する 3、4号との関連を調べる。この結果、3号が古く、その後、1号、4号の順で続くことがわかった。1号住居址にはベット状の一段高い部分がある。床面に青銅製鋤先片と鉄製鎌を発見し、床面よりわずか上面にジョッキ形土器を発見する。

12月 4 日 S M III 1 の調査。これは 1号住居址に柱穴を認めず、外側に柱穴の有無を確認するためのものである。又、4号に重複して住居址らしきものがあり。1号住居址の写真撮影を行なう。

12月 8 日 雨で住居址に水が溜まり、くみ上げに時間がかかる。次に調査を行なう高崎 3、4号墳の伐採を行なう。

12月 9 日 小雨で、湯納遺跡の住居址の調査ができず、高崎古墳群の伐採を続ける。

12月11日 住居址の実測を行なう。

12月12日 雨の中埋めもどし作業を行なう。器材の整理を行なう。

12月13日 雪の中埋めもどしを続行する。本日で湯納遺跡の調査を終了する。

## 立 地

湯納遺跡は早良平野の西側丘陵地に入りこんだ小谷に存する（第2図、調査地点番号3）。当遺跡は、この小谷の周囲に拡がり、すぐ西に宮の前遺跡が隣接する。当遺跡付近は宅地化され、遺跡の拡がりの範囲を十分に把握できない。この小谷はほとんど水田化され、わずかに畑地がある。堆積土が厚く調査地点の畑地では約1.2mの深さに遺構を発見。この深さは、現田水面とほぼ同レベルである。砂質の土層面にあるため湧水が多い。

## 遺 構（第3図、図版1）

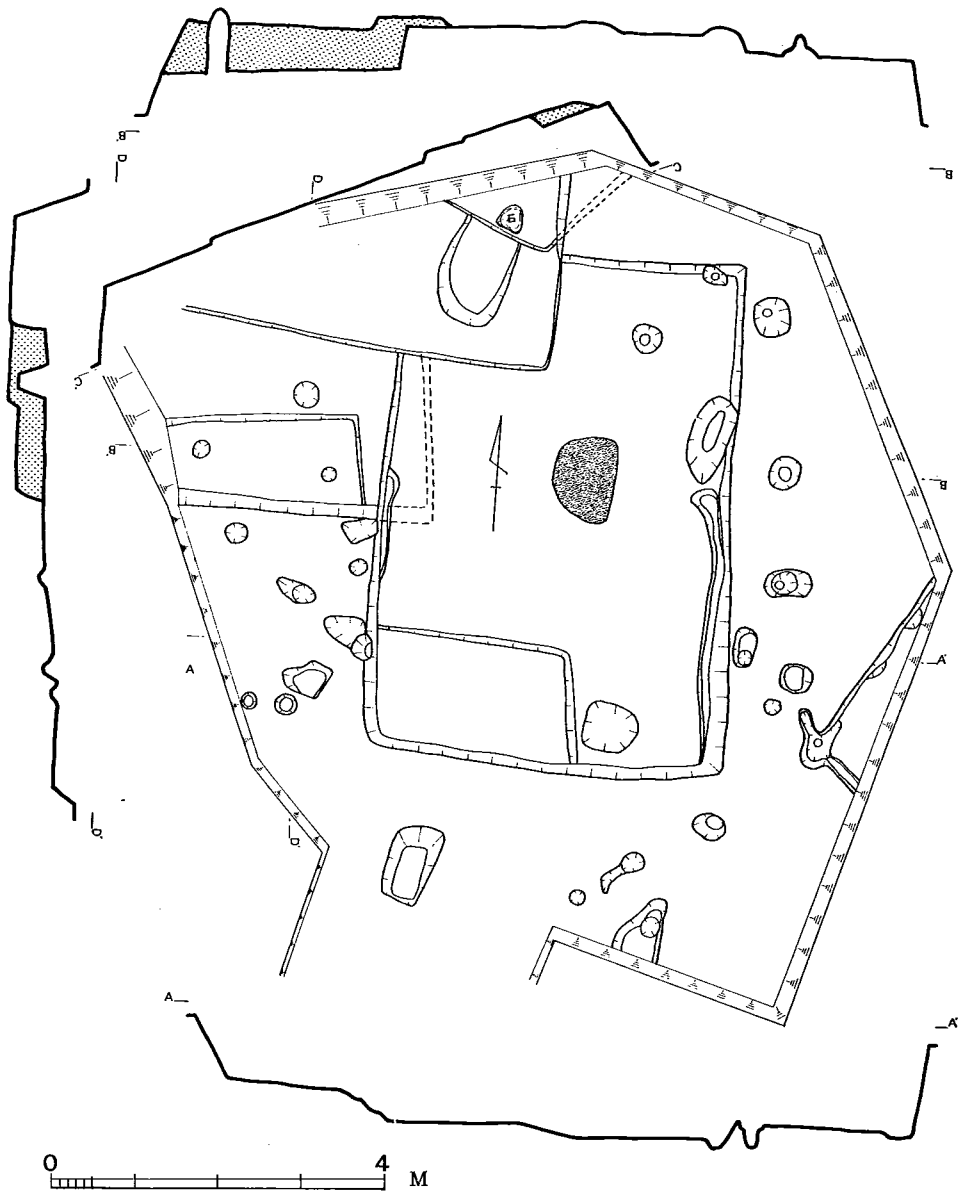
5軒の住居址を発見する。住居址の番号は発見順につけたものである。完掘したのは1号住居址のみである。1号住居址は長軸が南北方向で、長辺6.1m、短辺4.3mの長方形を呈するプランをもつ。深さは南側で40cm、北側は20cmを有する。周溝は東西の両壁沿いにわずかにみられる。住居址西南隅に接してベッド状の段がある。長辺2.3m、短辺1.3mを呈するものである。住居址のほぼ中央に凹みがある。この凹みはわずかに焼けた痕跡があり、おそらく炉址と考えられる。この1号住居址内には小ピットが4カ所数えられるが、2カ所をのぞいて他は、壁のそばにあるが、柱穴として考えられる位置にはなく、又西側にも柱穴はもちろん、小ピットは1つもない。住居址内ベッド状段のそばにある小ピットには2個の河原石が入っており、下に15cmくらいの石、上に約30cmくらいの石があった。住居址の外側に柱穴を求めたが、適当な位置にピットを認め得ず。ただ住居址の東側に柱穴らしきピットを見る。

2号住居址は1号住居址の東にあり。発掘区に1隅を見るのみで、詳細はわからない。1号住居址に重複して、3号・4号住居址があり、4号住居址と切りあって5号住居址がある。3～5号住居址については、部分を見るのみである。3号住居址は、1号住居址と同様にベッド状の段をもつ。その段に2つのピットをみるが、これは覆土上から掘られたピットの底部で、3号住居址のものではない。3号住居址の覆土中に1号住居址の壁をみる。1号・3号住居址を切って、4号住居址がみられる。これには浅いピットがある。長径1.2mである。4号住居址より古く、これに重複して5号住居址がある。4号住居址の南北に伸びる壁には、5号住居址と重複する部分で、薄い板状の石がたてかけられてあった。

住居址は古い順に3号住居址・4号住居址・1号住居址の順でつくられた。5号住居址は4号住居址より古いもので、1号住居址と3号住居址との時間差はわからない。

## 遺 物

土器、石器等の遺物は、第3・第4層に多く発見される。第4層は住居址内への落ち込み土である。いずれの住居址から発見される土器はほとんど小片で時期の判断が難しい。弥生式後期、古墳期が多く、縄文式期、弥生式前期の土器片も数片発見した。ここでは、1号住居址より出土の遺物に注目すべき点があり、それについて記しておく。

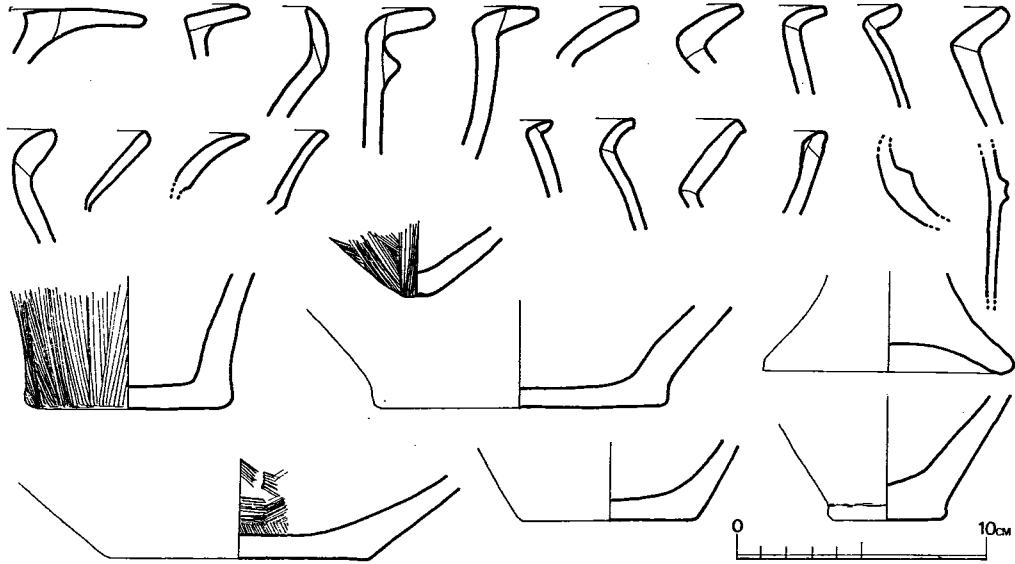


第3図 湯納遺跡住居址実測図 (1/90)

### 1号住居址出土の遺物

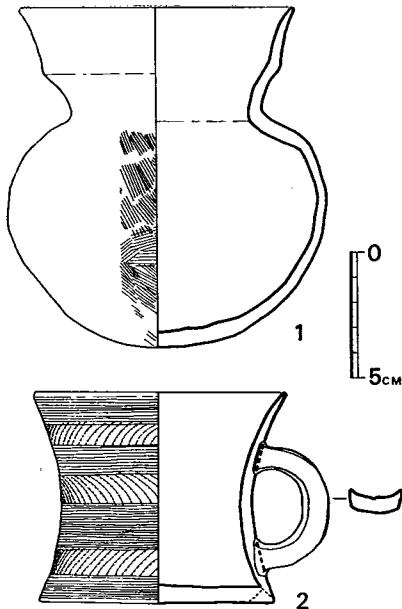
この住居址内から発見されたものは、その他住居址覆土中に多くの土器小片を見るが、第3・第4層（床面上にのる）より出土させる土器片（第4図）は、弥生式中期から古墳期にみられるもので、時間の差に巾があり、時期の判断を困難にしている。床面より10cm上面にジョッキ

形土器を、それにほぼ同一レベルで土師器で所謂古式の壺形土器を発見し、青銅製鋤先2(うち1は床面上)、鉄製手鎌1を床面に発見した。



第4図 湯納遺跡1号住居址地出土土器片実測図 (1/3)

ジョッキ形土器 (5図2、図版2-2)



第5図 湯納遺跡出土土器実測図 (1/3)

これは高さ8.4cm、口縁部径10.2cm、胴部径7.7cm、底部径9.5cmを有する。今日迄の発見例が高さ15cm前後あるのに比べて小型のものである。器形は中央が穿り、鼓状を呈し、胴部の曲線も器高からみて深く感ぜられる。そして把手は胴部くびれを中心にして、やや下方にとりつけられている。器形からはわりとずんぐりした感じを与えるが、それを文様でおぎなっている。文様は、器面を整形したのち幅1cmから2cmで4段に篋描きの沈線文を施しその間3段に貝殻の背を利用した羽状文を施す。中央に施された羽状文はその上下に対して逆に施されている。これらの文様は把手取付後に施されている。把手にも縦に1本の篋描沈線を有する。土器内面は、篋によって下から上にむけて整形されている。底部は円盤貼付で、本体の下端径とびったりあうものではなく、かなりの目貼りがある。土器内面

の篭による整形が行なわれた後にとりつけられたことがわかる。土器は器肉は薄い、胎土と焼上りは良く、わりとしっかりしている。

これまでの発見諸例に較べて小形であり、又それらのほとんどが無文で、発見諸例のうち文様をもつものは数例にすぎず、櫛描きの波状文、重弧文、平行波線文を有す(注1)。湯納遺跡のものは、それらとは特異な感じさえ与える。

ジョッキ形土器出土遺跡とこれに関する文献を記しておこう。(注2)

#### ジョッキ形土器出土地名表

##### 熊本県御船町御船上山神

- ” 御船町滝川南原B地点
- ” 益城町秋永
- ” 矢部町男成
- ” 城南町新御堂
- ” 飽託郡託麻村中山・叶丸
- ” 西合志村生坪・石立
- ” 熊本市画津町上江津画津湖湖底
- ” 菊池郡洒水町大字住吉字前原
- ” 玉名郡青野本村
- ” 菊池郡大津町杉水字上ノ原ヤボコ
- ” 熊本市島崎町石神原
- ” 菊池郡七城町小野崎方保田
- ” 菊池郡合志村大字幾久富字陣ノ内
- ” 菊池郡合志村大字上ノ庄字木瀬
- ” 熊本市清水町榎の木梅の木堤
- ” 玉名郡岱明町下前原

##### 福岡県福岡市飯倉

- ” 遠賀郡水巻町伊佐座

##### 大分県東国東郡国東町安国寺

##### 長崎県壱岐国龍

#### ジョッキ形土器に関する文献

- 1 乙益重隆「木器及び木製品」九州文化総合研究所編「安国寺弥生式遺跡の調査」所収 昭和33年
- 2 乙益重隆「中九州地方」小林行雄、杉原荘介編「弥生式土器集成本編1」所収 昭和39年
- 3 小林行雄「南九州地方及び東九州地方」「弥生式土器聚成図録正編解説」所収 昭和



14年

- 4 梅原末治「肥後菊池郡発見のコップ形容器」人類学雑誌62—4 昭和27年
- 5 梅原末治「九州に於ける中国史前の黒陶系の土器」史林52—3 昭和44年
- 6 緒方勉「熊本県下山神遺跡出土のジョッキ形土器」熊本史学34号 昭和43年
- 7 西合志町教育委員会「西合志町の文化財」 昭和45年
- 8 大谷従二・大国一雄・池田次郎「出雲国猪目洞穴遺跡 調査報告」人類学雑誌61—1 昭和24年

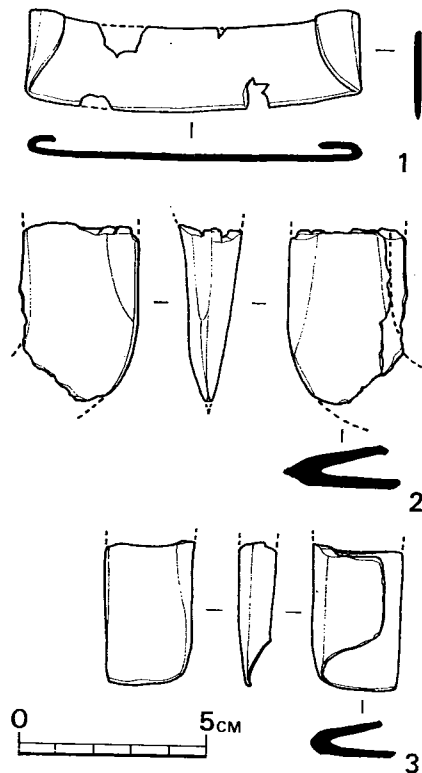
### 土師式壺形土器（第5図1、図版2—2）

この土器は、口縁径11.1cm、胴部最大径12.8cm、高さ13.5cmを有する小形のものである。口縁部は頸から外にひらきながらくびれ部にいたりそこからほぼ直線的な立上りを取り、口縁端で少しひらくというつくり方を示す所謂二重口縁をもつ。胴部の最大径が上部にあり、少し肩がはるように見られる。整形は口縁部の内外面とも横撫でであり、胴部は内面を篋整形し、外面は篋整形後に、印毛目整形をとり器肉をうすく仕上げている。土器の胎土中には、雲母がわずかにみられる。質は粗くない。しかし焼成が悪く、器面はおおかた剝離している。乳灰茶色を呈する。

当土器の類似品を付近の遺跡地にみないが、これに近いものとして、粕屋部新宮町立花貝塚出土の土師器の中にみる（注3）。又福岡市有田遺跡出土の土師器の中に二重口縁の系譜をひく甕形土器をみる（注4）。

### 青銅製鋤先（第6図2・3、図版3—1）

1号住居址から同先片を2個発見した。1つは同住居址にかかるトレンチで発見、同住居址内よりの出土には間違いなく、ほぼ住居址床面上であったと推定される。もう1つは、同住居址の西側の3号と4号住居址と重複する位置の床面より発見する。前者（第6図—2、図版3—1）は図で示すように、鋤の刃部から真直ぐ立ち上がる部分で、その上部と刃部を欠く。現寸縦4.7cm、横3.2cmである。縦方向に擦痕がある。現状ではそれほどの錆はふいておらず、しっかりしている。青緑色を呈する。後者は前者とは全くの別個体のもので白青色を呈し、もろい。これは前者と違い図上部がわずかに欠損するも



第6図 湯納遺跡出土金属器実測図（1/2）

ので幅の狭い方は少しも欠損しておらずほぼ完全なものであり。現寸は縦3.9cm、横2.3cmを有する。図下方平坦部が刃部と考えられるが、この部分が内側に回っていることが注目される。両面に使用擦痕が見られる。

青銅製鋤先は次に上げる出土地がある。

- 1 福岡市田隈
- 2 筑紫郡春日町字立石
- 3 糸島郡前原町三雲字柿の木
- 4 浮羽郡福富村

以上4カ所で発見されている(注5)。湯納遺跡発見のもので、前者は春日町出土のものに類似するものと思われる。前者が所謂U字状の形態を示すのに対して、後者はこれまでの発見諸例とは異なり、平面形は短冊形を呈する。所謂U字状を示すものではない。これまでに発見された鉄製鋤先の中にもこのような形を示したものは無い。そして又、これが鋤先でないにしろこのような青銅製品の類品をもみることができない。

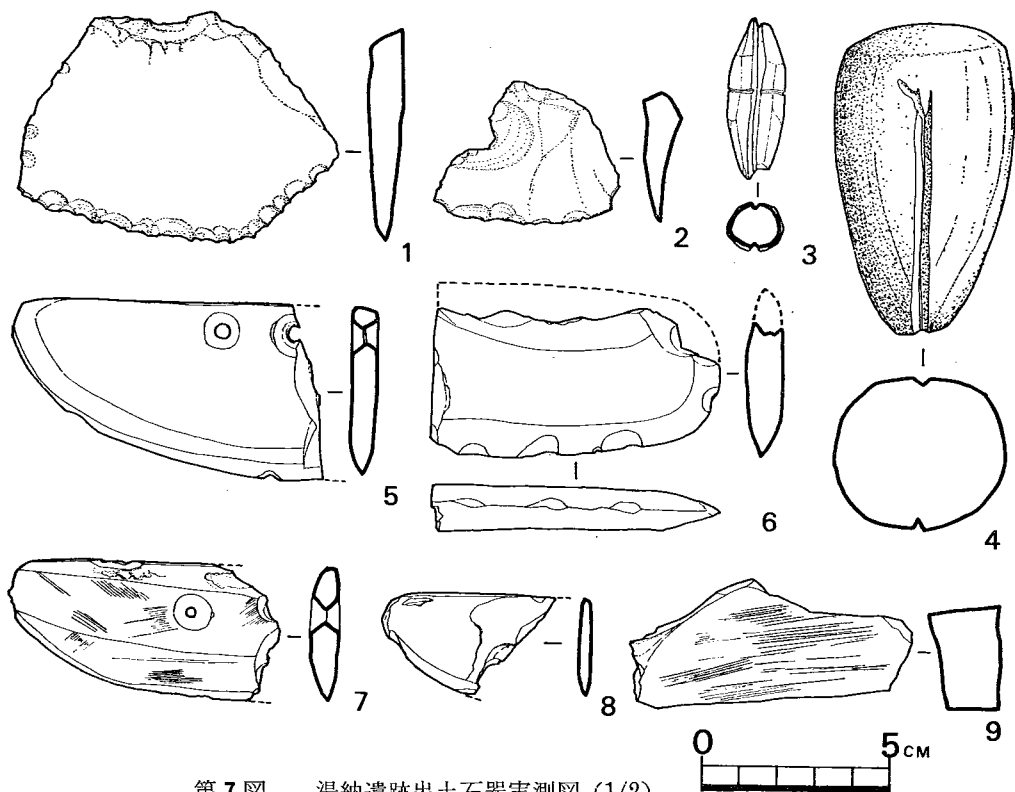
#### 鉄製手鎌(第6図1、図版3-1)

発見当初は錆が厚くふいていたために、製品名を知ることができなかった。錆を落としたのち、これが手鎌であることがわかった。これは1号住居址東側の壁で、南よりの壁がゆるやかに落ちる位置に発見された。現寸は横9cm(刃部の両端間)で最大幅は2.4cmを測る。中央部では2.2cmの幅をもつ。(身は、1.5mmから2mmの厚さである。)両端は内側に折り返えされ、刃はその折り返しのみられる側が深く研かれてある。そして発見例からみてこの折り返したところに木板を挿入し使用したものと思われる。これには木質は残っていない。発見例は、県内では筑紫郡春日町竹ノ本遺跡の弥生後期の住居址から1点と、もう1点がある(注6)。そして筑後市の狐塚からも1点発見されている(注7)。又遠く岡山県の金蔵山古墳からの発見がある(注8)、いずれも本質部をのこし、それもかなり幅の狭いものであることが知らされる。そして注意すべきは当遺跡出土のものは、他遺跡発見のもの刃部が直刃、内ゾリ刃であるのに対して非常に外彎することである。この点鋤先か手鎌かの判断に苦しむところがある。しかしこれまで発見された鉄製の鋤先と手鎌に比較してみると、身の大きさと厚さ等からやはり手鎌と考えるべきではなかろうか。

#### 石器(第7図1~9、図版3-2)

住居址内からの石器の出土は、その落ち込み土中にみたのであって、床面からの発見をみない。1号住居内の床面上にのる落ち込み土中からは、3、7、8、9を発見する。

当遺跡出土の石器は点数は少ない。図1、2は石匙である。石材は頁岩で、大型の剝片を利用し、刃部は丁寧にならされており、鋭い刃をしている。2もやはり頁岩製であるが、小型のものであり、つまみが簡単につくられてある。刃部の作りは1に較べて荒いがやはり鋭いもので



第7図 湯納遺跡出土石器実測図 (1/2)

ある。3、4は石錘である。付近の遺跡で、弥生式後期から古墳期にみられるものである。両者とも滑石製で、ていねいに磨かれている。3は小型のもので、縦4.3cm、最大径1.5cmを計る。溝は鋭利な器具によって十字に入っている。4は縦8.3cm、最大径4.5cmを計る。溝はやはり鋭利な器具によって入っているが、縦方向のみで、しかも一周しない。おそらく未製品ではなかろうか。5、7、8は石庖丁である。いずれも残欠のものである。5は水成岩系の石材で、発見中のもののうち最も大きいものである。刃部は、両面から磨きかけられているが、片方からの研磨が目だつ。7、8は輝緑凝灰岩を石材とするもので、5に較べ細身のものである。8は発見例中最も薄い身である。穿孔は5、7もとに両側からなされたものである。6は一部欠けているが、図左直線部以外は刃部と考えられる。図では便宜上横位置においているが、縦にみるものかもしれない。石材は砂岩系のもので、表面がいくぶん風化している。刃は両面加工である。石斧のように思われる。9は砥石である。水成岩製のものである。いくぶん欠損している。一面のみ使用されている。

## 小 結

湯納遺跡の遺構、遺物について簡単に記述してみたが、当遺跡で注目すべきは、1号住居址

内からの出土遺物であろう。その個々についてはさきに述べたが、はたして当住居址がどの時期であるかが問題となるところである。出土土器中に時期を明確に知る資料の不足がくやまれる。ジョッキ形土器、土師壺は床面より高い位置に、前者は上下逆位に、後者は横位置で壁に近いところに発見されている。ジョッキ形土器は熊本県菊池地方に最も多く発見されているが、いずれも弥生式後期から終末期頃の土器に伴出し、その時期を明確にしている。しかし当遺跡のそれは発見諸例とは、土器の大きさからも異物なように考えられ、貝殻利用による文様の施文という相異点を見る。この文様については、山陰のサコ遺跡出土の土師器に類似文様をみる(注8)。そうだとすれば土師壺との共伴も考えられる。又住居址内出土の鉄製手鎌は、狐塚、竹ノ本遺跡発見のものは、いずれも弥生式後期から終末期の住居址内であり、青銅製鋤先では春日町立石は、弥生中期甕棺出土と聞く。その他のものも弥生式期と推定されている。鉄器、青銅器からは、弥生式後期から終末期という時期が推定される。又、住居址内にベッド状遺構を有することから、弥生式後期をさかのぼりえず、古墳時代前期の間というかなり時間差のある時期(注10)も出土遺物とほぼ期を同じくするものである。(浜田信也)

注1 梅原末治「九州に於ける中国史前の黒陶系の土器」史林52-3 昭和44年

2 ジョッキ形土器出土地名表及び参考文献表作成にあたっては乙益重隆先生の御教示を得た。

3 福岡市教育委員会「有田遺跡」昭和43年

4 注3に同じ。

5 青銅製鋤先出土地名表作成にあたっては岡崎敬先生の御教示を得た。

6 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告」福岡県文化財調査報告書第22輯 昭和37年

7 筑後市上北島狐塚遺跡の10号住居址床面から西新町式の土器に伴って出土している。

8 西谷真次、鎌木義昌「金蔵山」倉敷考古館研究報告1 昭和34年

9 小田富士雄先生の御教示による。

10 注3に同じ。

### 第 3 宮 の 前 E 地 点

#### 調 査 の 経 過

8月6日 発掘資材を現地に搬入して、調査区の伐採を行なう。その後3m方眼のグリッドを設定し、さっそく発掘に入る。弥生式土器、土師器、須恵器の破片を採集する。

8月7日 EP-49区で遺構を検出する。古墳期の土坑である。撮影、実測等を行なう。又、各グリッドでも土器片多数出土する。

8月8日 EJ-49区で竪穴住居と思われるものを発見、2軒が重なりあい。同区の南寄りに炉址を認め、側のおち込みに鉄器を発見す。EH-49区、EI-49区にも住居址らしいものを認む、EN-49区には弥生期と思われるピットを認む。

8月9日 ベルコン到着。組み立てを始める。EL-49区にて壁線を認めるも柱穴を認めず（竪穴らしいが）。EH-47・48区で竪穴らしきものを検出。炉跡、柱穴らしきものを検出。58ラインに鋤を入れる。

8月11日 EL-49区は清掃を行ない、柱穴の検出を急ぐ。EL-49区を新たに拡張する。EL-58区及びEN-58区の発掘に着手。かなりの量の土器片を出す。ベルコン6台の始動開始。

8月12日 EF-49区では炉跡や柱穴を認めるも住居址の壁を検出できず。さらにEE-49区を拡張、58区の本格的な発掘に入る。二次的堆積層がかなり厚く地山にのこっている。

8月13日～16日 休み

8月17日 EE-49区に住居址の壁面を検出する。EH-53・57区及びEJ、EK、EMの58区の表土めくりを進める。

8月18日 前日に続き表土を下げた。かなりの土器を出土する。弥生中期から古墳期のもので、わずかに須恵器を発見する。

8月19日 EHラインでの層序をみるためにトレンチを入れる。EH-53区で地山面を見る。全面にわたって地山面を出すことに努める。

8月20日 前日に引き続きEHラインのトレンチを発掘を進める。

8月21日 EL-58区にやはり、層序を調べる為のトレンチを入れる。

8月22日 台風接近にとまなう雨のため、宿舎で出土品の洗浄整理及び資材の整備を行なう。

8月23日 EH・EL・EN-58区の第Ⅱ層を掘り進む。

8月25日 23日に続き調査を行なったが、午後天候悪化し、宿舎で遺物の整理を行なう。

8月26日 EH・EL・EN-58区のそれぞれ一部を掘り下げ、地山面の検出に努める。

8月27日 昨日に続き、層位の検討を行なう一方、EH～EP-49区の清掃し、写真撮影を行なった。

8月28日 EH・EL・EN-58の東西方向セクション3本を実測する。

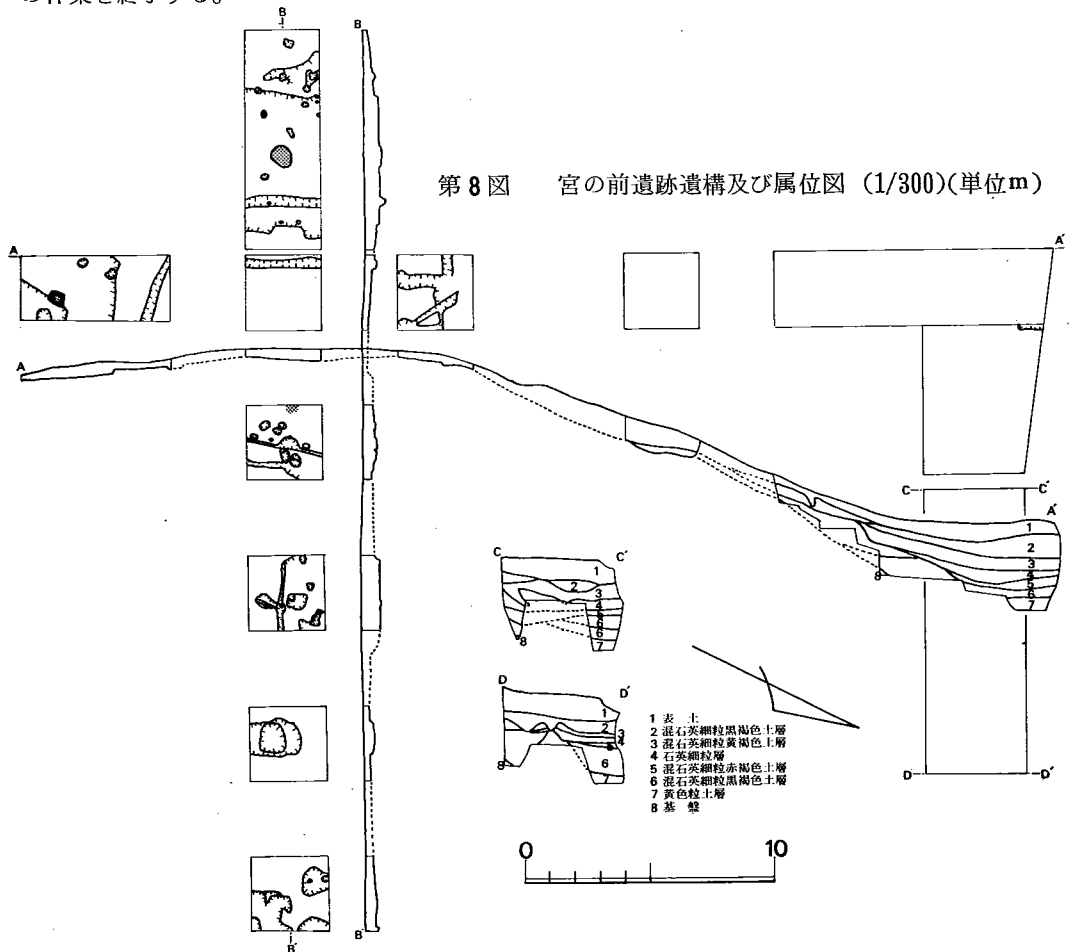
8月29日 発掘地区の500分の1の平板測量を作成し、午後は丘陵頂上部の遺構実測のための割付けを行なう。

8月30日 天候不順のため実測を中止し、高崎2号墳の発掘作業に加わる。

9月1日 20分の1で頂上部の遺構平面図を作成する。

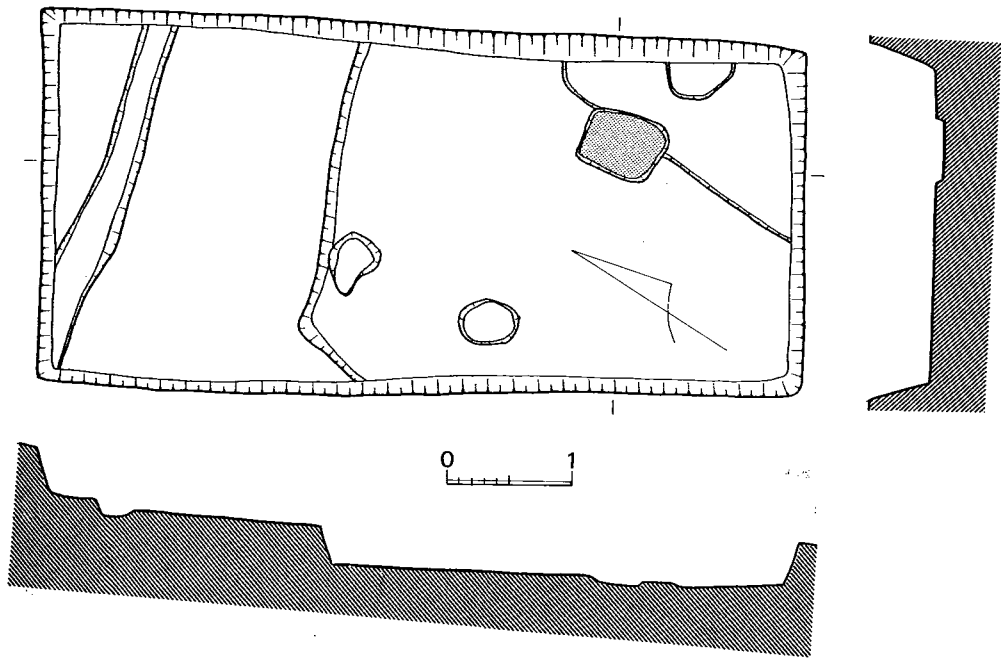
9月2日 昨日に引き続き実測作業を進め、夕刻に終了する。

9月3日 発掘終了後の全景写真を撮影し、その後遺構保存のため埋め戻しを行ない、すべての作業を終了する。



### 宮ノ前遺跡E地点

福岡市大字拾六町字宮ノ前所在遺跡(第2図、遺跡番号4)は東北に向って延びる丘陵の鞍部及びその傾斜面にみられる。この丘陵鞍部(平地面よりの比高約8m)上に主軸N27°Eの一辺3mグリッドを組み、丘陵北斜面にも同グリッドを組み、調査を行なった。以下各グリッドごとの記述を行なう(第8図、図版4・5-1)。



第9図 EH-46・47グリッド遺構実測図(単位m)

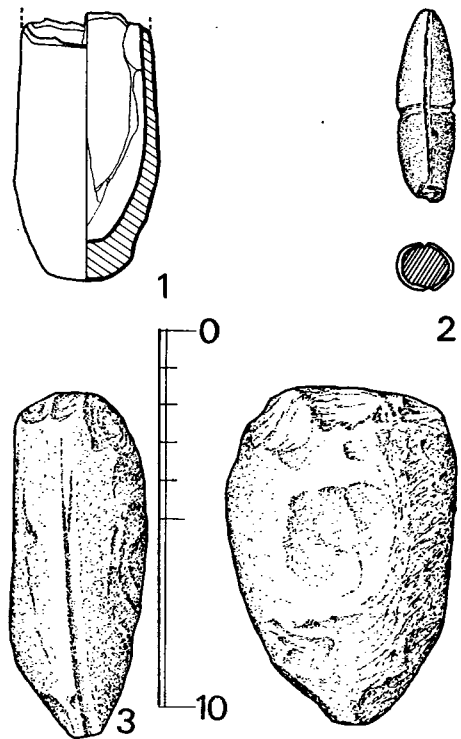
**EH-46・47グリッド**(第9図、第10図  
図版5-2)

**遺 構**

2軒分の竪穴住居址と浅い断面U字状溝が発見された。図右上の竪穴壁は一辺約30cmの浅い方形ピットに切られている。当ピット中には炭化物がみられ、火を受けた痕跡もみられるので炉址と考えられよう。この炉址はグリッド中央部の住居址に伴なうものと思われる。

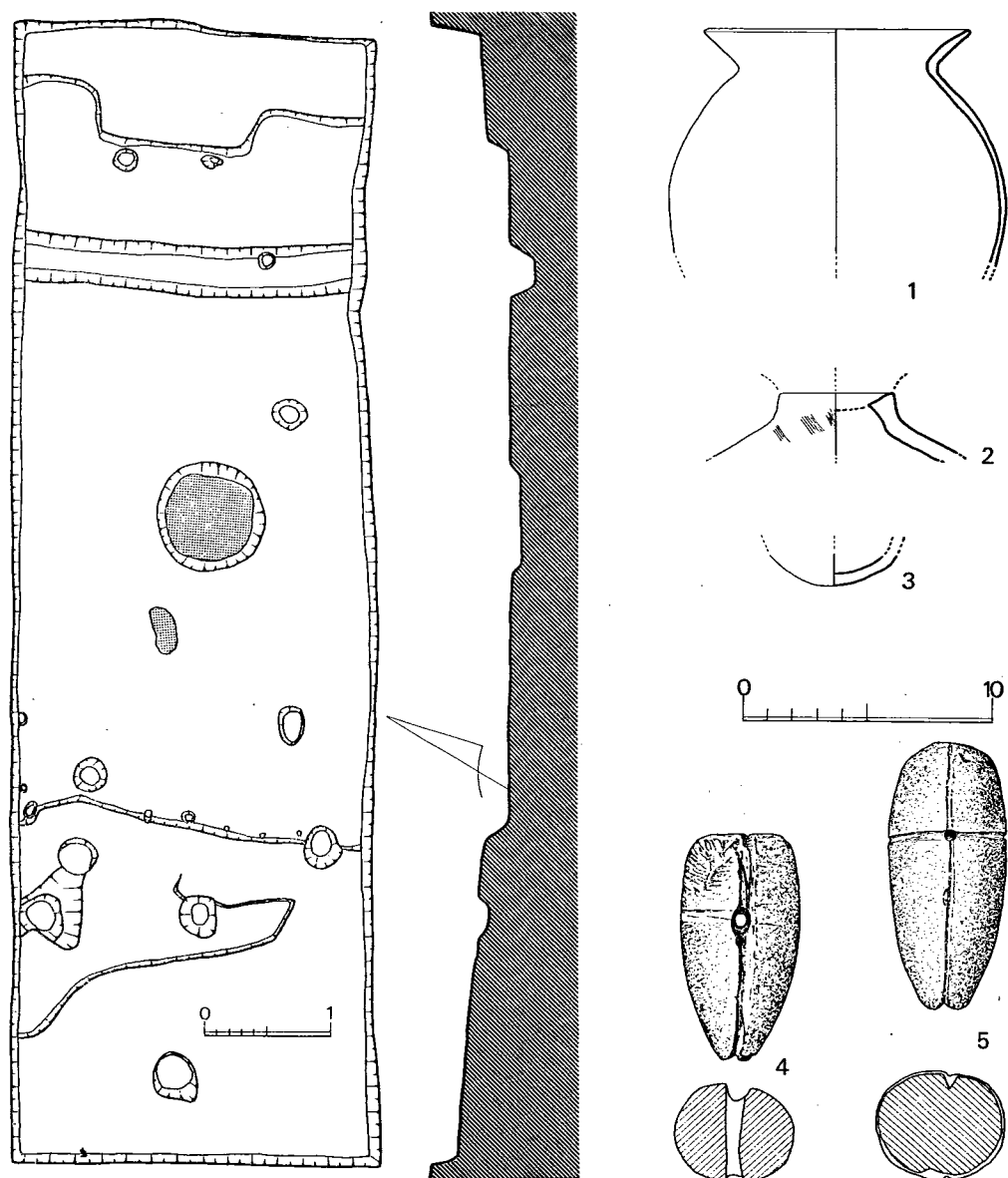
**遺 物**

1は筒状の手握ね小形埴である。口縁部は欠損しており、原形は不明であるが、分厚い器壁を有した特殊形態の土器である。2は小形石錘で、縦横2条の溝を有する。下端部は欠損している。3は大型石錘の未製品で、表面に打痕を残し側面に割付け用と考えられる縦位の切目が入っている。



第10図 EH-46・47グリッド遺物実測図(単位cm)

EE・EG-49グリッド (第11図、図版6-1)



第11図 EE・EG-49グリッド遺構(単位m)及び遺物(単位cm)実測図

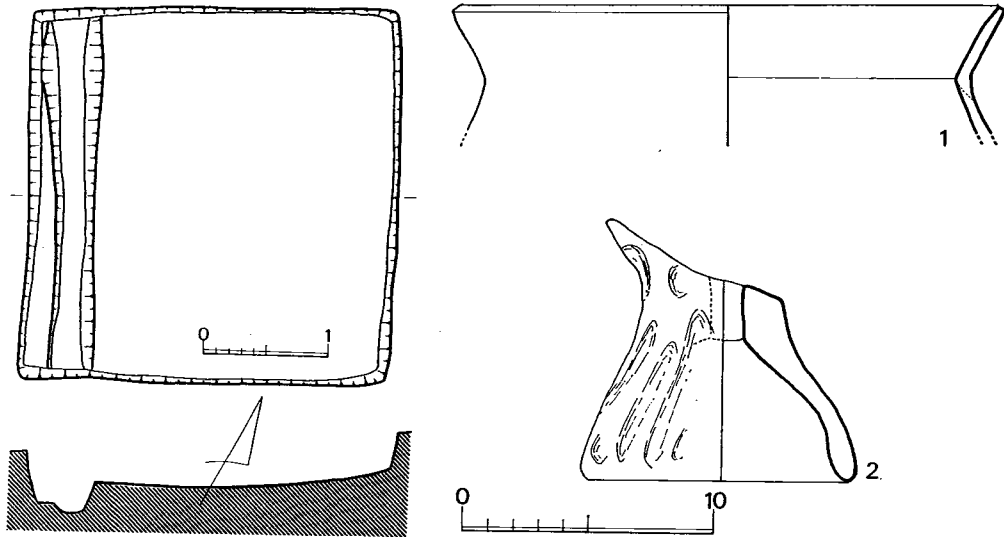
遺 構

1軒分の竪穴住居の東西両壁及びそれに付属する炉址が検出された。西壁にそって小柱穴が等間隔でならんでいた。東壁は一部が方形に入り込み、その位置に接して小柱穴が2個存在する。同竪穴を切って溝が走っており、この溝はあるいはEH-47グリッドの溝に続くものとも考えられる。



## 遺物

1は溝中で発見されたものである。赤茶色を呈し、胎土中に砂粒が多い。2は茶褐色を呈した手捏ね小壺の底部である。胎土、焼成いづれも粗雑である。3は高坏の脚部と考えられる。坏部が欠損したものであろう。4、5はいづれも大形石錘であり、4はその未製品である。



第12図 EH-49グリッド遺構(単位m)及び遺物実測図(単位cm)

## EH-49グリッド (第12図、図版6-2)

### 遺構

図上左側に割合深いU字状溝が走っていた。

### 遺物

1は上述溝中より出土した壺口縁部片である。2の器台は肉厚で、指圧痕が著しい。

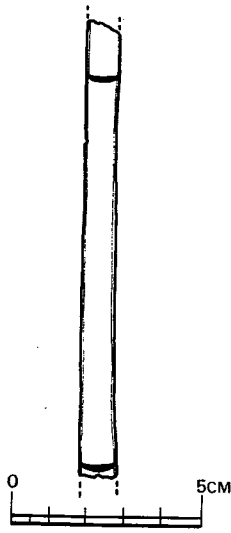
## EJ-49グリッド (第13図、第14図、図版7-1)

### 遺構

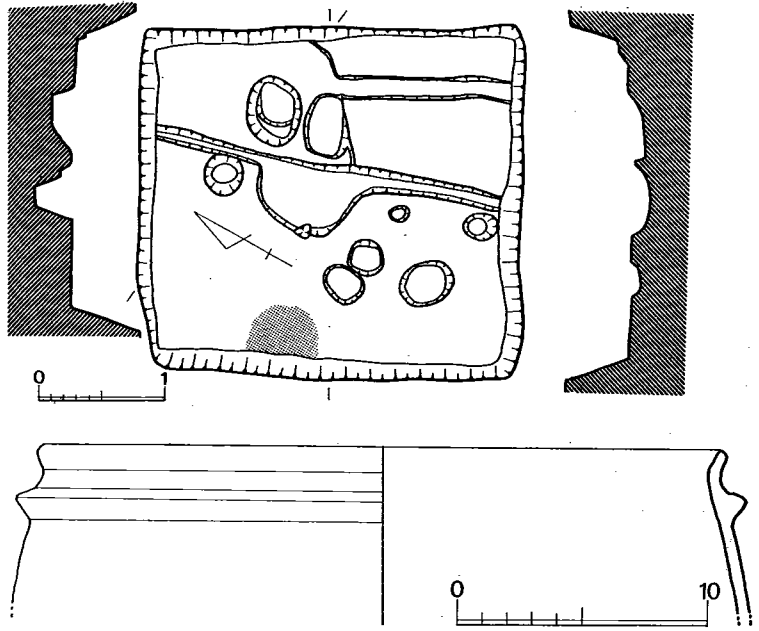
2軒分の竪穴住居が切り合っている。図下方の竪穴が新期のものと思われる。当竪穴の壁にそって溝が繞っており、炉は床面が焼けているという程度にすぎない。図上方の竪穴壁の一部は浅い溝に接している。

### 遺物

第13図の甕口縁片は口縁直下に1条の凸帯を有する。第14図の鉄器は鉈と考えられる。



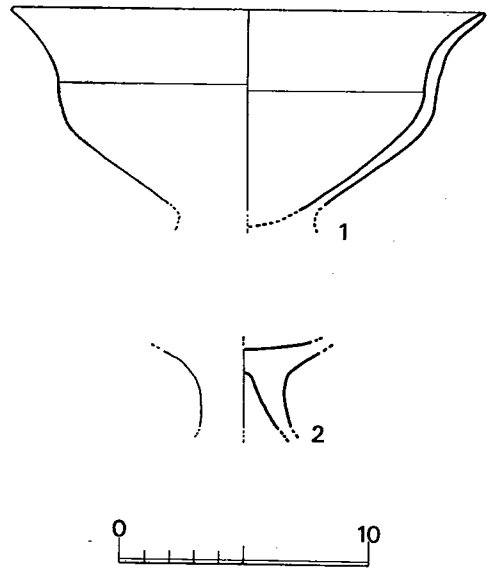
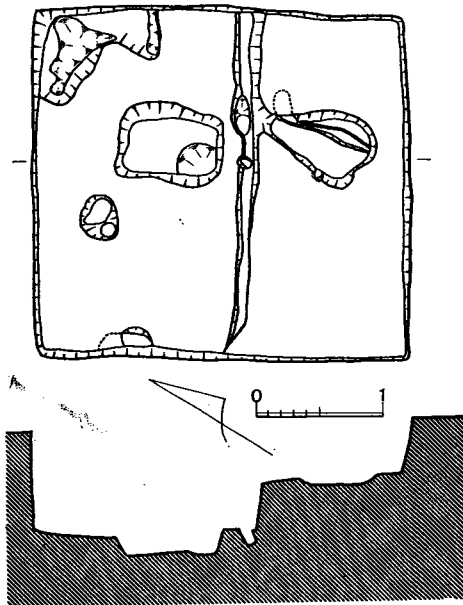
第 14 図 針実測図



第 13 図 EJ-49グリッド遺構(単位m)及び遺物(単位cm)実測図

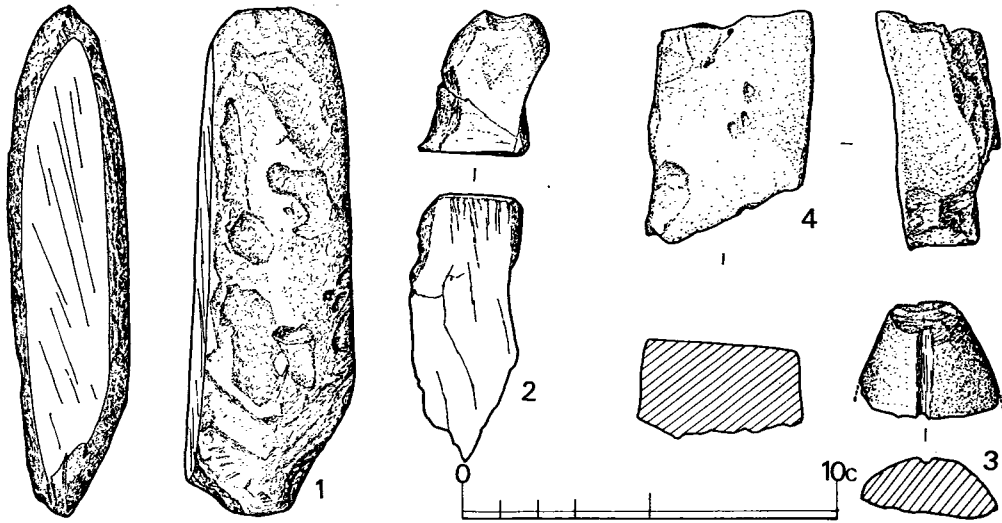
**EL-49グリッド** (第15図、第16図、図版7-2)

**遺 構**



第 15 図 EL-49グリッド遺構(単位m)及び遺物(単位cm)実測図

図中縦位に竪穴壁がみられ、それにそって溝が繞っている。壁の一部は不規則な溝によって切られている。床面上には不整形の掘り込みがみられる。



第 16 図 E L-49グリッド出土遺物実測図(単位cm)

遺 物

第 15 図 1 は高坏の坏部と考えられる。褐色を呈し、胎土中に石英粒を含んでいて全体に砂っぽい。2 は高坏脚部で、赤褐色を呈し、胎土中に砂粒を含むが、比較的良く精製されている。坏部内面は黒色を呈している。第 16 図 1 は磨製石斧であるが、一側面を砥石として使用している。2 は砥石で、断面図の上面と右側面を使用している。以上 2 点は竪穴床面近くから出土した。3 は大形石錘、4 は砥石である。

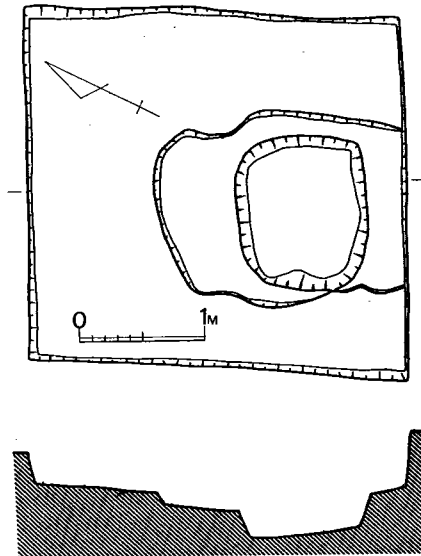
E N-49グリッド (第17図、図版 8-2)

遺 構

図右部にみられるような掘り込みがみられたが、性格は不明である。

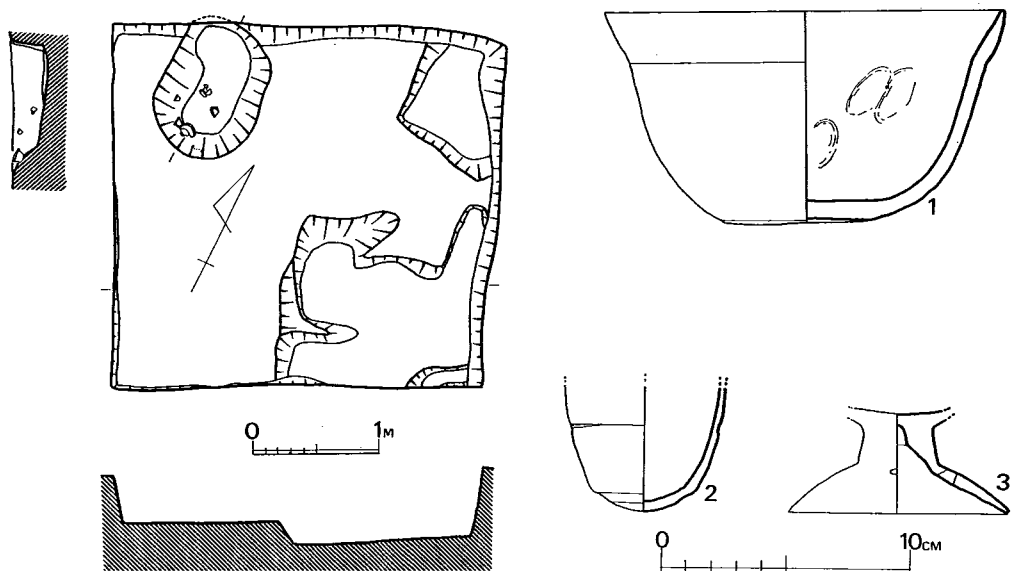
遺 物

特徴ある遺物はみられず、弥生式土器、土師器が若干出土している。



第 17 図 E N-49グリッド遺構実測図

## EP-49グリッド (第18図、図版8-1)



第18図 EP-49グリッド遺構及び遺物実測図

### 遺 構

図右側の不規則な掘り込みの性格は不明であるが、左側の楕円形掘り込み中からは下記の土器が一括して出土した。

### 遺 物

1は黄色を呈した鉢で、胎土中に多くの石英細粒を含み、全体に砂っぽい感を受ける。内面には指圧痕がみられる。底部は粘土盤張り付けのようである。3の高坏脚部は赤褐色を呈し、比較的精製された粘土を用いている。脚部の上位に小穿孔がみられ、本来3孔を有していたものと考えられる。2の小形壺は赤褐色を呈しており、焼成温度低く、胎土中に砂粒を多く含んでおる。口縁部は欠損している。

## EH-51グリッド (第19図)

### 遺 構

丘陵鞍部から北面傾斜地にかけて位置するグリッドであるため、鞍部にみられたU字状溝の末端と考えられる遺構である。

### 遺 物

少量の土器片が出土しているが、特徴あるものはみられない。

## EH～EN—58グリッド

(第20～22図、図版9—1・2)

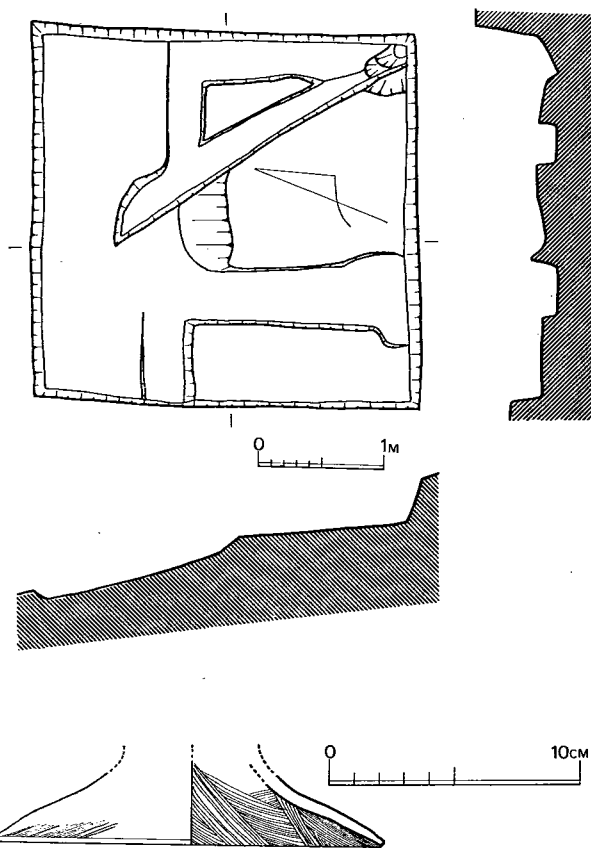
第8図のごとく、丘陵北斜面に位置し、鞍部からの流土が深く堆積している。遺物はこの二次堆積土層中の第三層まで含まれている。遺構はまったく認められない。

### 遺物

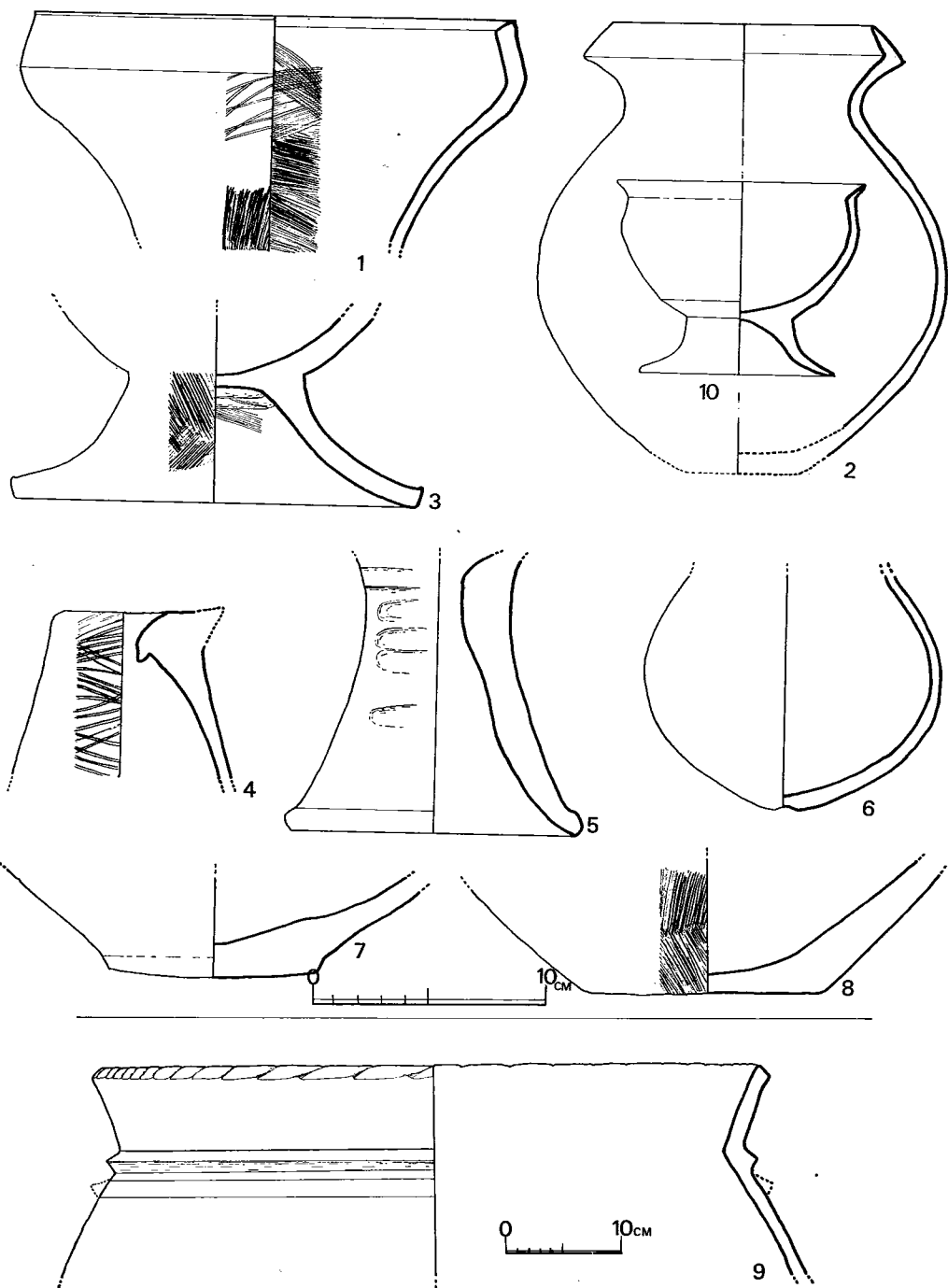
出土土器は壺、甕、高坏、器台に分類される。壺のうち第20図1は赤褐色を呈し、胎土は砂っぽい。内外面ともに刷毛をもって整形されている。外面の刷毛目は頸部と胴部とで施紋方向が異っているが、精粗の差もみられ、少なくとも2種類以上の刷毛が使用されたものと思われる。

2は灰色を呈し、胎土、焼成共に良好である。6は頸部及び口縁部を欠いているが、胎土は割合良く精製されており、表面の磨研も良好である。

3の高坏は焼成、胎土はいづれも良好であり、脚部のみ内外面ともに刷毛によって整形されている。坏部と脚部の接合部には指痕がついている。支脚のうち4は叩きにより、5は指によって整形されている。7～8は甕の底部、9はその口縁部片である。9は口唇部に等間隔の刻紋が施されており、頸部に2条の凸帯をもつ。10は台付鉢と考えられる。胎土、焼成ともに良好で赤色を呈する。第21図1は手捏ね土器で、内外面とも指圧痕が著しい。2～5は石錘である。2は上下両端に2孔を有し、そこから縦位の溝が2条走っている。この石錘は当遺跡出土の他の小形石錘とは型態、石材両面にわたって特殊な例である。なお当石錘材質は安山岩であり、他例は滑石である。7、8は紡錘車であり、7は土製、8は滑石製品である。8には使用痕が中央孔を中心にもみられる。6は黒曜石製石匙で、両面の加工は繊細である。9は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。2孔の間には著しい使用痕が観察される。10の鉄製品は鎌である。第22図1、2は有孔の礫であるが用途不明である。1は円形、2は方形の孔が間通しており、特に2の孔は鉄器により施されたことが明瞭である。1の孔は一方方向にのみ削痕が残っている。



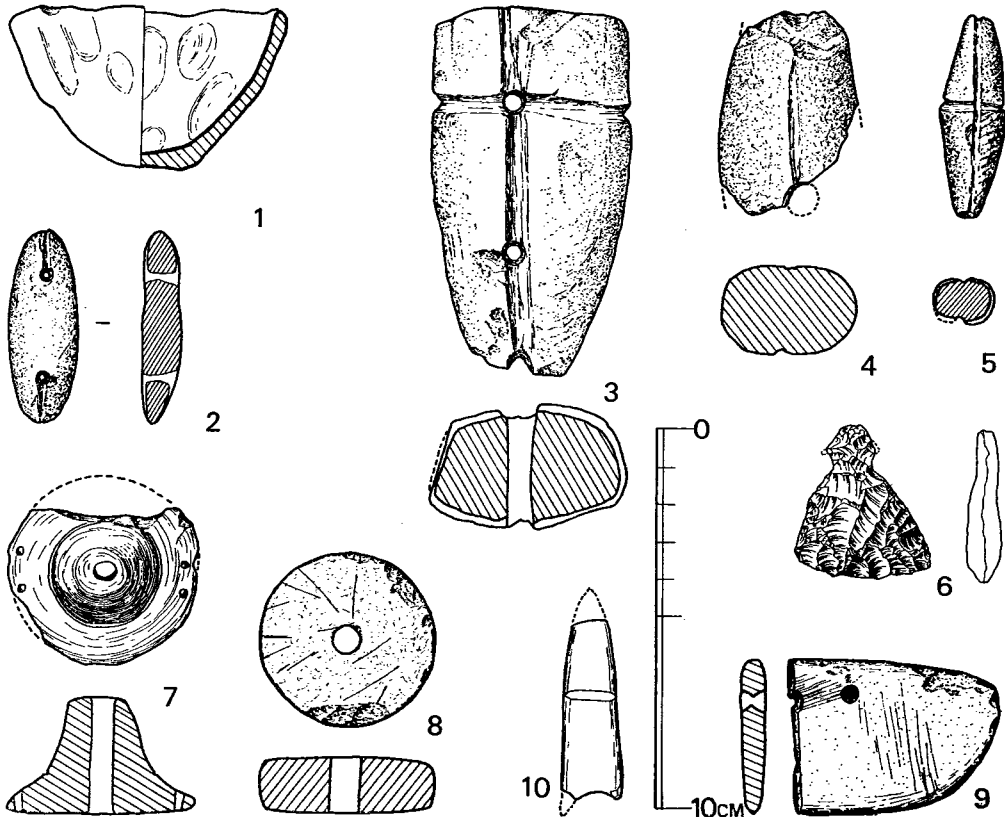
第19図 EH—51グリッド遺構及び遺物実測図



第 20 図 EH～EN-58グリッド出土遺物実測図

以上、各グリッドごとに遺構及び遺物についての記述を進めてきたが、予備調査の段階であり、遺構についての正確な記述や遺物のセット関係については不明な点が多い。今回の予備調

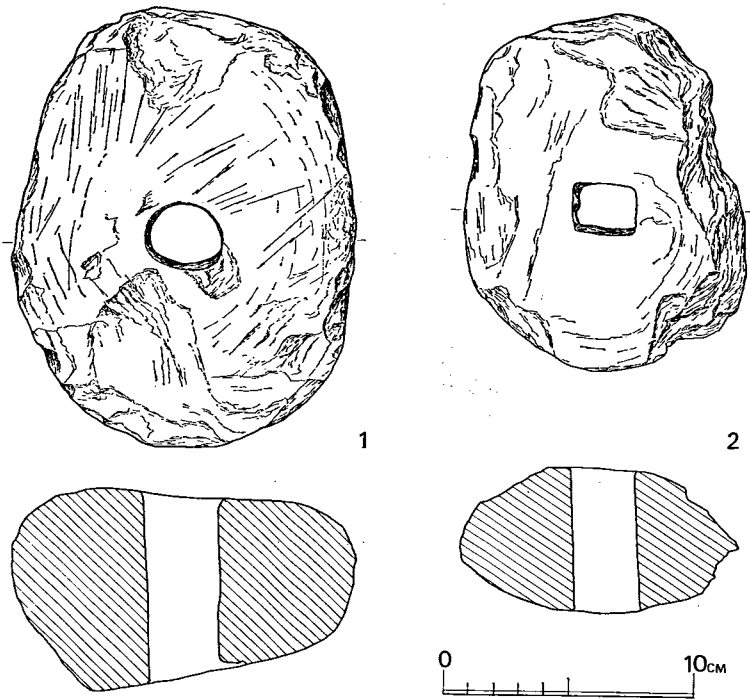
査を基に、今後の調査の予測を述べるならば、下記の通りになろう。



第 21 図 EH～EN—58グリッド出土遺物実測図

## 遺 構

丘陵鞍部上の遺構は竪穴住居、U字状溝、不整形ピットに区分される。住居址は計6軒分検出された。これらは方形を呈するものと思われ、壁に接して周溝をもつものもある。炉は住居中央に近く位置し、床を浅く掘り込んだ程度の竪穴炉である。柱穴は壁内側に接して立てられたのであるが、その数は不明である。柱穴の掘り込みは浅く、ほとんど5～6cm程度である。断面U字状を呈し、幅30cm前後の溝が3グリッドで確認されたが、これらが互いに関連を持つものかどうかは不明であり、今後の調査に期待するところである。丘陵北斜面の流土は7層にわたって堆積しており、このうち上位3層中に遺物が包含されていた。



第 22 図 EH~EN-58グリッド出土遺物実測図

### 遺 物

土器、石器、鉄器に分けられる。土器の大部分は弥生後期のものと考えられるが、第 18 図及び第 12 図のように古式土師器と思われるものも含まれる。石器のうち特に注目されるのは石錘であるこのうち完形品及び欠損の少ない例のみを選び重さを計量すると下記の通りとなる。

1	337 g	第 10 図— 3
2	292 g	第 11 図— 5
3	281 g	第 21 図— 3
4	237 g	第 11 図— 4
5	16 + αg	第 10 図— 2
6	15 + αg	第 21 図— 5
7	13 g	第 21 図— 2

1~4 は大形、5~7 は小形と区分した石錘である。大形石錘のうち未製品を除けば、200 g 代が一般的であり、小形石錘は 10 g 代を通例としたと考えられる。推測ではあるが、大形品は漁網用、小形品は釣り糸用とは考えられないだろうか。又、用途不明とした有孔礫は大形漁網あるいは小形舟の錨とも考えている。紡錘車の 2 点は素材、形態とも両者相反している。特に土製品の例は今後注目してよからう。重量は、土製品 33 + αg、石製品は 60 + αg である。



鉄器は鉋と鍬が各々1点ずつ出土している。鉋は両端が欠損し原形をつかむことは難しい。鍬は従来の出土品と比較して弥生式時代のもと考えられよう。その他鉄滓が若干出土している(図版16-2)。

これら宮ノ前E地点の遺構、遺物は弥生終期から古墳時代初頭にかけてのもと考えられる。当時期の住居址群が存在することはすでに述べた通りであり、本調査実施の際には、遺物のセット関係をとらえることによって、当時期の生活復元には絶好の資料となるであろう。現海岸線から1500mに位置する当遺跡は、当時はもっと海に隣接していたと考えられ、遺跡の中で石錘が大きな比重をしめている点を考え合わせると、海と無関係な当時の生活は考えられない。また少量ではあるが、鉄滓が出土している点は注目されよう。窯本体は検出されていないが、付近の調査を重ねることによって発見される可能性は強い。

以上弥生時代末から古墳時代初頭にかけてという学問的に不明確な点の多い時期に位置する当遺跡が本調査されることによって編年的にも、生態学的にも解明される点は多いと考えている。(酒井仁夫)

## 第 4 高 崎 古 墳 群

### 調査の経過

#### (第1次調査)

- 8月21日 墳丘を中心にして樹木の伐採を行なう。午後からは古墳の近くに絶対高を移動させる。
- 8月22日 天候不順のため、宿舎にて遺物整理作業を行なう。
- 8月23日 伐採作業を続行。
- 8月25日 午前中室外作業を行なったが、午後から雨が降りだし、宿舎で土器洗いを行なう。
- 8月26日 百分の一で墳丘を中心とした地形実測図を作成し、また近景、遠景の写真撮影を行なう。
- 8月27日 昨日に引続き地形測量を行なう一方、石室の調査に入る。
- 8月28日 2次の位置にある石材をチェーンブロックを用いて除去していくと、東西方向の石室を認める。玄門天井石を残存している模様。
- 8月29日 石室のプラン検出のための作業を続行。
- 8月30日 石室のプランをほぼ確認する。
- 9月1日 玄室内を1mほど掘り下げる。鉄刀剣、須恵器、土師器の破砕したものがかなり出土する。羨道部の露出に努める一方、墳丘を切るトレンチを3本設ける。Sトレンチでは地山面に落ち込みを2個所で認めた。1号墳では石室の清掃を行なう。
- 9月2日 羨道部を掘り下げ、閉塞石を認める。羨道前面付近で須恵器、土師器をかなり発見した。中には完形に近いものもある。玄門の上に残る天井石は中心で割れており危険なので、実測図を作成した後、取り除く。新たにNWトレンチを設けて掘り進める一方、Nトレンチとの間を地山面まで剥ぐため、盛土の除去にかかる。
- 9月3日 玄室内を掘り下げる一方、羨門前面及び墳丘上の表土を取り除く。
- 9月4日 玄門内の清掃を行なう。鉄器片がほぼ同一レベルで出土する。閉塞内側羨道部では須恵器群が検出される。墳丘裾部の作業も続行し、墳丘プランの検出に努める。石室北側では玄室より1m離れて側壁と同じような石材が4個並べたような恰好で出土した。
- 9月5日 玄室入口付近及び羨道部の閉塞石内側において多量の須恵器群を検出。玉類、鉄器等も出土する。玄室中央部には人骨を認めたが、破損が著しい。墳丘面の露出作業を進めた結果、墳丘の西南方で壕状の窪みを検出した。
- 9月6日 玄室内の須恵器検出をほぼ終える。人骨は永井昌文先生の鑑定により成人2体分とのことであった。人骨の北側からは単鳳環頭を検出。奥壁寄りに武器類、南壁に近く馬具類が

出土した。墳丘西南裾部を昨日に続き追求した結果、東へまっすぐ伸び、石室と平行する空壕が検出された。方墳の可能性が強まる。

9月7日 雨のため作業を中止し、出土品の整理を行なう。現地には作業員を警備のため留まってもらう。

9月8日 朝から写真撮影のため清掃を行ない、昼ごろから遺物出土状態の撮影を行なう。墳丘東南部の壕はほぼ露出し終る。西北部の墳丘面追求作業は夕刻までに終了。

9月9日 石室内の写真撮影を再度行ない、午後より遺物出土状況の実測作業に入る。夕刻までにはほぼ終了。東北部の表土を剥ぎ始める。

9月10日 須恵器出土状態実測図の作成を続行し、その後取り上げる。夕刻須恵器の下から馬具類が出土する。夕闇のせまるころ全ての遺物実測及びその取り上げ作業を終える。墳丘南部の表土剥ぎ作業を開始する。

9月11日 石室敷石平面図の実測を開始する。墳丘上の作業は昨日に引き続く。

9月12日 石室内敷石の平面図及び見通し図を作成。N、Sトレンチの石室南側部分の断面図を作成する。この古墳の南側にさらにもう1基の古墳があったようで、それを示す溝を検出するために表土剥ぎを行なう。

9月13日 石室内敷石及び南北トレンチの石室北側部分の実測図を作成。墳丘北部及び南側の掘り下げをさらに進め、予定部分の発掘を全て終える。

9月16日 石室内敷石実測を終え、砂利を剥がしたところ、さらに花崗岩による敷石を検出する。

9月17日 敷石の実測を続行する。墳丘の実測に入る。

9月18日 2号墳石室敷石の実測を続行する一方、1号墳石室の実測を行なう。

9月19日 1号墳の石室、2号墳の敷石及び閉塞石の写真撮影を行なう。

9月20日 調査員登庁のため作業中止。

9月22日 2号墳石室敷石の実測を全て終える。1号墳石室のほそく実測及び2号墳の閉塞石の実測を行なう。

9月23日 1号墳石室及び2号墳閉塞石の実測を完了、写真撮影のための清掃を行なう。

9月24～26日 作業休み。

9月27日 石室の実測を行なう一方、石室掘り方の検出に努める。

9月28日 日曜日により作業休み。

9月29日 石室の実測を全て完了し、石室掘り方の検出に努める。その掘り方壁面に当時の鋤先痕跡を発見する。

9月30日 作業開始とともに雨が降り出し作業中止。

10月1日 雨のため作業を休み、遺物及び器材を庁内に運搬する。

10月2日 掘り方壁にみられた鋤先痕を石膏で形を取る。

10月3日 古墳南側溝の南斜面にみられたピットを検出し、実測、写真撮影を行なう。本日で全ての作業を完了した。

(第2次調査)

12月8・9日 写真撮影の為、伐採作業を行なう。

12月15日 4号墳より調査を行なう。4号は封土がほとんど崩れ、原形をとどめない。天井石等もないようだ。

12月16日 石室は、天井石と壁の上部がとりさらされており、流土の堆積がはなはなだしい。石室の掘り方をみるため、石室を十字に切るようなトレンチを入れる。このトレンチに銅環1を発見する。

12月17日 トレンチに石室の掘り方を認める。石室内の調査に入るとともに前庭部を調査。石室はすでに荒らされている模様。

12月18日 4号墳の調査に並行して、3号墳の調査に入る。4号墳の羨道部閉塞石の内側に須恵器、玉類がまとまって発見さる。

12月19日 4号墳は羨道部の天井石がとられており、土砂の堆積が著しい。石室内にはそれほどの堆積はなく、ほぼ床面まで掘り下げる。すでに荒らされていて、須恵器の破片をみるのみである。4号墳は、写真撮影と遺物の出土状況を行ない、遺物をとりあげる。

12月22日 3号墳、これも羨道部に須恵器と鉄鏃がまとまって発見された。写真撮影を行なう。又、封土の状況を知るため、十字にトレンチを設け、まず東西トレンチをはじめる。4号墳は石室の実測に入る。

12月23日 3号墳は遺物をとりあげると、閉塞石の状況写真の撮影、東西トレンチの発掘。4号墳は、石室の実測を完了。

12月24日 3号墳は石室の実測に入る。

12月25日 3号墳石室の実測、各トレンチの土層図の作成を完了。トレンチの埋めもどしに入る。器材運搬を行なう。

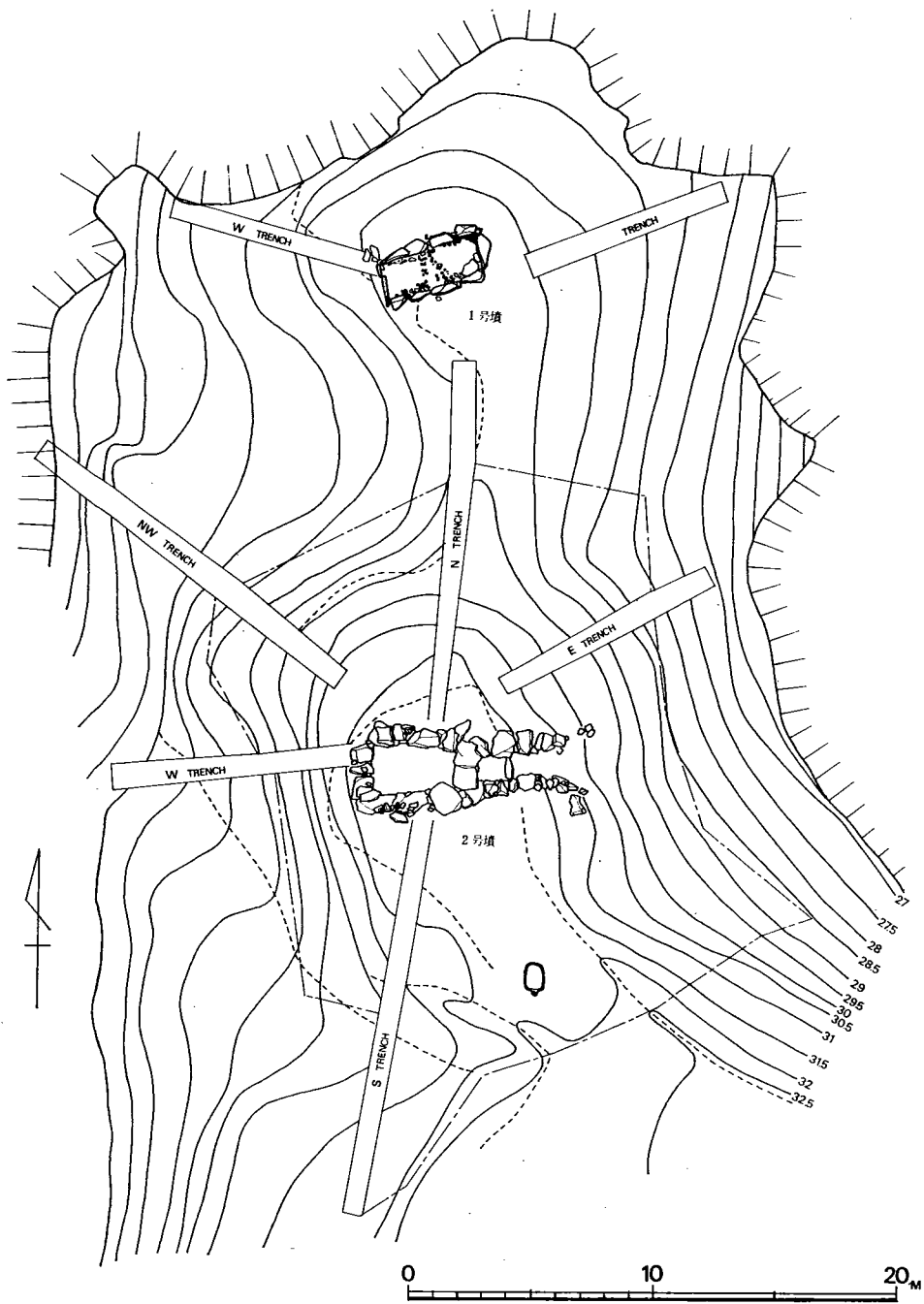
12月26日 3号墳石室の実測を完了、全作業を終了する。

## 遺跡の立地

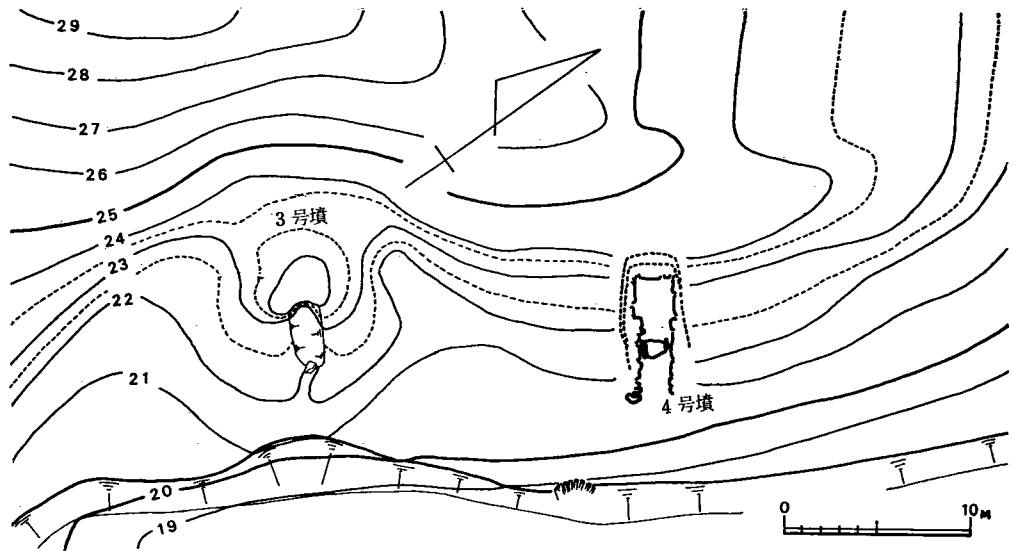
高崎古墳群は現存している古墳が6基確認されている。当古墳をもその範囲を包む大古墳群が、ゴルフ場建設の際に破壊されており、その数は数十基に及ぶものといわれる。

この古墳群は、早良平野と糸島平野を分かち飯盛山、長垂山の連なる山塊の麓に展開する丘陵に存在する。早良平野の西側にあり、ほぼ北に向けてのびる丘陵に分布する。

古墳群は谷をはさむ二つの丘陵に2基つつ存在し、さらに西方の丘陵にも古墳が存在する。1、2号墳は北へのびる丘陵の尾根上にあり、1号は西に、2号は東に開口する。3号は北東へのびる丘陵の東斜面にあり、いずれも谷にむけて東南方に開口する。いずれも旧状をとどめず、



第23图 高崎1・2号墳地形图 (1/300)



第24図 高崎3・4号墳地形図 (1/400)

1号墳は、墳丘は全く認められない。3号は石室を現丘陵斜面下におき、古墳の存在を考える状況を呈していない。2号は墳丘の上部を削平され、石室も上部を欠く。4号は墳丘の東南半分を削られ、石室は開口してあり、最近迄人の住んで居たことを聞く。

谷には大又遺跡があり、住居址を発見する。古墳群より一時期古いもので、古墳と生活址との関係を考えるに重要な遺跡地である。

### 高崎1号墳

#### 墳丘 (第23図、図版17-1)

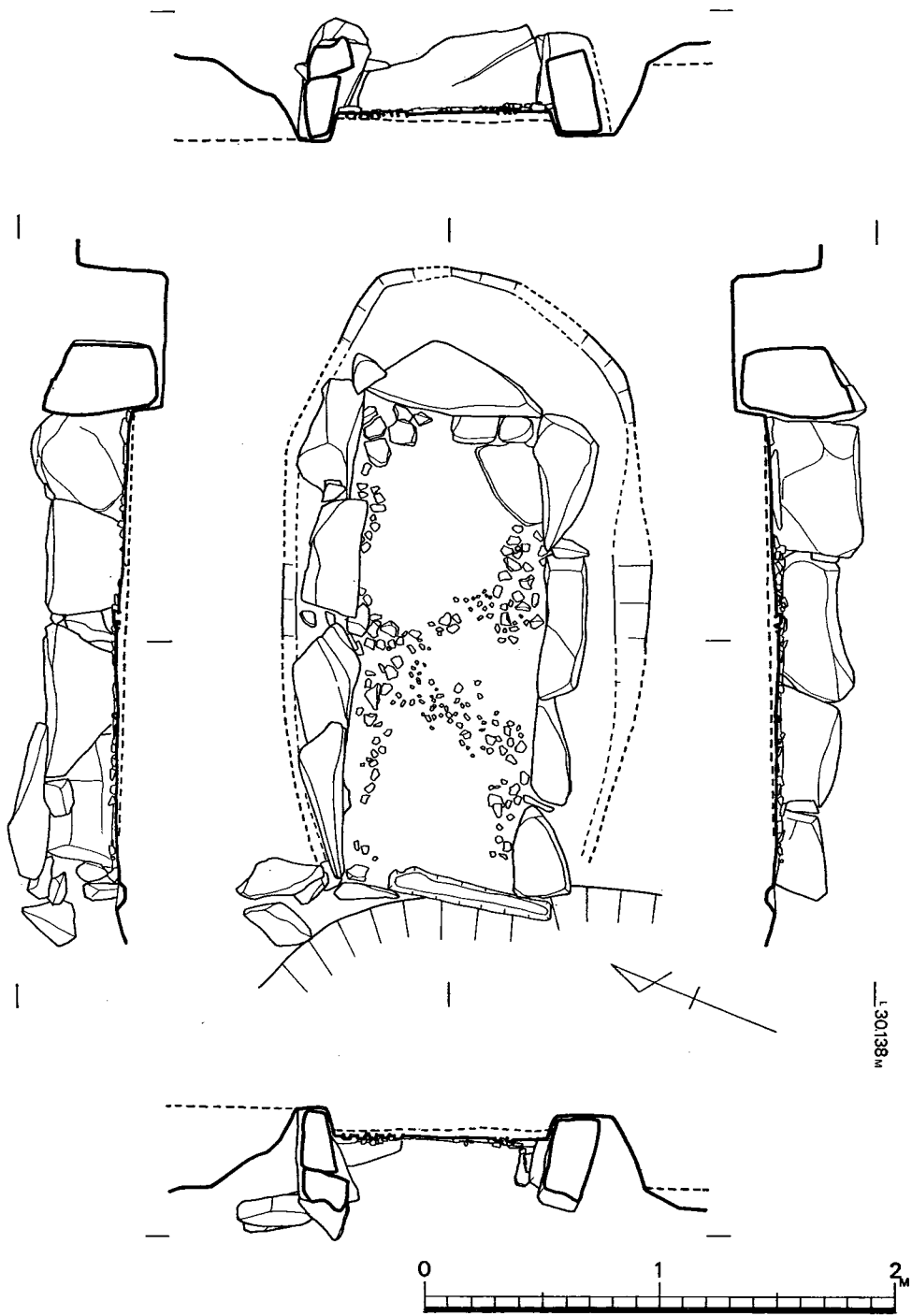
高崎1号墳は発見当初石の一部が露出しており石棺かと思われたが、調査の結果この石が石室の奥壁であることがわかった。封土は既に削り取られたのであろう、石室のほぼ東西方向にトレンチを設定してみたが、封土を少しも検出できなかった。石室西側はとくに深く削りとられていた。

#### 石室 (第25図、図版18-2)

石室は幅1.5m、長さ約2.7mほどのコ字形の壙内に架構されている。この壙は現地山面より約40cmの深さを測る。そして壙の北側は(地山面は石室床面より低い位置にあり)盛土から掘られている。

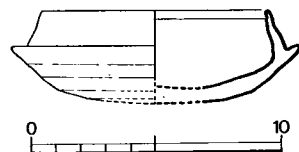
石室はその内法を、東西幅2.7mを計る。南北幅は0.8mの最大幅を測り、平面形は中ぶくらの形を呈す。石室は主軸はN-68°-Eである。

石室は、ほぼ腰石部を残すのみで、わずかに1カ所2段目の石をみる。石材は全て花崗岩を用いている。約55cm×45cmの扁平な石材を腰石として立て、その上は腰石よりも小さい石を



第 25 图 高崎 1 号墳石室実測図 (1/30)

小口積みしている。積石が旧状をとどめず、天井高も推定できない。石室は北東壁の石を最大とし、おそらくこの石の大きさからして奥壁と考えられる。これに対する南西側はすでに崩壊して石を残さないが、かろうじて溝状の落ち込みがあり、これが石の置かれた痕跡と考えられるならば、少なくとも石は幅70cmはあったろう。奥壁石とほぼ同大ある。しかし、この石が側壁間におさまらず、側壁外に出、しかも幅28cmを計る小石がその横におさまる。(又これを補うものとして、北西側壁にその西側端にそれとほぼ直角に小形石を配置していることである。東南側壁のその部分については、その部分まで削られており不明である。)このようなことからおそらく石室は横穴式と考えられる。敷石は奥壁傍にわずかに残っている。床面は荒されており、床面にみる小礫は石くずで、おそらく石室が壊された際にわられた石のものであろう。



第26図 須恵器実測図(1/3)

**遺物** 須恵器坏片1と鉄鏃2を検出するのみである。須恵器(第26図)はその復原実測図であるが、それからすると口縁部径9cm、高さ約3.8cmと推定する大きさである。器肉は厚く、底部付近のヘラケズリの他はナデによる整形である。口縁部は底部方からほぼ直線的に立ちながらも徐々に内側に傾くが、その角度も浅く1.5cmの立ち上りを示す。口縁端の下部に1つのくびれをもつ。やや小形であるが、第Ⅲ型式でもやや古い時期に比定されるものであろう。

## 高崎2号墳

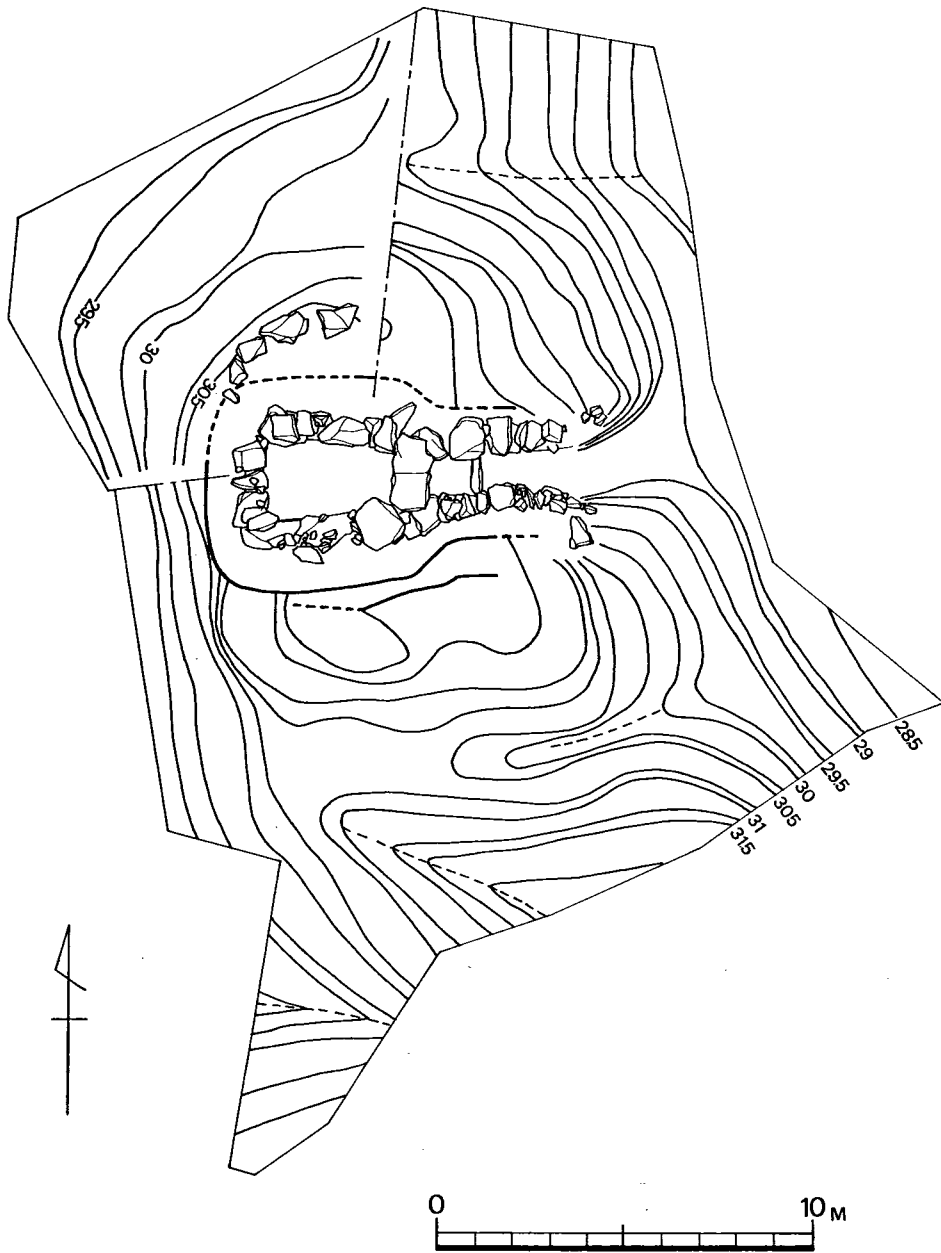
### 墳丘(第27・28図、図版19-1)

墳丘は既に削平されており、高さは不詳である。しかし削平は墳丘の上部のみで、墳形あるいは掘り方等はつかめた。

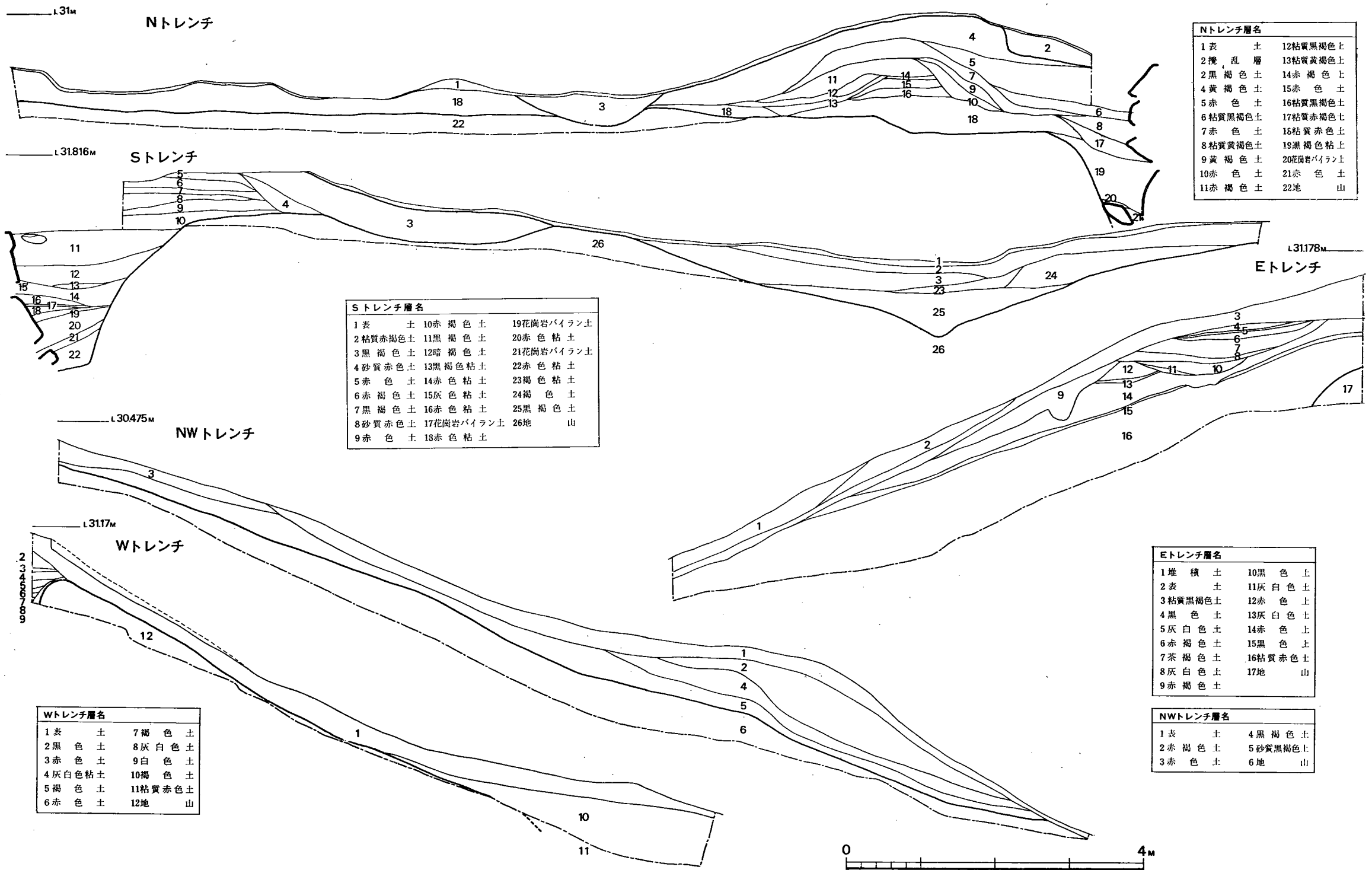
一辺約15mの方墳で、主軸はN-79°-Eである。墳丘は尾根の北と南に切断溝をつくり、尾根線から独立させ墳丘の基部をなし、これに版築状の封土をのせている。

まず地山面で石室とほぼ同形の掘り方(壙)を掘り、石室を架構するが、2~3段に石を積み上げる。その際に1段ごとに裏ごめを行なうが、その後掘り方より外側か、これにかかって土堤状に高く封土を積みあげている。Nトレンチでこの状況がよくわかる。Sトレンチのかかる南側でも同様であろう。次に4段、5段と石を積み上げたことが推定される。そして封土の積み上げに注目すべき点は、墳丘の北西部(墳丘のほぼ4分の1の広さ)を地山面まで掘った結果、ここに花崗岩の大石が4個地山面に据えてあった(第29図)。西側の小形の石はこれらとは別に一段と深い位置に据えてあった。これらの石は丁度土堤状に築かれた版築下におさまり、又これの延びる位置でもあるところから、この土堤状の版築を築くのにより早く合理的に行なう為使用されたものであろう。N、Sトレンチの土層図で第3層黒褐色土の堆積する落ち込みが溝となる。Sトレンチでは溝よりさらに南にV字状に掘り込まれたところを検出したが、このV字状





第 27 图 高崎 2 号墳墳丘実測図 (1/200)



第 28 図 高崎 2 号墳墳丘各トレンチ土層図 (1/60)

の落ち込みをどのように見るかはわからない。おそらくは封土に使用する土を採取した跡とも考えられる。E、W、NWの各トレンチが入る東及び西の斜面は急である。NWトレンチでは堆積土になんら変化はないが、下方に平坦部をつくっていることがわかる。Wトレンチも堆積のしかたは単純で、地山上に2つの層が堆積するのみである。おそらく地山面が墳丘の上面に続くものと考えられる。Eトレンチでは地山面がなかなかでず、かなりの急斜面で落ちていることがわかる。墳丘にかかるところで堆積のしかたに疑問な点があり、封土の版築にはおかし。第4～11層は落ち込みに堆積する二次的なものと考えられる。これは江戸年間に石室の石をぬかれた気配があり、その際に墳丘も掘られていることも考えを助ける。第15層の黒色土層が旧地表面である。

封土の版築は粘土質と砂質土を交互に積む。又黒色粘土をはさんでいる部分もある。

### 石室（第30図、図版19-2）

石室は横穴式石室である。石室の主軸は墳丘のそれとは少し方向が異なり、ほぼ東西に主軸をおく。N-89°-Eである。石室開口部からは、早良平野はもちろん福岡平野まで眺めることができる。

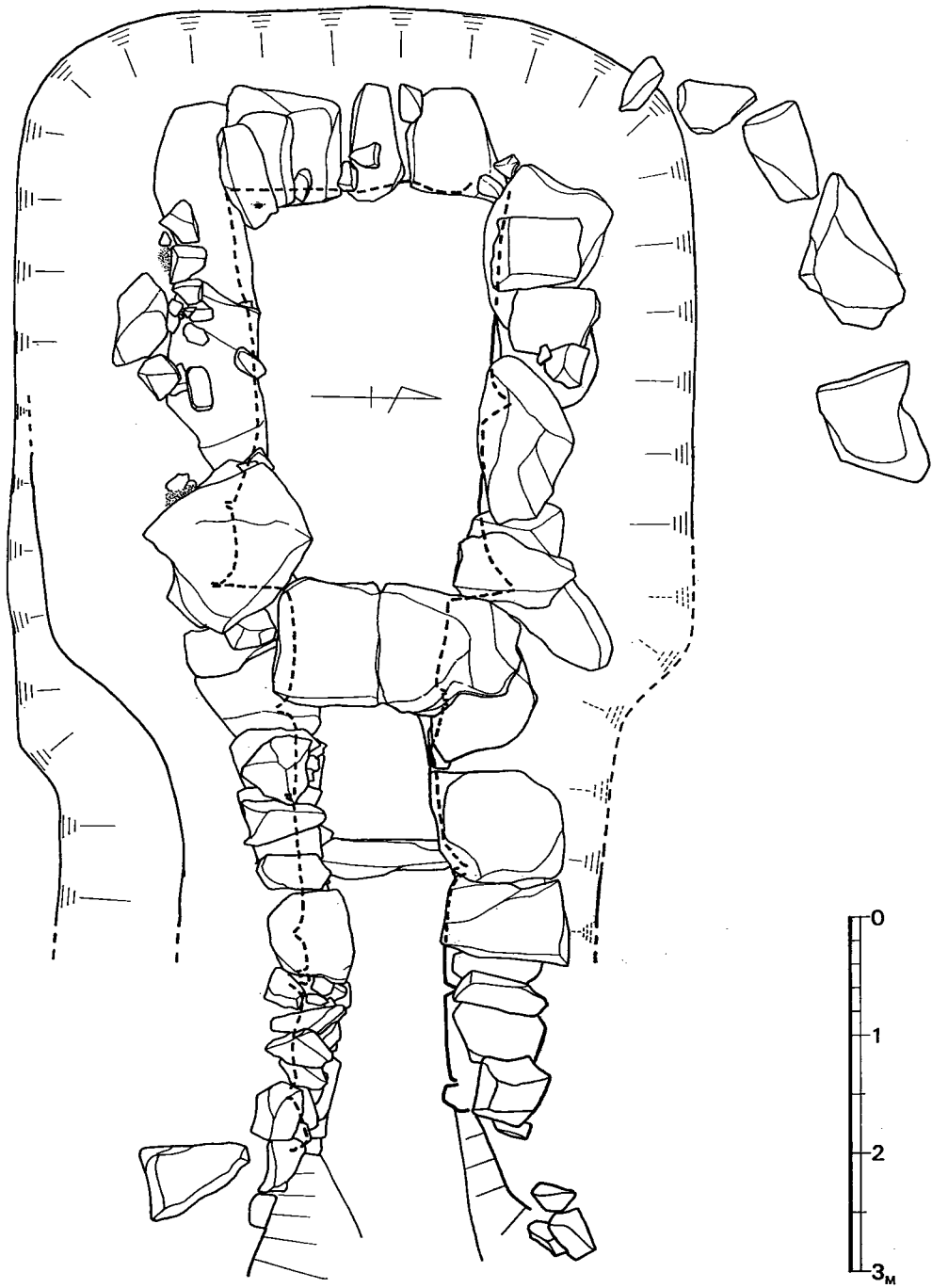
横穴式石室は、両袖式で単室の形式をとるもので、全長9mである。

玄室は主軸で、框石中央までの長さは3.7mを測り、幅は奥壁部で2.4mで、玄門側は2.5mである。長方形の平面形であるが、両側壁が腰石部で内側に彎曲し、最も狭いところで1.9mとなる。胴細りの傾向をしめず。羨道部の幅は約1.2m前後である。天井部はほとんど壊されていたにもかかわらず玄門部の天井が残っているだけである。高さは奥壁部に最も高く積石が残っており、この部分で約1.3mあり、羨道部で高いところは約2mである。羨道部の側壁高はほぼ同じ高さで残っており、玄門部の天井高からして、おそらくこの高さで天井石が置かれるのではなからうか。玄室での天井高は少なくとも3mの高さがあったのではなからうか。

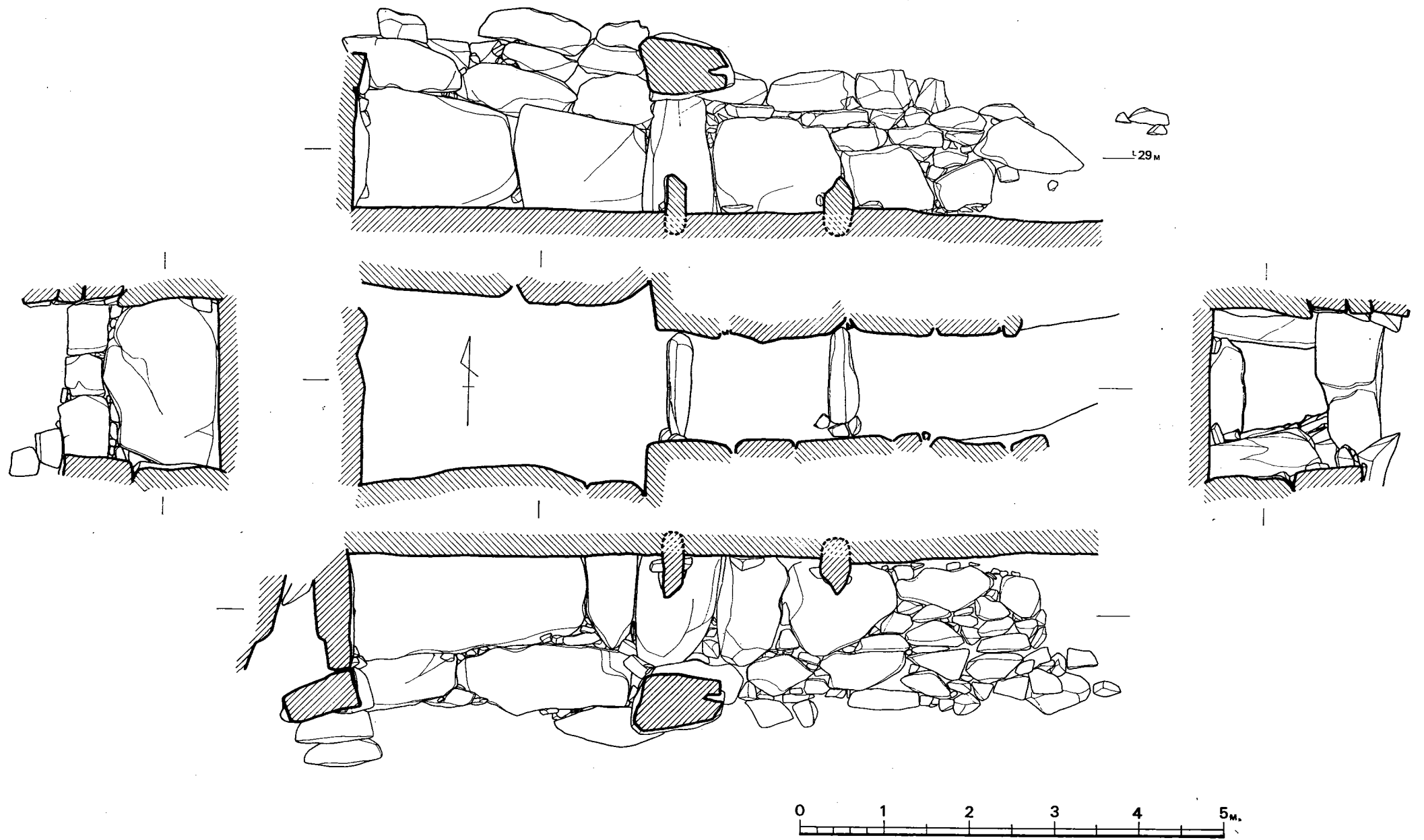
石室は石材に花崗岩を利用している。側壁は腰石に大石を利用し、2段目からは小形の石が使用され、小口に積まれている。玄室南側壁は腰石に長さ2.8m、幅1.3mの大石を立てている。そして2段目にもかなりの大きさの石を横に据えている。奥壁も大石を立て、やはり小形の石を積んでいる。そして開口部付近では小さな石を適当に積み上げている。特に南側壁はより小形の石を利用している。

石室断面をみると2段目より側壁が石室内部へせりだし気味になっている。そして積石の隙間には小角礫を適当に詰め、裏ごめにも小角礫や粘土をつかっている。奥壁裏側には下部に長さ約50cmくらいのを据え、奥壁石の安定をはかっている。

羨道部の内側から2番目の框石に接して（以後玄門部の框石を第1框石、羨道部の中間にあるものを第2框石という）、長さ1.3m、高さ1mの範囲に閉塞部がある。全て埋没していたので当初の状態をのこしているといえよう。この高さで羨道部天井のと間にわずかに空間を生じる。閉塞部は長さ0.9m、幅0.8mの石をまず立て、その横に長さ0.8m、幅0.25mの小石を縦にし



第 29 図 高崎 2 号墳掘り方実測図 (1/60)



第 30 图 高崎 2 号墳石室実測図 (1/60)

て立て基部とし、その上部及び詰めには小形の石を使用している。そして背後に土を積み上げてわりと大きな石を置いているようだ。いくぶん石の移動が考えられ、明確には断定できないところである。

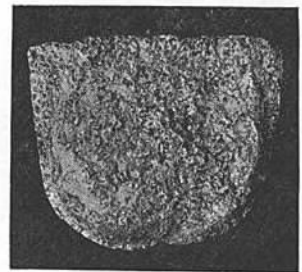
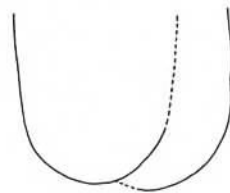
石室の床面は奥壁付近と、中央部の南北に敷石がある。敷石中央部では下部に角礫を敷き(第32図)、上部には砂利石を敷いている(第33図)。奥壁側でも2段に敷石があり、奥壁南側隅にその状況がよくわかる。奥壁側では南北の隅に敷石があり、中央部にはない。このような状況からして、奥壁側の敷石は棺台とも考えられよう。石室の玄門付近と羨道部には敷石はない。

石室は単室の形式をとっているが、羨道部の前室的な意味をもつ部分を設けているようだ。第1框石と第2框石との間がこの部分にあたる。というのは第2框石付近より石室の内と外では積石に若干の相異がみられる。即ち、羨道部は第2框石まで玄室と同じく腰石に大石を用い、外側は全体的にみて小形の石を小口積みになっていることである。又第2框石を設けることで羨道部に1つの空間がつけられること。そしてこの部分より須恵器等多量の遺物を出土していることから考えられる。

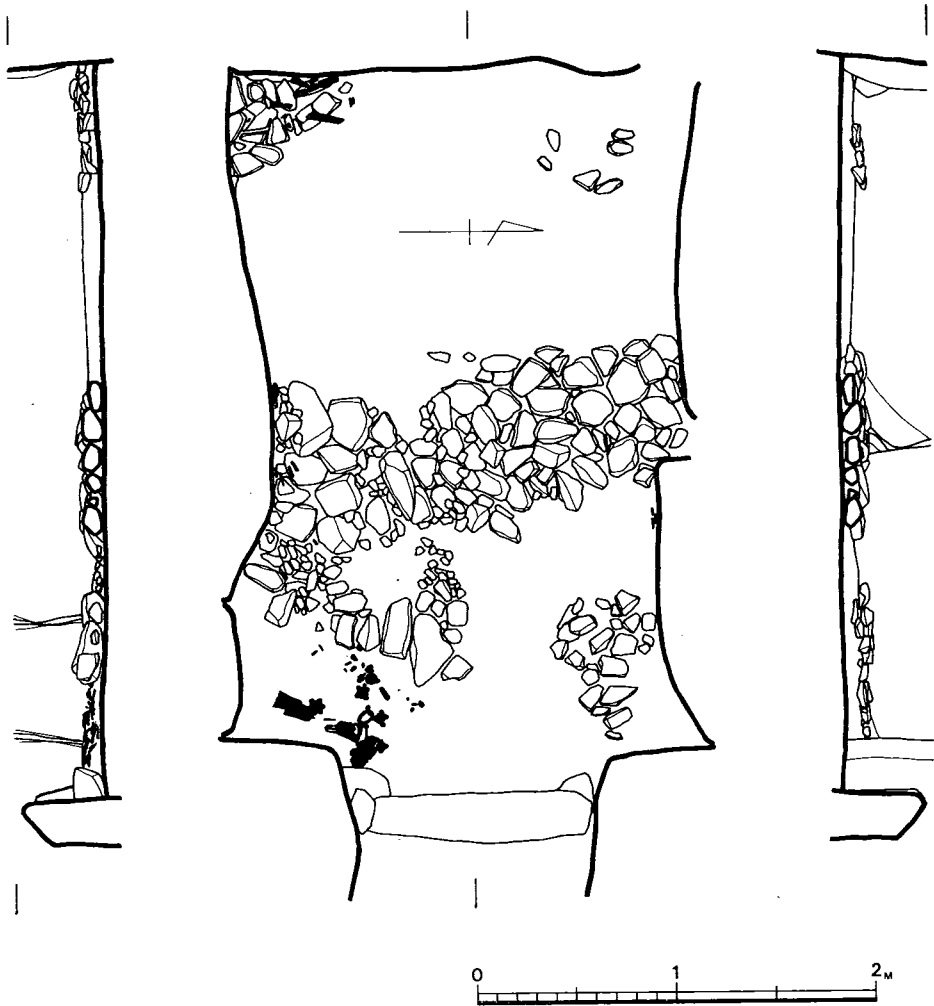
石室の掘り方は(第28図)、地山面より掘り込まれている。平面形は石室と同じプランを呈する。最大幅5.7mをはかる。地山面からの深さは約2mである。奥壁部での掘り方壁は奥壁の石室側面より約64cmのところから立ちあがり、外傾してのび、約1mのところ段をつけて再び同じ傾斜で延びている。奥壁石の固定にわりと大きな石を据えている。N、Sトレンチ上でも掘り方壁面を出したが、基底部では積石はかなり掘り方壁に接近しており、南側では約40cmの間隔である。壁は基底部より急傾斜でのぼり、約1.2mで段をもち傾斜もゆるやかに延びている。北側では基底部まで掘り下げていないが、かなりの急傾斜で掘り込まれている。

掘り方は石室の玄門部から羨道にあたるところは2段に掘り込まれてある。奥壁側でもこの痕跡はあるが、段部が広がっている。この掘り方を羨門部までプランをつかめなかったのは残念であり、羨門部までこのまま掘り方が続くことはなく、なんらかの変化があることが推定される。

又この掘り方を検出する際に、南側の掘り方壁にスコップ状の用具を使用したであろう。その用具の刃部痕跡を検出した(第31図、図版21-2)。第31図は使用痕跡の石膏模型と実測図であるが、この使用痕跡の重なったものである。用具の刃部はU字状を呈し、最大幅約20



第31図 スコップ状用具使用痕模型図



第32図 高崎2号墳石室内遺物出土状態実測図(2) (1/40)

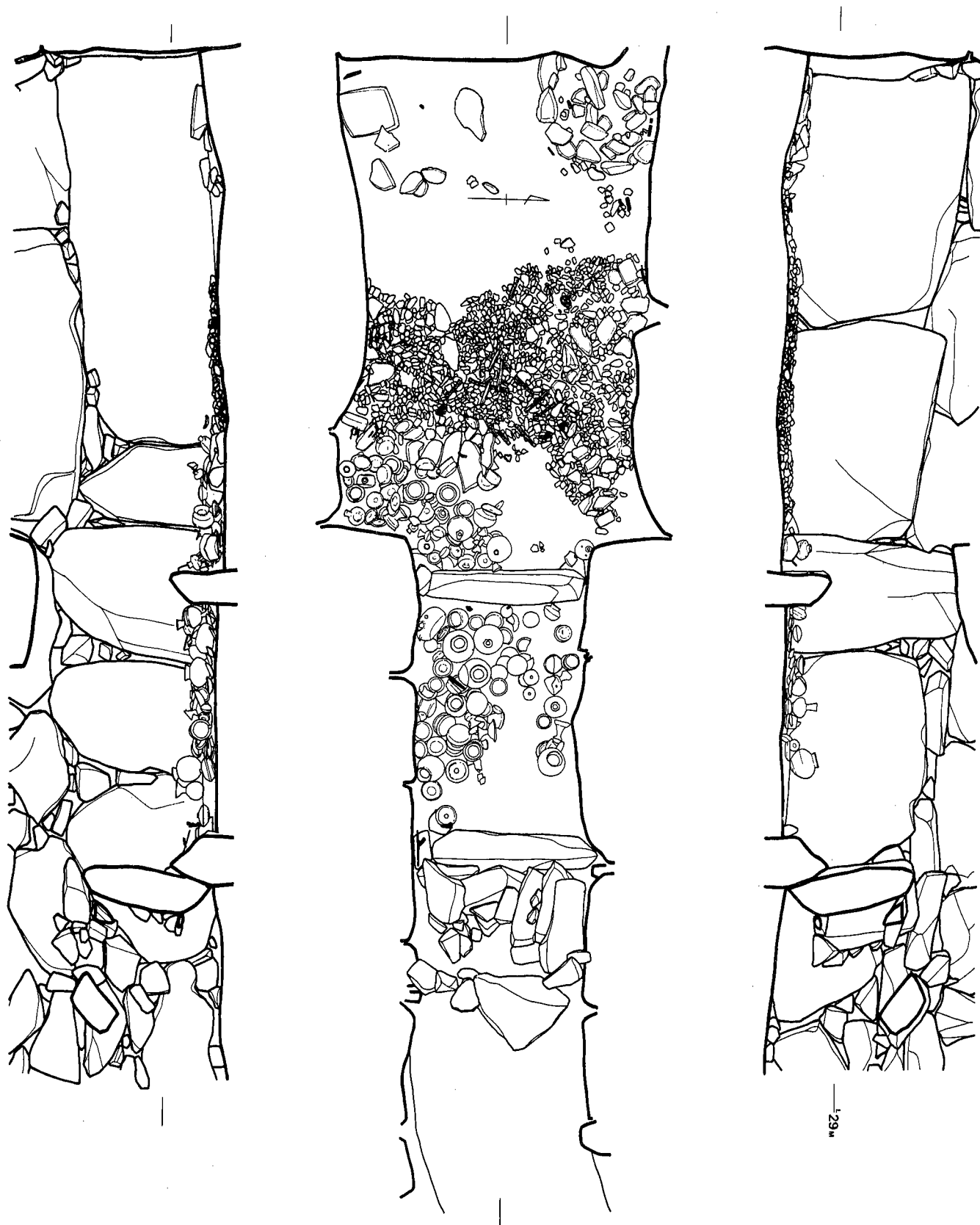
cmである。

#### 遺物出土状況 (第31図、第32図、図版22、23)

遺物は石室内の落ち込み土中のかなり上面からも出土していることから、いくらか荒らされているようだったが、状況から判断して、玄室中央から奥壁にかかるところが、とくに荒されているようで、玄門付近と羨道は手をつけられていなかった。

遺物は玄室の南側袖部と羨道部に集中して出土した。出土遺物のうちほとんどが須恵器である。およそ140個体を発見する。出土した須恵器は、当初の状態のものもあるが、ほとんどが倒れたり、意識的に逆に置かれたものもあった。

玄室では、南側袖部付近に集中して須恵器が出土し、玄室中央敷石部に人骨・鉄製品・玉類が出土し、奥壁側にも若干の鉄製品が出土した。遺物は南側袖部に出土した以外は、だいぶ動



第 33 图 高崎 2 号墳石室内遺物閉塞石出土状態実測図 (1) (1/40)



かされ、散乱している。人骨はとくにひどく散乱していた。鉄鏃が中央敷石の南側壁よりにわりとまとまって出土している。又、奥壁南側隅では、上部の敷石下にもう1つの敷石がありこの面にも直刀の破片を数個発見した。中央部敷石でも上部砂利敷石下に若干の鉄製品を発見した。玄室で発見された遺物の中で注目すべきは、框石のそばに置かれてあった3本の足を付ける須恵器壺と玄室中央のやや北よりの敷石上に出土した単鳳透彫りで金銅張りの環頭である。羨道部は、石室の主軸から南側により多く出土した。須恵器が多い。羨道部には趣を異にする土器を出す。作り方など全く須恵器と変りないが、焼きが土師器のようで赤く焼きあがっており、もろい。二、三の坏と有蓋脚付の壺・罎がこの類である。おもしろいのは土器が逆に意識的におかれていたものがある。玄室出土の須恵器坏に較べて、羨道部出土の坏の中に大形で摘みをもつ蓋付のものがあることが注目される。須恵器の他に鉄製品、切子玉がある。鉄鏃が須恵器にまじって発見され、閉塞部付近に兵庫鎖が出土した。又、閉塞部南側の側壁との隙間に小刀と刀子が置かれてあったが、意識的にこの位置に置かれたものであろう。

当古墳より出土した遺物は多量で、その内容も豊富である。須恵器は石室内より約140個体を、その外からは20数個体分が出土した。この他馬具、鉄製品、玉製品がある。

## 出土遺物

### 須恵器 (第34~41図)

出土した須恵器のうち坏身、坏蓋が他の器種と比較にならないほど多量にしている。須恵器については玄室、羨道と出土地点に分けることなく分類、考察してみた。分類の表示は各器種のそれと必ずしも一致するものではないことを書き添えておく。

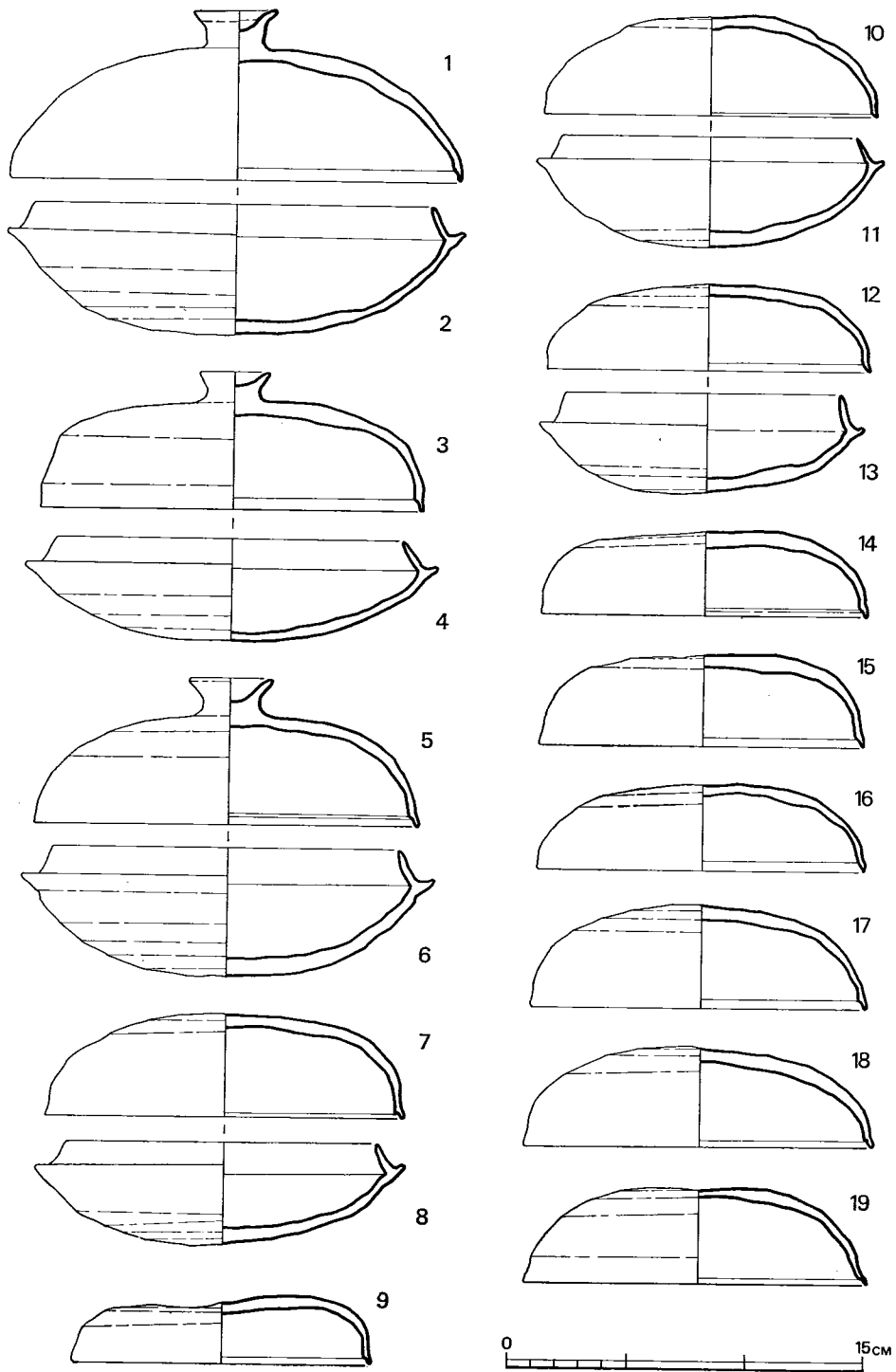
### 坏の身

**I a類** (13) たちあがり1.5cmで延びきり、やや内傾する。蓋受けは小さい。いくぶん扁平味を有する。底部は匏けずりのままである。口縁径は11.7cmである。

**I b類** (62, 64) a類に較べ器高が低く、より扁平味を有する。たちあがりは内傾が浅く、直線的であるが、延びが短い。

**II a類** (2, 4, 6) 出土した坏のうち大形のもので、特異な存在である。たちあがりI類に較べより内傾し、1.3cmから1.5cmの延びをみせる。全体に器高は高く丸味を有する(2, 6)。このうち2が最も大きく、最大径19.1cmである。匏けずりの痕跡がかなり上の部分までのっているが、けずりの整形も丁寧で器肉も薄く仕上げている。II a類の蓋と組合わせるものである。

**II b類** (8, 11, 61~72) 口縁径12cm~13cm前後でわりあい大きい。8, 61, 68のようにたちあがりの深いものもあるが、全体にたちあがりは内傾する。なかに62, 64のように傾きが浅く直線的に延びるものもある。又66はたちあがり接合部から彎曲を描いて延びきる。71, 72は蓋受け部が長く延び、受け部の落ち込みが深くなっている。器肉は薄く丁寧に仕上げている。



第 34 图 高崎 2 号墳石室出土須恵器实测图 (1/3)

る。11、69は底部に丸味を有するが、ほかは扁平味である。底部は篋けずりで整形をすませている。

Ⅱc類(73~75) 全体に器肉が厚くなっている。まだ大形の傾向をみせる。たちあがりは厚く、その長さから短かく感じる。接合部も厚く安定味を有する。蓋受けも大きくがっしりしている。

Ⅲa類(24、26、28、76、77、79、88、89) 全体に器肉が厚く、ことに底部が厚くなっている。たちあがり口縁端ではハネあがったように伸びきって、短いものとなっている。たちあがりの断面は88ように三角状を呈し部厚い。接合部も厚くなりしっかりとたちあがりを定着させている。たちあがりから蓋受けへの落ち込みは篋によつて沈線を描くように引かれ、痕跡が深く残っている。この類になると一般に小形になってくる。

Ⅲb類(78、81、85、87) a類とほぼ同じ大きさであるが、丸味を有し、接合部下に1段を有する。この部分よりやや内傾するか、直線的に直すぐに伸び、たちあがり内傾しながらも、その端にむかって垂直にたっている。81もこの類に類似するものようだ。

Ⅲc類(82、83) 口縁部径10cm前後で小形である。底部は丸味を有する。83はたちあがり、ほぼまっすぐに伸びる。たちあがりは1.5cmと伸び、器高が高く感ぜられる。

Ⅳa類(52、54、56、90、91、92) 口縁径が12cm前後で大きい。この類は底部が平坦にけずられ平底になる傾向がある。底部から蓋受け部へと直線的に伸び、断面が鉢状を呈する。器面の凸凹がめだち、整形が粗雑である。52、54、56、90は同じヘラ記号がつけられており51、53、55の蓋がこれに組み合わさり、これも同じ記号がついている。

Ⅳb類(80、93~97) a類の小形のもので、底部以外は器内は薄く、つくりがあまりよくない。a類と同様に胎土に砂質が強い。

V類(48) 小形で蓋受け部がない。底部が平坦になり断面は箱形となる。胎土、焼成はよくなく、器面がもろくなっている。径が9cmである。

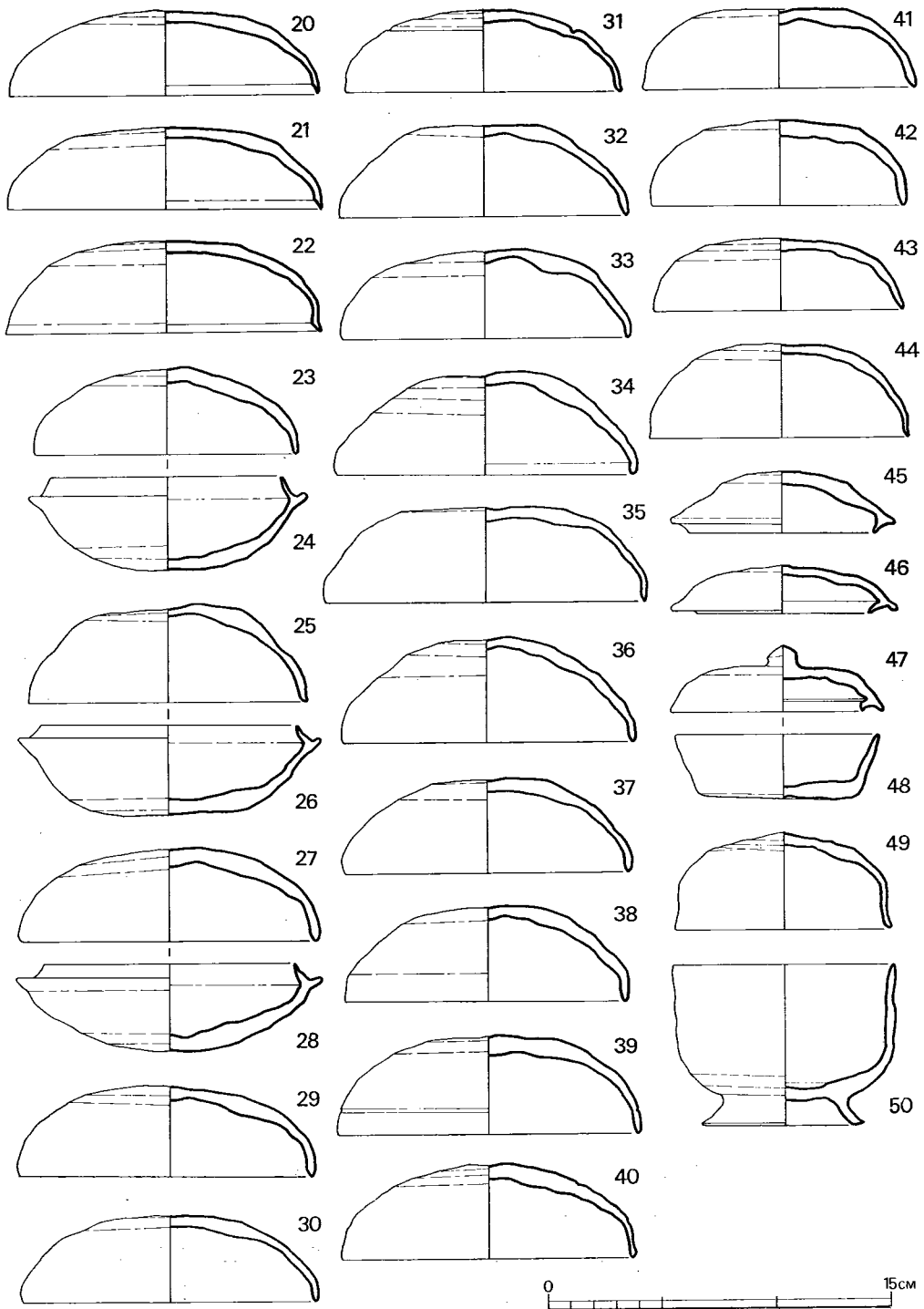
## 坏 蓋

Ⅰa類(9) いくぶん変形しているが天井部から肩部の変換点に段を有し、肩部から口縁部へ急傾斜で続く。口縁端の内側に段を有している。最大径12.5cm、器高2.9cmで小形のものである。全体に箱形の形態を呈す。

Ⅰb類(7、18) 最大径15cm前後で、器高も高い。a類に較べ、全体的に丸味を有する。口縁端内側に段を有する。口縁内側に段を有する。

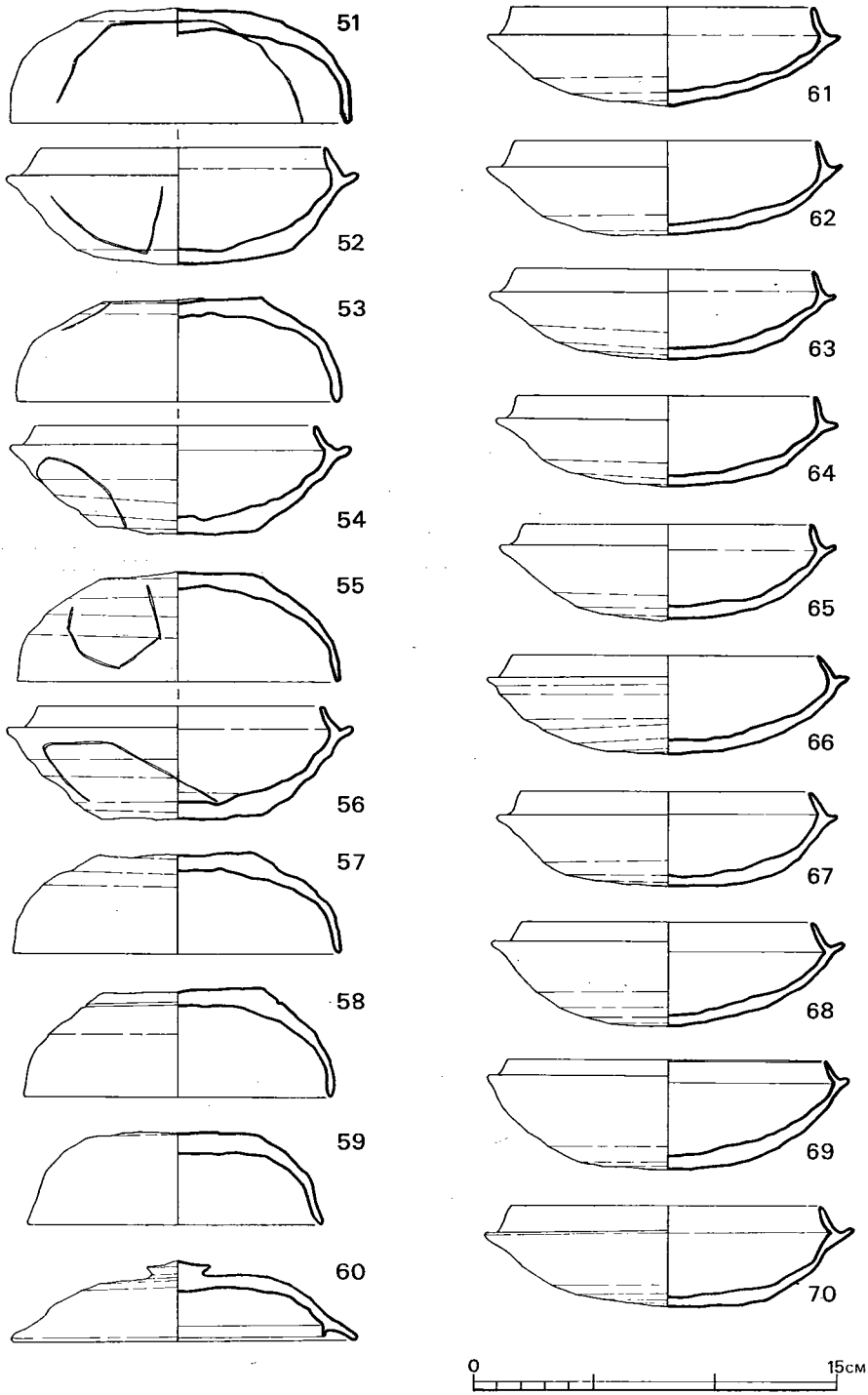
Ⅰc類(10、12、14~17、19~22) b類とほぼ同じ大きさである。全体的にみて丸味を有するが、天井部から口縁部にかけて段を有するものもある(12、15、22)。口縁端内側に有る段が退化し簡単になっている。19、22のように口縁端が外側に開くものもある。

Ⅱa類(1、3、5) 坏身のⅡa類の蓋になるもので、最も大形の1では最大径19cmであ

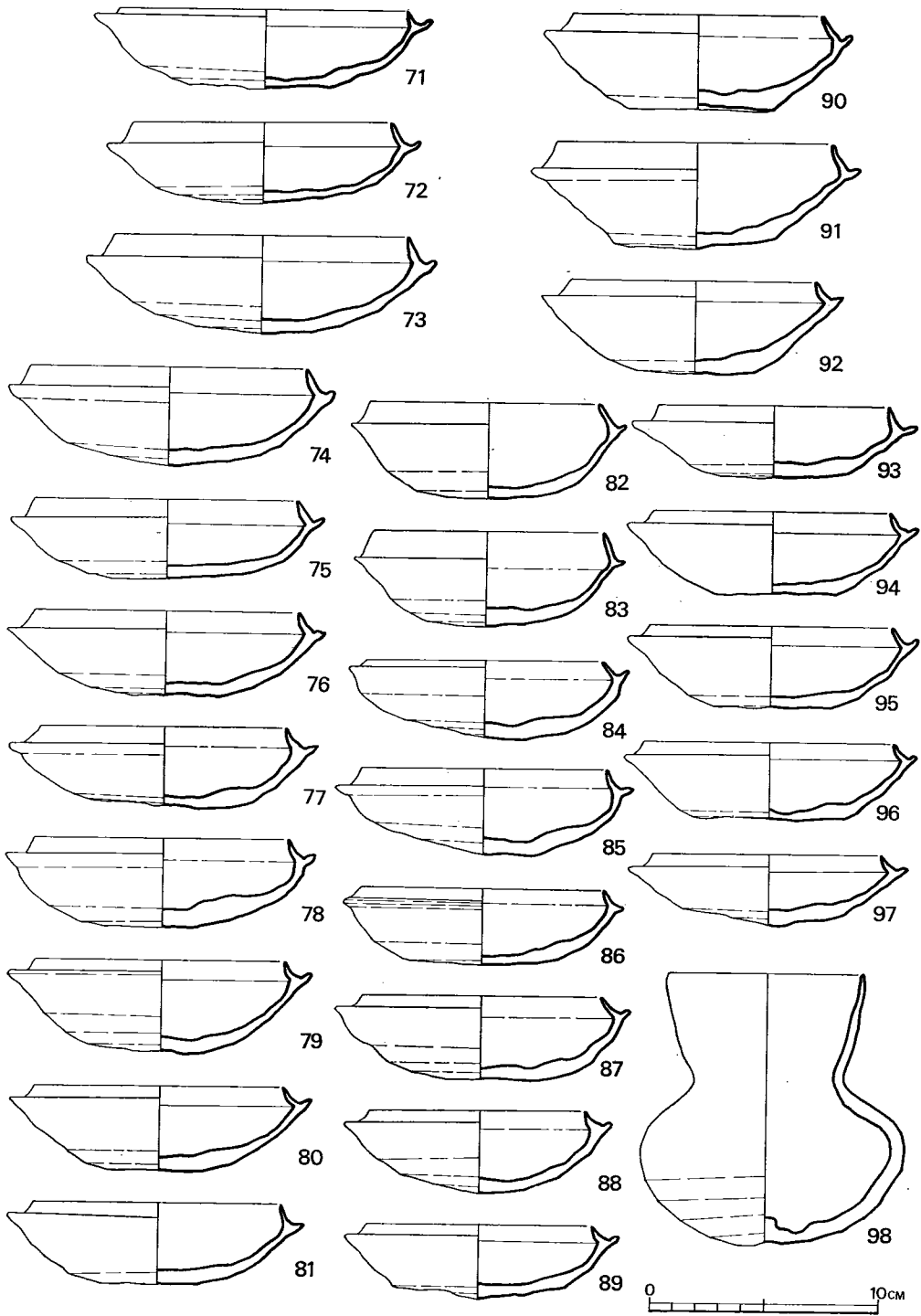


第 35 图

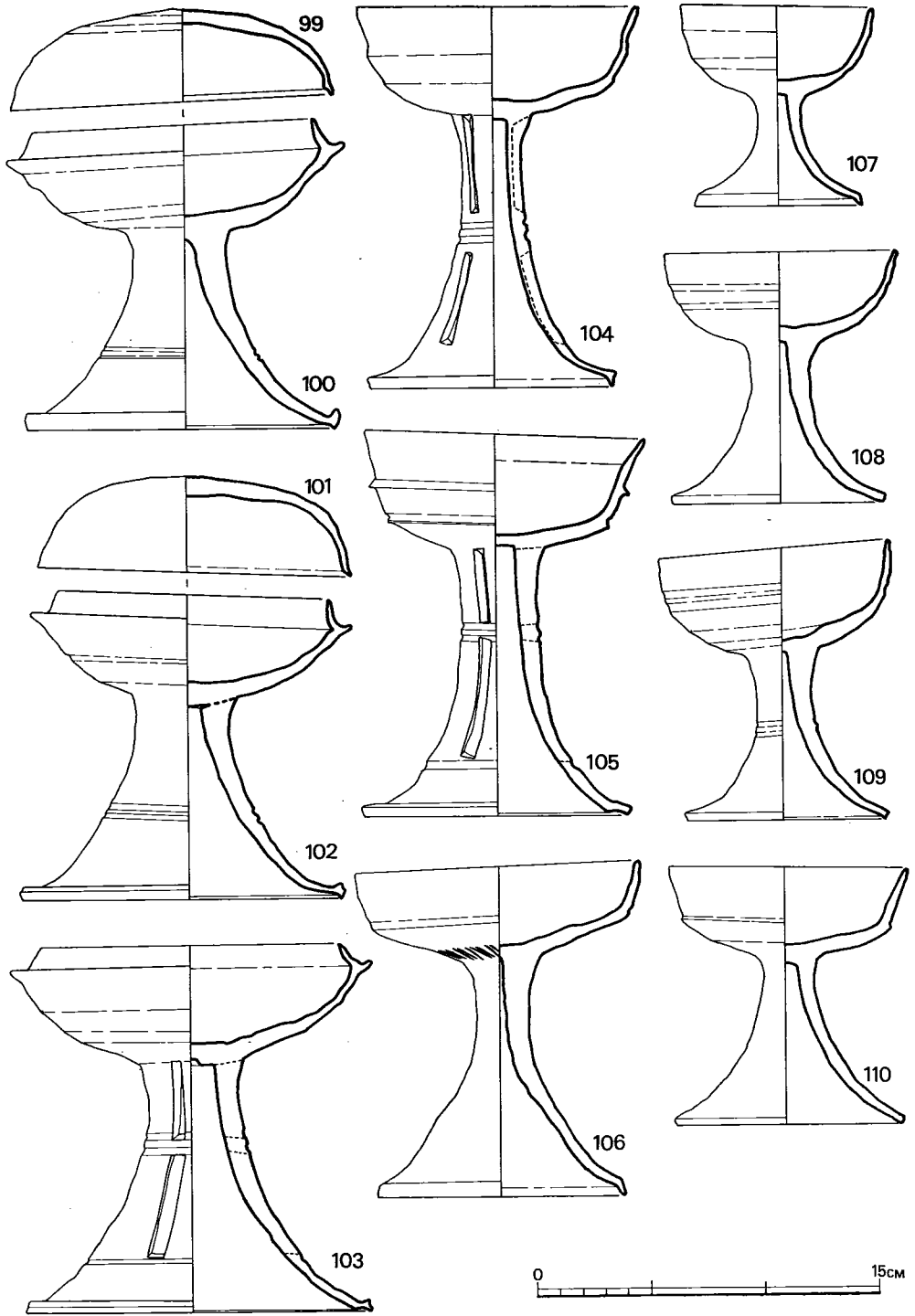
高崎 2 号墳石室内出土須恵器実测图 (1/3)



第 36 图 高崎 2 号墳石室内出土須恵器実測图 (1/3)



第 37 图 高崎 2 号墳石室内出土須恵器実測图 (1/3)



第 38 图 高崎 2 号墳石室内出土須恵器実測图 (1/3)

る。器形はⅠ類と変わらず、口縁端に段を有する。この類の特徴は、つまみをもつことである。

Ⅲ a類 (31、41、44) 器形は小形になる。口縁端内側に段を有する。これはⅠ、Ⅱ類ほど明確ではないが、その形体を残している。

Ⅲ b類 (23、25、29、39) 天井部から口縁端に曲線を描いて、丸味を有する。口縁部に一条の沈線を有するものもある (39)。

Ⅲ c類 口縁部付近に段を有するものである。この段の浅いもの (30、32、33、36、37、38) と、深いもの (27、29、35、38、40、42) がある。

c類は a・b類と同じく、底部に篋けずりのみの整形痕を残し、全体に器肉が厚くなっている。篋けずりもあらく、丁寧さを欠く。

Ⅳ類 (51、53、55、57~59) 坏身のⅣ類の蓋になるもの (51、53、55) で、この類の特徴は、天井部が平坦になることである。平坦部は篋けずりによってつくられている。器体部も篋けずりの痕跡が残っており、凸凹がめだち丁寧さを欠く。身と同じく焼成はよいが、胎土に小石が多くはいっている。

V a類 (47) 宝珠形つまみをもつものである。48と組み合わせる。身受けの落ち込みが浅く、かえりは短かく、端は外にはねるように延びきっている。

V b類 (45、46) つまみのないもので身うけ部にかえりをもつ。45はかえりの断面が三角形状を呈し、身受け部よりなめらかに続く。かえりはこの類のうち長く延びきっている。46は全体的に薄手で、かえりも身受け落ち込みより直線的に延びている。

坏にはこの他に特殊なものがある。116、117の組み合わせるものがそれである。

蓋はつまみをもち、つまみは頭の平坦なもので蓋の大きさからしてかなり太い。口縁端の身受けのかえりは短い、太くてしっかりしている。このかえり接合部の器の外側に段を有する (116)。本体 (117) は坏のたちあがり長大化したものであろう。口縁径 9.5cm、器高 9.5cmで、最大径 12.5cmは蓋うけ部にある。たちあがりは接合部でいったん外にくびれ、再び内傾し、蓋うけ部より 5.6cmの延びをみせる。蓋うけ部は平坦につくられている。底部は扁平味を有し、篋けずりの整形痕が残っている。全体的に器肉の厚いものでしっかりした作りである。

### 有蓋高坏 (第38図)

I a類 坏部は口縁径 11.5cmこすもので、たちあがりほぼ垂直に延びるもの (102) とやや内傾するもの (100) がある。両者とも脚は胴部から端部にむけ大きく開き安定感がある。脚端部は内傾するかえりは短い、直線的に脚部より続く。いずれも脚部に二条の波線が入る。102は坏部と脚部の接合がよくわかる。両者とも蓋を有しているが、99の坏の口縁部内側には段がまだ強く残っている。

I b類 (103) a類に較べ脚胴部が細く感じる。長方形の透しを2段に入れている。胴部に2



条の、脚部に1条の沈線が入っている。脚端部はかえりがあるが浅く、接合部に浅い落ち込みをつくることによってより強い表現をしている。

#### 無蓋高坏 (第38図)

**I類 (104、105)** 両者とも坏部に段を有し、脚についても他と分類できる。いずれも脚胴部はI類に較べて細く、したがって脚部はそれほど開かない。104は胴部に2条の沈線が入り、2段に断面三角形の切りこみが入る。脚端部にかえりがほぼ直角につく。105も胴部に2条の沈線が入るほか脚部にも1条の沈線が入る。脚部の沈線より上下に透し孔を入れている。脚端部はかえりが退化し段を有し、この段より内側に浅い落ち込みをもち、かえりの端に彎曲して続く。坏部にはその体部に断面三角形の帯を1条つけ、その下部に深い断面三角形を呈する沈線を施している。

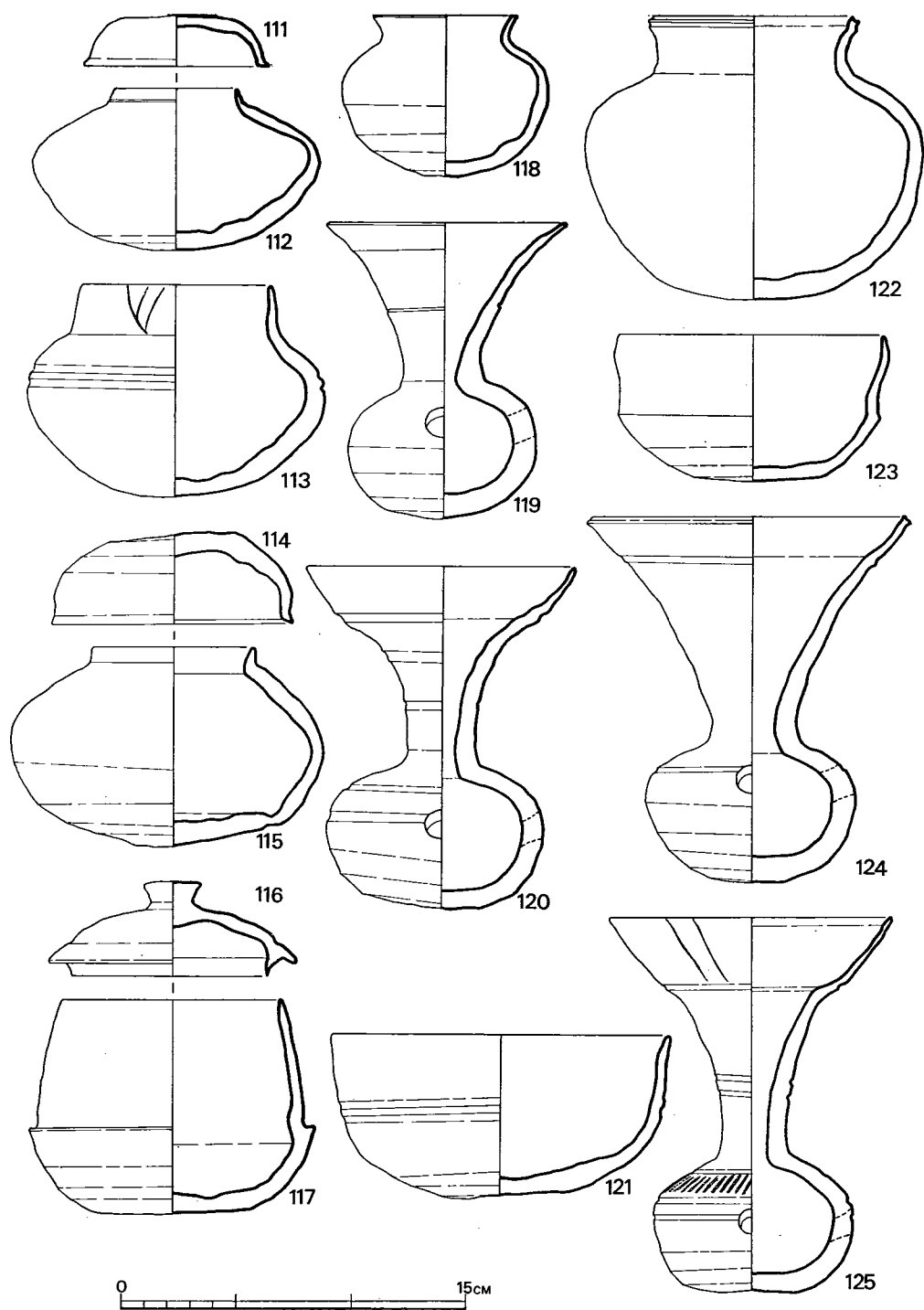
**II類 (106、110)** 坏部が全体的に箱形を呈し扁平になる。脚胴部はより細くなってくる。

106は坏口縁部径12.5cmで、体部変換部に浅い沈線を1条入れている。脚胴部の接口部付近に篋描き羽状文を施している。脚胴部と脚部への変換部は膨みをみせている。脚端部は内傾して鈎の手状のかえりをつけている。110は坏部は体部変換点より直線的に口縁部に続き外傾する。これも1条の沈線をもつ。脚はごく簡単なもので、脚端部にはかえりはない。坏部口縁部は10.4cmである。

**III類 (107~109)** 全体的に坏部が丸味を有し小形である。109は最も小形の高坏で坏部口縁部径8.4cm、器高8.7cmである。脚胴部から脚端へ内側にそるようにひらき、脚端の内側にかえりを鈎の手状につけている。106と同じようなかえりである。108は坏部に浅い2条の沈線を有する。脚端はかえりをもたず角をつけて終わっている。109も坏部に沈線を有し、脚胴部にも2条の沈線をもつ。脚端部につまみあげてつくりだしたような、ほんのしるし程度のかえりがついている。

**壺 (112、113、115)** 113は蓋を欠いているが全て有蓋のものである。口縁部のたちあがりは長く延びる。胴部の張りが上部にあるが全体に丸味をもつ。胴上部に2条の沈線を入れている。図に示すヘラ記号を入れている。他の2つは蓋と組みあわさって出土した。いずれも肩部が張り、丸味がなく扁平気味である。口縁部のたちあがり是非常に短い。112は底部に篋けずりの整形でおわっているが、115は胴部にまで篋けずりの痕跡が残っている。115の胴部から底部への変換点は器肉が薄くなっている。蓋は両者とも口縁部が平坦で、口縁端が外側にとび出している。天井部は平坦である。

**直口罎 (98)** 口縁径8.5cm、胴部径11.9cm、器高11.9cmのものである。口頸部は胴接合部よりやや内に反りながら外反する。胴部最大径が上にあり、肩部が張り、接合部より肩へは直線的に続き、これより曲線を描いて底部に延びる。下胴部から底部に篋けずりの整形痕をのこ



第 39 图 高崎 2 号墳石室内出土須恵器実測图 (1/3)

す。底部の内側はヘソ状につき出している。

## 甗

**I a 類 (124)** 胴接合部から口縁下の沈線部までラップ状に外反して延びて、再び内に反りつつ外反する口頸部である。口縁端に段を有し、一見かえりのあるように見える。胴部は肩が張り、肩部に1条の沈線を有する。

**I b 類 (119)** 胴接合部から口縁部までラップ状に外反して延び、口縁下の段でより外反しながら口縁端につづく。口縁端には陵線が入る。口縁部なかほどに1条の沈線を入れ、頸部には1段を有すが、胴部は接合部での器肉の厚さがつづき、いくぶん重みを感じる。丸味をもつ胴部である。口縁径10.5cmである。

**II 類 (120、125)** 口頸部は胴接合部から口縁下の段まではほぼ直線的に延び、この段より内に反りつつ外反する。口縁部は丸味を有する。この口縁部下の段に内側ではわずかに平坦面となり、外側には1条の沈線を入れている。口頸部に2条、胴部に3の沈線を入れている。又胴部1段目と2段目の沈線間に櫛押圧による斜文を施している(125)。120も胴部から口頸部は直線的に延び、口縁下の段よりやや下方から曲線を描きながら外に開き、段より内に反りつつ外反する。やはり口縁下の段に1条の波線を入れている。口頸部に2条、胴部にも2条の沈線を入れている。胴部は断面が楕円形を呈する。篋けずりの整形痕が胴の中ほどまで入っている。

**椀 (121・123)** 口縁径14.8cm、器高7.2cmの大形のものである。口縁部はその端内側に段を有し、わずかに外反する。胴部に2条の沈線が入る。底部は篋けずりで整形をおわっている(121)。

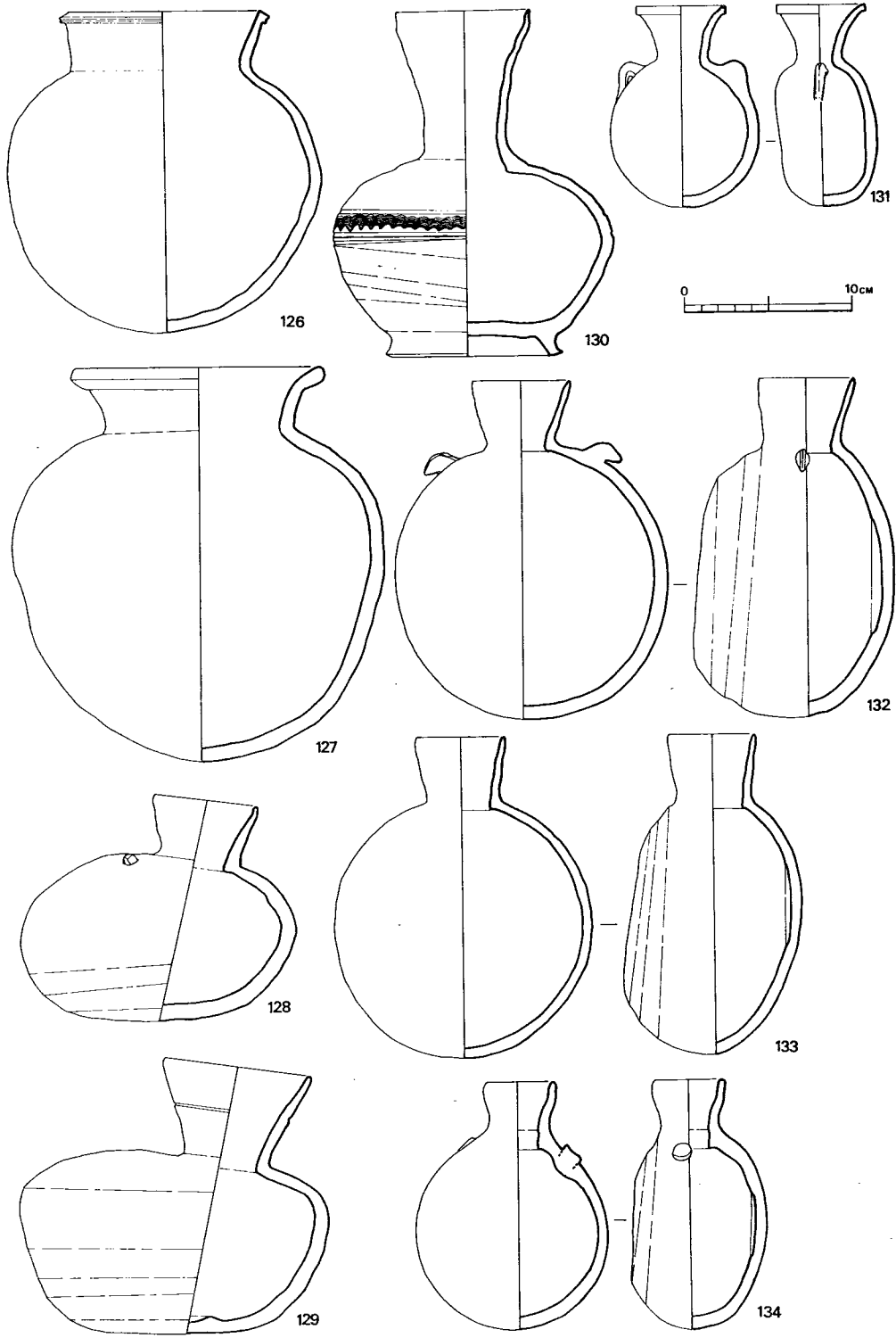
123は茶褐色を呈し土師器のようであるが、整形法など須恵器と同様であり、わりと硬く焼きあがっており須恵器のうちに入れた。

器形は坏の変形したものようで、又椀ともいえないような器形をしているが、椀としてとりあげてみた。

口縁径11.5cm、器高6.4cmで深い。底部は平らである。体部に1段を有し、この段まで外側に延びてきた線はここで垂直に立ちあがり再び外反し、口縁部ではやや内反して延びきっている。底部は篋けずりである。

**台付椀 (50)** 口縁径9.7cm、高さ6cmで深い椀部に高さ1cmの低い台脚がつく。台脚径は7.1cmで器肉は薄く、外側に直線的に延びている。椀部の台脚接合部付近には篋けずりの整形痕が残っており、台脚は椀部を一応整形したのちにつけられている。

**椀蓋 (60)** 最大径14.1cmで大きい。擬宝珠形つまみのつくものである。天井部はやや平坦で、天井部から口縁端へは外反するように延びている。身受けのかえりは小さく薄いもので、その接合部は内側に段を有し。直線的に続いている。



第 40 图 高崎 2 号墳石室内出土須恵器実測图 (1/4)

甕 7 個体出土しているが、そのうちより選んで4 個体あげている。

I 類 (122、126) 頭部は曲線を描きながら外反するが、口縁部では内傾し、直口である。口縁端の外側に1 条の突帯と その下に1 条の沈線を入れることによって擬似凸帯をもうけたようにしている (122)。

126の頸部は直線的に外反し、口縁端の外側に断面M字状の帯をつける。

II 類 (127) 頭部は直線的に外反し、口縁部下でより外に反り、段を有する。口縁端はやや丸味を有する。口縁径 15.1cm、器高 23.2cmで石室内出土の甕のうち大形のものである。

III 類 (118) 最小の甕形土器である。口縁径 6.3cm、器高 7 cmである。口縁部は直線的に外反するが、頸部は曲線を描いて肩部に続く。口縁端は平坦である。胴中央部より下に筥けずりの整形痕を残す。

長頸台付壺 (130) 口頸部は胴部より直線的に立ちあがり、それから外反しながら延び、口縁部では内反し直口の形をとる。頸部から曲線を描いて肩部に続き、肩部から直線的に底部へ続く。胴部に2 条の沈線を入れ、沈線間に櫛描きの波状文を施している。台脚は短く、太めのものである。脚端は平坦になっており、外側に脚端がとびでている。胴部2 条目の沈線より下に筥けずりの整形痕を残す。

平 瓶 (128、129) 胴肩部に乳状の突起をもつものと、そうでないものの2 種がある。

128は胴肩部に乳状の突起をもつものである。頸部は直線的に外反し、口縁部で内側に浅くくびれる。胴中央部に最大径を有し、断面は卵形に近い形になる。乳状の突起は肩部に中央より対称的に2ヶ所つけている。筥によってけずられた面があり、丸いものではない。底部及び下胴部に筥けずりの整形痕がある。

129は頸部が胴部より直線的に外反し、口縁部付近ではやや内反しているようだ。頸部に1 条の沈線を入れている。胴部は肩が張り、断面が箱形を呈する。胴中央より底部に筥けずりの整形痕がある。焼成が悪く、器面がもろくなっている。

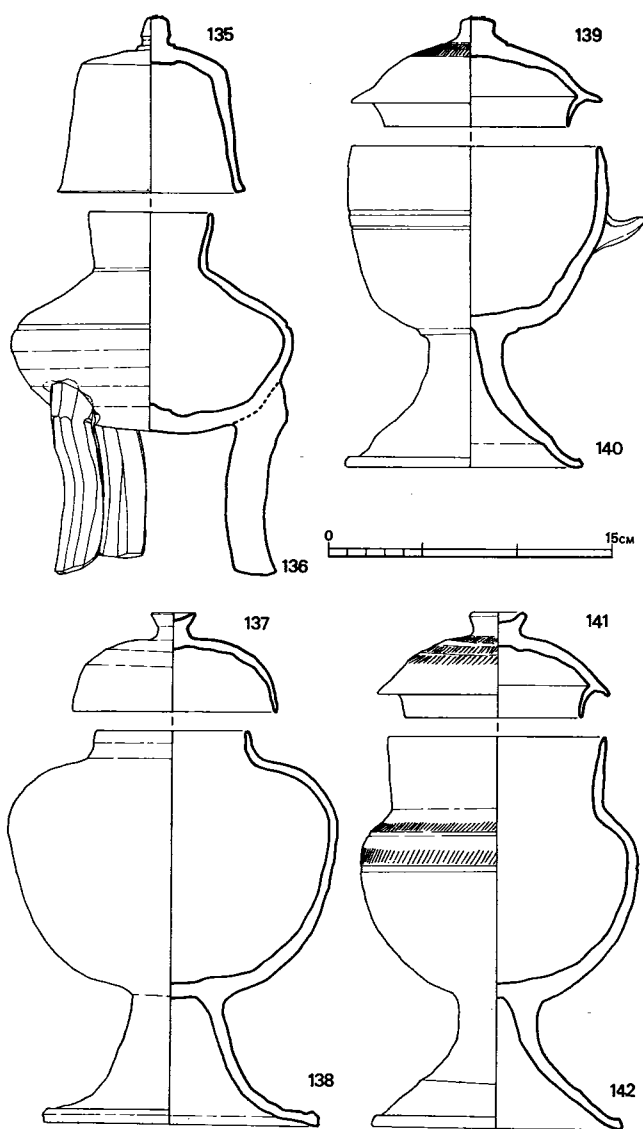
提 瓶 出土した量は多く、それらのうちより選んで図示した。

I 類 (131) 小形の提瓶である。口縁部はラッパに外反し、肩部に耳状の把手をつける。口縁径5.3cm、器高11.8cmである。

II 類 (132、134) 耳状の把手が退化し、132は鳥の羽根のような形の把手がつき、134は円盤貼付となり、把手というよりもむしろ非実用的な飾りである。

134の円盤貼付は、円盤を器におしこむようにしてつけている。

III 類 (133) 132から把手をとりのぞけば同様のかたちをとる。口縁部は頸部より直線的にやや外傾して4.4cmで延びきっている。口縁端は丸くおさめている。I・II類と同じく、胴平坦部



第 41 図 高崎 2 号墳石室内出土須恵器実測図 (1/4)

**有蓋脚付壺** 蓋 (137) は坏蓋Ⅱ a 類に類似し、その小形化したものであろう。つまみは頭が落ち込んでいる。口縁端の内側にいくぶん段を有している。本体 (138) は短頸の広口の壺に脚のついたもので肩部からなめらかに曲線を描きながら内傾し口縁端に続く、やや肩が張り胴部を長く感じる。脚胴部は太めで脚は大きく外反し、安定している。脚端部は外側にいくぶんふくらみを持ち、段を有する。

焼成が土師器と同じようで茶褐色を呈する。このような器形及び整形の手法を土師器にみることができず、これが須恵器のそれと同じである。しかし須恵器の類とはいえず特徴のある土

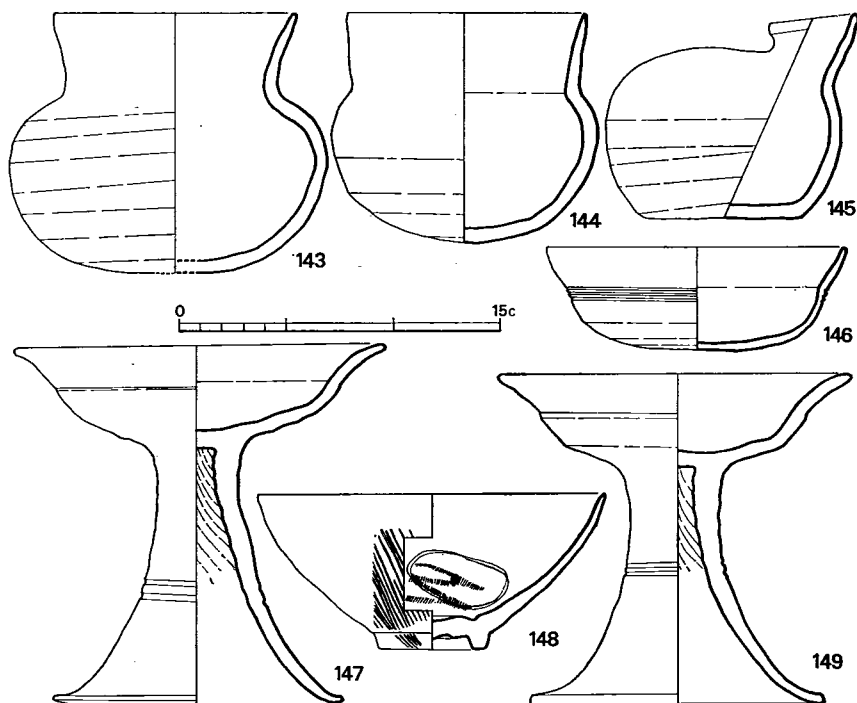
のほうには篋けずりの整形痕がある。

**有蓋足付壺 (136)** 細頸の口縁をもつ壺形土器に 3 本の足をつけ、これに深い釣り鐘状の蓋 (135) をもつものである。蓋は宝珠形つまみを持ち、その取付部に 1 段を有する。つまみの頭は平坦になっている。蓋は釣り鐘状を呈し、肩から急傾斜で直線的に口縁端に続く。口縁端は平坦である。蓋は器高 6.7cm 口縁径 9.8cm である。本体は壺の肩部に 1 条の沈線を有し、いくぶん扁平味を有する胴部をもつ。これを一応完成したのち、棒状の足をつけ、篋けずりにより外に反る足をつくりだしている。色は小豆色を呈し、肩部と蓋には灰釉がかかっている。W のへら記号を胴下部に記している。

器が(139~142)出土している。

**有蓋脚付椀** 蓋(139)は宝珠形のつまみに類似するつまみを付け、その下方に1条の沈線を入れる。これに接して、2段にわけ篋描きの羽状文を施す。天井部から口縁部にかけて段を有し、この段から天井部に延びる線は外に反りつつ口縁端に達する。かえりは外に反りつつ1.6cmで延びきる。細身のかえりである。140の本体は口縁径が蓋の最大径より大きく、13.2cmをはかる。椀部は胴中央部に2条の沈線を入れ、一方のこの沈線にかかるところに鈎状の上にはねあがる把手をつける。椀部と脚部の接合部に段を有している。脚部も接合部は器肉は厚くラップ状に外反する。脚部は段を有し、脚端部は外側がやや上にはねあがっている。

**有蓋脚付埴** 141の蓋はつまみを有する。つまみの頭は落ち込みをもつ。かえりは身受けから段を有して1.7cmで延びきっている。つまみ接合部より下方に3段に分け、篋描きの羽状文を施している。142の本体は、蓋と同じく全体的に薄手につくられている。頸部から口縁端に直線的に延び、いくぶん外傾する。胴部最大径を上にもち、14.6cmをはかる。肩部からの下胴部は長く、肩部付近に2条の沈線を入れる。そして各々の沈線に接してその上に篋描きの羽状文を施している。脚胴部は厚くしっかりと接合している。脚胴部は細く、脚部はラップ状に開き、脚部



第 42 図 高崎 2 号墳出土土師器、青磁実測図 (1/3)

に段を有す。

### 土師器 (第42図)

石室内より4個体出土している。

壺 (143) 口縁部は肩部から頸部に曲線を描き、それより直線的に外反する。胴部は肩部から底部へいくぶん直線的に続き、底部は平坦となる。肩部から底部に篋けずりの整形痕を残す。焼成はよい。底部中央部が少し欠損している。

埴 (144) 口縁径 11.1cm、器高 10.6cm を測る。口縁部は頸部くびれより直線的に外反し、接合部内側に段を有す。胴部は頸部からそれほど張らずに続き、底部は丸味を有す。

平瓶 (145) 口縁部は器体の中心線に向けて開く。口縁端は丸くおさめ、外側に段を有す。底部は平底ととなる。胴中央部より下方に篋けずりの整形痕を残す。

坏 (146) 体部に段を有し、この段より内に反りながらも外反する。この段の下に3条の沈線を入れる。底部は篋けずりで、器形は全体的に扁平味を有す。口縁径 14.1cm、器高 4.7cm である。

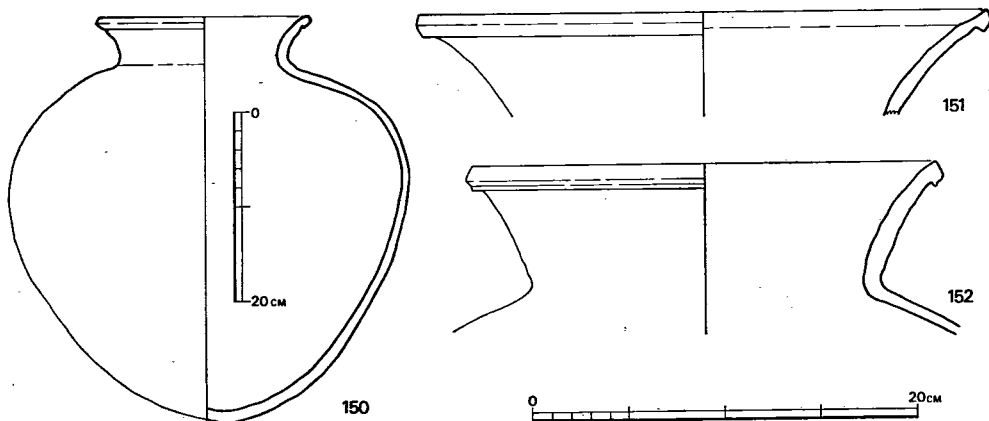
### 石室外出土の土器

須恵器は大形の甕形土器が多く出土している。土師器のほか珠光青磁も出土している。

### 須恵器 (第43図)

甕 (150、151、152) 完形のものがある (150)。口縁径 22.4cm、胴部最大径 41.7cm、器高 43cm の大形のものである。口縁部は肩部から曲線を描き大きく外反する。口縁部外側に篋けによって沈線を入れ、段をつくっている。胴部は卵形を呈する。

151は口縁径 29.5cm、152は同 24.1cm である。150と同じく大形の甕の口縁部であろう。151



第 43 図 高崎 2 号墳石室外出土須恵器実測図



はラッパ状に外反する口縁で、口縁端は内傾しやや内に反り、外に段を有す。152は頸部から外に反りながら外傾し、口縁端外側に段部を有し、凸帯をつける。

### 土師器 (第42図)

高 坏 (147、149) 両者とも坏部中ほどに段を有し、これより外に反りつつ外傾する。脚胴部に2条の沈線を有する。149は器高がやや低い。

青 磁 (148) 石室の墓道の落ち込み土中に出土し、ほぼ半分を復原することができた。

珠光青磁で、口縁径16.2cmを有する台付碗である。器面の外におそらく櫛描きと考えられる斜条文を入れ、内側には篋により楕円形に沈線を描き、重ねて細い篋状のもので、W字状に沈線を入れている。器面の整形は篋けずりで終り、釉をかけている。台は低くてしっかりしたものがつけられてある。底部裏は篋けずりである。

### 馬 具

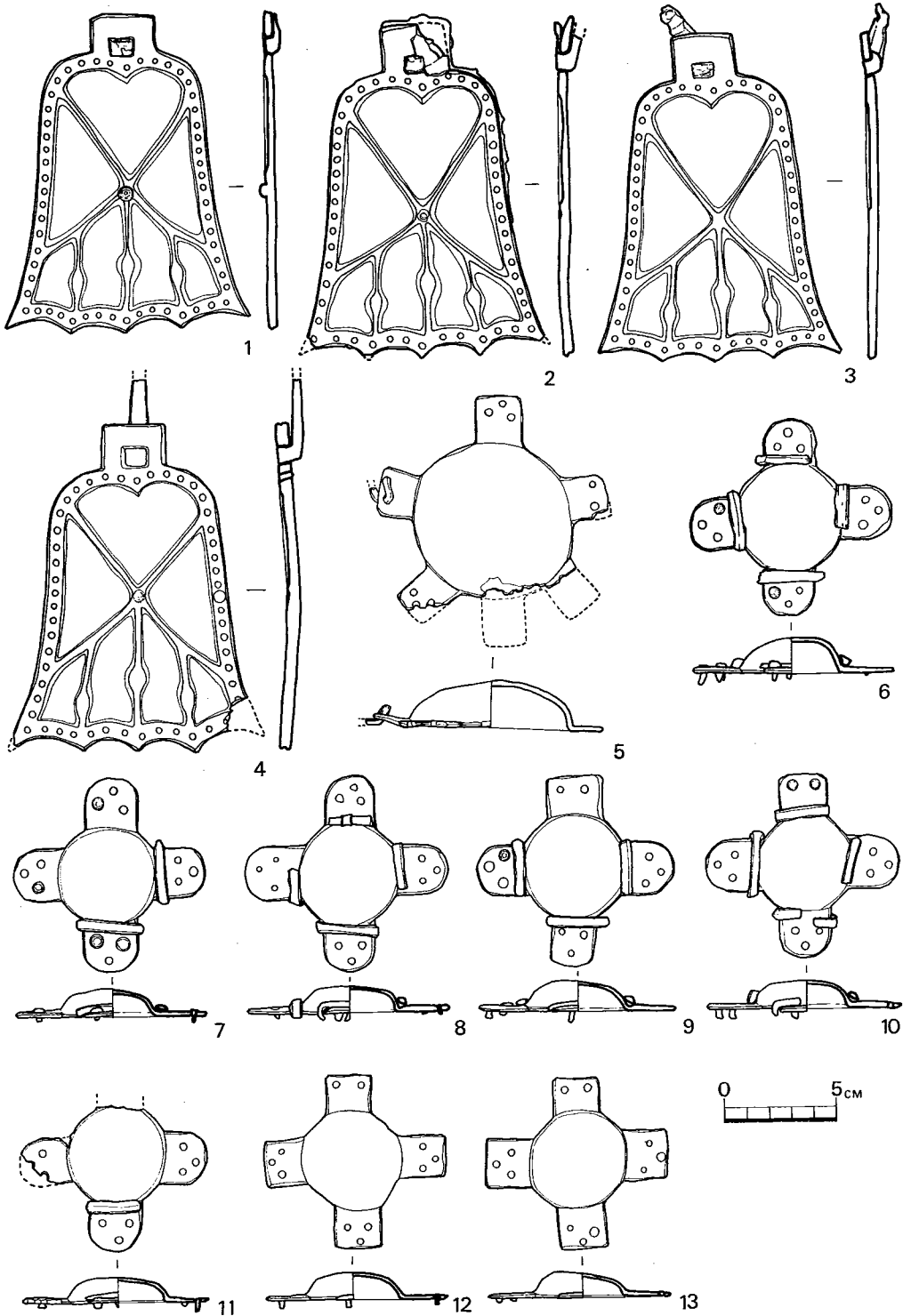
馬具は石室南側袖部に須恵器群の下に集中して出土した。1組の轡が少し離れるのみである。杏葉は一定の方向に向けてあり、辻金具、雲珠は散在し、脚もとれたものがあった。

杏 葉 (第44図1~4、図版24-1) 鐘形の鉄地金銅張りの杏葉が4葉出土した。長さ14.5cmから15cmで、下縁にいくぶん幅のちがいがあがあるが、ほぼ同じ大きさである。台板、地板の區別のあるもので、身の上端に方形の立間があり、方孔を存することは通例のものである。身は鉄板に文様の形に組み合わせた鉄線と縁金をおき、その上に金銅板をまいて、そのうえから鋳で台板と貼り合わせている。鋳は笠鋳でほとんど朽ちている。笠の部分は径5mmをはかり、周縁に飾りをかねて、接近して打たれている。文様は身の上部にハート形、両側に三角形の空間をつくり、下部には縦に3本の線を引き、空間をわけている。中央の線の交叉するところに、鉄製の半球球形の形をしたものをつけている。身の下縁を5カ所とがらせている。またいづれも釣手金具の一部が付着しており、これは鉄地のままのものである。

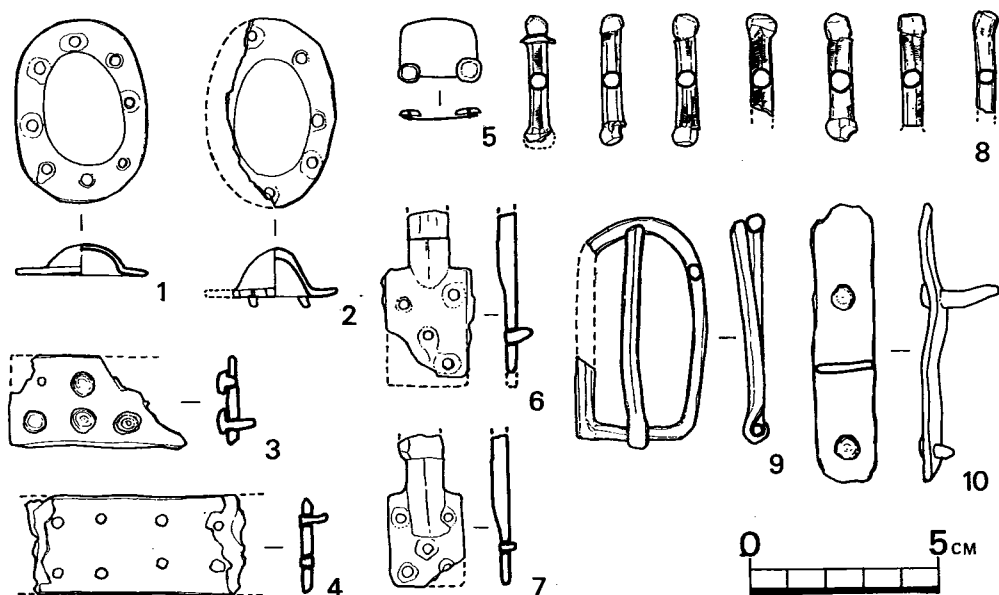
雲 珠 (第44図5、図版24-2) 鉄地に金銅張りのものである。一部欠損しているが、中央に径7cm、高さ2.2cmの半球形を造り出し、長さ1.8cmと同2cmの脚を6本もっている。孔を2つ持つ脚が最も短い。2つの孔を持つ脚は一方にその孔を通して鉄線が付着している。おそらく留金具であろう。他の3つの孔を持つ脚には鋳が打たれてある。

辻金具 (第44図6~13、図版24-2) 辻金具は8個出土している。これらは三つに分類できる。いづれも鉄地金銅張りのものである。中央部に中空の半球形を造り出し、これに4本の脚をつけ、その接合部に責金具が付着している。金具の裏には交叉して布が朽ちてはいるが残っている。

これらは三類にわけることができる。脚端部がすべて丸味をもつもの、一脚のみ脚端部が方形で、鋳がその脚のみ2つであるもの、またすべての脚が方形であるものに分類できる。図は一脚のみに2つの鋳をもつものは、その脚を上部においてみた。鋳は笠鋳である。



第 44 图 高崎 2 号墳石室内出土杏葉、雲珠、辻金具実測図 (1/3)



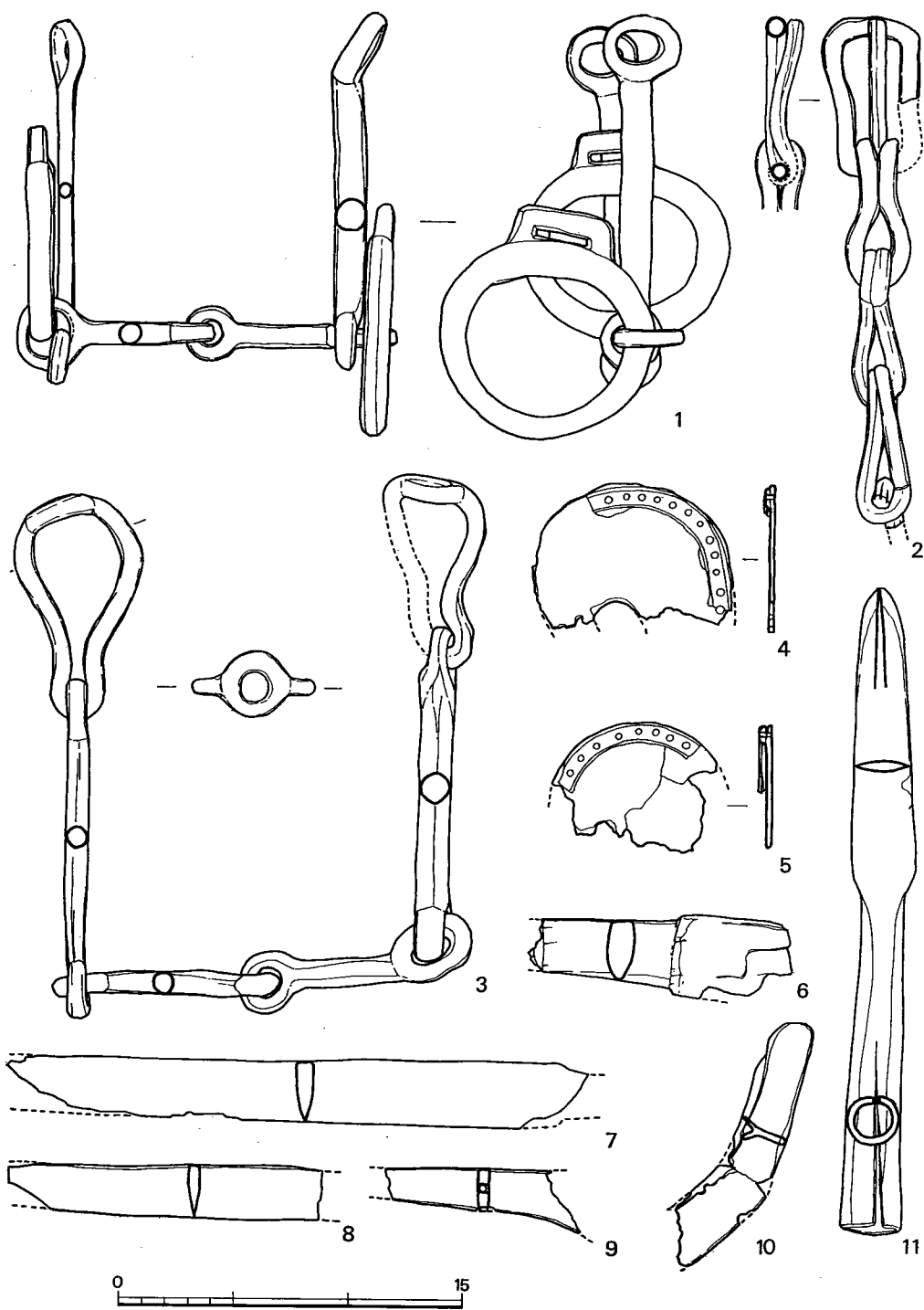
第45図 高崎2号墳石室内出土馬具実測図 (1/2)

釣手金具(第45図6・7) 図は上下逆になっていることをまず記しておく。鉄地金銅張りのもので、長方形の身に細い棒状部がついている。両者ともこの棒状部先端を欠いており、原形は不詳である。身に5個の笠鉾を打ったのであろうその痕跡をとどめる。身は扁平であるが、棒状部の断面は半円形を呈す。おそらく雲珠、辻金具から杏葉をつるのに用いる金具であろう。

鉄地金銅張金具(第45図1~4) 用途のわからないものが二種ある。1つは長径3cm、短径2.1cm、高さ0.8cmの楕円形で鉢状の中空部を造り出し、この周囲に庇状に平坦部をつけ、全長径4.8cm、全短径3.5cmのもの(1)がある。庇状部に鉄の笠鉾を4本打っている。2も一方を欠損するが同じものであろう。腐って中空部に歪みがある。その他に飾金具と思われるものがある。薄い鉄板に金銅をまいた幅2.6cmで板状に延びているもので、鉾は二列に等間隔で打たれている。3・4は同一個体のものである。3の短辺の一方は角に延びきっている。この他に5に示すようなものがある。現在は薄い銅板のみが残っており、下端両側に銅製の笠鉾を残している。鉾は極く細いものである。おそらく金銅張であったのであろう。また何に合わせてあったかは不詳である。

鉄製留金具(第45図8) 同じものが8本出土している。長さ3.5cmの棒状のもので両端が丸くなっている。そして図の左のものに見るように両端の丸くくびれる部分の周囲に庇状の部分をもつ。この丸い部分は棒状部の端に、新たに鉄板をまいたように造り出している。棒状部には直角に木目が残っている。

鉄製鉸具(第45図9) 全長6.1cm、幅3.5cmである。鉸具の環部の長辺左側は直線的である



第 46 图 高崎 2 号墳石室内出土馬具、鉄器実測図 (1/3)

のに対し右側は内に反っている。おそらく鉄線を折りまげてこの環部を造ったのであろう。図下方の左が直角に交じわり、おそらくこの部分が接合部であろう。

**鉄製金具**（第45図10）用途不明のものである。長さ7.5cm、幅1.1cmの隅丸の長方形を呈する鏡板に、2つの笠鉾が打ってある。鉄板はいくぶん曲折している。鉾も少し曲っているが長さ2.1cmの大きなもので、図下方の鉾は先端が折れている。

**轡**（第46図1・3、図版25-1・2）1は杏葉、雲珠、辻金具に重なって出土した。鉄製環状形の鏡板を有するものである。銜は二連式のもので最大長16.6cmである。引手を内側にし、鏡板を外側につけている。引手には手綱を結びつける簡単な環をつけている。鏡板は扁円形を呈し長径9.5cm、短径8.6cmで、これに幅4.5cmの立間を付ける。

3はこれとは離れて出土した。1と同じく片方の引手が太く短目である。銜は二連式であるが、1とは異なって環のつけ方が同一方向につけられている。引手の環には別に引手壺をつけている。これには次にあげる鏡板がつくものと思われる。

**鏡板**（第46図4・5、図版25-1）一部を残すのみでどのような形のものが不詳である。4の下方に丸味を有した孔が残っており、このことから鏡板と推定される。器部の周縁部のみ金銅張りの状況を知ることができる。鉄地板が残っているだけである。

**兵庫鎖**（第46図2、図版25-2）現全長22cmをはかる。下方にこれに続くものの残欠部がついている。先端に鉸具を付ける。器は太くしっかりしたものである。中央止金の基部は鎖部に固定されている。鎖の各節は6.5cmから7cmの長さを有し、環が直交するようにひねって造っている。下端にこの鎖をつける取付部の残欠が付いている。

## 鉄製品

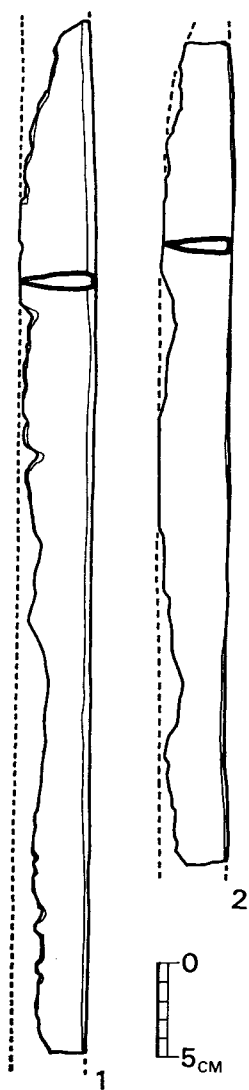
直刀、刀子、石突、鉄鏃、鉄矛が出土している。鉄鏃が最も多く出土している。

**直刀**（第46図6～9、第47図1・2、図版26-1）いずれも残欠部で、完形品はない。6は茎から刃部にかかる部分であるが、発見中もっとも身の厚いもので、刃部に木質が付着していた。同じく茎で、目釘孔径0.4cmをもつものも出土した(9)。7・8、第47図1・2は刃部であるが錆がめだつ。ことに1～2の刃はこぼれたのであろうか原形を保っていない。いずれも脊は平坦である。

**鉄矛**（第46図11、図版29-1）全長28.2cmである。刃部は長さ13.5cm、幅は中ほどで2.6cmで鋒先は鋭い。断面はレンズ状を呈している。袋部は円筒形で、茎部は径2.7cmである。

**刀**（第48図1、図版26-1）全長26.2cm、刃部幅1.9cm、茎幅1.1cmであり、これは刀子とはいいがたく、刀としてあげた。茎端は丸くおさめている。閃は鈍角で脊にも段を持つ。これは羨道部の閉塞部と側壁との間に発見されたものである。

**刀子**（第48図2～8、図版26-2）2・8が完形品で、4が鋒と茎部を一部欠損する他は残欠部である。



第47図 高崎2号  
墳石室内出土直刀実  
測図 (1/4)

の二つに大きく分けられる。

細根形にはあまり出土例のない形式のものが多い。1は長さ18.6cmの細身のものである。茎端を欠く。断面は方形を呈し、茎部はいくぶんふくらみ、断面は半円形を呈す。3もこれと同形式である。刃部は丸味のある鋒部のみである。これに近いもので鋒の丸味の顕しいものがある(6・7)。これも刃部断面は半円形を呈す。やはり刃部断面が半円形を呈し、形式のちがうものがある(2・4)。

所謂片刃式に類似するものがある(5・8~14)。鋒先は鋭く、斜めに切り込まれている。ま

2は長さ15.5cmで刃部方に関はなく、脊が斜めに切れ込むことによって茎をつくっている。茎部長は約4.7cmと思われる。木質が付着している。3は脊に関を有し、2とは逆に刃部側が斜めに切れ込み茎部を造っている。鋒部と茎端部を欠く。茎に木質が付着している。4は鋒先と茎端部を欠く。刃部幅は鋒先の方え細くなっている。脊に関を有す。刃部に木質が付着している。5~7は茎部であるが、6には金銅製の縁金が付着している。金張りは取れている。8は小形のものでほぼ完形に近く、茎部をわずかに欠損するものである。長さ5cmで、鋒先に木質が付着している。

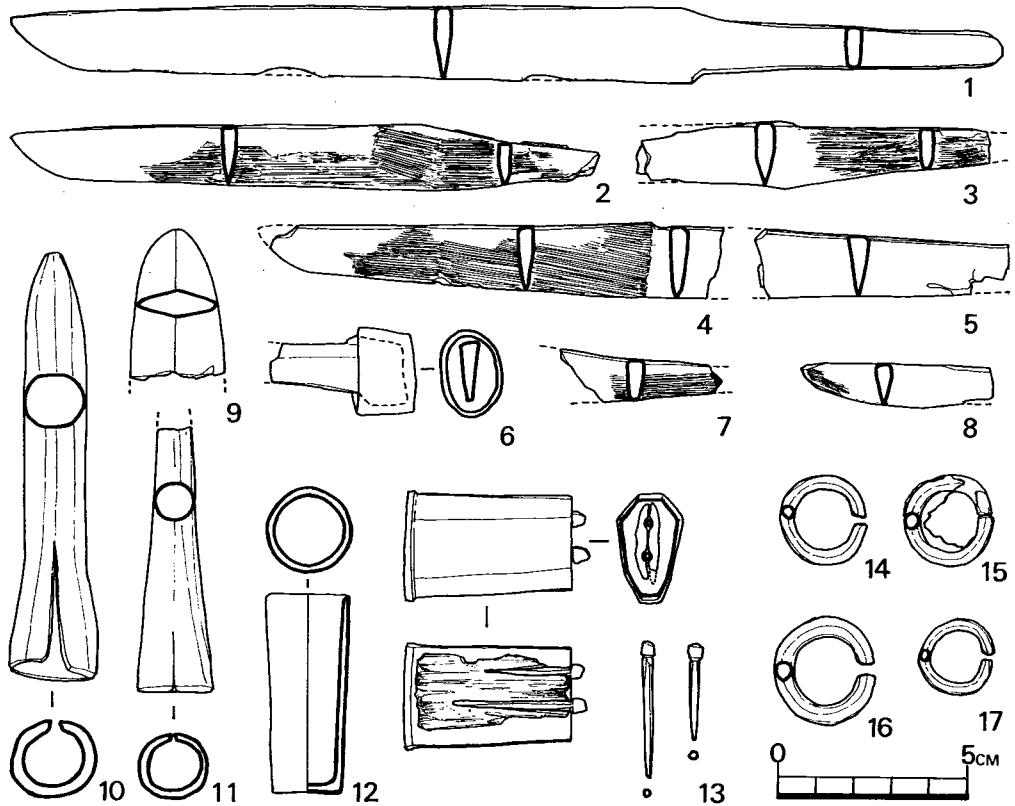
**鉄 剣** (第48図9) 鋒先部のみが出土している。最大幅2.5cmで、断面は菱形である。

**石 突** (第48図10・11、図版29-1) 10が完形品で長さ11.4cmである。茎部がやや開き、鋒先がわずかに欠損している。11は鋒先を欠くが、10より小形のもので、茎端部から鋒先へ円錐状に延びる。

**用途不明の鉄器** (第48図12) 兵庫鎮に付着して出土したもので、これにかかわるものと思われる。長さ5.3cmの円筒形のもので一方に口がある。

**鞘尻と釘** (第48図13) 鞘尻は金銅製のもので長さ4.4cm、最大幅2.9cmのものである。断面は変八角形を呈している。中に二枚の組合せの木部をのこし、釘も2本残っていた。木部の周囲に空間があるが、おそらくこれに腐食の顕しいものを詰めたものと考えられる。釘は木部を組合せた後に打ち込んだものでその痕跡がある。釘は銅製のもので2本あり、長い方で3.7cm、短い方は2.6cmの長さで原寸を保っている。

**鉄 鏃** (第50図1~27、図版27-1・2) 完形品は一本も出土していない。1・23が茎端部を欠くのみで完形に近い。細根形と広根形

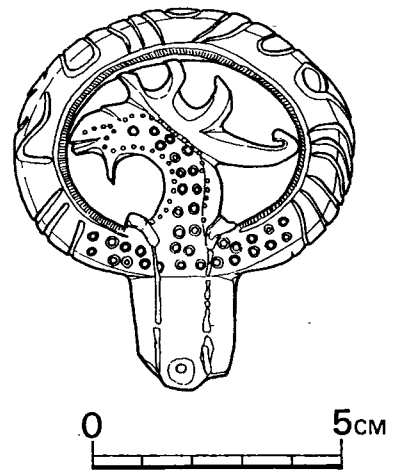


第 48 図 高崎 2 号墳石室内出土鉄器実測図 (1/2)

た、かえりもない。刃部断面をみると、刃は両刃に近いものと片刃のものがある。この他15の  
 ようにのみ頭式と考えられるものがある。鋒先の方が細く、刃部は鋒先平坦部にある。細根形  
 の棒状部 (16~22) があるが、棒状部の太いものと細い  
 ものがあり、また茎の断面が方形のもの (16・18・19・  
 22) と円形のもの (17・18・20・21) に分けられる。

広根形は 5 本出土している。24・25は細い棒状部で、  
 鋒はおそらくのみ頭式ではなかろうか。23・26・27は三  
 角形式のものでかえりが長い。27は全体的に厚いもので  
 ある。

鋤 先 (第46図10) 鉄製品の中で唯一の農工具であ  
 る。鋤先の一部で木身装着部である。その内縁は雁股状  
 に開き溝をつくり、木身をはめるようにしてある。木身  
 装着部に続く鋤先身の厚さは0.3cmで、同先端部で溝の  
 切れる所で幅1.9cm、刃部欠損部で幅2.6cmをはかる。



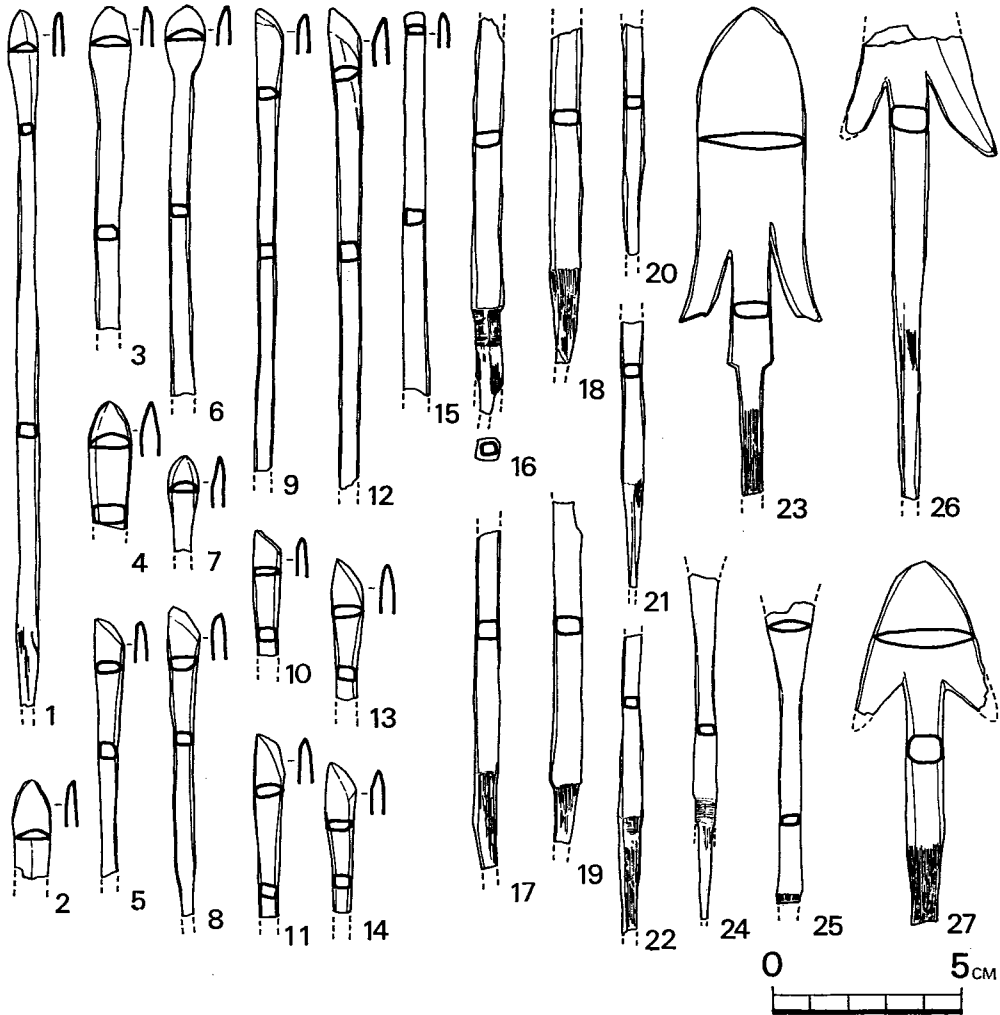
第 49 図 高崎 2 号墳石室内出土  
 環頭実測図 (2/3)

復原形の大きさは不詳である。

### 装飾品

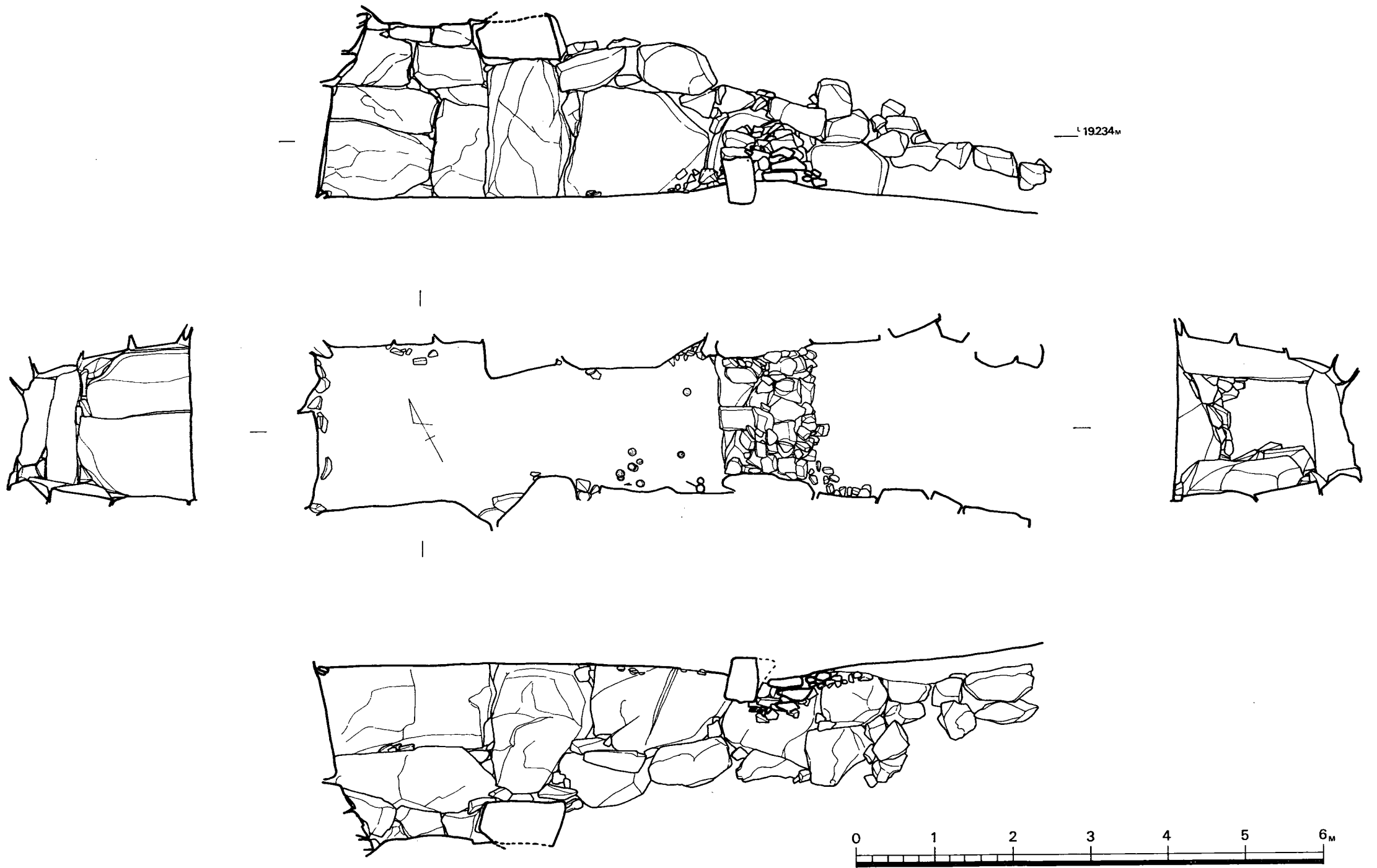
金銅張環頭（第49図、図版28-1） 金銅薄板張の環頭である。環内に単鳳の立体的な装飾を入れている。環内縁には刻目を入れ、単鳳の面・頭からこれに続く環の一部に円文を配し、環には流文状の文様を施している。目釘孔を有し、この両側に環内側から延びる紐状のものが付着している。これが鉄製のものであるかは疑問である。しかしこれにも鍍金か金銅張りかが施されている。

耳環（第48図14~17、図版28-2） すべて金銅張のものである。14・15がセットになる。16・17はそれぞれ大きさが異なる。15は金銅が剥がれている。



第 50 図 高崎 2 号墳石室内出土鉄鍍実測図 (1/2)





第 51 图 高崎 3 号填石室实测图 (1/60)

玉 類 (図版28-2) 切子玉2、ガラス小玉3、土製小玉29が出土している。

切子玉は長さ2.7cmのものと、同1.5cmの大小2個出土した。いずれも断面六角形を呈し、穿孔も一方からのみ行なっている。

ガラス小玉は最も大きいものは径1cmで、小形のものは0.8cmである。色は青色と濃青色の二種あり、濃青色を呈する大形のものには質が悪い。

土製丸玉は29個出土している。中には二つが付着したまま出土したものもあり、茶色と黒色を呈する二種がある。厚さはさまざまであるが、径は0.7cmから0.8cmをはかる。

### 第 3 号 墳

墳 丘 (第24図、図版38-1)

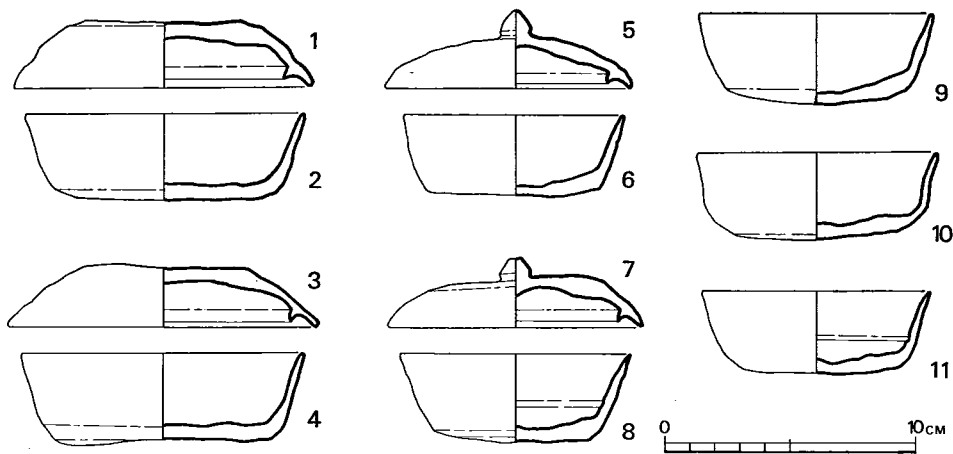
第3号墳は、丘陵の東南斜面にある。1・2号墳の在る丘陵とは谷を挟んで北西方150mの位置にある。墳丘は丘陵斜面中位にあり、墳丘周囲には丘陵との切断部(溝)をもっている。墳丘は地山上に版築上の封土を有し、径約9mを測る。溝の中央ではmである。墳丘は南東側半分を削りとられ羨道部が露出し、玄門から石室内へ入れる。最近まで人の住んでいたことを聞く。

石 室 (第51図、図版38-2)

石室はコ字状に開く墳内に架構されている。石材は花崗岩を利用している。石室は腰石には大きな石を立てている。最大のもは、玄室南西側壁の腰石に利用されたもので幅2.1m、高さ1.1mを測る。二段目・三段目もかなり大きな石を小口に積み上げている。壁は天井部にむけて内傾しながら立ち上がる。壁は羨門部付近では幅50cm前後の石を利用している。石室はE-32°-Sを長軸とし、その内法は長軸で9.3mを測る。玄室内は荒されて敷石、框石はとりさられているが、玄室は玄門袖石からして、長軸方約2.1m、短軸方2mを測るほぼ正方形の平面を示す。石室全体の規模からして小形の両袖、単室である。玄門から3.1mのところ閉塞部がある。閉塞部に縦約0.6m、横約1.6mの石を框状に立て、その外側と上部詰め石に河原石や花崗岩礫を利用して積み上げている。羨道は玄門より外へやや開きながら伸びる。図上で羨道南西壁の閉塞部で壁が突き出すが、これは現閉塞部上部での実測によるもので、下部では一線上に並ぶものである。しかし注意すべきは、さきにもふれたように閉塞部基部石が框状に、地山に掘り据えられていることや、閉塞と玄門間に須恵器、鉄鏃の出土をみることは、その間が前室的な意味を持っているのではなからうか。2号墳にみられるように明確に表現はなされていないが、同様に思われるのである。

### 遺 物

遺物は玄室から須恵器の小片を 発見するのみであったが、羨道部から須恵器完形品と鉄鏃を 発見した (図版39-1・2)



第 52 図 高崎 3 号墳石室内出土須恵器実測図 (1/3)

須恵器 (第52図、図版42)

須恵器は坏 7 と坏蓋 4 を発見する。いずれも器肉は薄く胎土はきめこまかいものを使用しているが、焼成がわるくもろい。

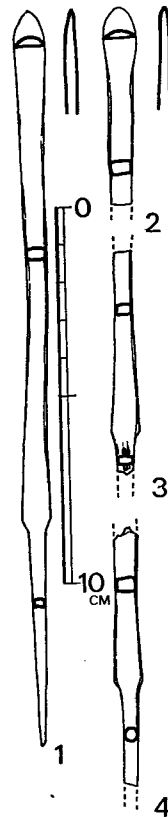
**坏 I 類** 径が 11cm 以上で、深さ 2.8cm を測る大形のものである。底部はほぼ平らで、これより口縁端にむけて外側にひらく。底部が篋削りによる整形であるほかは横撫である (2・4)。

**坏 II 類** 径が 9 cm 前後であり、身の深さは 3 cm 前後である。底部からの立ち上がりは、直線的にやや外側に開く (6・8・9・11)。底部はこれらも篋整形により平らであるが、他は横撫である。

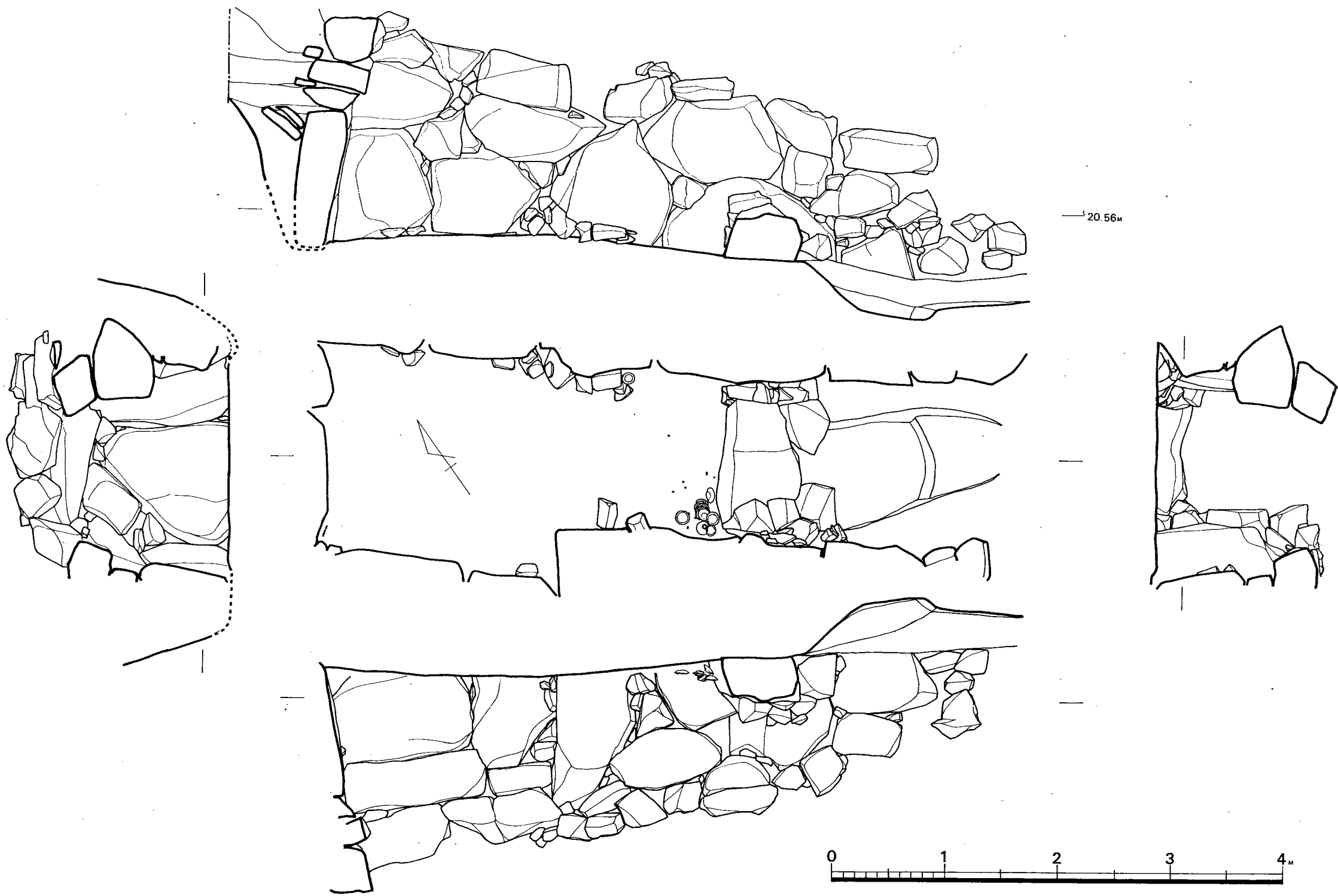
**坏 III 類** II 類と計測値は近似するが、II 類と異なるのは、底部からの立ち上がりやや垂直に伸びつつ半ばから外にひらくという形状をみる (10)。

**坏蓋 I 類** 1・3 がこの類で、径 12cm 前後を測る。蓋上部は篋によって平らに削られている。身受けのかえりは浅くつきだしている。おそらく坏 I 類の 2・4 にそれぞれ組み合わせる。

**坏蓋 II 類** 宝珠摘みをもつ 5・7 がこの類である。径 10cm 前後である。I 類と同じく身受けのかえりは浅いものであ



第 53 図 高崎 3 号墳出土鉄鎌 (1/2)



第54图 高崎4号墳石室实测图(1/40)

る。

#### 鉄鏃 (第53図)

完形品が1本出土している(1)。長さは19.5cmを測る。鏃は棒状部から鋒先へひろがりながら続き、鋒先は丸味をもって尖っている。鋒部の断面は扁平で半円形を呈する。2の鋒部も同じものである。他の棒状部の残欠もこれと同じような形式をとるものであろう。

### 第 4 号 墳

#### 墳 丘 (第24図、図版40-1)

第4号墳は3号墳と同じ斜面にあり、3号墳から北東へ19mの地点にある。墳丘はすでに壊わされて削平されており、石室は斜面下にあるという現状で、墳丘はその下部がトレンチを入れることで確かめられた。石室の規模からしておよそ10m前後の円墳と推定される。

#### 石 室 (第54図、図版40-2)

石室はコ字状の堀内に架構されている。石材は花崗岩を利用している。石室はかなり大きな石を積み上げているが、腰石に大きな石を立て、最大なものは幅1.2mを測る。そして石室の架構の方法は、2号・3号と相違はそれほどみられないが、石材の選び方によることもあろうが、積石のやり方がかなり乱雑である。

石室は所謂片袖式といわれるものである。石室全長約6mを測るが、玄室は小さく縦約2m、横は奥壁側で約1.7m、玄門側で約2mを測る。玄室内はすでに荒らされており、敷石は遊離し、框石は抜き取られていた。しかし閉塞石は保存されており、その内側に原位置に須恵器の出土を見た。閉塞部は基部に幅1.2m、厚さ0.4mの大石を据え、角礫を詰めにつかっている。これも3号墳の閉塞部と同様に角礫を積み上げたものであろう。閉塞部に接して外側に落ち込みをみるが、この落ち込みのプラン及び発掘状況からして遺構のようにみえるが、どうも盗掘窟のように思われる。

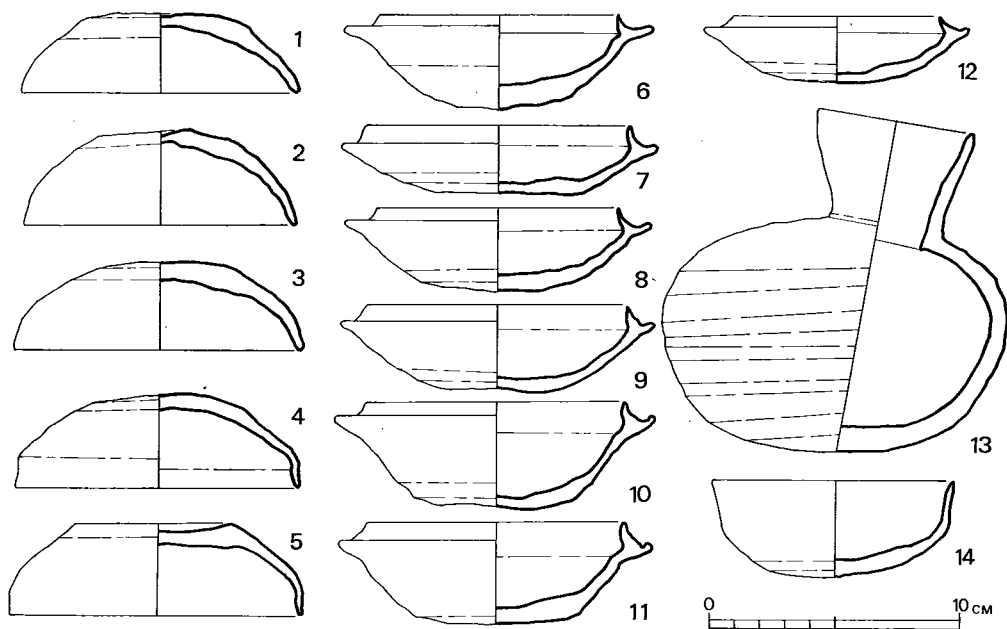
#### 遺 物

遺物は羨道部に須恵器の坏・坏蓋・平瓶のほか玉類の出土を見た。すべて完形品で羨道の南西側壁に接し、重なって出土した。玉類は散乱し、また閉塞石の間からも出土したことは注目される。おそらくは閉塞部の積石を行なう際に、この付近に意識的におかれたか一考を要するところである。

#### 須恵器 (第55図、図版42)

坏Ⅰ類(7) 蓋うけたちあがりほぼ直線的にのびており、受け部先端へなだらかにつながる。整形のよいものである。底が平らである。

坏Ⅱ類(6・8・12) 径12cm前後を測るが、12は6・8に較べてやや小形である。蓋うけたちあがりは内傾し、口縁端がやや直線的になる。6は受け部が蓋うけたちあがりからなめらか



第 55 図 高崎 4 号墳石室内出土須恵器実測図 (1/3)

にのびるが、8・12は受け部が短い。

坏Ⅲ類(9・10・11) 体部もかなり厚いが、蓋うけたちあがりの接合部の厚さが目立つ。蓋うけたちあがりの接合にクセがみられ、受け部との間に窺によって落ち込みをつくる。受け部はⅠ・Ⅱ類に較べ非常に短かくみられ、また身の深さも3.5cm~4cmを測り目立つ。整形はⅠ・Ⅱ類に較べ雑である。Ⅰ・Ⅱ類とともに底部ちかくは窺による整形のみであるが、底部が平らになっている。

坏蓋Ⅰ類(1・2・3) 天井部は平らである。天井部から口縁にやや内側に傾むくように開く。丸味をおびている。径11.5cm前後で深さ3.5cm前後である。3は1・2に較べて口縁端にやや直線的なのびをみ、底部が窺によって深く削られておらず厚い。

坏蓋Ⅱ類(4・5) Ⅰ類とほぼ同大で、整形もよく似ているが、天井部から口縁端にかけて、肩部を有し、肩部から直線的に口縁部に続く。口縁部内側にややふくらみを有す。ここに稜線の入るものある(4)。

平瓶(13) 口縁部は頸部から直線的にたちあがり、外側に傾きながらも口縁端ではやや内傾する。端部はまるくつくっている。頸部は窺けずりによってつくられた段がみられる。胴部は総じて丸味をもち、胴部から底部は曲線を描いて変化している。このため底部の平面部はせまく感じられる。肩部から底部にかけて窺けずりによる整形である。焼成が悪く器面がもろくなっている。

#### 石室外出土須恵器

坏 (14) 石室内出土の須恵器とは類を異にする。焼歪みのある製品であるが、復原すると図のようになる。径 9.7cm を測る。底部から口縁にいたる間に段を有し、この段から口縁部は直線的にやや外側に傾く。薄手である。匱けずりが底部に認められる。

### 玉 類 (図版43-1)

切子玉 3個出土している。大きいもので長さ約 3cm、最大径 1.9cm で、小さいものは長さ約 1.6cm、最大径 1.2cm である。いずれも面は 6面である。穿孔は片方からのみである。

小 玉 14個出土している。のち 11個が鉛ガラス製のもので緑色を呈する。その大きさは平均すると、径 1.1cm を測る。孔径は 0.3cm 前後で一方の径はそれより少し小さい。その他 3個はソーダ石灰ガラス製のものであろうか、白く風化し原形が不詳である。最大のもので径 0.9cm である。

### 窯 状 遺 構 (第56図、図版43-2)

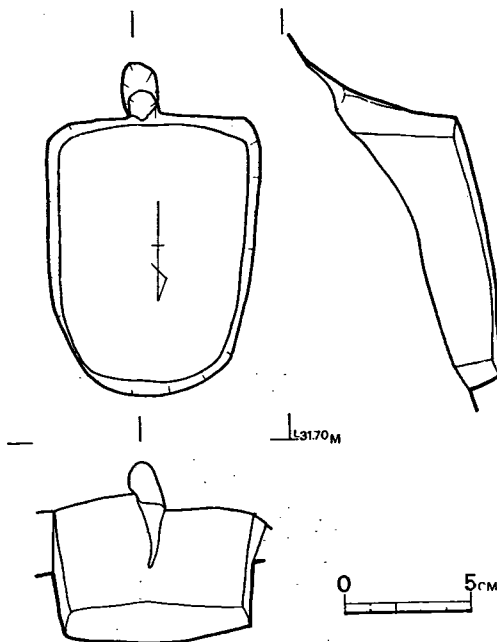
この遺構は第 2号墳の南側にある 溝の南側斜面に発見された。発見状況からしてこの遺構は 2号墳の構築以前のものであることがわかったが、時期は明確にしがたい。

遺構は長さ 1.1m、最大幅 0.86m で上部が角張っているのに対して、下部は丸味をもっている。いくぶん削られているが、深さは上部で 47cm、下部で 13cm となる。そして上部には煙道らしきものをつける。遺構の床面はあまり焼けておらず、灰が 2~3cm の厚さで拡がっていた。し

かし遺構の壁は非常に硬く焼けており、かなりの熱量を用いたものであろうことが推定される。またこの遺構が何にの用にたしたかは不詳である。遺構内よりの出土遺物はなかった。

### 小 結

高崎古墳群は 5基が確認され、4基を調査したが、4号墳の発見の状況からして他にも墳丘が消滅して埋没して確認できないものが予想される。古墳は丘陵尾根、丘陵斜面にあり、いずれも丘陵に直交する方向に構築されている。古墳はすべて盗掘、採土のために半壊または全壊の状態に近く、僅かに 3号墳が旧状に近い。石室はすべて単室のもので、無袖式、片袖式、両袖式の各形式がある。また石材はすべて花崗岩で、かなりの大石も利用



第 56 図 窯状遺構実測図 (1/30)

している。

2号墳では、側壁の腰石に大石を縦積みになっている。2段目に比較的大きな石を利用している。閉塞部より外側では(羨門部付近)小形の石材を小口に積みあげている。同様のことは3号墳でも見られる。4号墳も比較的大きな石を利用しているが、石材の選択が悪く積石の状態は適当に行なっていることがわかる。しかし2・4号と同様閉塞部より外側では小形の石を利用し、内側では比較的大きな石を利用している。3・4号墳は奥壁に大形の石を二枚立てている。各石室長は2号墳3.7m、3号墳2.1m、4号墳2mとなり、2号墳の玄室の平面形は長方形を呈し、3・4号墳は正方形に近い平面形である。3号墳は石室全長9.3mで2号墳よりわずかに長大であるが、4号墳は6mとなり、2・3号墳に比べ小形である。また3・4号は羨道部は羨門部方が拡がり呈している。このように2・3・4号墳の石室を見ると若干の相違がみられる。ことに2号墳は石材の選択に気をくばり、構築にしても入念である。

石室内部の構造としては、いずれも玄室は敷石がなされていることである。わずかに2号墳が旧状をとどめるのみで、他は盗掘にあい敷石は遊離している。

1号墳は平面形を窺えるにすぎないが、他の石室とは異なる平面形である。羨道部をもたず、竪穴式石室のようにも思えるが、積石の状況は腰石に比較的大きな石を立て、二段目には小形の石を小口積みし、入口では外側に石室に直交する石が置かれていることから、横穴式のものと考えられる。2・3・4号墳に比べ非常に小さい石室である。このような形式の石室は最近発見例が増し、古墳時代後期によく見られるものである。大阪府の塚脇古墳群の中にその例を求めることができる(注1)。

遺物は2号墳に最も多く出土し、3・4号墳においても羨道部で須恵器等の遺物を発見した。1号墳は須恵器杯の残欠1点を発見するのみである。2号墳からは土器類のほか、馬具・鉄器も多く出土し、石室内における遺物の発見総数は約200点に達するもので、その類例をみない。

土器類が最も多く出土しているが、なかでも釣鐘状の蓋を有し、三本の足をもつ有蓋足付壺は非常に貴重なものである。この種の土器は糸島郡前原町で出土したほか(注2)、大分県豊前市(注3)、茨城県内(注4)の出土例があるが、いずれも発見状況は不詳で石室内より発見せる例はこれが初めてのものである。このような形態のものは、その類例の少ないことから、舶載のものかと考えられがちであるが、蓋の形あるいは三本足の装着という特異な点を除くと、その作製上の観点からは他の須恵器のそれとあまりちがわない。この須恵器はWの記号を付している。この他に観るべきものは有蓋脚付碗・埴で、両者とも土師質の焼成であるほかは全く須恵器と変わらない。他にもこのように赤く焼上がった須恵器もあるが、このような土器は判断に苦慮し、今後十分に検討する必要がある。

脚付の碗・埴あるいは壺という形態の上でその類例を求めるならば、脚付碗で把手をつける



ものが、兵庫県御津町中島に出土しているが、椀部の形状が異なる(注5)。また脚付の埴・壺あるいはこれに蓋を持つものの例は、愛知県の炭焼古墳群に出土例がある(注6)。

馬具でも杏葉・辻金具・雲珠の発見は、福岡市近辺はもとより、九州地方でもその例は少ない。ことに杏葉について考えれば、当古墳出土のものは、鐘形を呈しわりあい大形のものである。この種のもは岡山・赤井古墳、大阪・南塚古墳に出土例があるが、いずれも当古墳出土のものに比べ小形である(注7)。南塚古墳出土の杏葉が斜格子の交点に忍冬文を施し、忍冬文の中央に花形の飾紙をうってあり、これに較べ当古墳の杏葉は、その製作の拙劣さはかくしがたい。南塚古墳・赤井古墳とも6世紀の時期があてられてある。

土器類は須恵器が圧倒的に多く、土師器を若干出す。須恵器坏はⅠ～Ⅴ類に分けてみたが、Ⅱ～Ⅳ類が多く、注目すべきはⅢ類が玄室内出土の大勢を占めていることである。そしてⅠ・Ⅱ類が羨道部に集中していることも加え、このことから追葬のあったことが十分に考えられる。また馬具が須恵器の下から発見されたこともこの考えを助けるものであろう。須恵器はⅠ・Ⅴ類は比較的少なく、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類がほぼ同量である。このようなことからこの古墳が比較的長く利用されたことが考えられる。

3・4号墳からは須恵器の坏および蓋が主体となって発見されているが、3号墳はⅢ類、4号墳はⅣ類に比較される。また1号墳の坏はⅠ類に近い形式を示す。このように須恵器の分類から石室の構築は、まず1・2号墳がほぼ時を同じくしてつくられ、このあと4号墳、3号墳の順で構築されたものと考えられる。3・4号墳については羨道部発見のものであり、1号墳については残欠部のみの資料で、しかも須恵器の坏、坏蓋に関する限りの考察で十分に可能な考えであるかは検討の余地はある。

なお当古墳群出土の須恵器坏、坏蓋を基にする分類は不十分であるが、これらの須恵器は所謂須恵器Ⅲ式に属するものと考えられ、同式の後半のものと同判断される(同Ⅳ式に属するものも出土しているが)。ちなみに6世紀後半から7世紀前半の時期が与えられよう。

早良平野には五塔山古墳の出現を始めにして多く古墳が築造されているが、後期古墳がその大半を占め、平野周囲の丘陵上にいくつかの古墳群を形成している。高崎古墳群もこの類例であろう。しかしいくつかの大古墳群があるにもかかわらず前方後円墳は現在までに一基も確認されず、すべてが円墳であるとされていた。しかし今回発見の2号墳は方墳であり、早良平野はもとより、近県でも発見諸例の少ないものである。なかんずく早良平野における方墳の出現は、前方後円墳の不在を補うものであり、同古墳より貴重なる遺物の発見は、これに副葬されたる者の背景を考えるに十分な条件であろう。そしてこれが早良郷あるいは城の原廃寺等に何らかの関連があると考えられよう。(浜田信也)

- 注1 西谷正「塚原古墳群の研究」高槻市文化財調査報告書第4冊 高槻市教育委員会
- 2 伊勢神宮徴古館所蔵
- 3 小田富士雄氏教示
- 4 渡辺正気氏教示
- 5 横山浩一「手工業生産の発展」世界考古学大系3所収 平凡社刊 昭和34年
- 6 注5に同じ  
榎崎彰一「愛知県宝飯郡炭焼古墳群」日本考古学年報 昭和32年
- 7 小野山節「馬具と風習」世界考古学大系3所収 平凡社刊 昭和34年

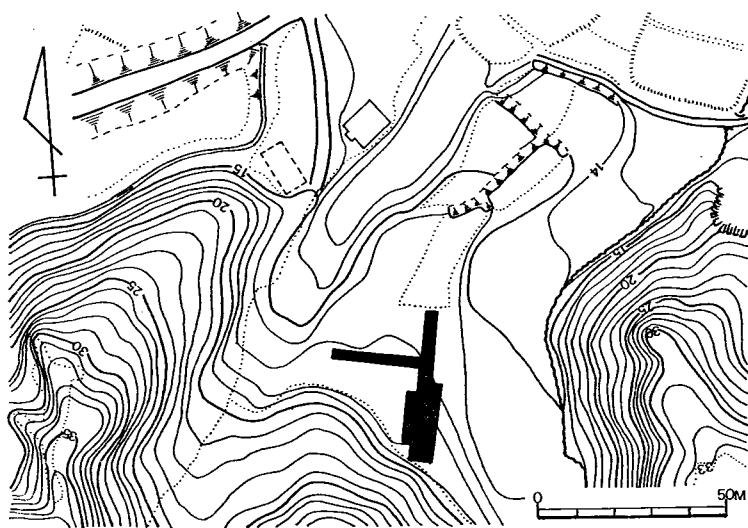
# 第 5 大 又 遺 跡

## 1 はじめに

### I 遺跡の位置

筑前風土記に「生の松原の半より少東の方道より南一町半許にあり、壱岐直真根子の社より。熊野権現相殿にまします……云々」

この熊野権現より東に1kmの地点、高崎古墳1・2号墳の舌状台地と3・4・5号墳の舌状台地との狭まれた谷間の畑地に本遺跡は位置する。



第 57 図 遺跡地形図

地籍は福岡市大字高崎1108番地にあたる。

### II 調査の経過

高崎大又遺跡の発掘調査は昭和44年9月4日から昭和44年10月4日まで行なった。

9月4日 晴 草が繁茂しているので、草の伐採を行なう。

9月5日 晴 草の伐採と焼却。

9月6日 晴 トレンチ設定。

9月9日 晴 200分の1で測量を行なう。

9月13日 晴 発掘開始、東西(3m×30m)、南(北3m×39m)T字に組む。遺構面を確認

するとともに、1号住居址を把握する。

9月16日 晴 柱穴遺構を中心とする遺構を確認する。

9月17日 曇 遺構面の掘り上げとともに、新しい遺構面の確認に全力を上げる。2号住居址の確認（1号住居址の北）

9月18日 晴 遺構面の掘り下げとT字トレンチを完全に抜く。3号住居址を2号住居址の北で、近世の土台石などの重複が見られる。

9月19日 晴 柱穴を完掘し、住居址が出た南側の一段高い部分を拡張することにし、全貌を出すことにする。

9月22日 晴 新たにメントレンチを中心に、東3m×21m、西3m×13.5m拡張区を設定し、表土を剥ぐ。

9月23日 晴 住居址面の遺構の続きを確認する。南北軸の断面を取る。5号住居址確認。

9月24日 曇のち小雨 2号住居址と3号住居址の間に溝が存在する。溝の属位を見る。その結果古墳時代のものと思われる。

9月25日 晴のち曇 遺構の掘り下げと遺構の追及を主として行なう。2号住居址の床面と柱穴を確認。

9月26日 晴 遺構の追及と完掘をいそぐ。掘立て柱の断面を取る。4号住居址の床面と、壁の立ち上がりを追及し、一応掘り上げる。

9月27日 曇 詳細写真撮影。溝の実測。

9月29日 曇 全体写真撮影。全体の実測割り付け。

9月30日 雨 全体実測の予定であったが終日土器洗いを行なう。

10月1日 雨 一部遺物運搬。

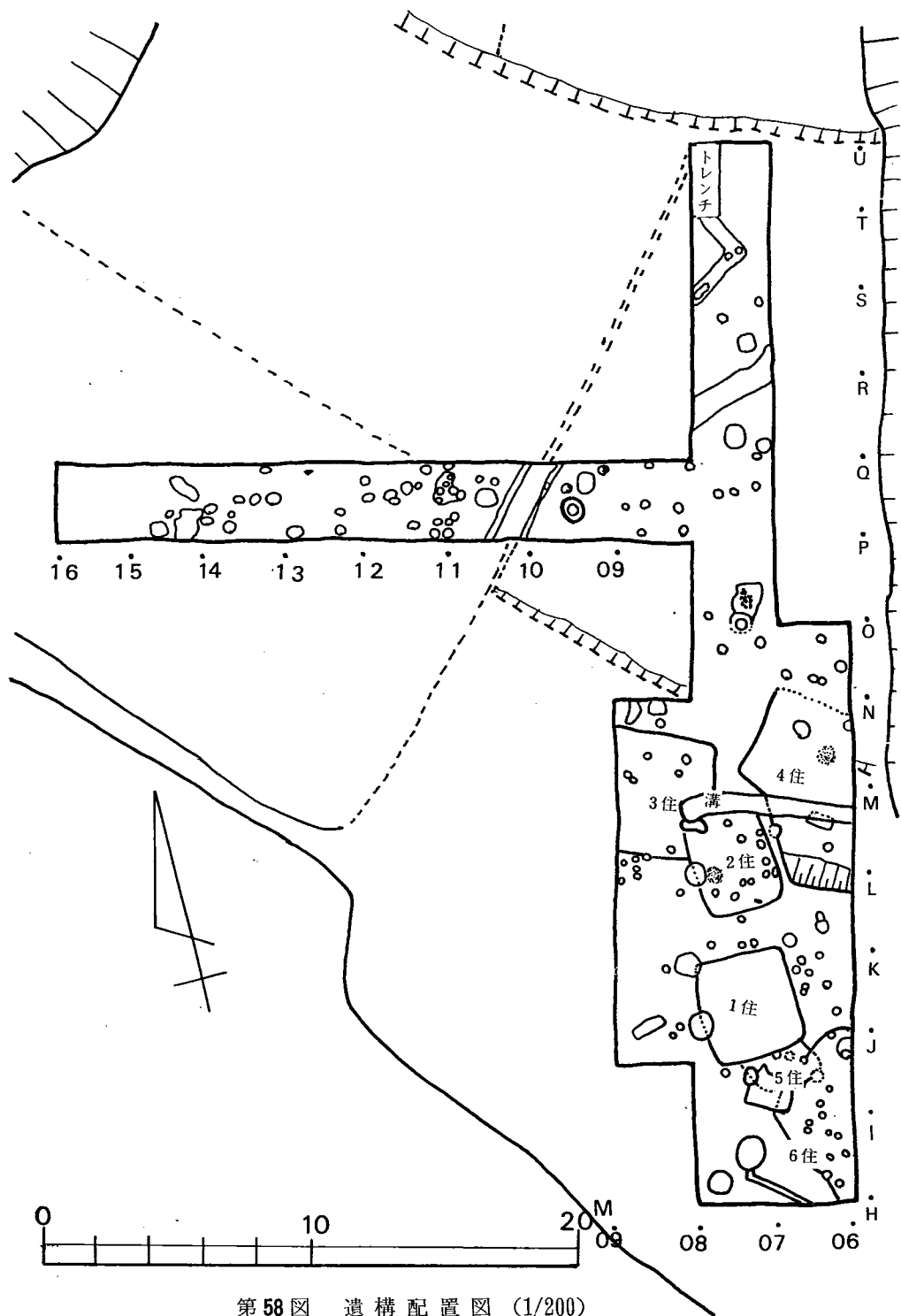
10月2日 曇 遺構全体及びエレベーション。一部うめ戻し。

10月3日 晴 うめ戻しと併行して、炉址の微細図を取る。

10月4日 晴 午前中うめ戻し、午後より器材の整理及び器材運搬、現場作業終了。

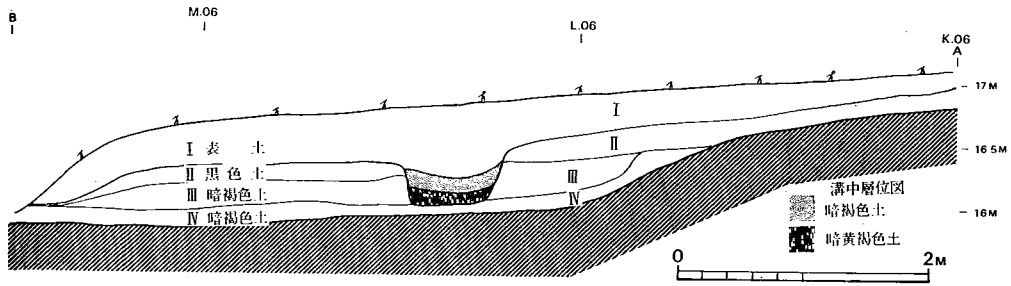
### Ⅲ 発掘区の設定

グリッド原点（P-7）としてほぼ等高線と平行に南北軸をN14°E、東西軸をN76°W、をもって発掘区を設定した。南北軸（アルファベット）東西軸を（算用数字）で表示する。遺構は住居址6軒と柱穴ピット群を把握できた（第58図）。



第58図 遺構配置図 (1/200)

#### IV 層位 (第 59 図)



第 59 図 層位 図

本遺跡は 5 層からなる。

I 層 表土。旧耕作土で厚さは 20~30cm で色調は暗灰褐色、物質は砂質で締りがなくパサパサしたものである。

II 層 色調は黒色で、砂質で I 層よりも締りがある。厚さは 20~30cm である。

III 層 色調は暗褐色で小礫を含む、粘質を帯びている、厚さは 20~30cm である。

VI 層 色調は暗褐色で、砂質層である。厚さは 20~30cm である。

V 層 基盤。

## 2 竪穴遺構及び柱穴ピット遺構

本遺跡の今回の調査では、住居址が 6 軒とそれにとまなうところの柱穴ピット遺構を見出した。つぎに個々の住居址ピット遺構について述べるのであるが、関係位置については第 58 図を参照していただきたい。

### I 第 1 号、第 5 号、第 6 号

このグループは H・I・J・K-6・7・8 区に存在する。

1. 第 1 号住居址 一辺 4 m の方形をなし壁の高さは高く 50~60cm である。炉も柱穴も床面にはみられず、断面でみると (PL46-2) 砂をたたきしめたようである。鉄滓を 3 点採集された。

2. **第5号住居址** 第1号住居址の南側にあって一部を第6号住居址と重複する。若干であるが第6号の重複部分の下に低い壁を確認することができた。一辺3mで方形であるが北側半分は完全に切り合っている状態である。柱穴ピットを3本確認した。

3. **第6号住居址** 第5号住居址の南にあって、一辺4mで隅丸方形でほぼ半分だけしか確認できなかったが多数の柱穴が存在し、どれが主柱になるか不明である。

4. **これら三軒の住居址の関係** 前述のごとく三つの住居址はお互いに重なり合っているの、その前後関係を考えなくてはならない。

この三軒のうち二軒同時に存在したことは考えられない。すなわち第1号住居址が第5号住居址を切っており、第5号住居址は第6号住居址の下面で壁の立ち上がりをとらえることができる。この結果から第5号住居址が一番古く、第1号、第6号住居址の順序であったことが判断できる。

ここで一言断っておきたいのは、住居址の前後関係を考えるのには、もちろん出土遺物のことを考えねばならないが、ここでは一応遺跡だけを考え、遺物の記述が終った後で、その結果と照合して検討したい。

## II 第2号、第3号、第4号住居址及び溝

このグループは、L・M・N-6・7・8の区域にある。

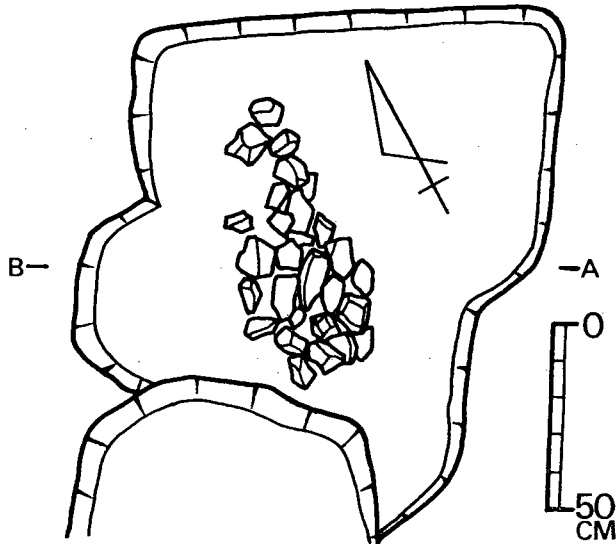
1. **第2号住居址** 1号住居の北にあって、一辺3.5m×5mの長方形の住居址で西側で3号住居址の一部を切って炉址をつくっている。第2号、第3号住居址を溝が大きく切っている。第3号住居址は一辺4mで方形の住居址で今回は半分だけとらえられた壁高は10cmであり柱穴も対応してとらえることができる。溝よって一部切られている。

2. **第4号住居址** 第2号住居址の東側にあって、炉址を東側にもっている。この住居址は溝の下にあって一辺4mの方形になるものと思われるがその附属として、張り出し部が存在するのか、あるいは住居址が2軒重複していることが推定できる。しかしながら、どちらであるか明確にとらえることができない。

鉄滓の数点採集し、炉址の近くに2点の砥石を見出した。

3. **これらの住居址関係** この複雑な重複関係は、溝を把握することが重要な様相になってくる。

溝は幅70cmで長さ7mで带状に流れている。溝が第2住居址、第3住居址を切っているの、この場合時期差は第4住居址、第3住居址、第2住居址、溝の順で新しくなっていくと思われる。



第60図 配石遺構 (1/20)

### Ⅲ 配石遺構

O-7区出土の配石遺構は、ほぼ隅丸方形の掘り方を掘り、中心部に小石をしきつめた形で二段に積み小石の上からたたきしめている。このことから近世の家屋土台と思われる。

### Ⅳ 掘立柱遺構

P-9区では、掘立柱を一つ確認できたが、それに伴う他の掘立柱は今回の調査では確認できなかった。

掘立柱の掘り方はやや傾斜を持っていた。柱穴の掘り方の直径は80cm、柱の直径は30cmである。中心は灰白色砂質土であり、掘り方は黒褐色土の堆積がみられる。

P-10区の溝は農道をつくるために掘り下げたもので溝の堆積土は表土であった。

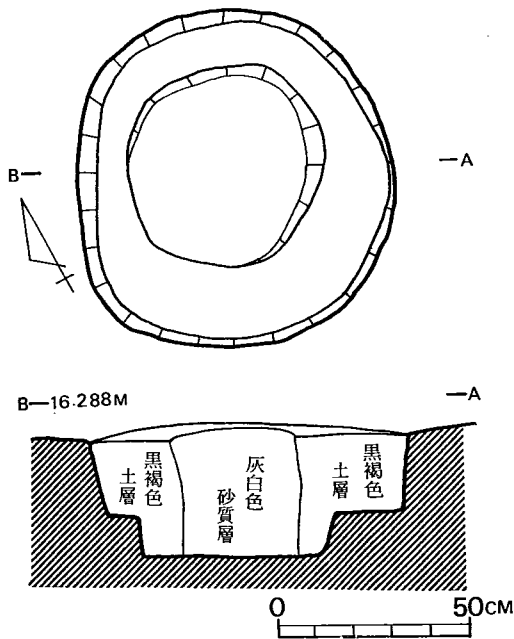
P-11~14区の集中するピット群は柱穴と思われ。P-14区の南端は土壌では、その中より弥生終末期か、あるいは土師期にはいると思われる完形土器の出土がみられた(PL51-1)。

Q-7区では溝の遺構と南側のピット内覆土から縄文土器の破片が見つかった。溝は深さ30cmで今回は一部の調査だけでその性格を把握することできなかった。

S・T-7区は方形溝とピットを確認するだけで遺構の性格までは理解できなかった。またT-7区は遺構らしきものはなく1m×3mのトレンチを入れ層位の確認を行なった。



### 第 3 遺 物



第 61 図 掘立柱図

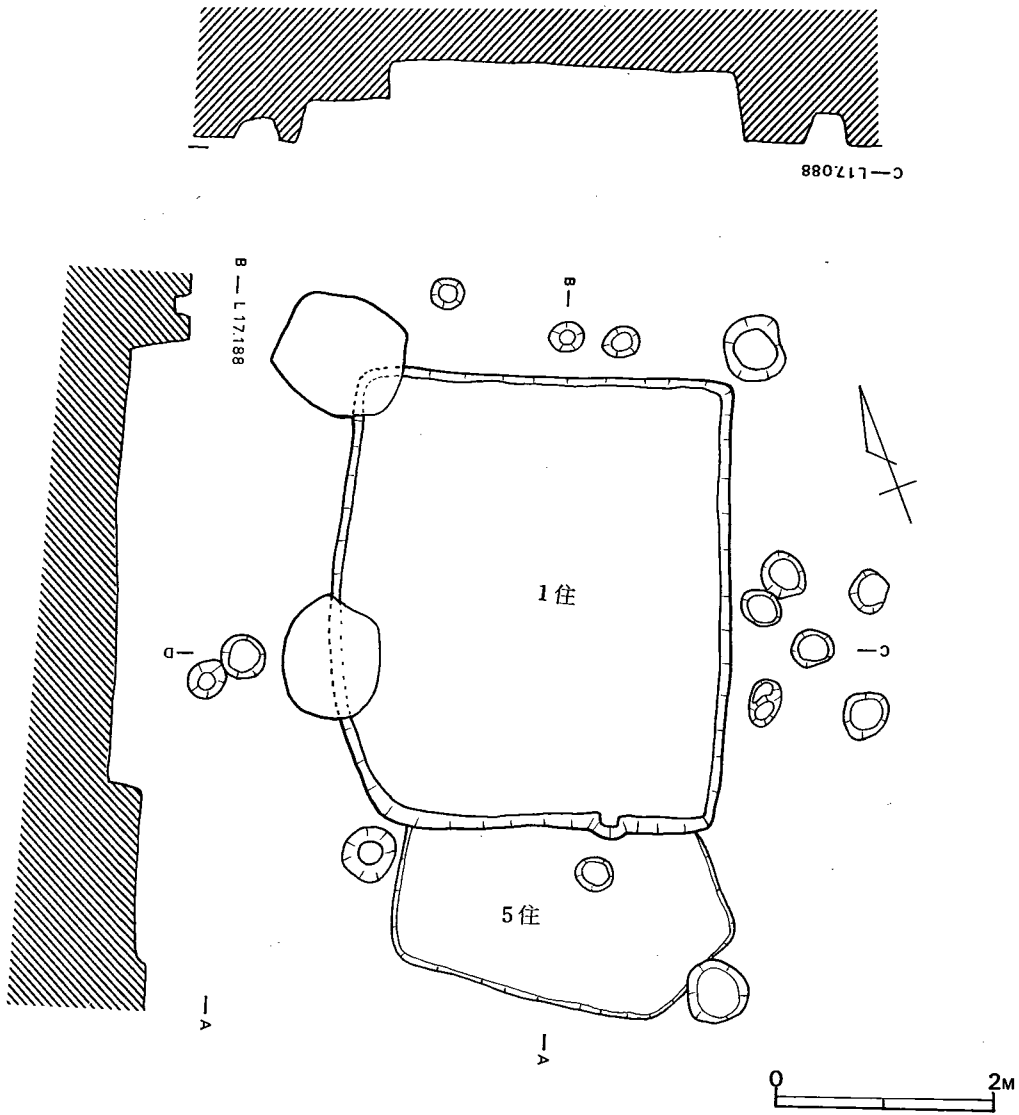
第 1 号住居址 (第 65 図 - 1 ~ 3) 出土遺物の量はわずかで、土師器と須恵器の出土が見られた。1 は土師器壺の口縁部の破片で、口径は推定 14 cm で、胴部はおそらく球形状をなし、胴部中央に最大径を有する壺形土器であると思われる。色調は黒褐色で胎土は良質であり焼成は比較的良い。2・3 は須恵杯と蓋である。杯と蓋も II 型式にあたる。2 は身で口径は推定 10.2 cm、器高 4 cm 前後、口縁部の高さ 2.1 cm、口縁はやや内反し、口縁近くでわずかにそる。口縁内面は斜めにへら削りされている。底部にへら削りの痕跡があり、色調は青灰色で焼きはかたい。

蓋の口径は推定 13 cm、器高は 4.5 cm 前後、体部の高さは 2.5 cm、口縁近くでわずかに外反し、口縁内面は斜めにへら削りを施し、天井部もへら削りである。色調は灰青色で胎土焼成も良い。

鉄滓を数点覆土中より採集した。

本遺跡から出土した遺物の大半は土師器及び須恵器片である。その量はリング箱に 7 箱程である。その他に、弥生式土器、縄文式土器の破片も数点出土している。近世陶器、また土器以外では鉄滓、石器が数点あり、石器では砥石が主体を占めていた。鉄滓も 20 余点出土している。

住居址内部より出土した遺物のうち、ある程度器形の解るものを以下に図示するとともに、説明を加えたい。

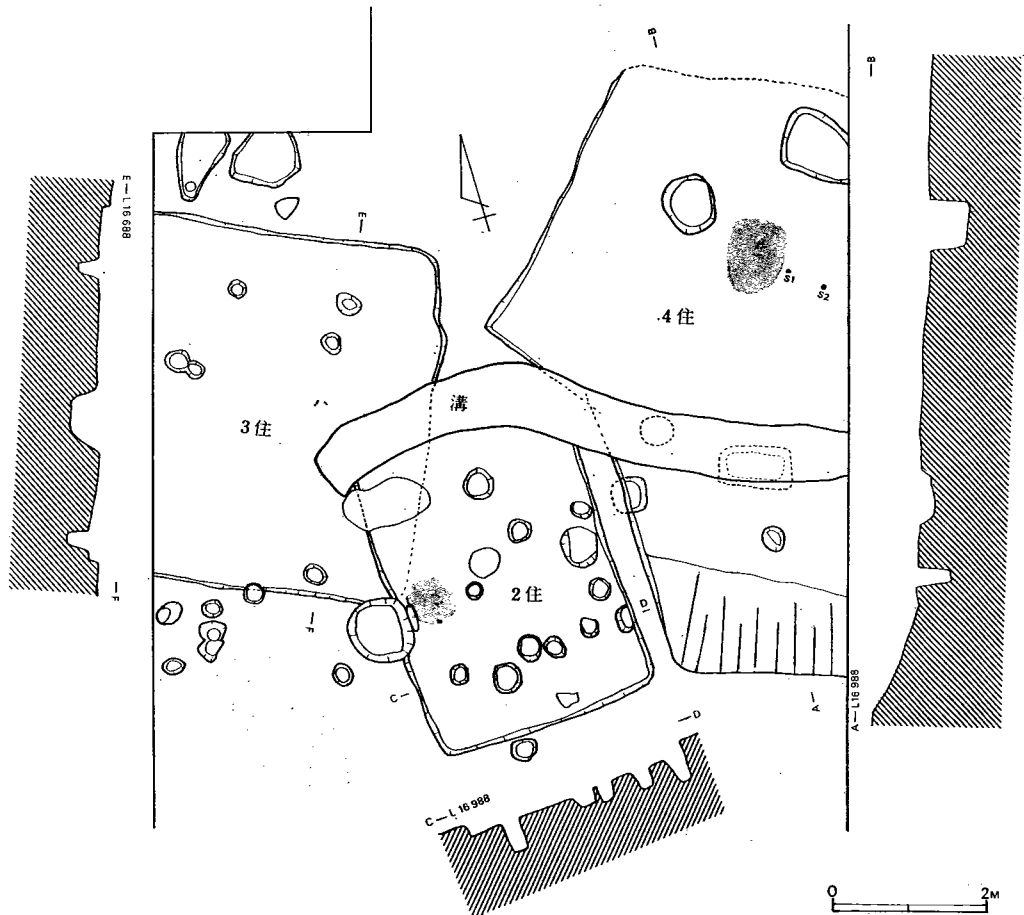


第 62 図 第 1 号住居址付近

第 2 号住居址 (第 65 図 - 4 ~ 6) 少量であるが須恵器と土師器が出土した。5 は須恵器中型甕は推定口径 18cm、肩部以下を欠くが、頸部は短かく、口縁が「く」字状に開く。口縁が幅広くなって外に開く。口縁面には凹線が一条めぐっている。須恵器坏は底部を破損している。口径 14cm、器高 5.5cm、立ちあがり高さ 2cm で、色調は灰青色、焼成は良好である。時期は III 型式と思われる。

4は土師器の底部で色調は灰白色で焼成は比較的柔らかい。刷毛目は横位方向である。

石器（第64図-3） 石皿または砥石の破片と思われるが、石質は硬砂岩で表面は磨痕が走っている。石皿よりも砥石と考えるべきであろう。

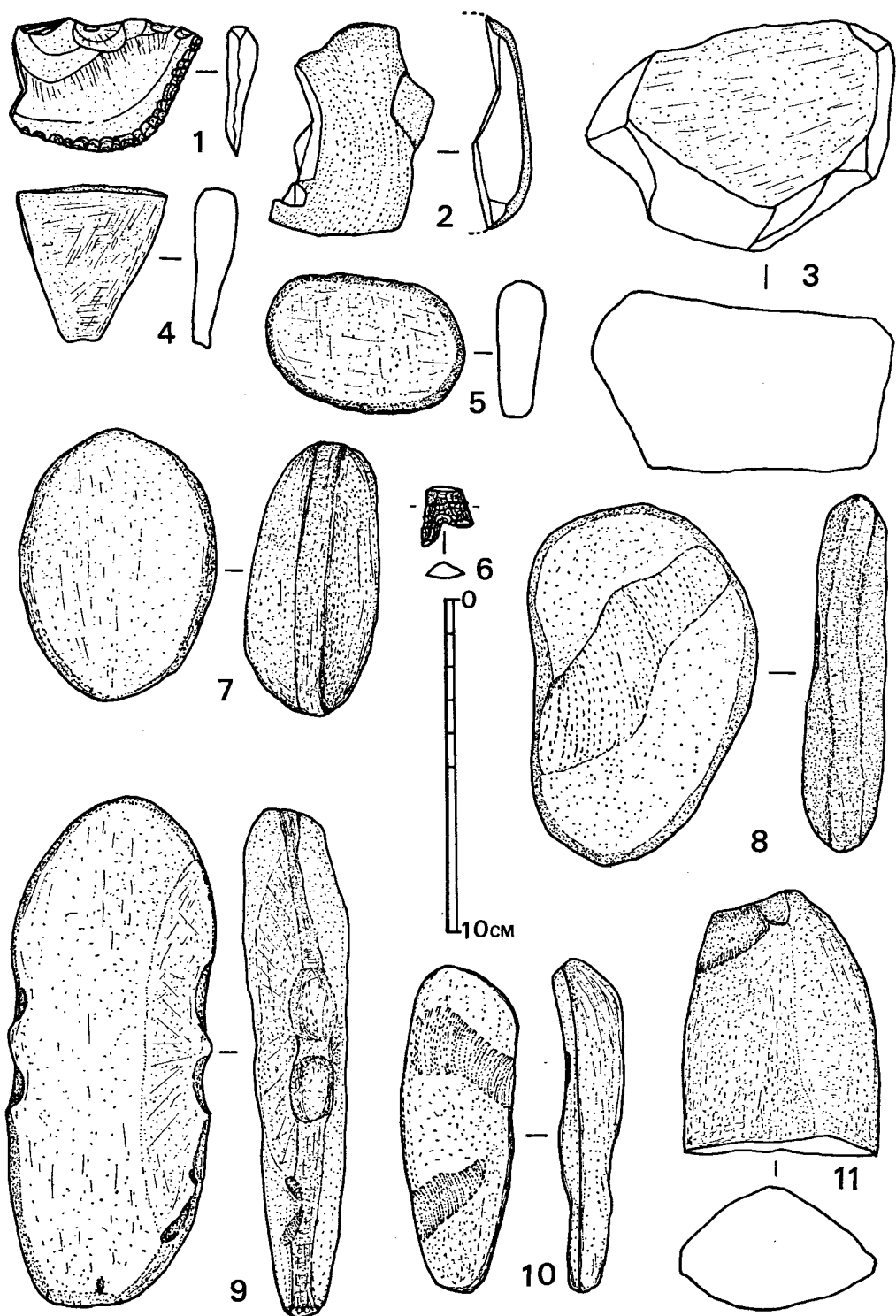


第63図 第2号住居址付近(1/100)

第3号住居址（第65図-7・8） 出土遺物は少なく、須恵器及び土師器である。

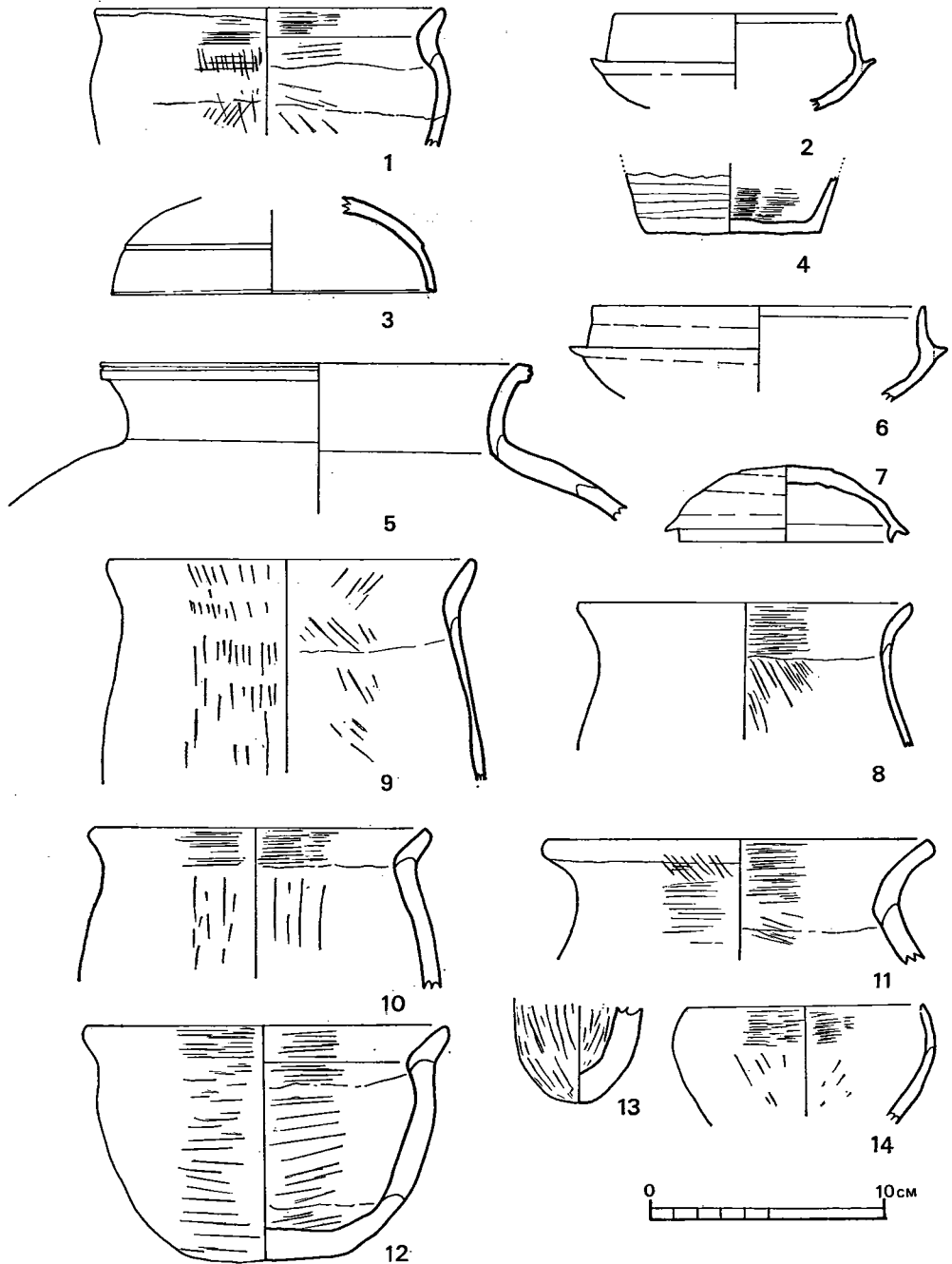
7は須恵器杯の蓋である。口径は9cmで天井部はヘラ削りで、器高3.2cm、蓋内面のかえりがみられる。宝珠つまみはないが、つまみのできる一段階前の感じがする。

9は土師器甕で口径は14cmである。内面は斜行の刷毛目で調整し、色調は茶褐色で胎土は良好である。表面は無文である。床面直上から出土した。



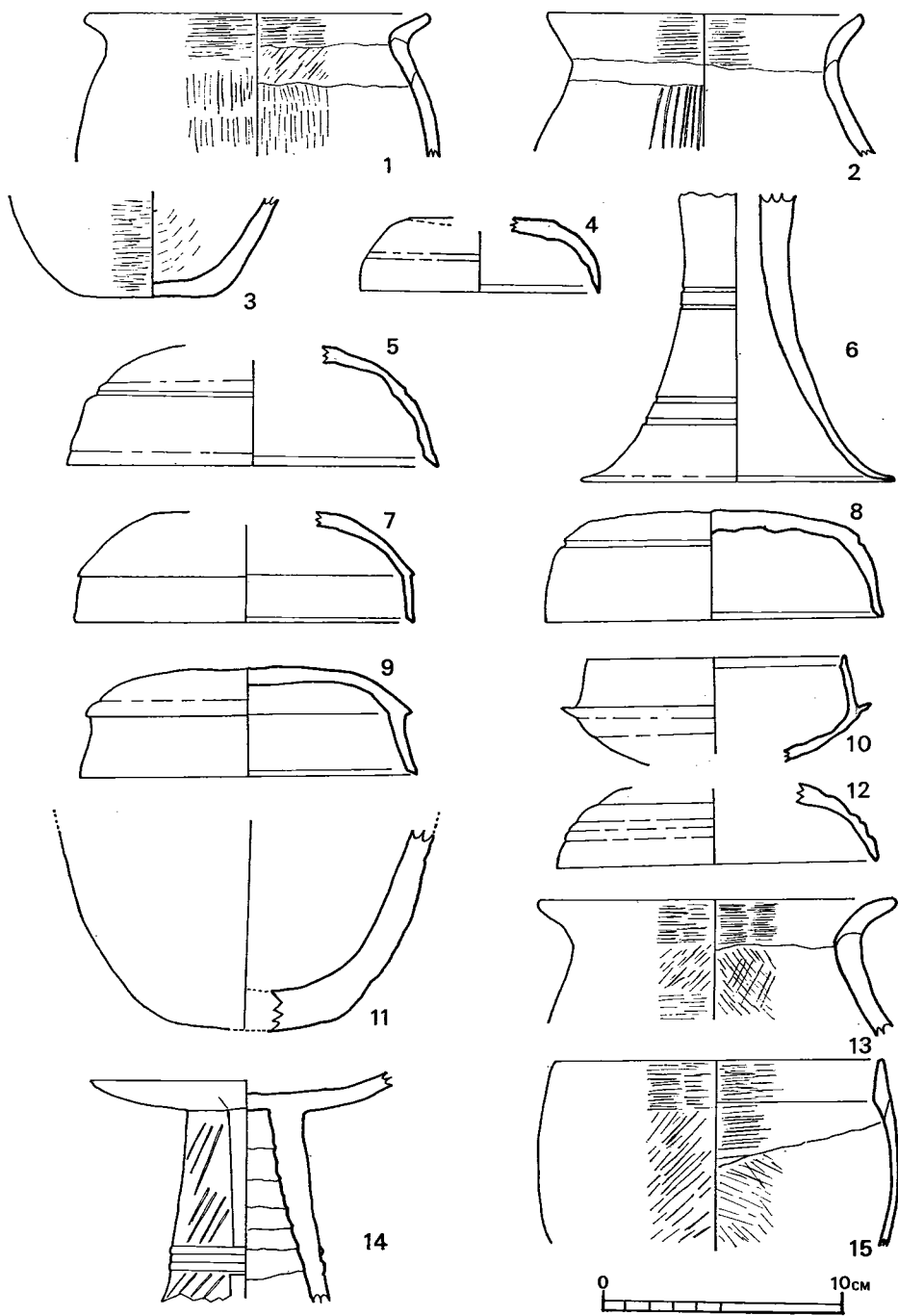
第 64 图 出土石器实测图 (1/2)

第4号住居址（第65図-8・10~14、第66図-1~11）遺物は他の住居址よりも多く出土している。土師器は壺形甕と鉢、碗、高坏、タコ壺に分類できる。須恵器は坏を出土した。



第65図 住居址内出土遺物 (1/3)

第1住居址 1~3 第3住居址 7・9  
 第2住居址 4~6 第4住居址 8・10~14



第66图 住居址内出土遗物(1/3)

第4住居址 1~11

第5住居址 12~15

土師器の壺形土器（第65図-10）で口径が14cm、胴部で若干のふくらみを持ち、粘土接合部が残っている。内面の口縁部は刷毛の横なで、胴部は縦なでであり、色調は褐色で焼成は比較的良い。

甕形土器（第65図-8・11、第66図-1・2）である。いずれも破片である。口縁部は外反し、粘土接合部が残っている。色調は茶褐色が主で、胎土は比較的良好である。第66図-2は胴部を櫛目で縦位に調整し、他は表面、内面ともに刷毛目である。第66図-8・11はその底部である。

鉢形土器（第65図-12）で完形土器である。色調は褐色で胎土に小石を含み、焼成は柔らかい。口径は15cm、器高は11cm、器厚は1cmである。両面とも横位の刷毛なでによって整えてある。

埴形土器（第65図-14）で底部を欠損している。色調は黄褐色で胎土に砂粒を含む。口径は10cmである。

高坏（第66図-14）色調は褐色で胎土に小石を含み、二段の2凹線を有している。刷毛で調整している。

タコ壺（第65図-13）色調は黄褐色で、焼成は比較的不良である。底部破片で表面は縦位の刷毛によって調整されている。

須恵器は蓋坏（第66図-4～10）までが蓋が主体である。4は口径10cm、器高4cm、色調は青灰色であり、焼成は比較的良い。7は口径14cm、器高5.5cm、口縁部の高さは2cmである。口端面には凹線をめぐらす。天井部はかなり低い。青灰色で胎土に砂粒をわずかに含む。焼きは堅い。9は口径13.8cm、口端から天井部までの高さは5cm、口縁部の高さは3cmである。色調は暗褐色で胎土良好。焼成は良い。6・8は凹線を一本有しており、口縁がやや外反する。前者は口径16.5cm、高さは7cmで天井部はかなり低い。灰青色で胎土に細砂を含み、焼成は良好である。後者は口径14cm、器高6cmで天井部はかなり低い。青灰色で焼は良好である。10は坏の身で口径10.8cm、器高5cmで立ちあがりの高さは2.2cmである。色調は灰青色で胎土に細砂を含み、焼成は良い。坏の時期はⅡ型式からⅢ型式の古い所に位置するものである。

石器（第64図-5・6、9～11）炉址の東側に砥石が2点、覆土中に砥石2点の合計4点を出土。第64図の第4号住居跡S-1とS-2がそれである。S-1（第64図-9）は玄武岩製で両側縁に指を安定させるための指置きがあり、両面を使用しているものである。磨痕は全面を走っている。S-2（第64図-10）は石英製で断面はD字形であり、両側縁には磨痕が走り、磨痕は右側縁と左側縁との両縁から走っている。

11は今山の玄武岩製で両側縁及び全面にわたり磨痕が走っている。覆土から出土した5・6は扁平な河原石の両面及び側辺を見事に研磨し、ほぼ円形に整えている。石質は安山岩である。

鉄滓を数点出土した。

第5号住居址（第66図-12~15） 高杯・坏・甕・壺形土器に分類できる。

土師器は甕形土器の13、壺形土器の15である。前者は口縁部破片で口径14cmで内面に粘土接合の残痕が残っている。表内面とも刷毛によって斜位方向から調整されている。色調は暗褐色、胎土、焼成は良好である。後者の口縁は直立し、埴に近い形をとるもので口径15cmで内面に粘土接合の残痕が残っている。口縁部の付近は刷毛による横位の調整で胴は斜位の調整となり、内面は横位の刷毛調整による。色調は黄褐色で胎土に細砂を含み器面はざらついており、焼成は粗い。

須恵器は坏（12）と高坏（14）の破片である。前者は蓋坏で口径13cm、器高5cm内外、色調は灰青色で焼は堅い。後者は脚上部破片で平行沈線文が二帯ないし三帯、一定間隔をおいてつけられている。色調は黒青色、胎土は砂粒を含んでおり、透が二対はいる。ヘラ磨をもち、器面にヘラによって細い沈線の文様体である。時期はⅢ型式の古い所に位置するであろう。

石器（第64図-4・7） 砥石と石鏃の2点である。4は砥石で全面を研磨していて石質は安山岩である。6は石鏃で無柄の扱りがはいたもので石質はサヌカイトである。

鉄滓を十数点土中より採集した。青銅製品も採集したが、それが何であるかは不明である。

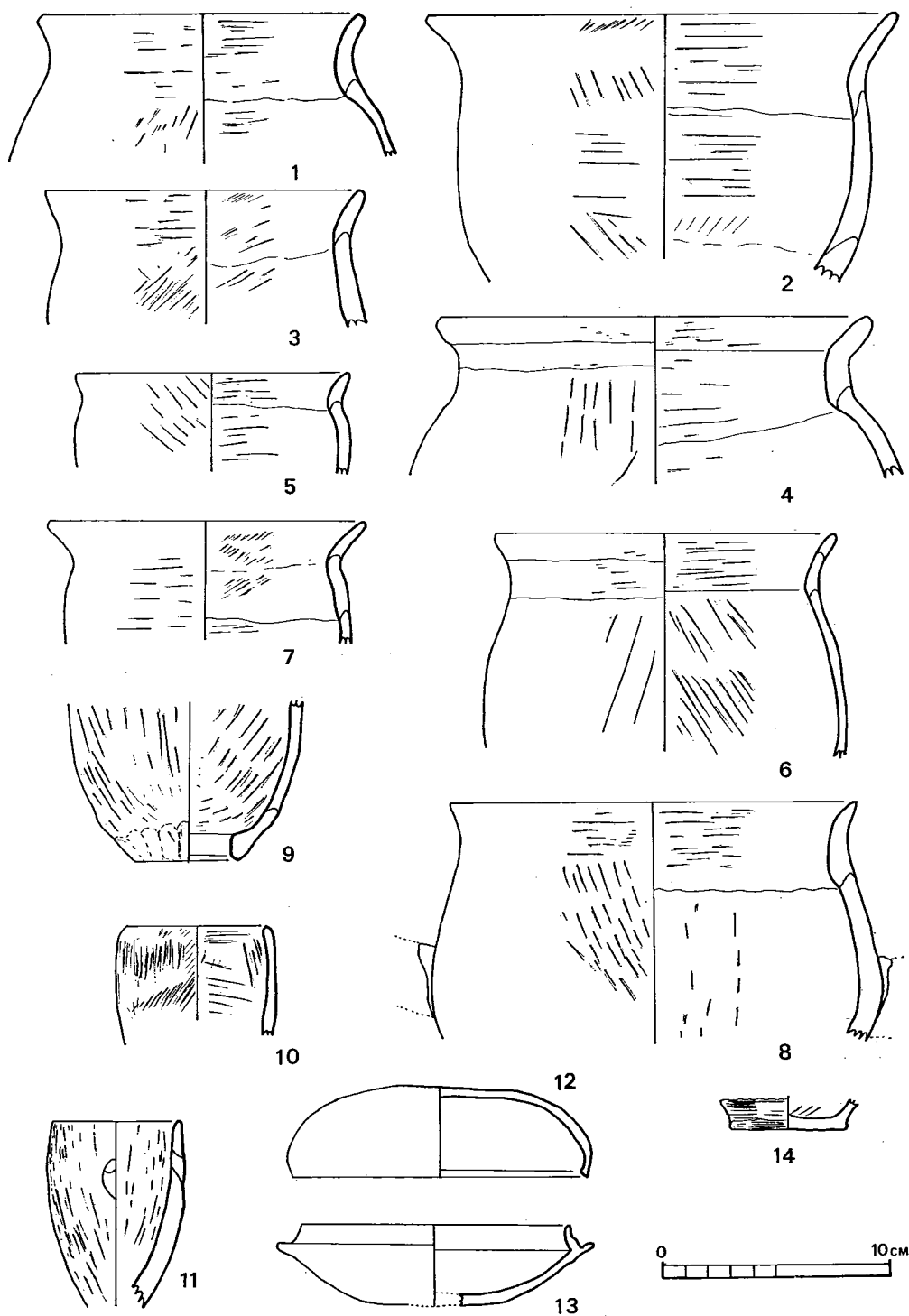
溝（第67図-1~14） 土師器は甕形土器、壺形土器、把手付土器、甕、タコ壺に分類できる。須恵器は坏である。

この溝から出土したものは甕形土器が一番多く、口縁が「く」字状をしているもの（2）、それに近いもの（3・7）、頸部にあたる部分が垂直で口縁が外反するもの（1・4）に分かれる。口径は10~20cm、色調は暗褐色で胎土焼成は良い。

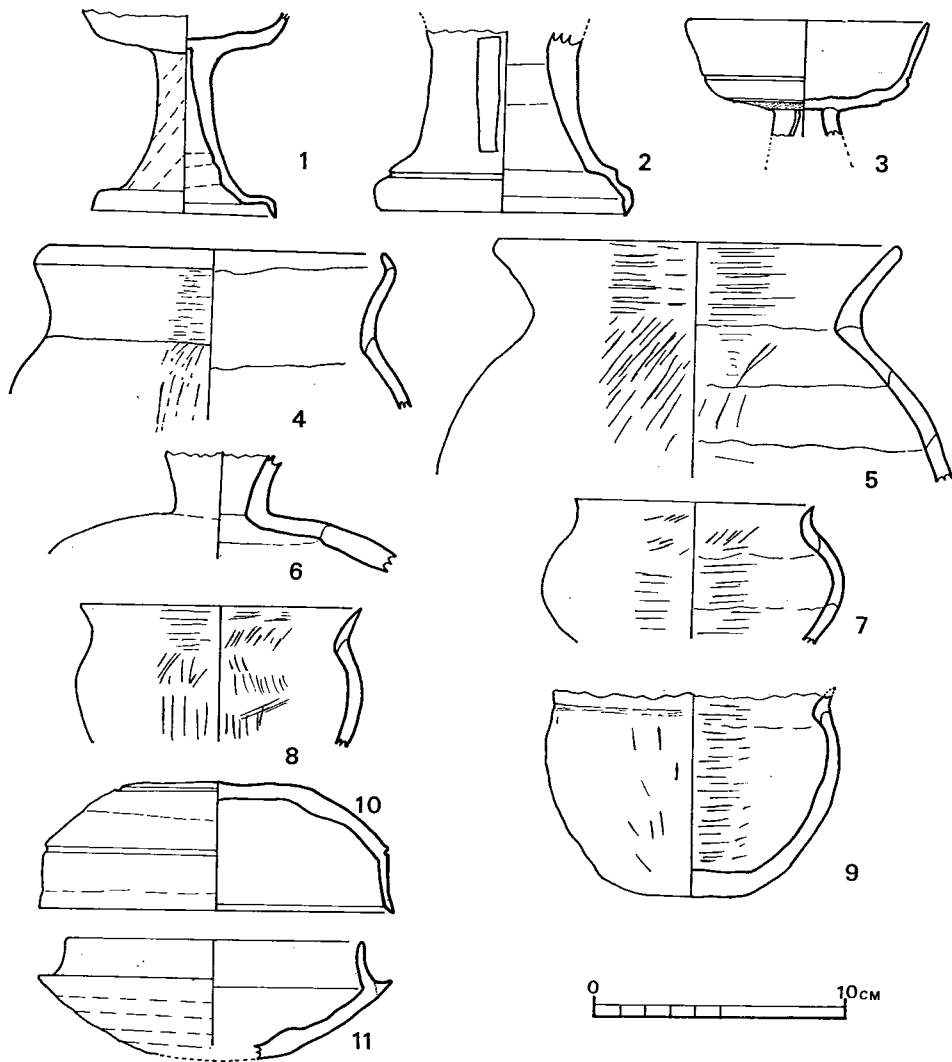
壺形土器は小形で「く」字状がはっきり断面に出ている。色調は黄褐色で焼成は非常に良い。刷毛で調整し、器面は滑らかである。14は小形壺の底部である。8は甕。今回の調査ではこの一点だけである。甕は生活用具の代表であるのに少なかったということは興味をひく。10は把手付土器で口径18cmで内面に粘土接合の残痕がかる。色調は暗褐色、胎土には小石が含まれ、器面はざらざらしている。器面調整は大ざっぱであるが、刷毛によって調整を両面に施してある。焼成は比較的良好である。9・11はタコ壺で、口径は7cm内外、色調は黄褐色である。焼成は比較的良く、刷毛によって調整されている。器高は10cm内外。11はほぼ完形であり、一つの紐孔を持つ。12・13は須恵器の坏である。12は蓋で口径13cm、器高4cm。色調は灰青色、焼成は良好である。13は身で口径12cm、器高3.5cm、立ちあがり1cmで体部も低い。色調は灰青色、胎土焼成は良好である。時期はⅢ型式の新しい方ではないかと思われる。

石器（第64図-7） 磨石が一点出土している。石質は安山岩で全面を磨痕が走っている。





第67图 溝出土遺物(1/3)



第68図 その他の出土遺物(1/3)

その他の地区(第68図-1~11)

高杯、平瓶、壺形土器、鉢、杯の主なものをあげた。

1、2、3は高杯で表土中から出土したものである。時期はⅡ~Ⅲ形式である。6は平瓶の口縁部破片である。これも表土中から出土したものである。

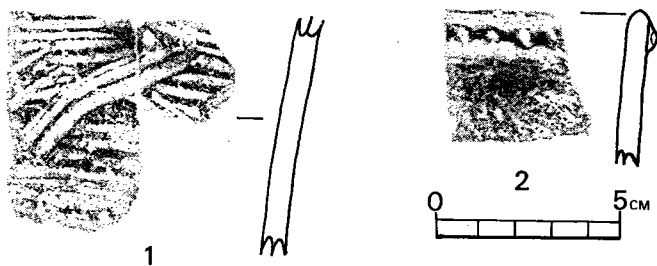
5はQ-7区の南端のピットの中から出土した土師器の壺形土器で口径は16cmで両面をヘラによって調整をほどこしている。内面に粘土接合の時の残痕が残っている。色調は暗褐色、胎土に小石を含み、焼成は良好である。

9はP-14区のピット内から出土したほぼ完形に近い鉢で、色調は暗褐色で胎土に細砂を含

み焼成は比較的良好である。時期は土師期初頭のもので弥生的な様相を残している。同じく7、8も鉢で口縁部のつくり方が9に類似するが、色調は黄褐色で胎土には小砂を含んでおらず、焼成も9よりよい。7・8とも刷毛によって両面とも調整しているのので、9の時期よりも一段新しくなると思われる。4は土師期どの時期にいれたらいいか不明である。10・11は坏でP-14区とN-6区から出土したもので蓋の方はⅡ型式、身の方はⅢ型式の古い方である。

石器(第64図-1・2)搔器と磨石と思われる。1はT-7区で出土し、サヌカイト製で両面にわたり細かく剝離を行なって刃部を形成させている。それに風化度も高いことを考え合わせると縄文期にはいる遺物であろう。2はP-11区表土中のもので磨石の破片であろう。石質は安山岩で磨痕は一部に残っている。

縄文土器(第69図) Q-7区ピット内から条痕文土器と凸帯文土器が出土した。色調及び胎土から縄文晩期土器とおもわれる。



第69図 Q-7ピット内出土縄文土器

第69図-1は色調褐色で、胎土に小石を含み焼成は不良である。表裏に貝殻条痕を施している。器厚は9mmである。2は口縁部に凸帯を有し、器厚は9mmで、直立する。胎土焼成は良好で色調は褐色である。

#### 第4 小 結

今回の調査から検出された遺物の主体をなすものは土師器と須恵器であるが、若干縄文式土器が発見されている。

遺跡は各時代の遺物を採集することができた。近世陶器(有田・唐津・須恵<sup>\*</sup>焼)等である。

須恵器については、坏、高坏、甕などの器種があるが、圧倒的に坏が多く、Ⅱ型式~Ⅳ型式までであったが、その中でもⅡ型式が主体である。

土師器については高坏、甕、壺形土器、把手付土器、埴、坏、鉢などがあり、比較的古手の土師器である。弥生的様相を残し「く」字型に外反する短い頸をもち、球形胴で丸底或いはそ

れに近い甕や小形丸底の鉢等である。巻きあげ手法によって器壁の内面は篋削が加えられ、刷毛目や研磨。撫でなどによって器壁をうすく仕上げている。

住居址の時期については、床面直上で採集されたものが少なく、覆土中の遺物から推定すると須恵器Ⅱ型式からⅢ型式が主体を占めているため、6世紀初頭が妥当な線である。

第1住居址と第4住居址は、前述のごとく普通の住居址と考えることができず、工房跡的な様相をふくんでいる。鉄滓の量などから、すぐさま製鉄跡だと断定することはできないが、生の松原の海岸砂丘が近くにあり、現在でも砂丘から砂鉄を多く見出されることを踏まえると、これに何んらかの関係を推定できる。

しかし、今回の調査では不十分なことが多くて、本調査の折に、それをうめていきたい。

この遺跡は高崎古墳から出土する須恵器よりも古い型式であるということを考え合わせて、その当時になにがここで行なわれ、そしてなにが、高崎2号墳を作り上げた要因となったのであろうか。その裏には生の松原の砂鉄が、なにかの働きを示めしていると思われる。この鉄滓が、多くの重要な問題をなげかけてくる。それは当時の人々の生活を瞬間的にかきまみることができるのである。(副島 邦弘)

\* 近世の陶器で福岡県粕屋郡須恵町で焼かれたものである。

#### 参 考 文 献

筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告

福岡県文化財調査報告書22 昭和36年 福岡県教育委員会

有田遺跡 一福岡市古代集落遺跡第二次調査報告一

1968 福岡市教育委員会

陶邑古窯址群Ⅰ 平安学園考古学クラブ

1966 田辺昭三

福岡県弥永原遺跡調査概報

福岡県文化財調査報告書32 昭和40年 福岡県教育委員会

## 第 6 総 括

今宿バイパスの予備調査は最初 8 カ所の発掘調査を行なう予定であった。ところが第 7、第 8 地点は既に削平され、旧状をとどめず第 7 地点のみ試掘を行ない、遺跡の有無を確認し調査を終った。そして第 8 地点に替えて、第 6' 地点である高崎 3・4 号墳の調査を行なった。こうして調査は福岡市大学拾六町の地域に集中することとなった。第 3～第 6' 地点に関しては先に詳しく記述しているが、ここに第 1・第 2 地点について若干の記述をしておく。

第 1・第 2 地点は現在水田・畑地となっているが、調査の結果 十郎川の氾濫原であることがわかった。そして両地点で発見される遺物は極めて少なく、2 次堆積であることがわかった。土層は青色粘土層の上に 2、3 層の砂質土あるいは砂の堆積層がある。遺物はこれらのとくに上部の層に発見される。遺物はどれも小片であるが、縄文式土器片、弥生式土器片、須恵器、土師器の小片から青磁の破片と種類は豊富であるが、資料となりえるのは全くない。この両地点とも調査の対象地点としては不十分で早々に調査を終える。

つぎに第 3～第 6' 地点に関して全体的にみてみよう。いずれも丘陵あるいはその間の谷に所在するところの遺跡であるが、第 3 地点の湯納遺跡は早良平野に向けほぼ東に開口する谷のやや奥まったところの僅かに高い地点に所在し、対岸の東北方に伸びる丘陵尾根の平坦地に第 4 地点の宮の前遺跡がある。両遺跡とも縄文式土器から須恵器、土師器までを出土するが、概して弥生式後期から古墳期に至る時期が主体である。宮の前遺跡の調査が遺跡の有無の確認ということで、十分な調査をなし得なかったが、隣接地を福岡市教育委員会が調査を行ない、この成果からして弥生式後期から終末期のものが主体となり、遺構も住居地であることから、宮の前遺跡も同様な性格の遺跡であることが推定され、湯納遺跡との関係がどのようになるかが問題となるが、両遺跡間には若干の時間差のあることも推定されるが、ほぼ同一時期に併行して活用された遺跡地ではないかとも考える。唯湯納遺跡における住居址の明確なる時期の決定がなされないことには十分な考察もできない。しかしながら湯納遺跡の調査の成果は、1 号住居地内より出土せる遺物にあり、県内では事例の少ないジョッキ形土器の発見とこの土器と土師器の関連について問題をなげにけ、また青銅鋤先 2 例と鉄製手鎌 1 の発見は、青銅器と鉄器の併用期間を研究するのに貴重な資料を提供している。また青銅製鋤先の 1 つにこれまでに類例のないものを発見した。これは所謂 U 字状を呈するものでなく、U 字状を呈する鋤先の木身装着部にあたる部分に類似し、完形品である。U 字状を呈する鋤先の刃部が使用されることによって消滅し、木身装着部のみが残っているということも考えられるが、刃部が完全なくなるほどまにも使用されたかどうかは疑問である。

第 5～6' 地点は第 4 地点のさらに西方にあり、5・6' 地点は丘陵上にあり、この間の谷に 6 地点が所在する。調査の結果、6 地点は住居址遺跡で、住居址、掘立柱の柱穴が発見された。住

居址内よりは須恵器、土師器を出土するが、須恵器は所謂第Ⅱ型式に属するものと考えられ、5・6'地点の古墳築造よりも早くこの地点で生活が営まれ、この後に5・6'地点の古墳群が築造された。また5地点の高崎1・2号墳が、第6地点の3・4号墳よりも若干早く築造されている。第6地点の大又遺跡と5・6'地点の高崎古墳群の関係は、生活址と墳墓の関係、即ち生活地域と墳墓地域の撰択をどのように行なったかをうかがえる資料かと思われる。

この他5・6'地点の高崎古墳群の調査の結果は、後期古墳群における石室の構築を察知することができた。また、高崎古墳群の中であって、2号墳の調査の成果は貴重なものである。同古墳が方墳であることは早良平野における新事例であり、同古墳が多量の遺物を副葬することも全国的に極めて類例の少ないことである。また、副葬された遺物のなかにも非常に貴重なものも含まれている。なかでも有蓋足付壺の出土は、今日迄の出土例の発見状況が不詳であることを補うものである。この他土器には特異な形態等を呈するものがあり、加えて馬具類をこれほど副葬する例も稀なことである。

このように拾六町における遺跡の調査は、早良平野における原始、古代の研究に新しい資料を加え、室見川の対岸の青銅器を出土し、大遺跡群が所在する飯倉、有田の地域と同じく、今後十分な調査研究がなされる必要があると考えられる。同時に調査の成果は、わが国考古学界にとって貴重な資料を提供し、重視される場所である。

しかし今回の調査が道路建設事業にともなうものであり、当事業が地域開発を目的とし、このように最近における地域開発はめざましく、早良平野も福岡市の近郊であることから開発のブームに乗り、多くの遺跡地が壊滅している。はからずも高崎2号古墳が採土工事によって姿を消したことは、非常におしまれる。

# 圖 版

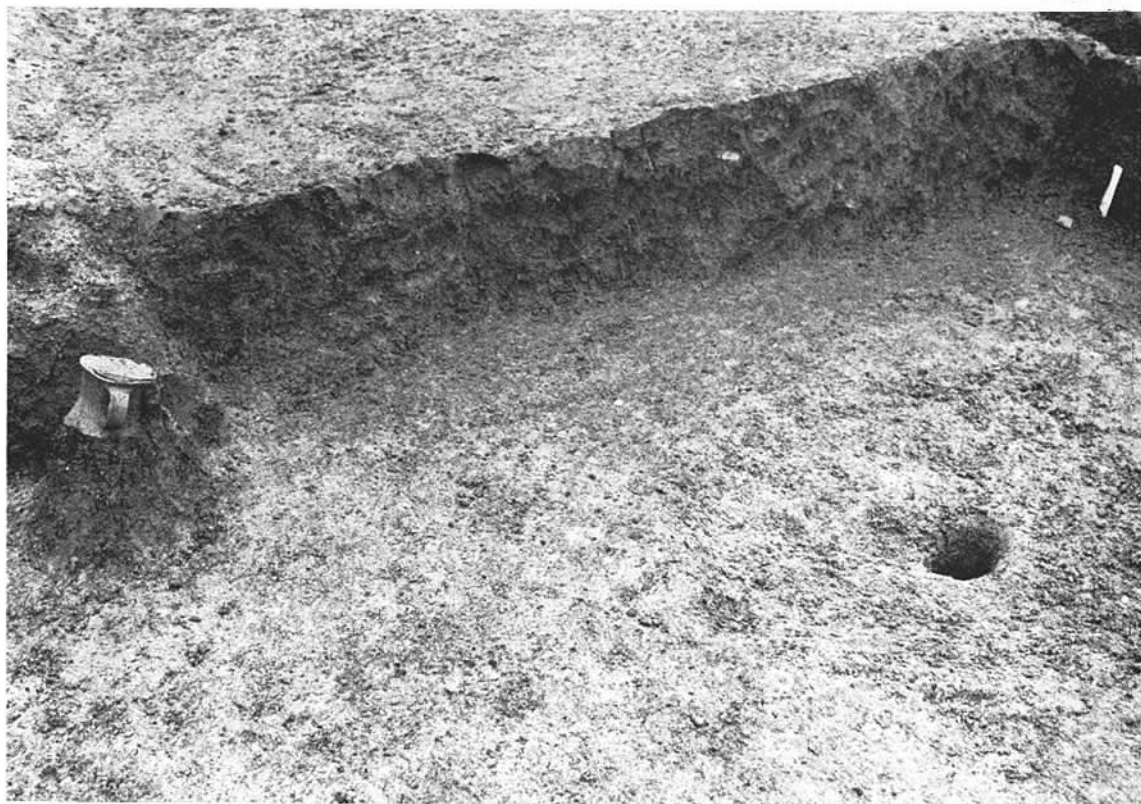


1 住居址（東方より）



2 住居址（南方より）

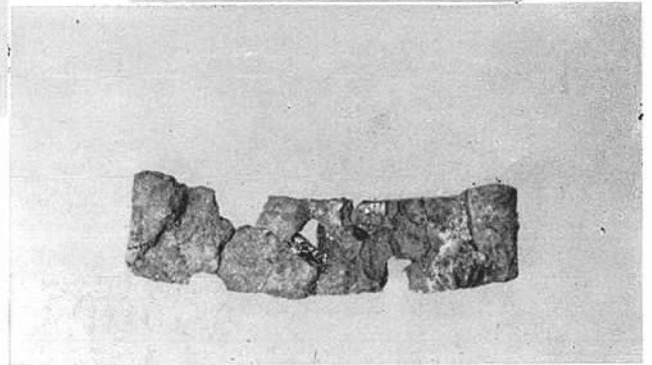
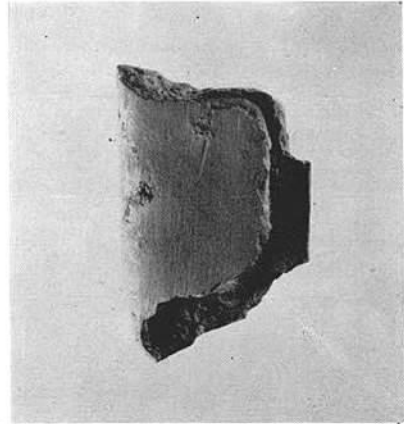




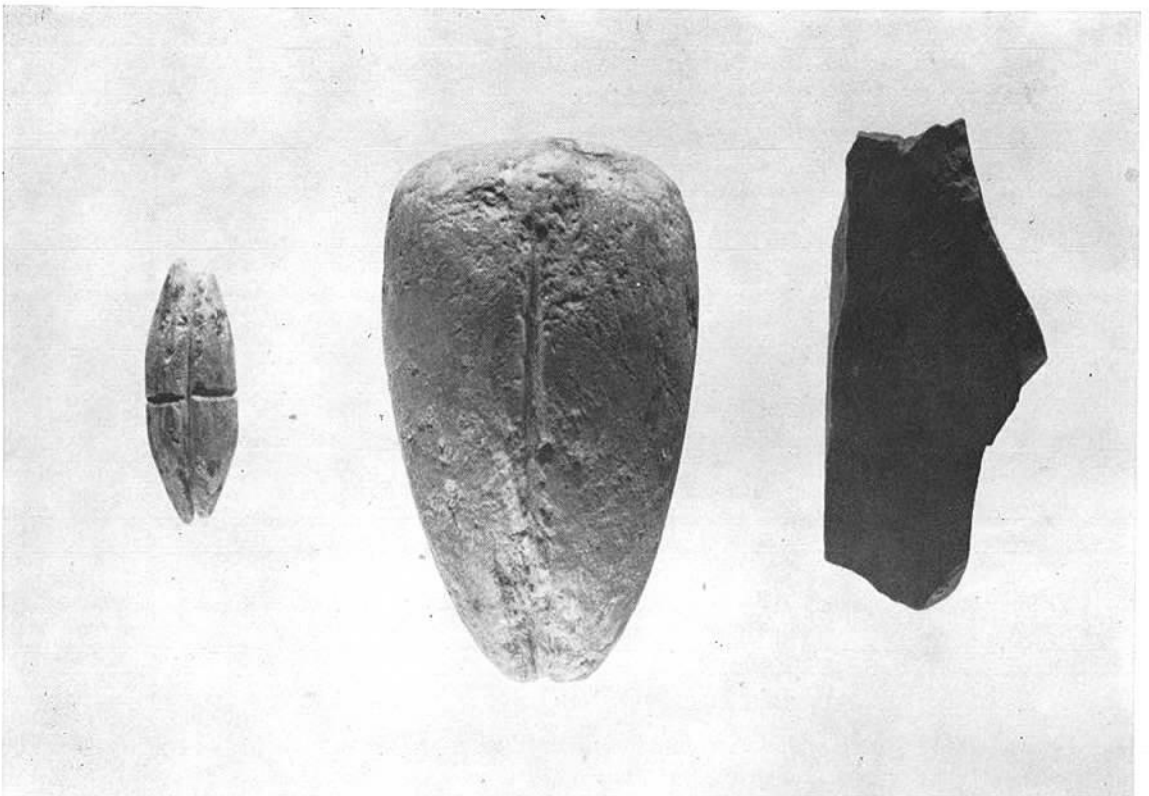
1 ジョッキ形土器及び青銅製鋤先出土状況



2 左 ジョッキ形土器 右 古式土師器



1 上段 青銅製鋤先  
下段 鉄製手鎌



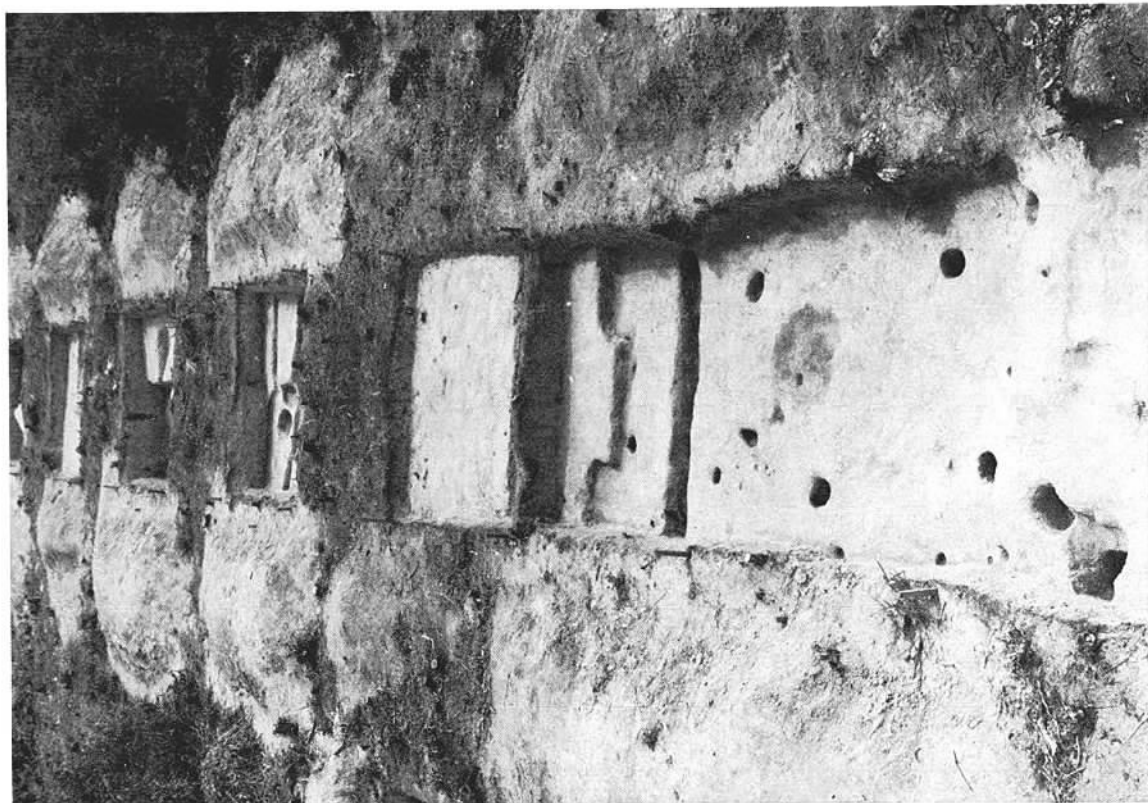
2 左及び中 石錘 右 砥石



1 宮ノ前遺跡遠望（高崎1号墳より）



2 宮ノ前遺跡遠望（西方より）



1 丘陵鞍部の遺構群(西方より)



2 E、G 49 グリットの遺構(西方より)





1 H-46、47グリットの遺構(西北方より)



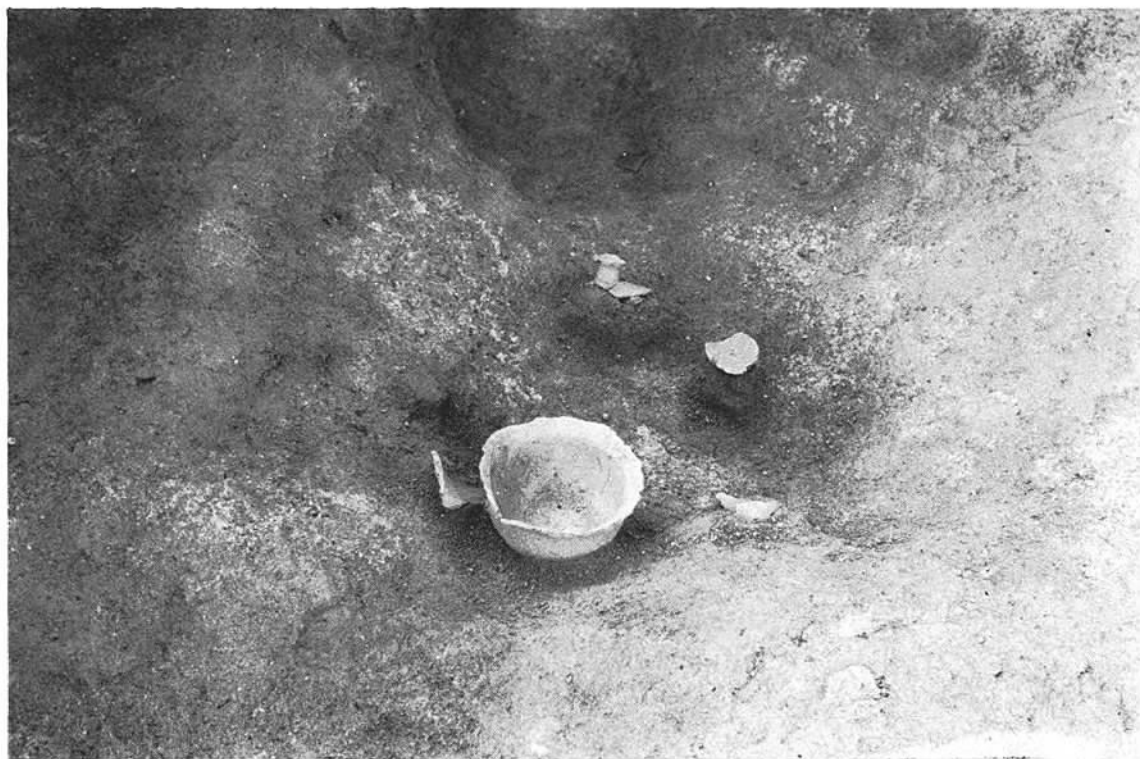
2 H-49グリットの遺構(西北方より)



1 J-49グリットの遺構（西北方より）



2 L-49グリットの遺構（西北方より）



1 P-49 グリットの土器出土状況（東南方より）



2 N-49 グリットの遺構（東南方より）





1 H~N-58・59 グリットの土器出土状況

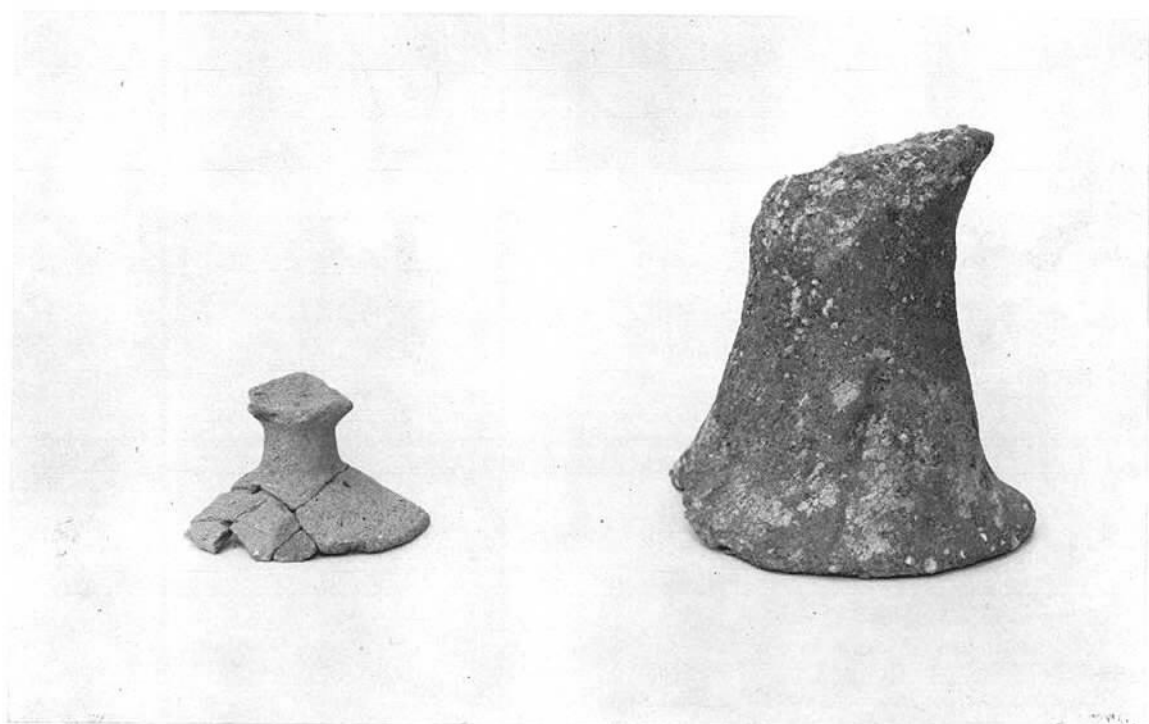


2 同 上

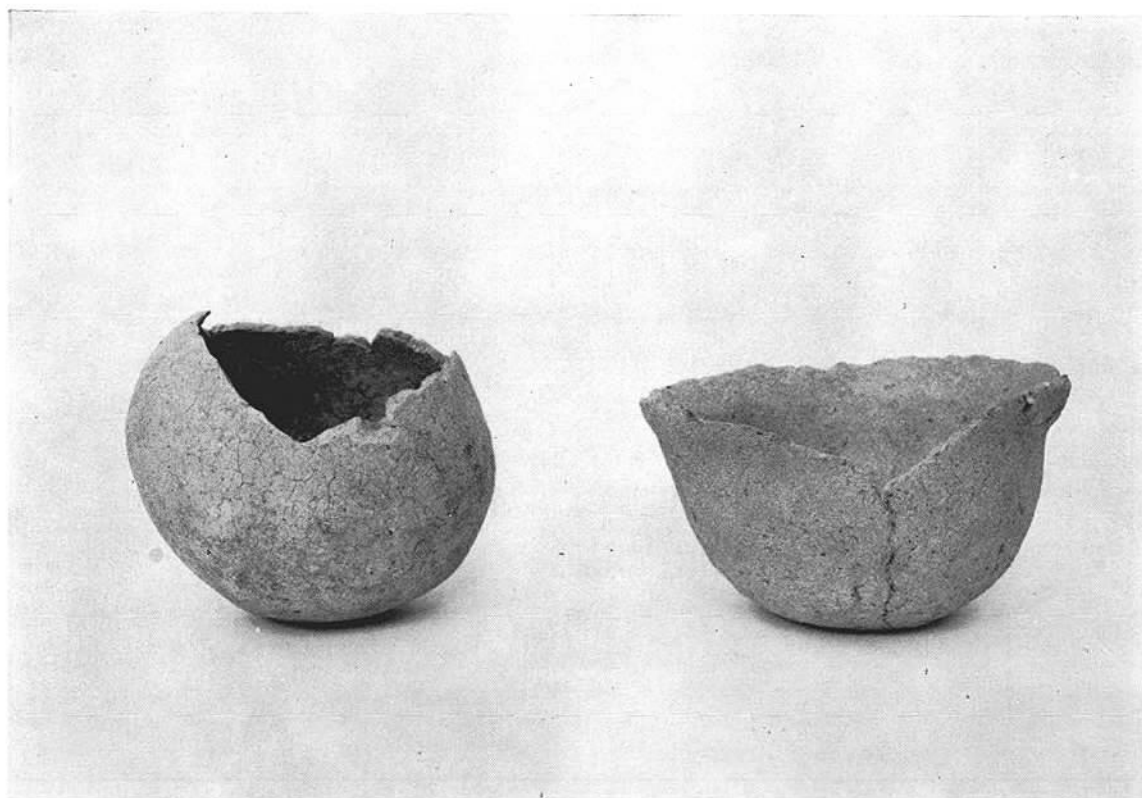




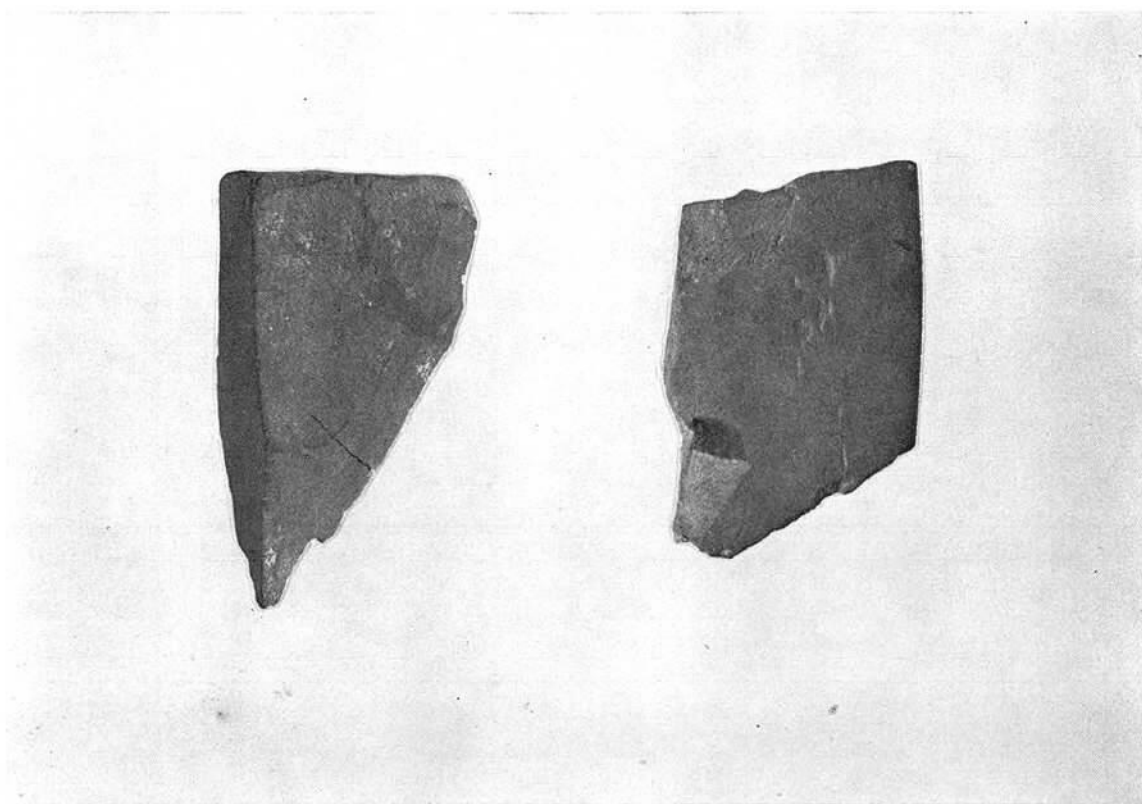
1 L-58 グリット出土の器台



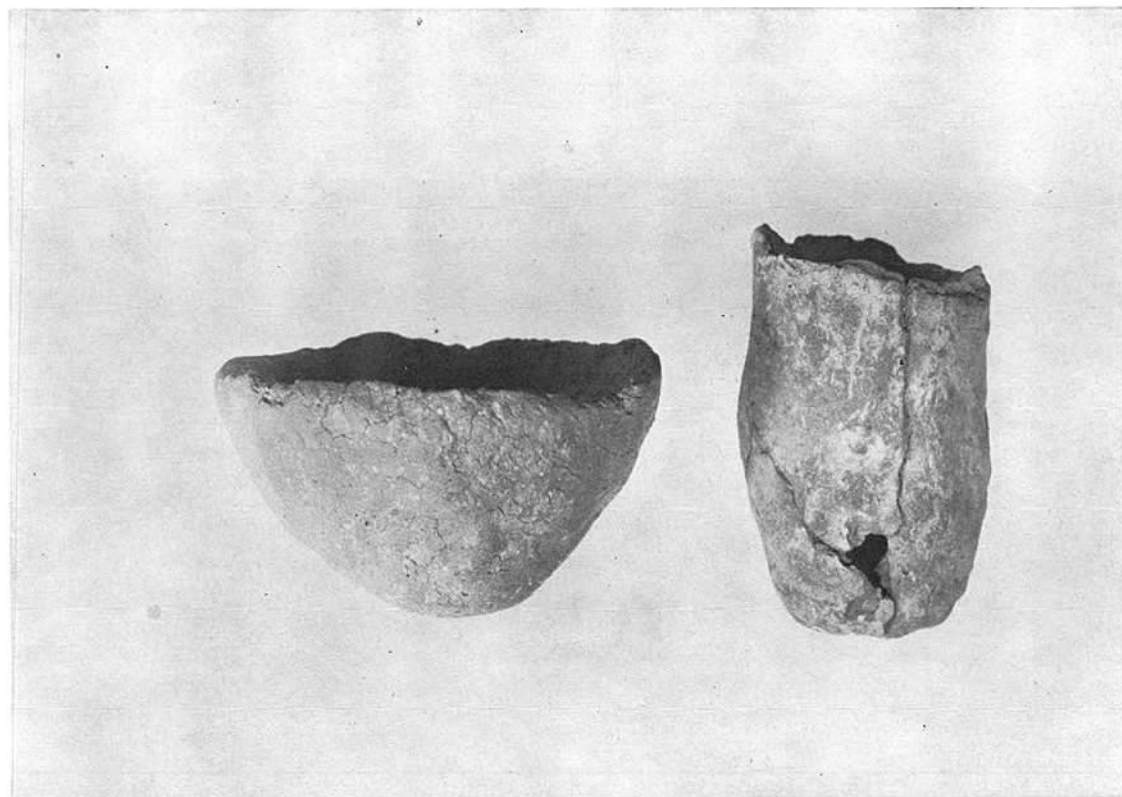
2 右 高坏脚 左 器台



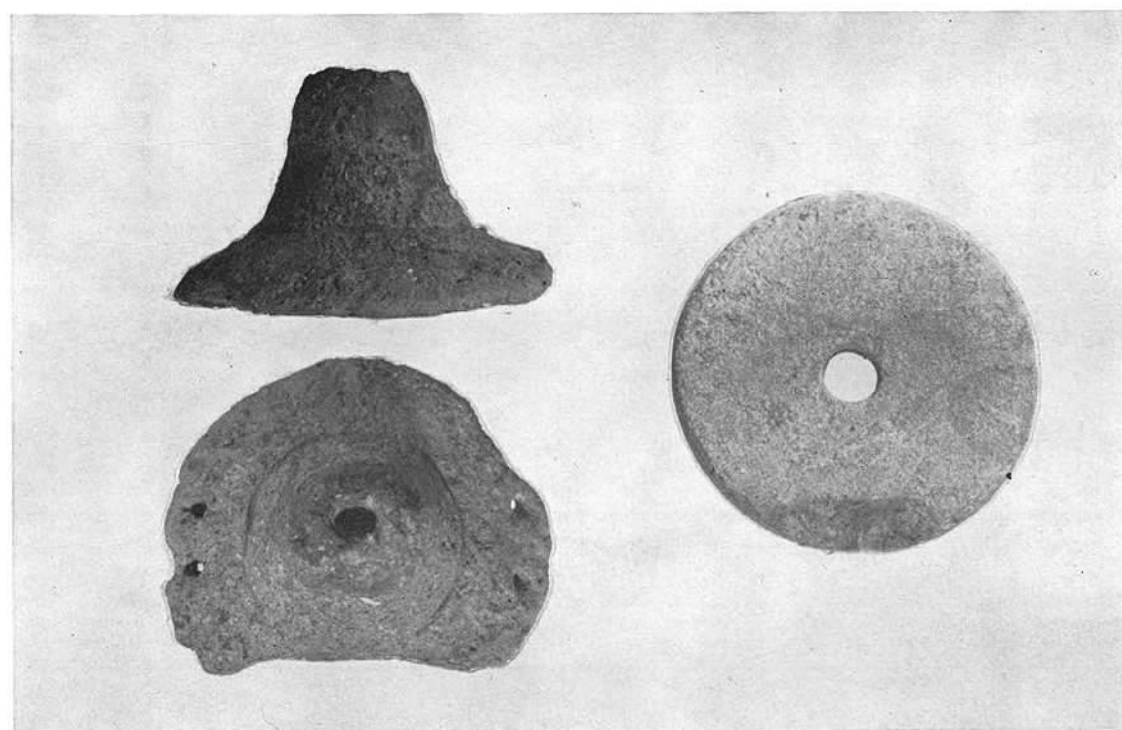
1 右 壺 左 鉢



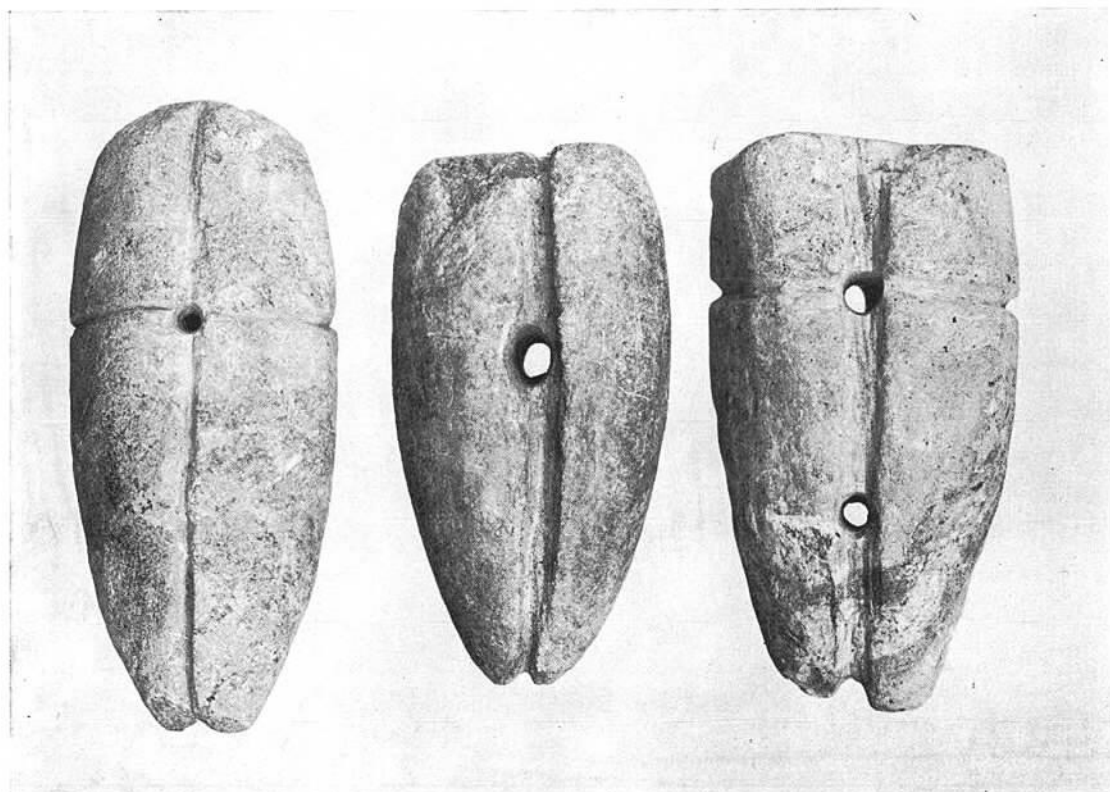
2 砥 石



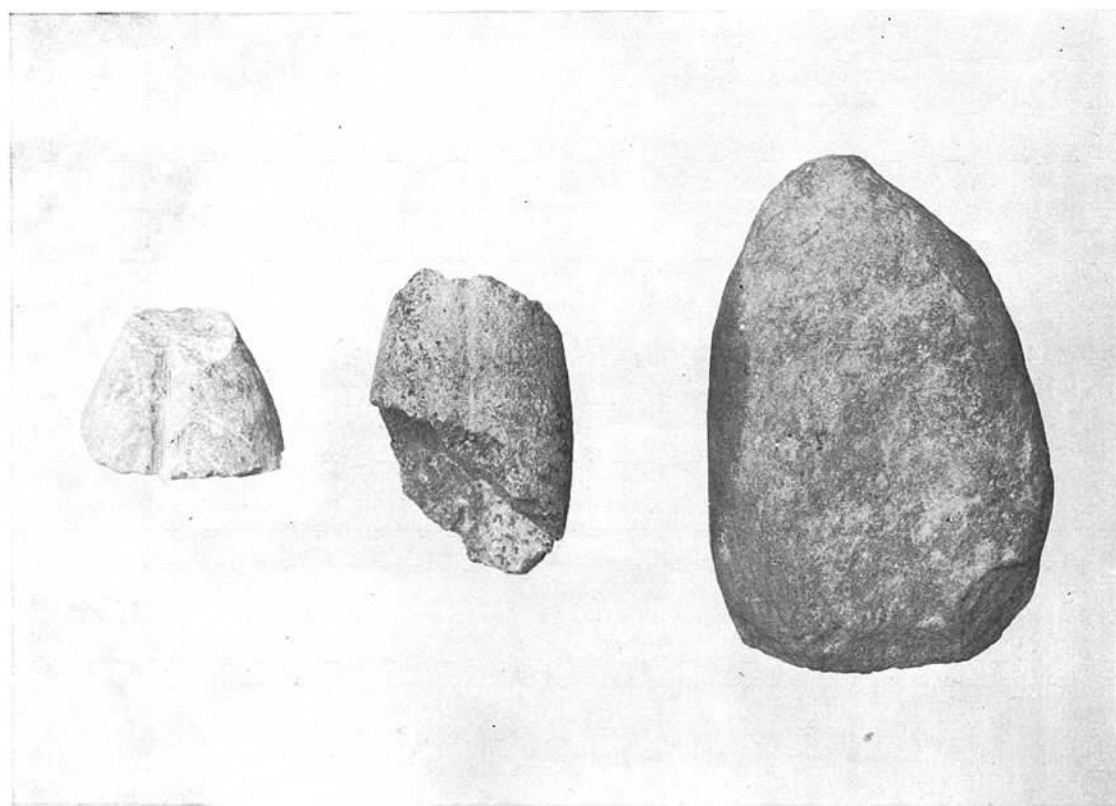
1 手捏土器



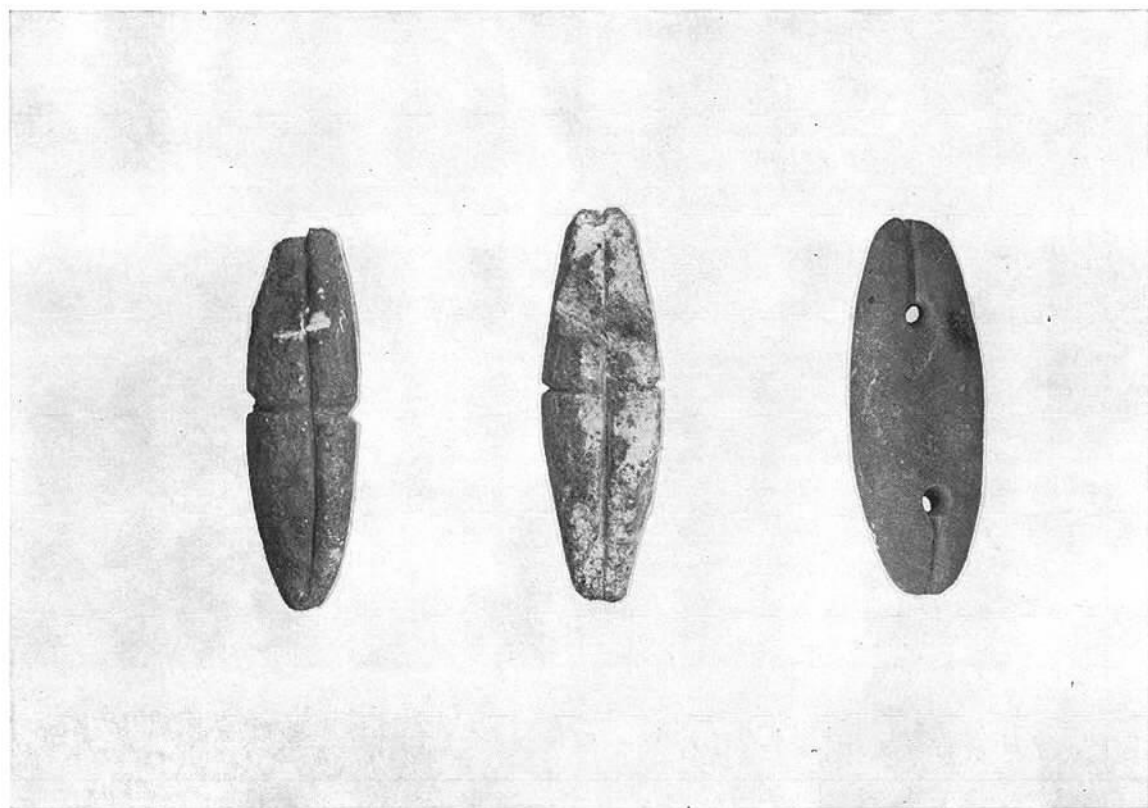
2 紡錘車



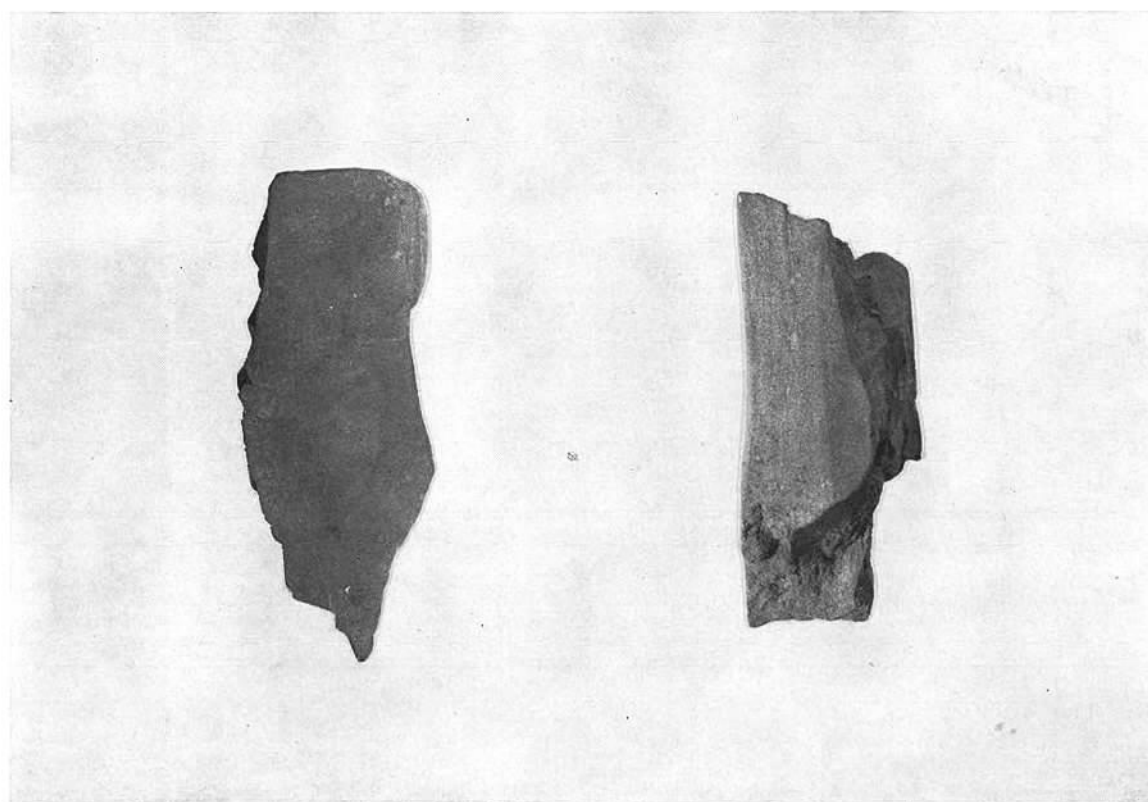
1 石 錘



2 石 錘

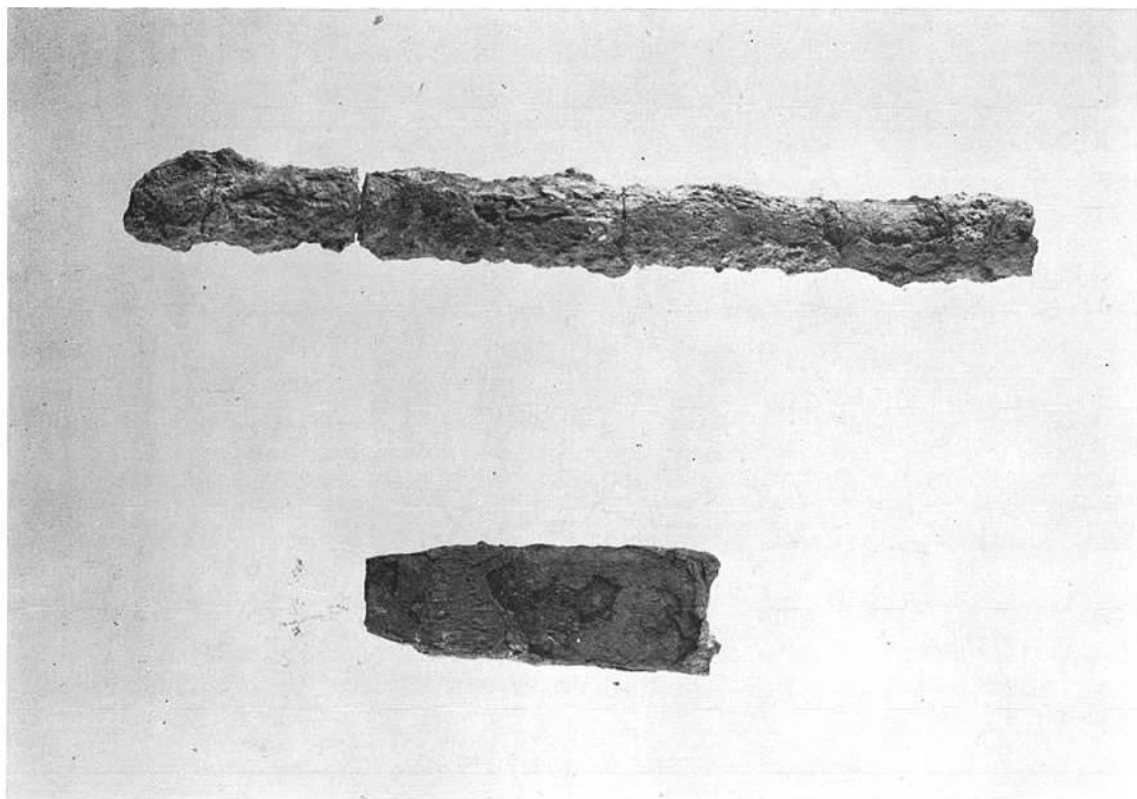


1 石 锤

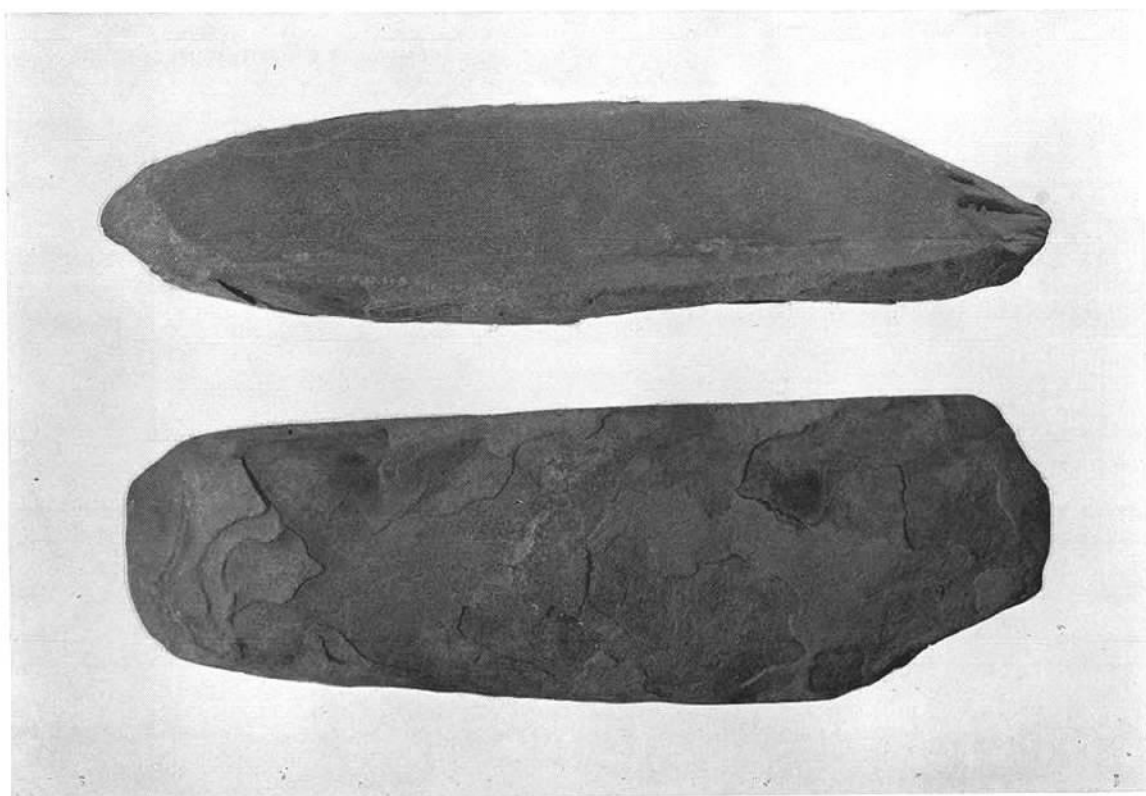


2 砧 石

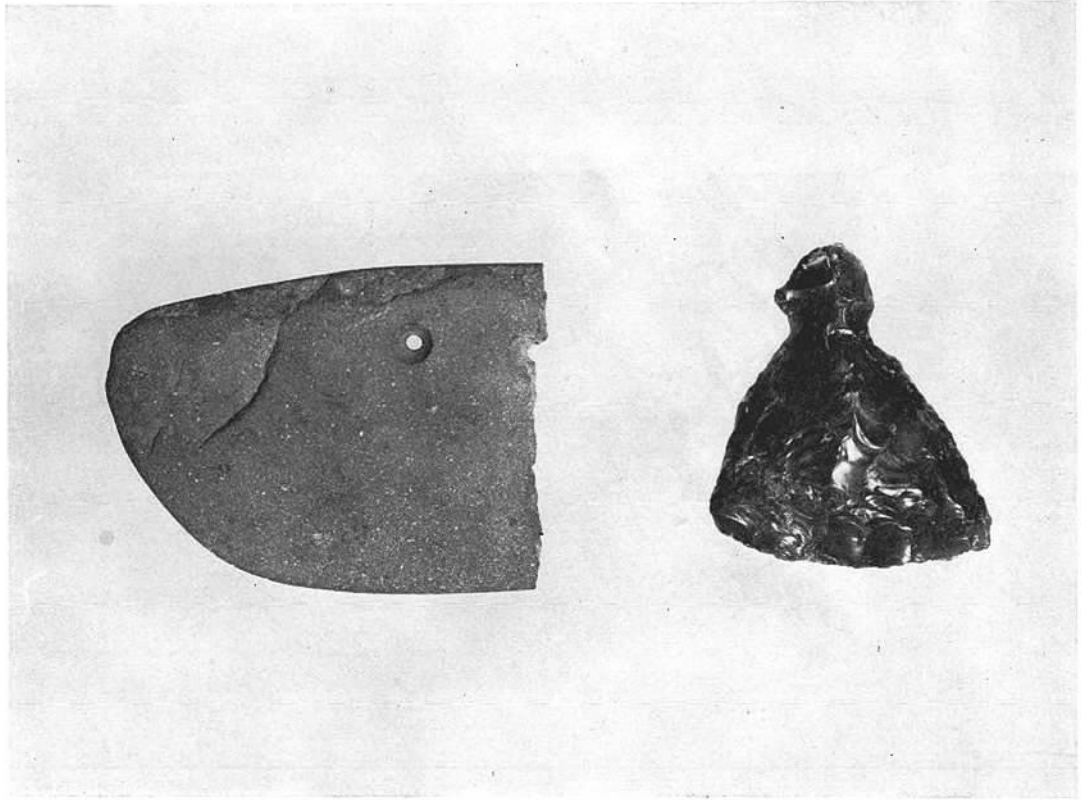




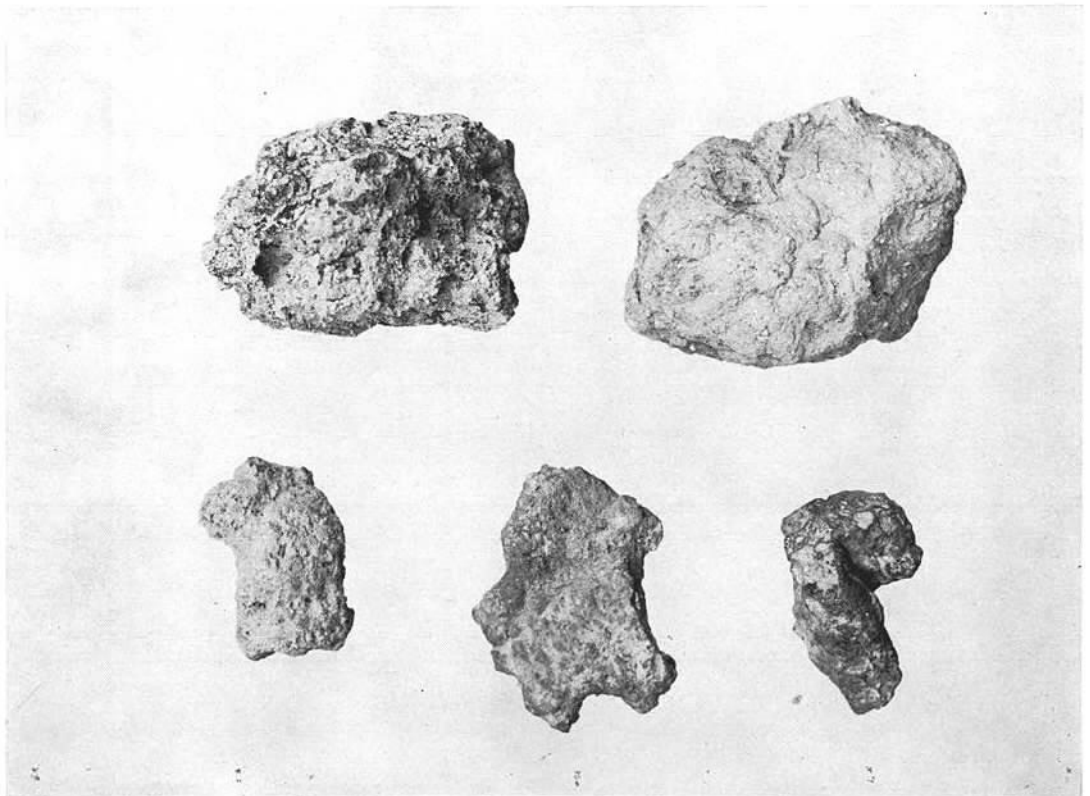
1 石 鉞 左 鉄 鏃



2 磨 製 石 斧



1 左 石 庖 丁 右 スクレーパー



2 鉄 滓



1 高崎古墳群遠景



2 高崎1号、2号墳（中央後方が1号墳）





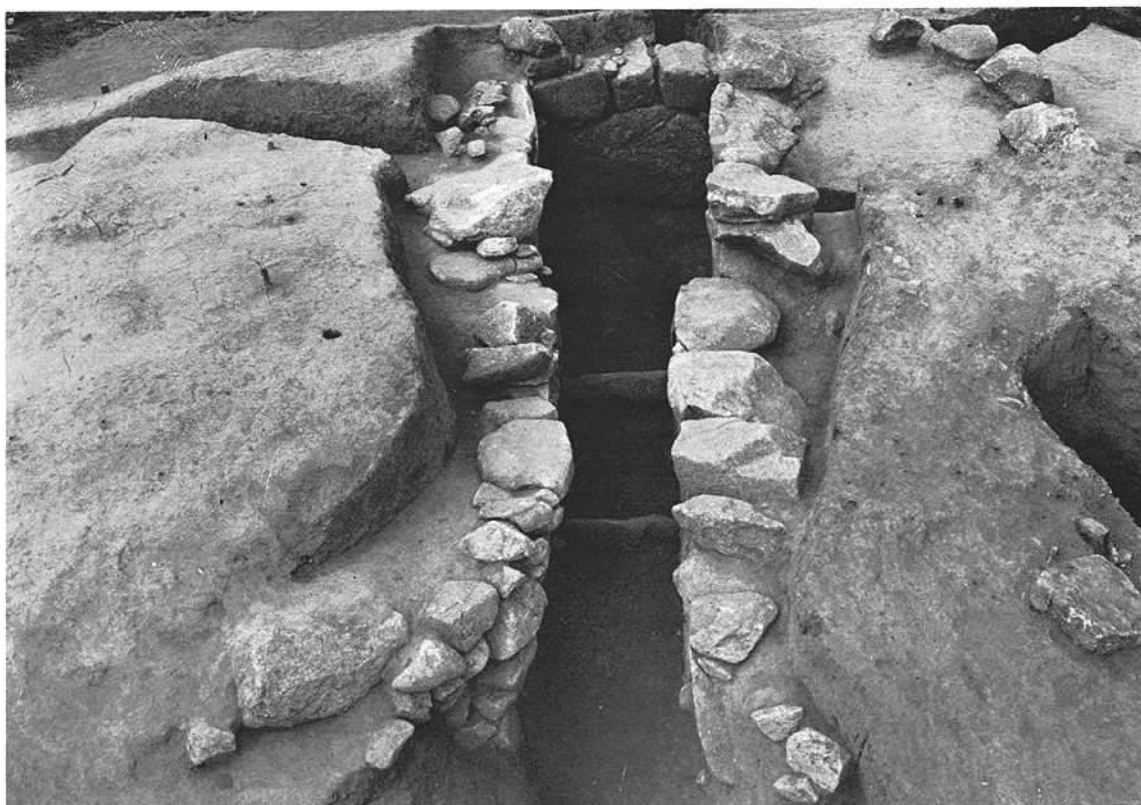
1 高崎 1 号墳 (南より)



2 高崎 1 号墳石室



1 高崎 2 号 墳



2 高崎 2 号 墳 石 室



1 高崎 2 号墳封土の状態と掘り方

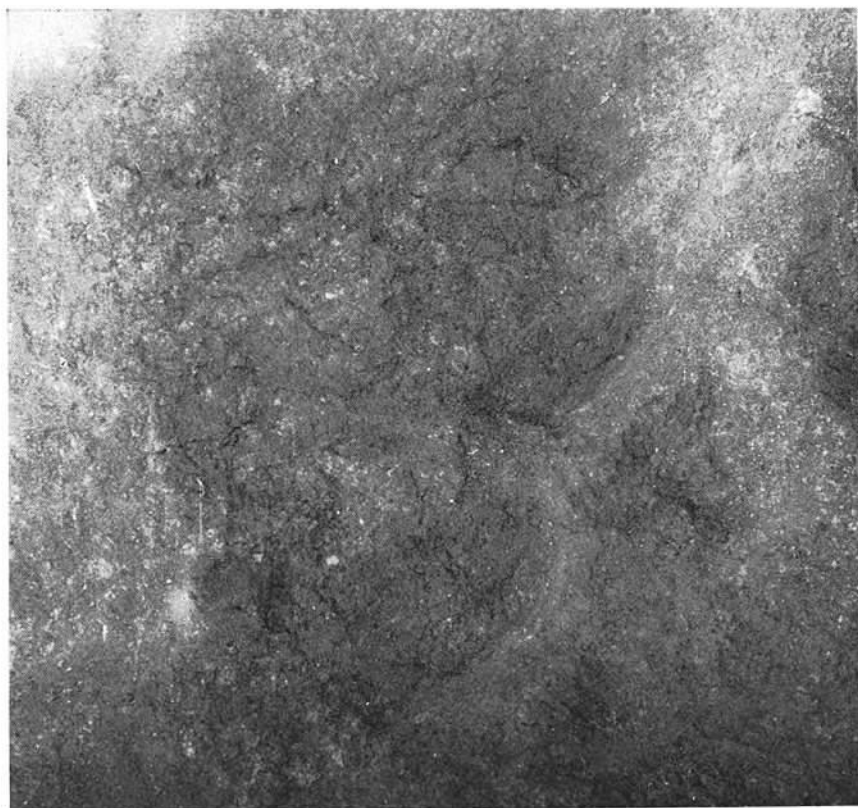


2 高崎 2 号墳奥壁側掘り方





2 高崎2号墳南側掘り方



2 高崎2号墳掘り方壁に残る用具の痕跡



1 高崎 2 号墳遺物出土状況



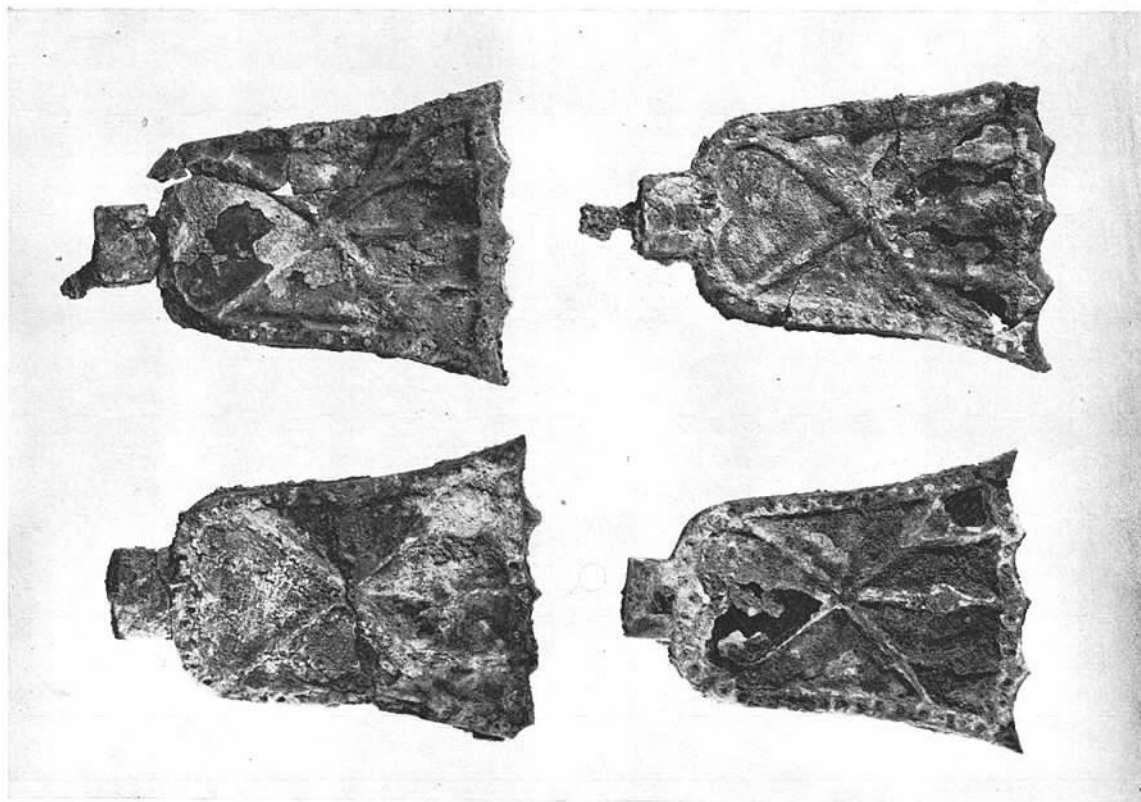
2 高崎 2 号墳遺物出土状況（奥壁側より）



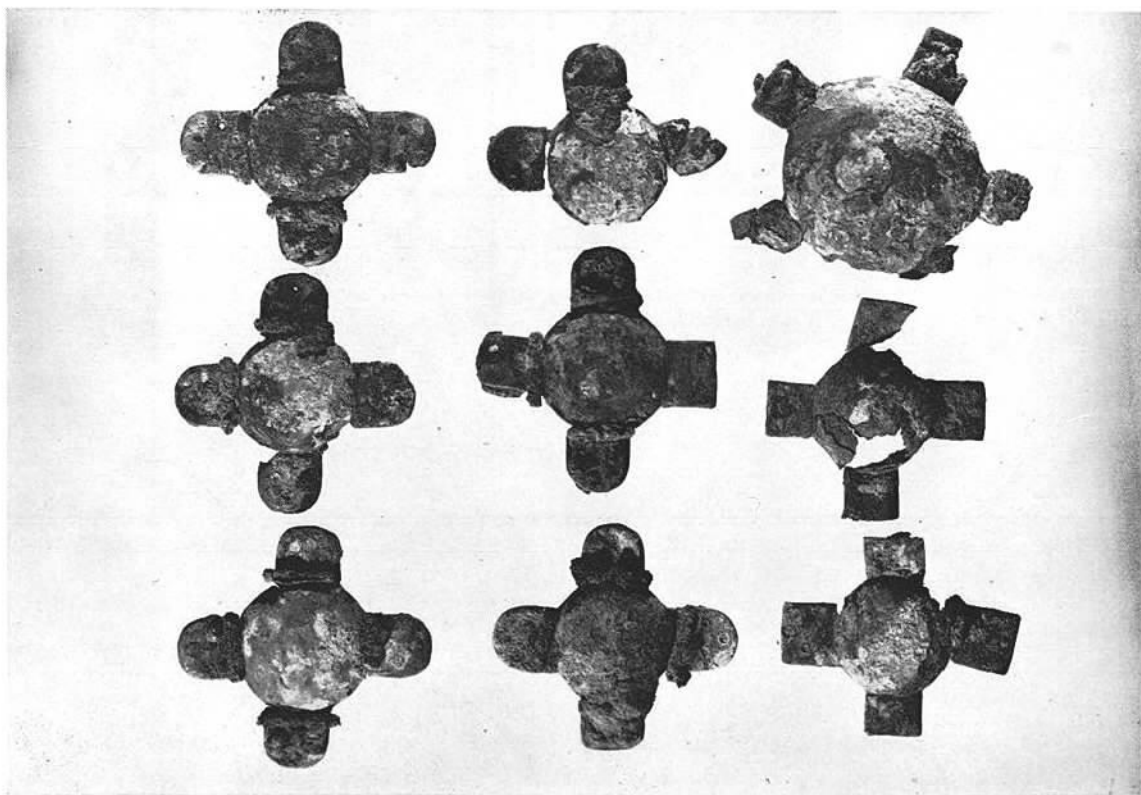
1 高崎 2 号墳単鳳環頭と切子玉出土状況



2 高崎 2 号墳馬具の出土状況

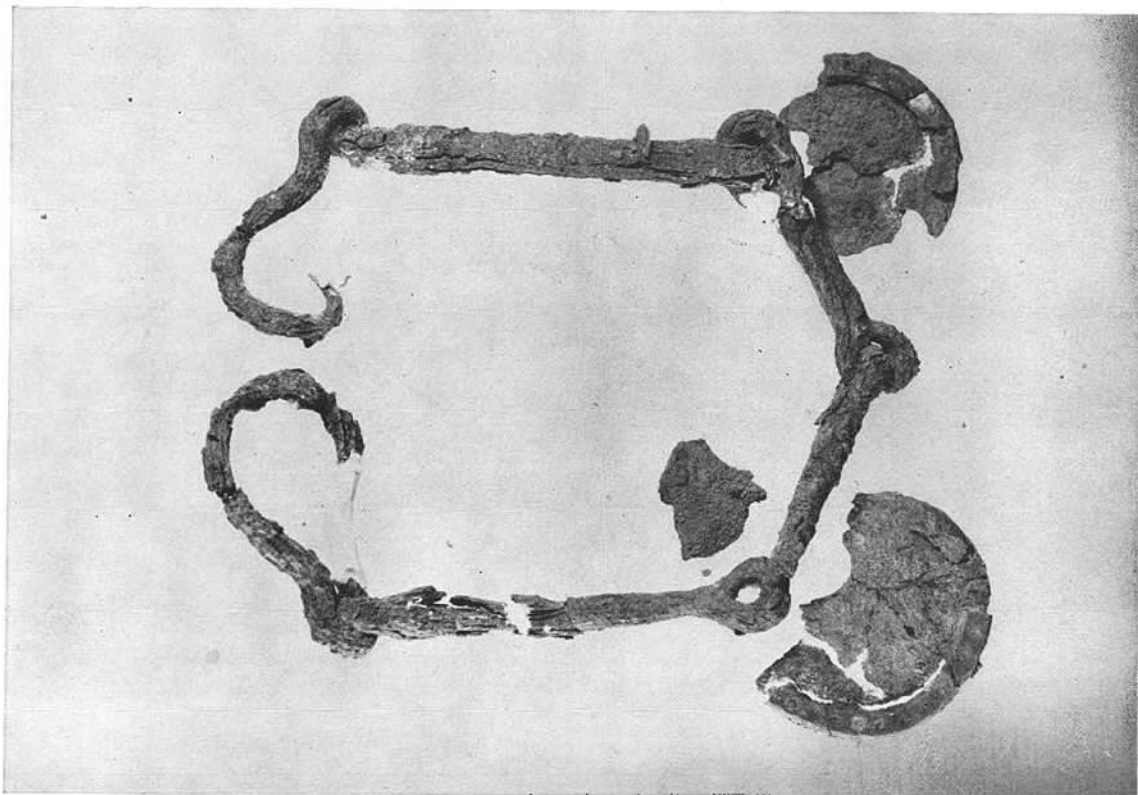


1 高崎2号墳出土の杏葉

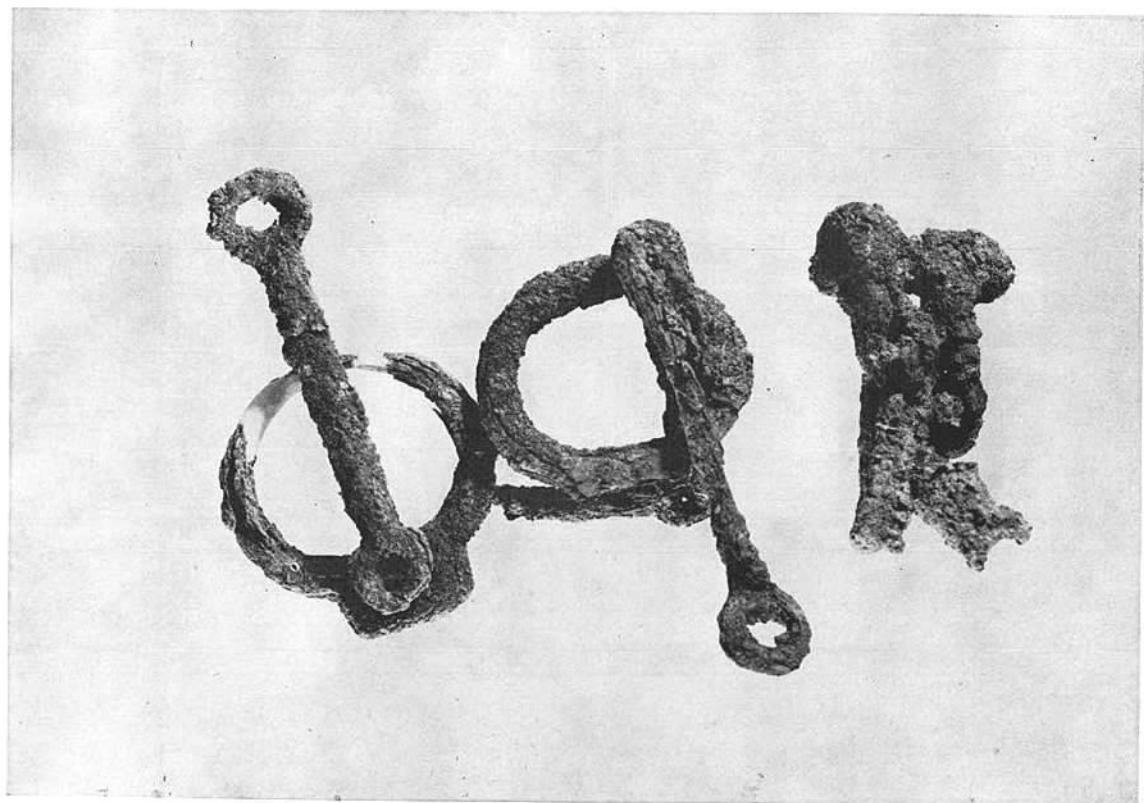


2 高崎2号墳出土の雲珠と辻金具



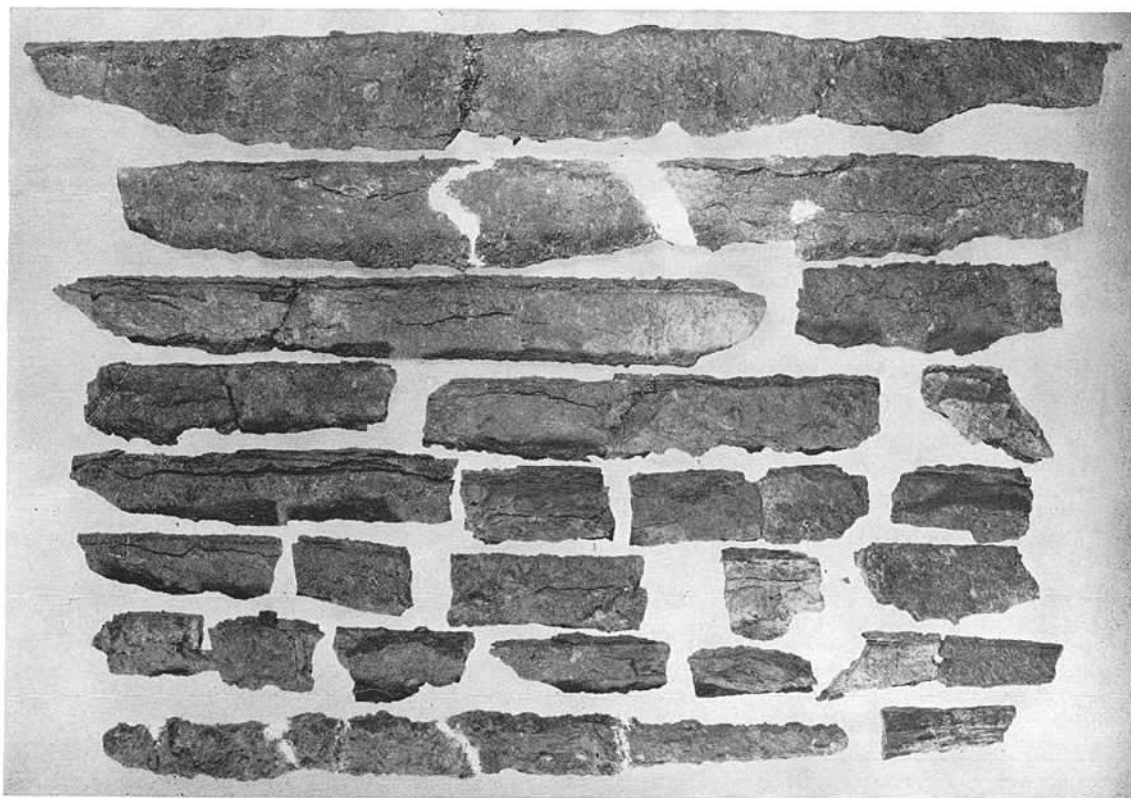


1 高崎 2 号墳出土の轡と鏡板

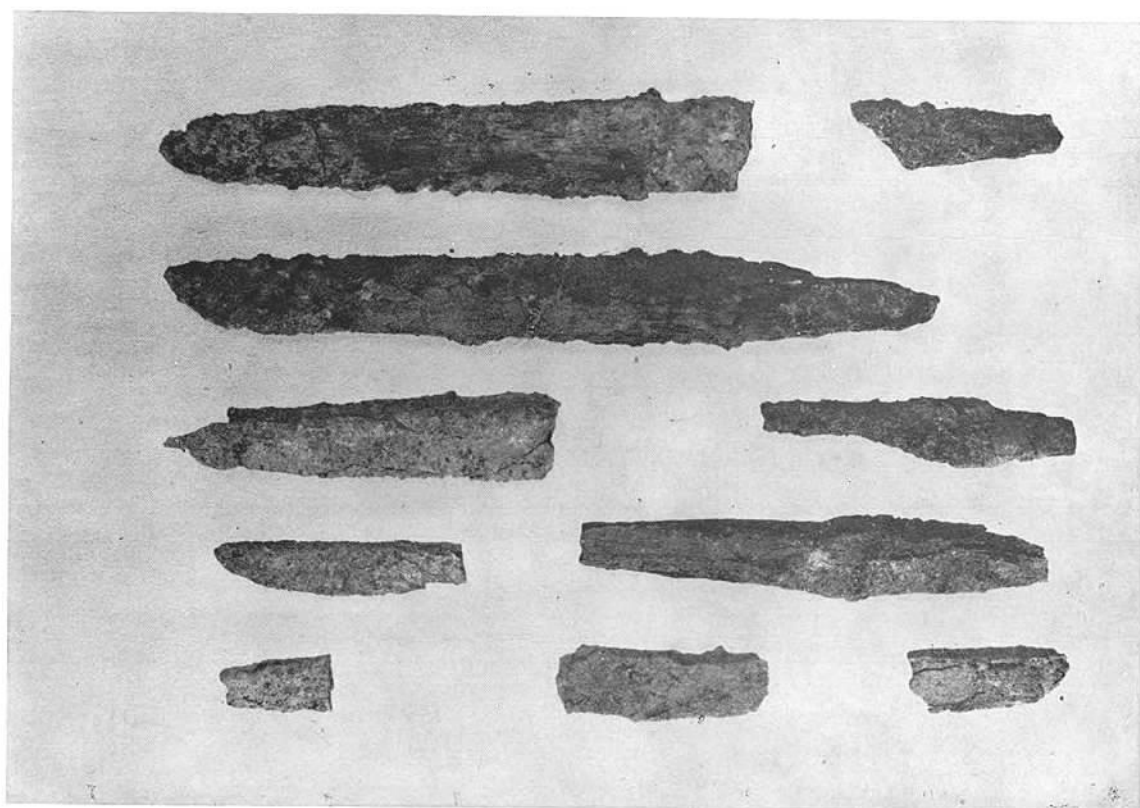


2 高崎 2 号墳出土の轡と兵庫鎖 (右)

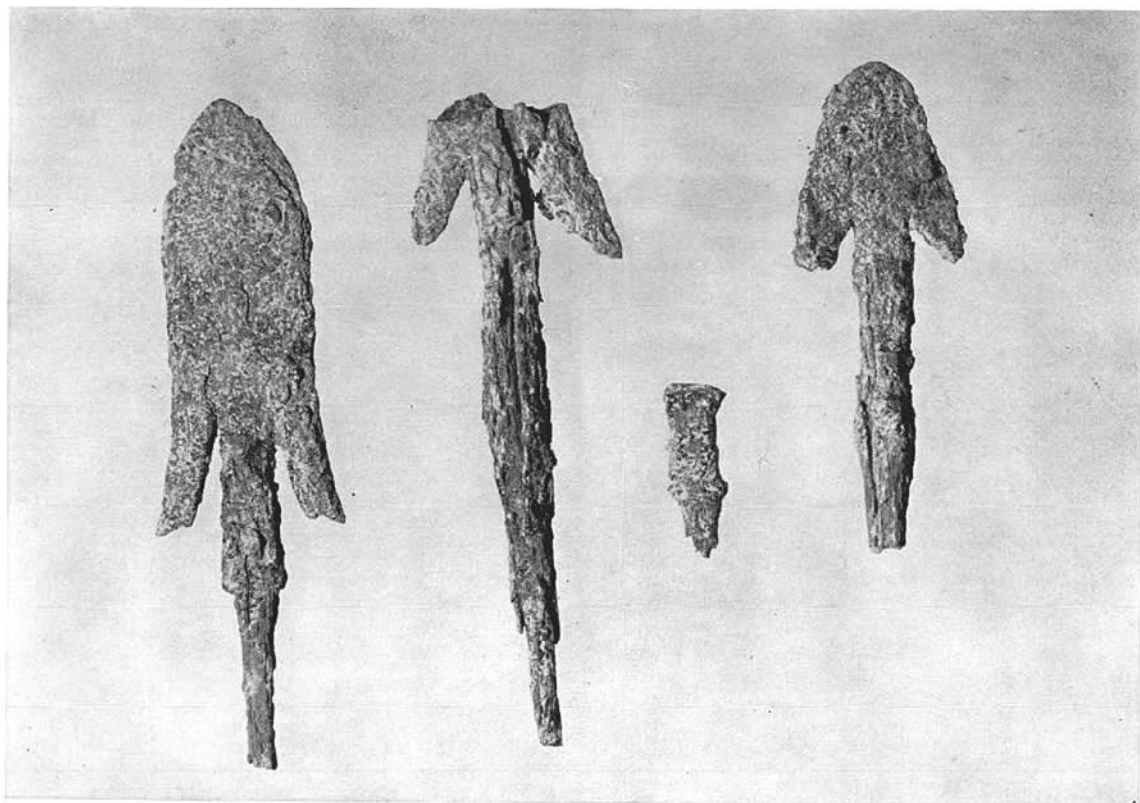




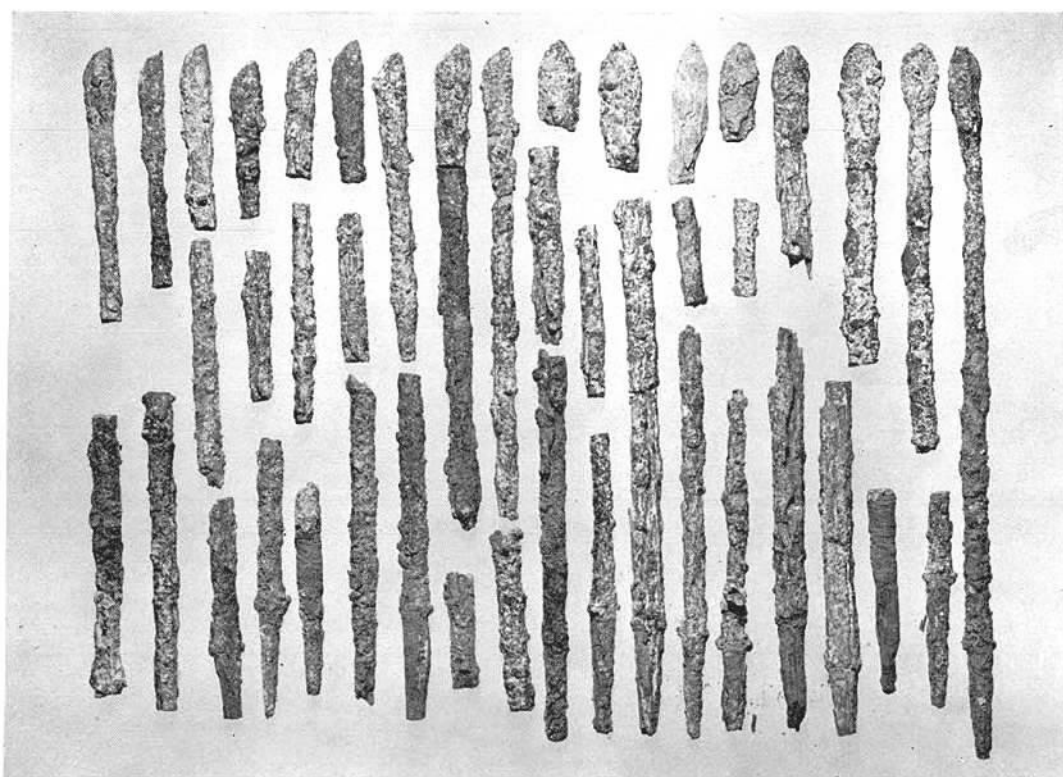
1 高崎 2 号墳出土の直刀



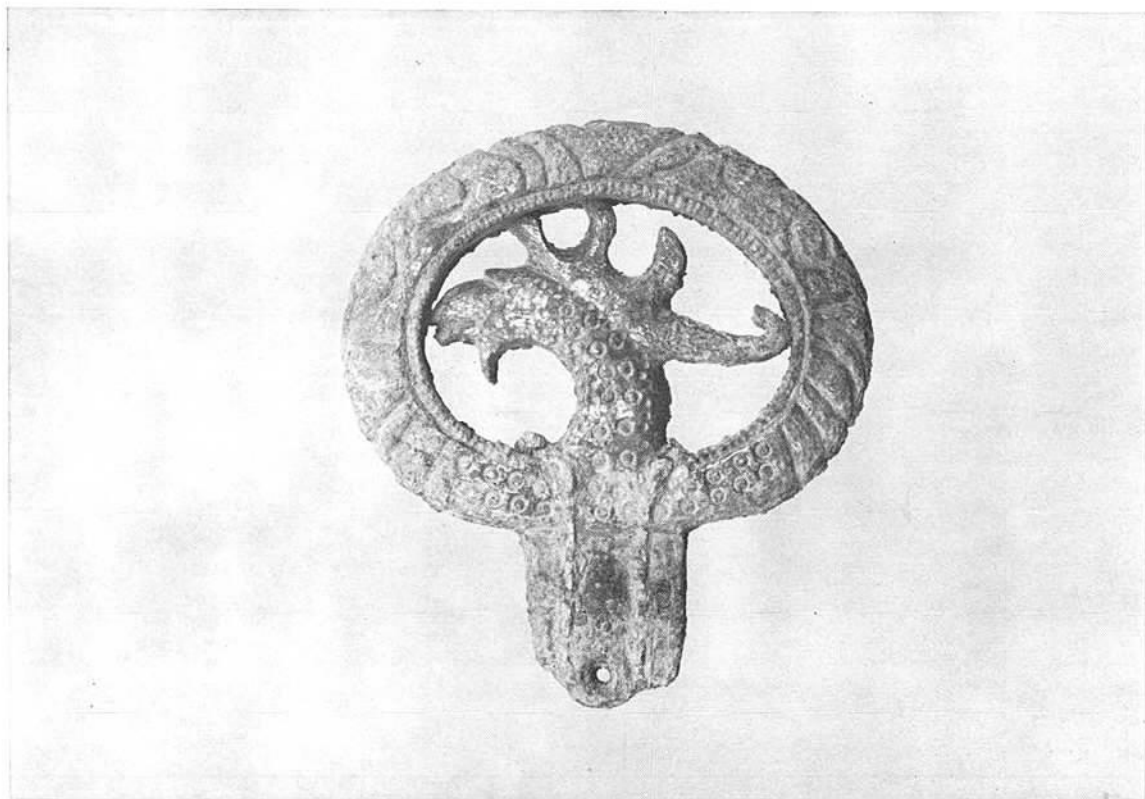
2 高崎 2 号墳出土の刀子



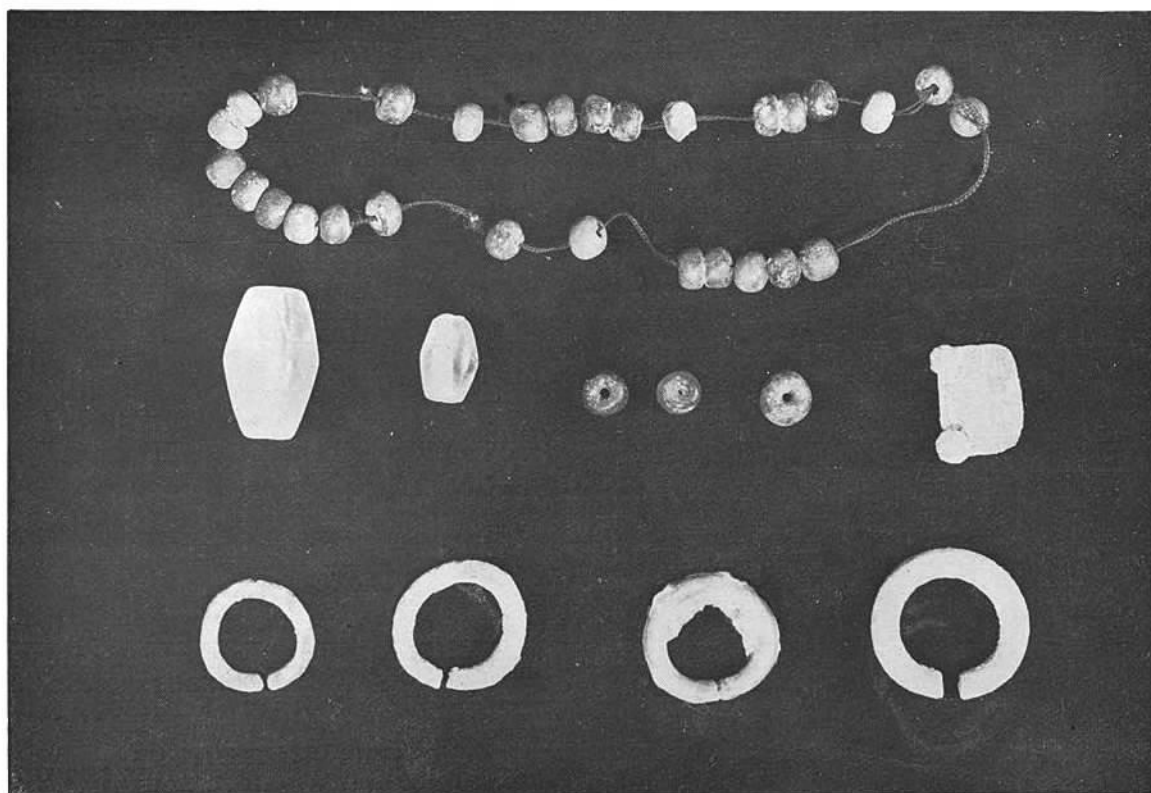
1 高崎 2 号墳出土の鉄鏃



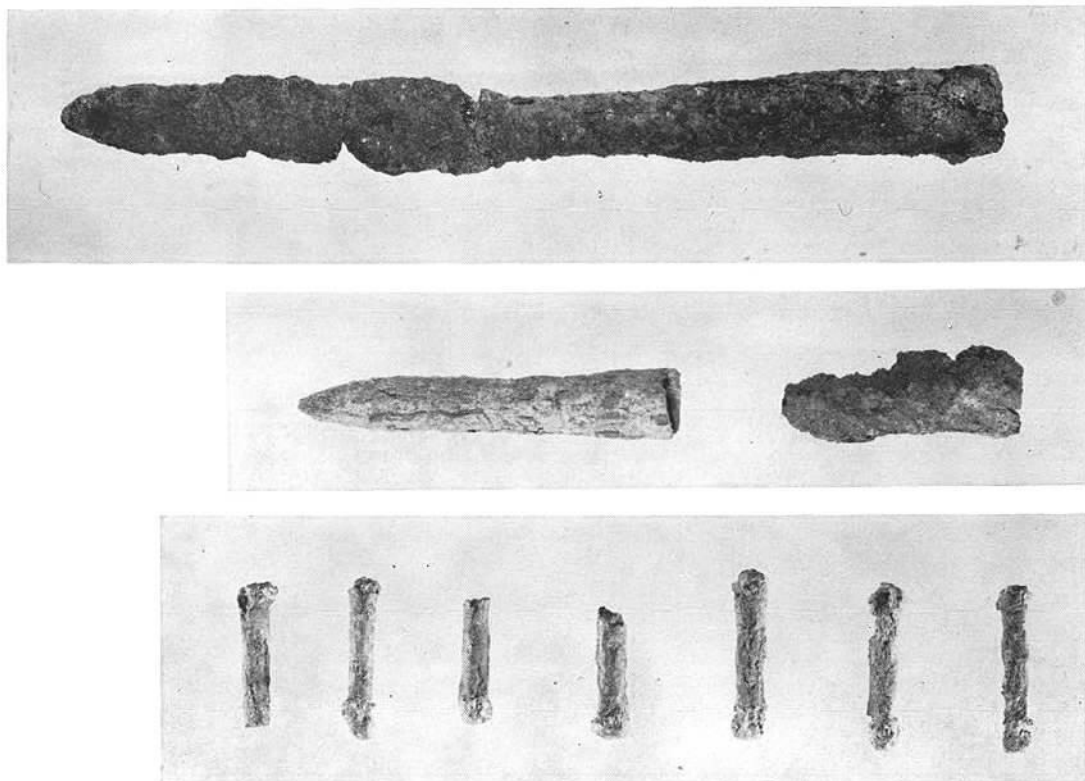
2 高崎 2 号墳出土の鉄鏃



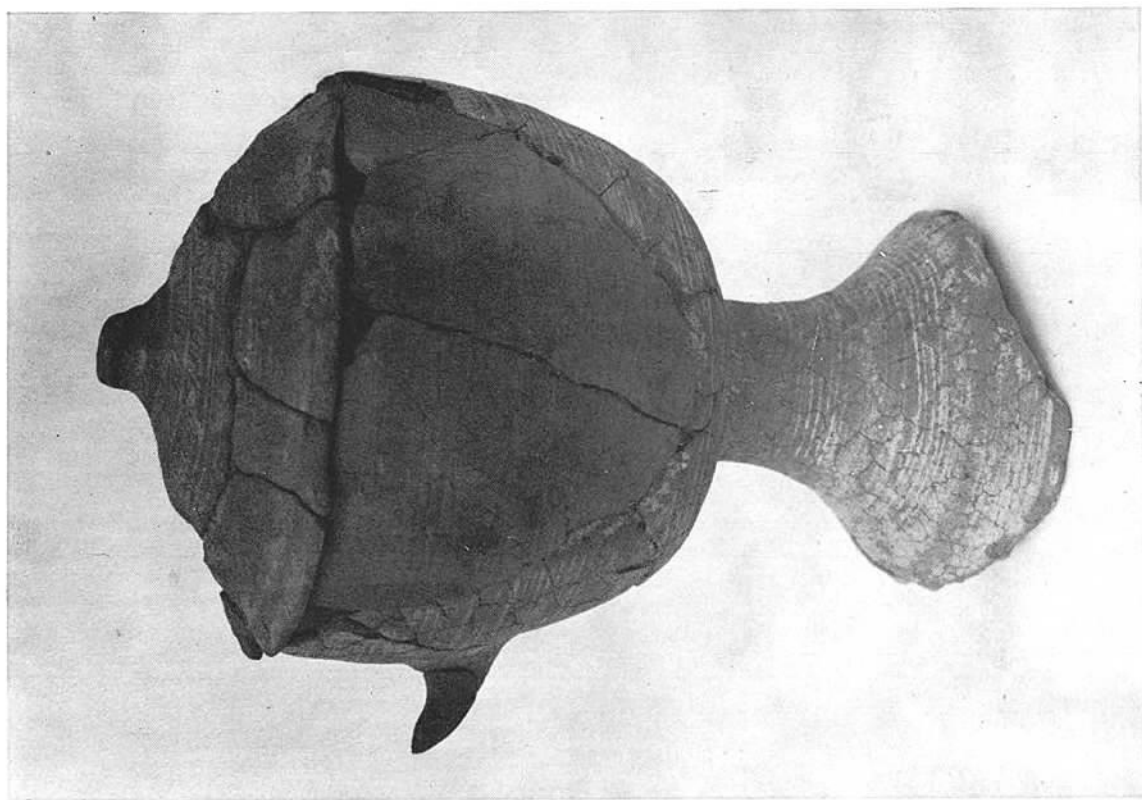
1 高崎 2 号墳出土の環頸



2 高崎 2 号墳出土の耳環、玉類用途不明金具（中央右）

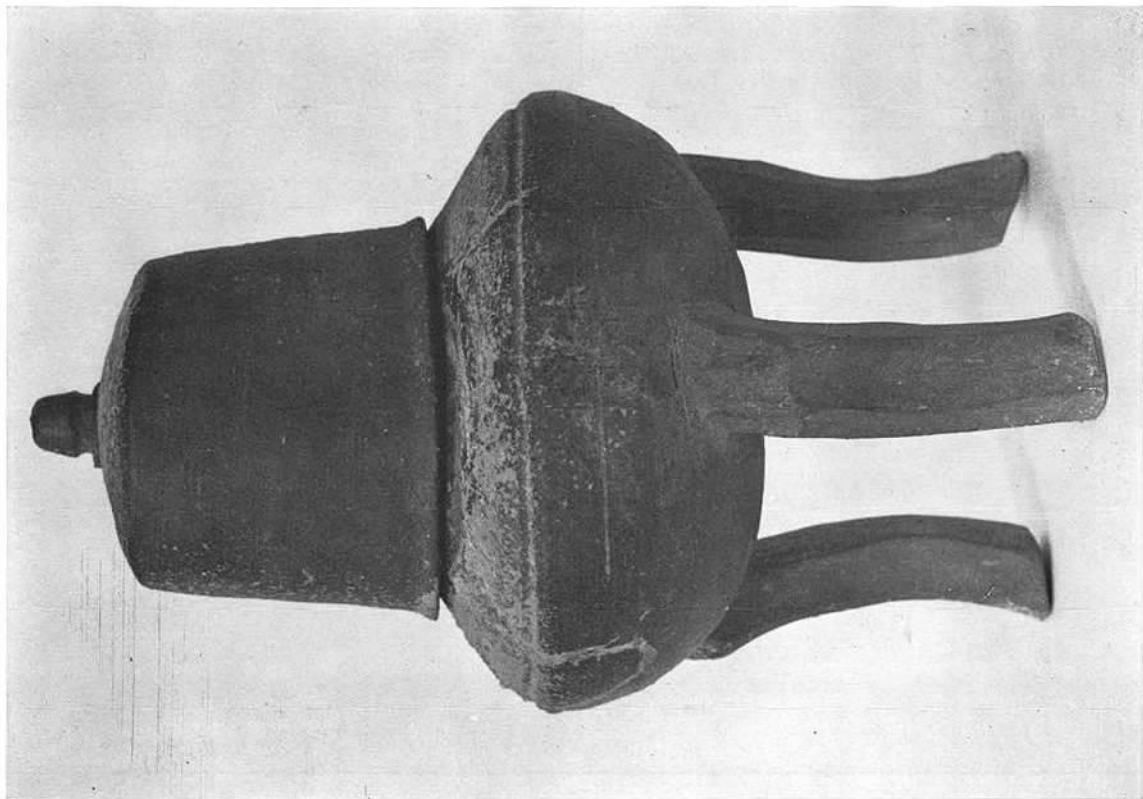


1 高崎2号墳出土の鉄剣、石突、鉄製留金具

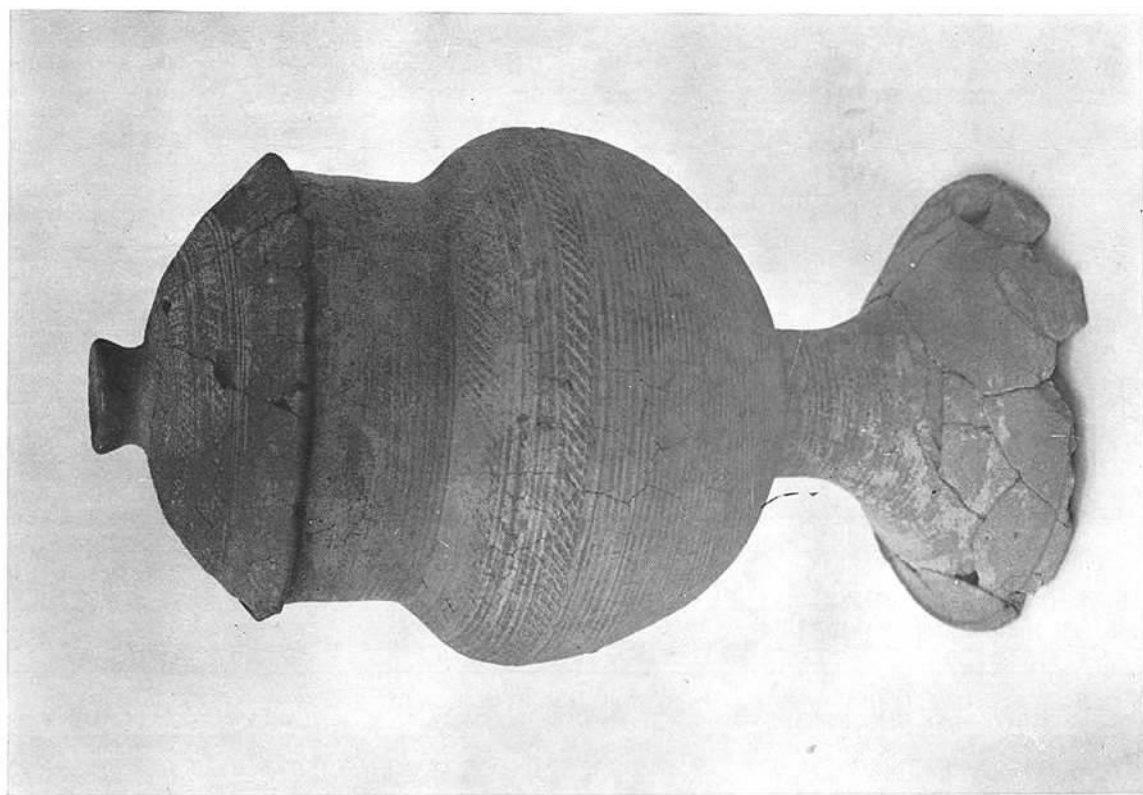


2 高崎2号墳出土の有蓋脚付椀

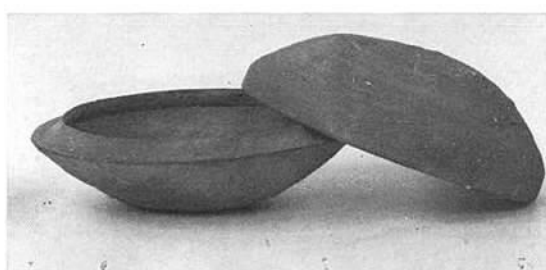
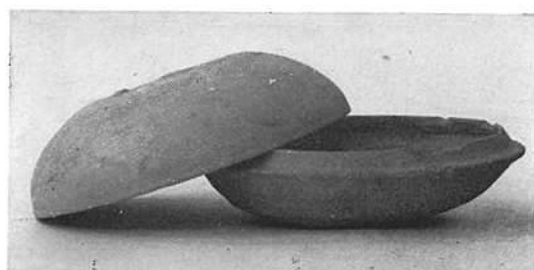
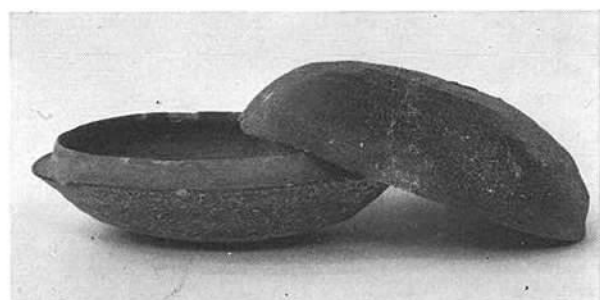
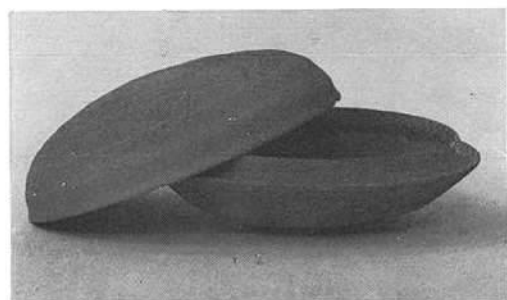
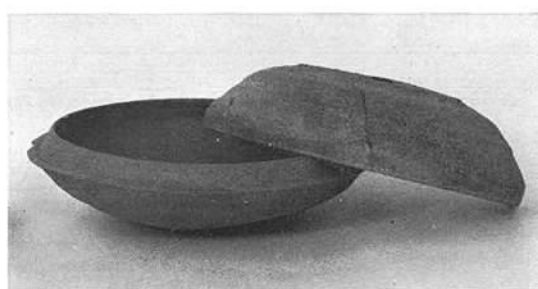
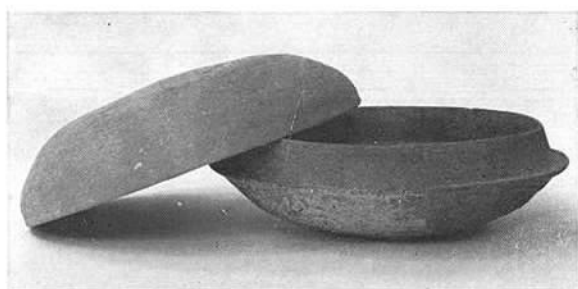
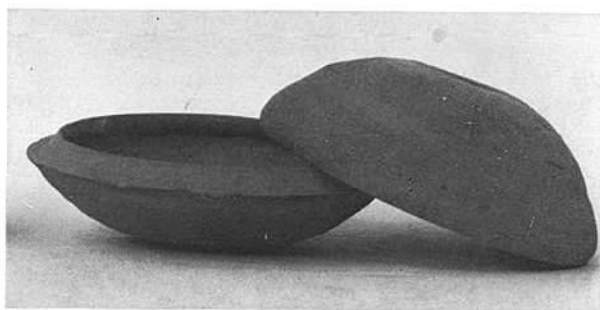
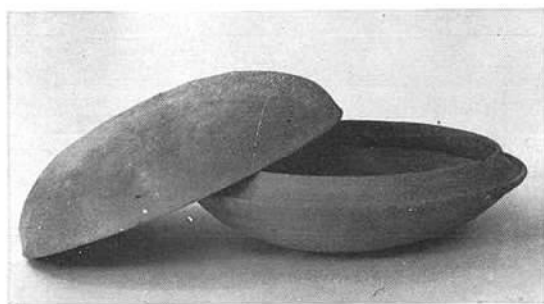
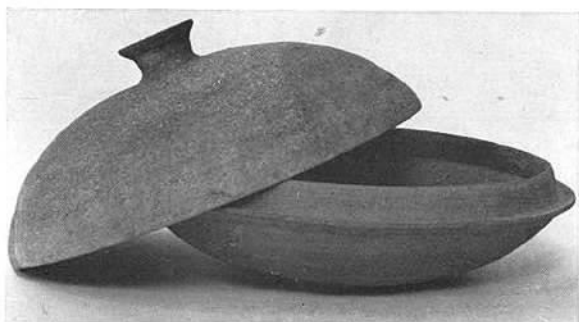
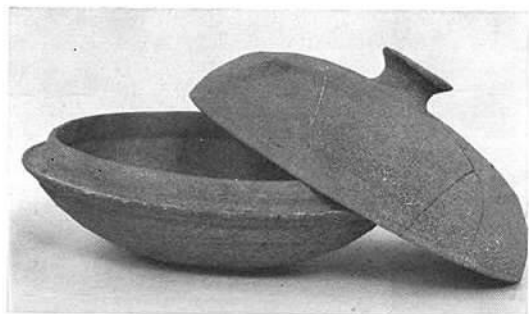




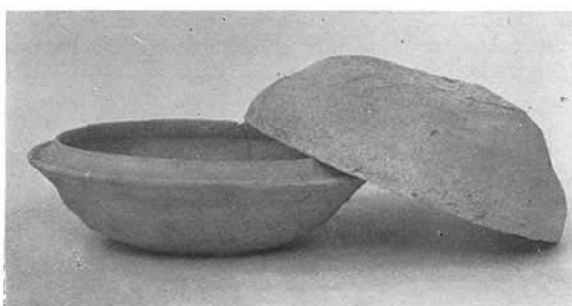
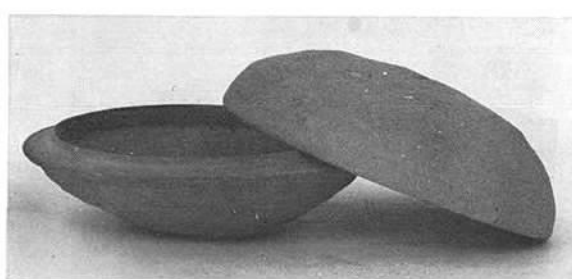
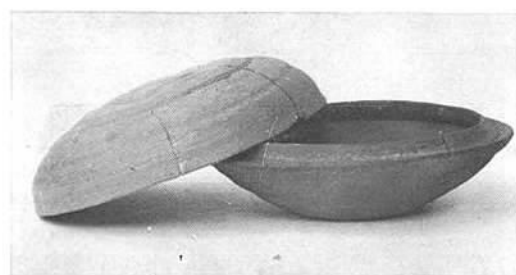
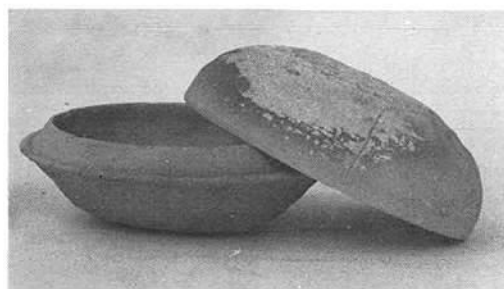
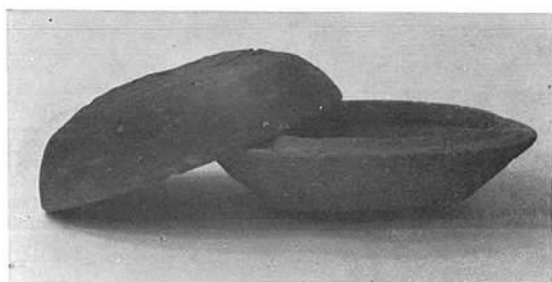
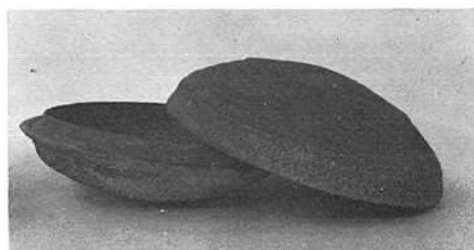
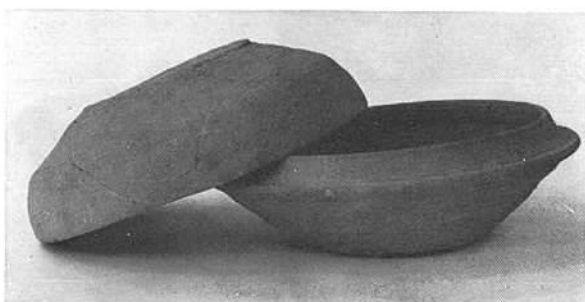
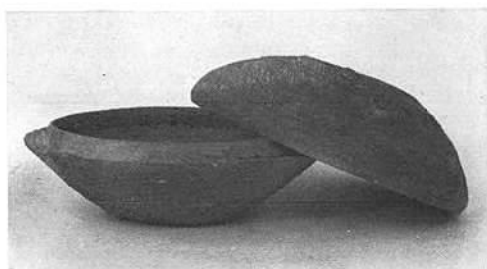
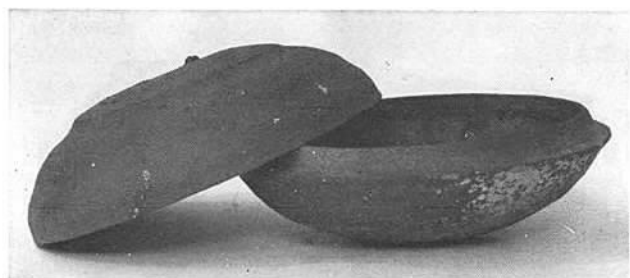
1 高崎 2号墳出土の有蓋足付壺



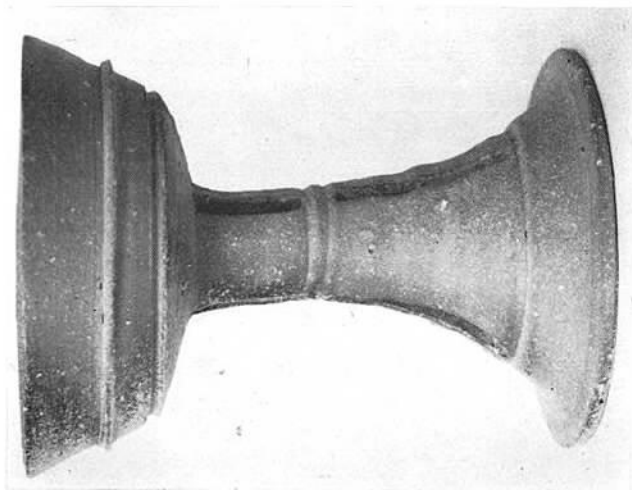
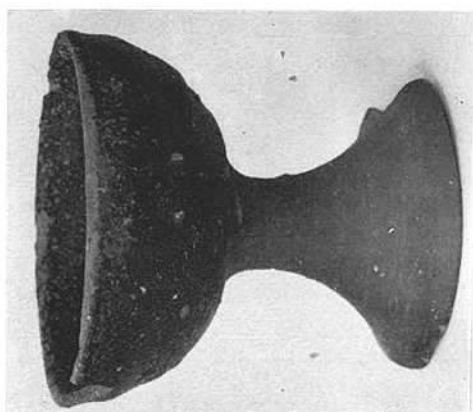
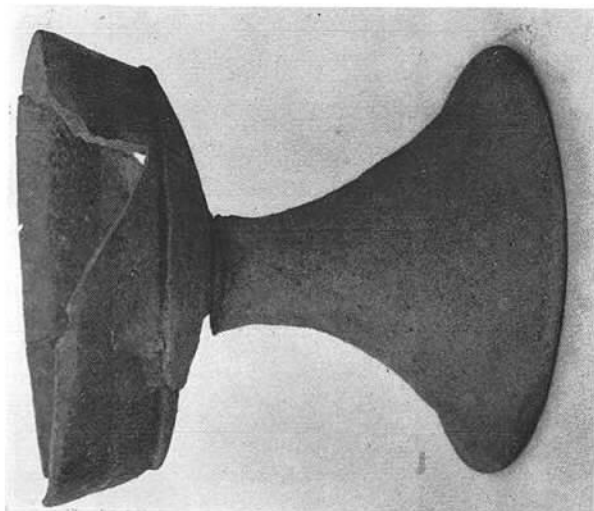
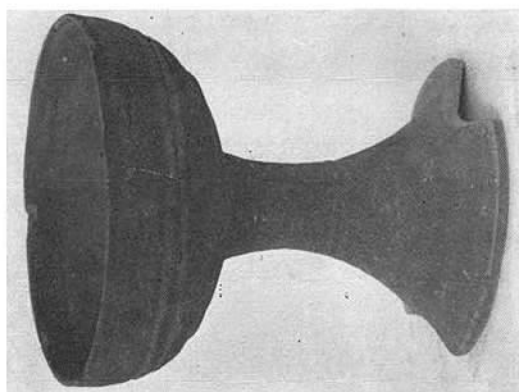
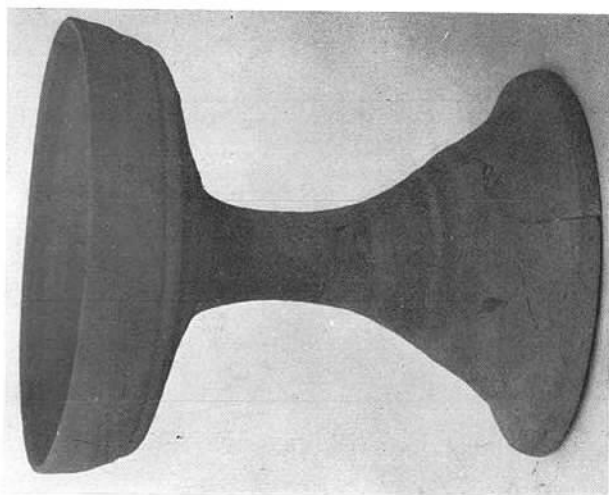
2 高崎 2号墳出土の有蓋脚付罎



高崎 2 号墳出土の須恵器

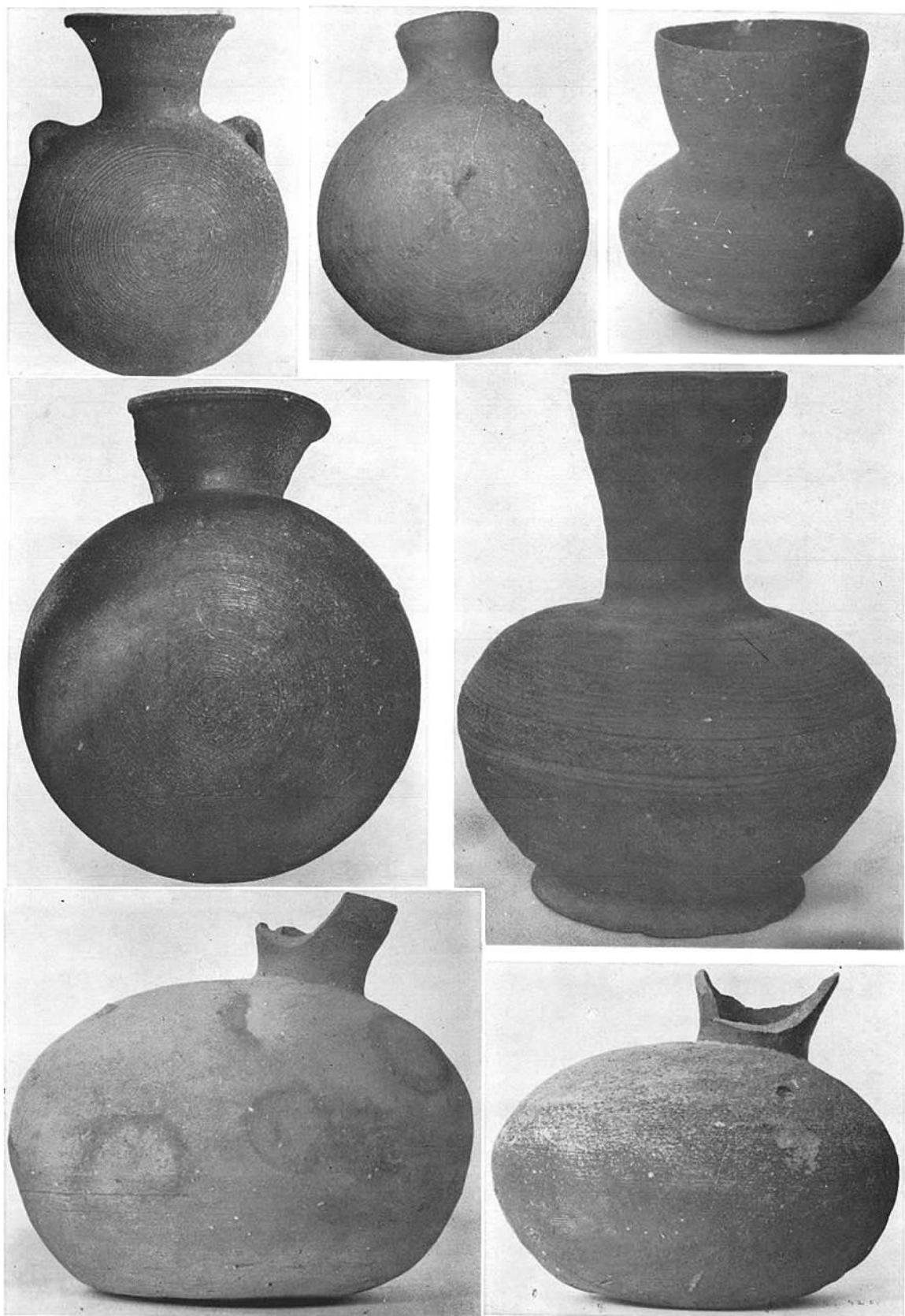


高崎 2 号墳出土の須恵器

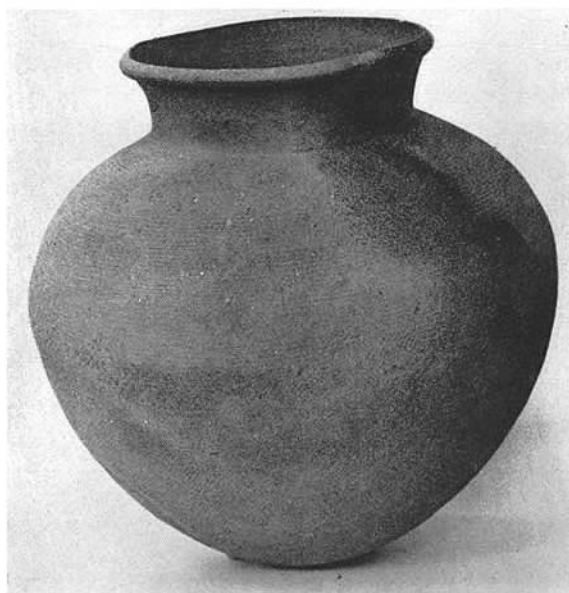


高崎 2 号墳出土の須恵器





高崎 2 号墳出土の須恵器



高崎 2 号墳出土の須恵器



高崎 2 号墳出土の土師器



高崎 2 号墳出土の須恵器及び青磁





1 高崎 3 号墳墳丘（北より）



2 高崎 3 号墳（羨門部より）



1 高崎3号墳羨道部遺物出土状況



2 高崎3号墳羨道部遺物出土状況



1 高崎 4 号墳の現状



2 高崎 4 号墳石室



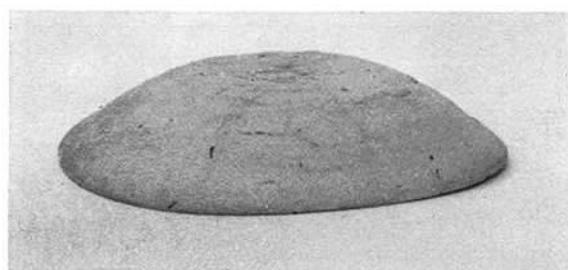
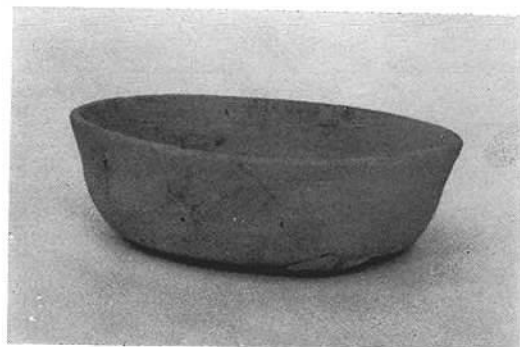
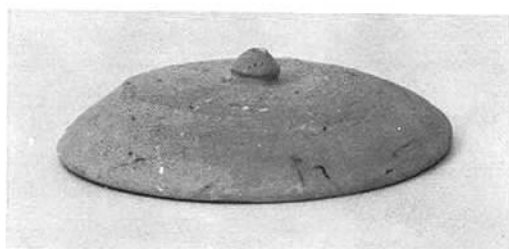


1 高崎4号墳羨道部遺物出土状況

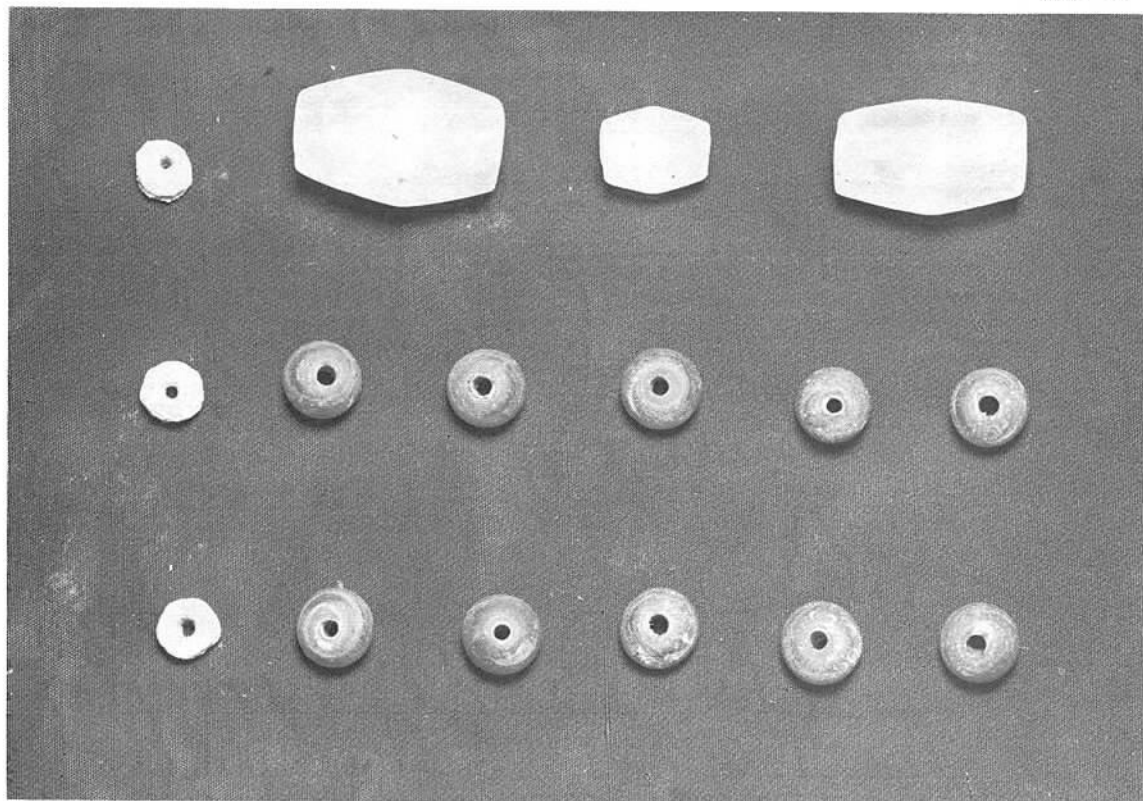


2 高崎4号墳遺物と閉塞石出土状況





高崎 3、4 号墳出土の須恵器



1 高崎4号墳石室内出土の玉類



2 窯状遺構



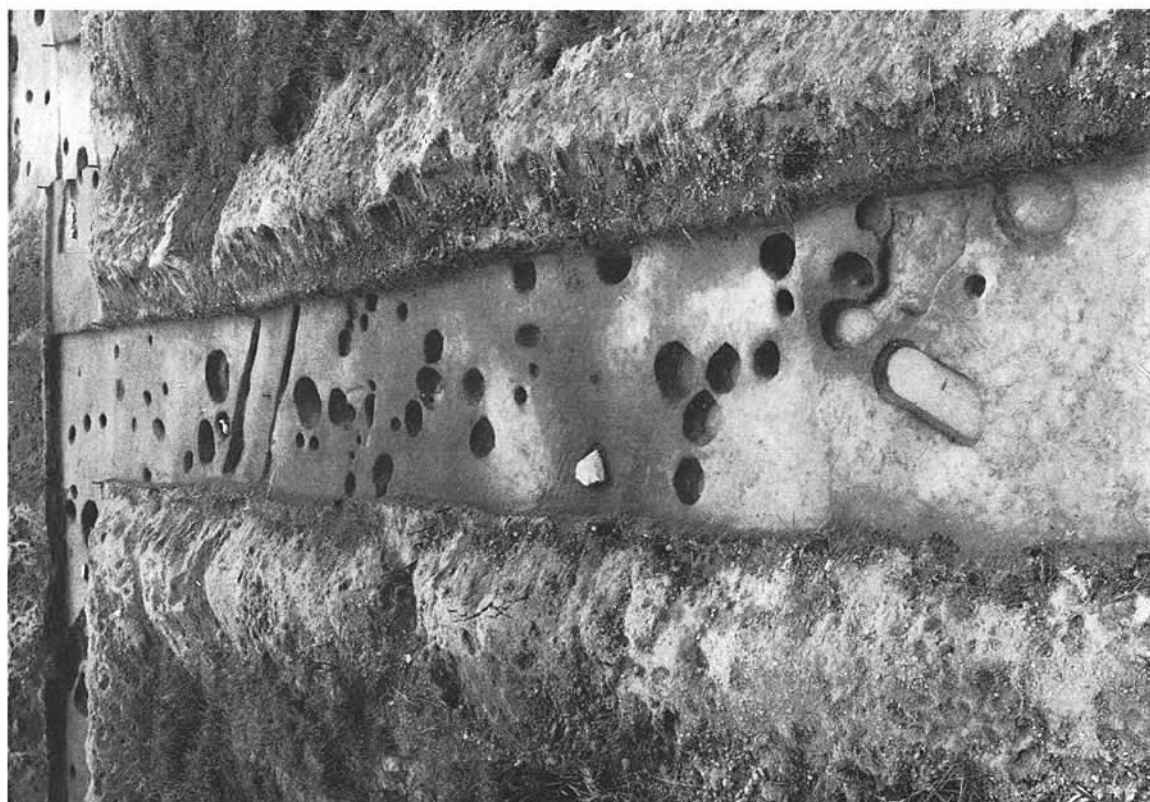
1 高崎大又遺跡遠景（高崎2号古墳より）



2 発掘区全景（高崎2号古墳より）



1 遺構を南から (G~7区)



2 遺構を西から (P~16区)

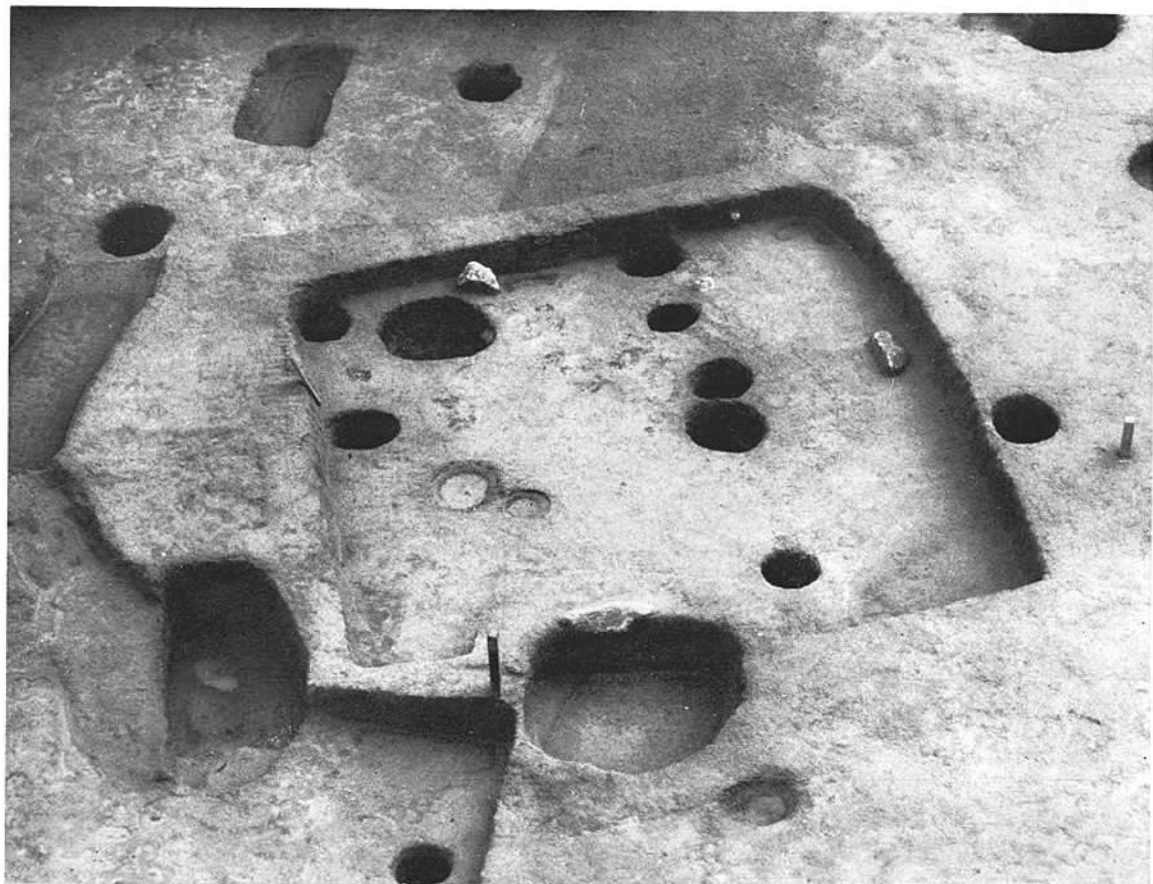




1 第1号住居址(東より)



2 第1号住居址断面(東より)



1 第2号住居址(西から)



2 第3号住居址(北から)

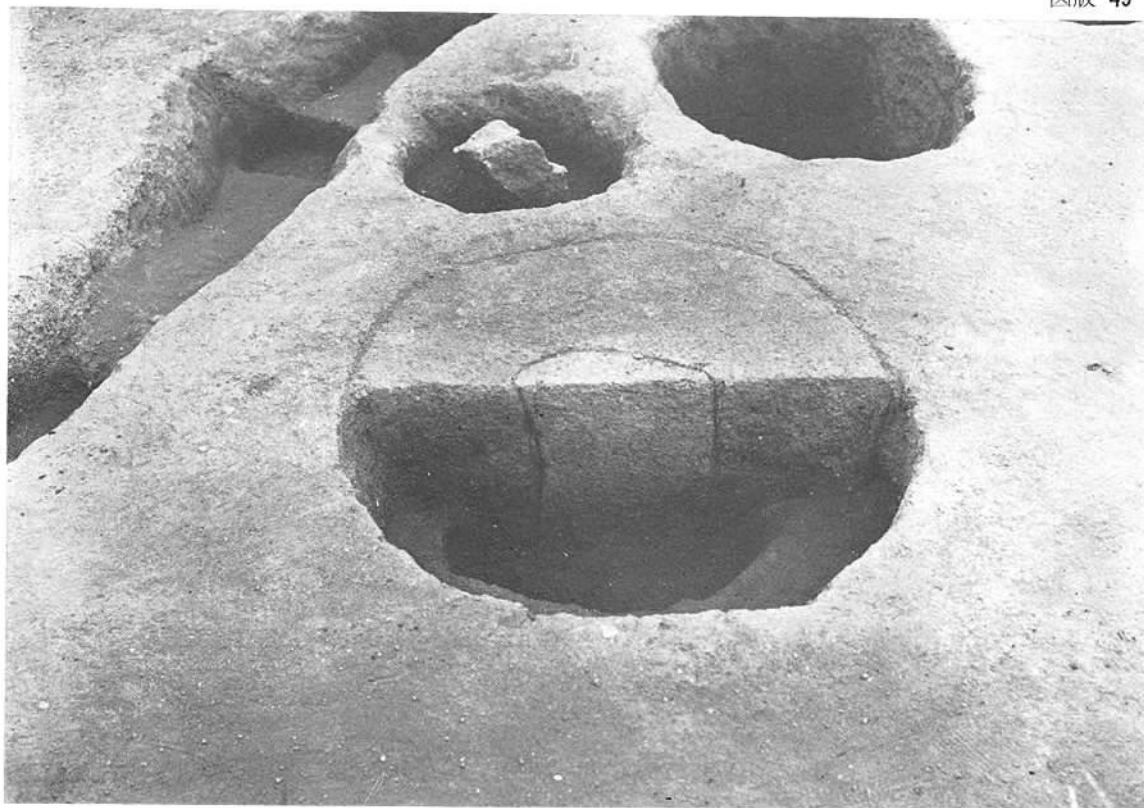


1 第4号住居址(南から)



2 第4号炉址東側砥石出土状況





1 掘立柱出土状況 (P~9区)



2 遺構及び遺物出土状況 (P~14区)





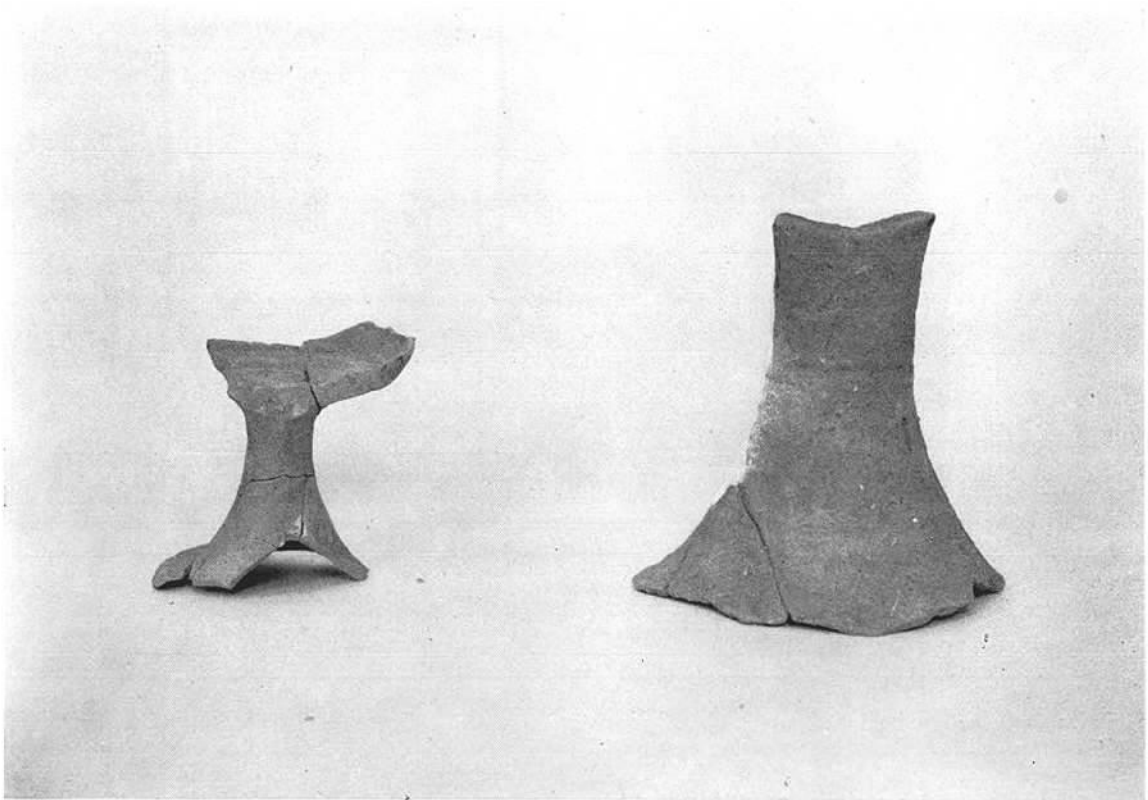
1 P~14区 出土 遗物



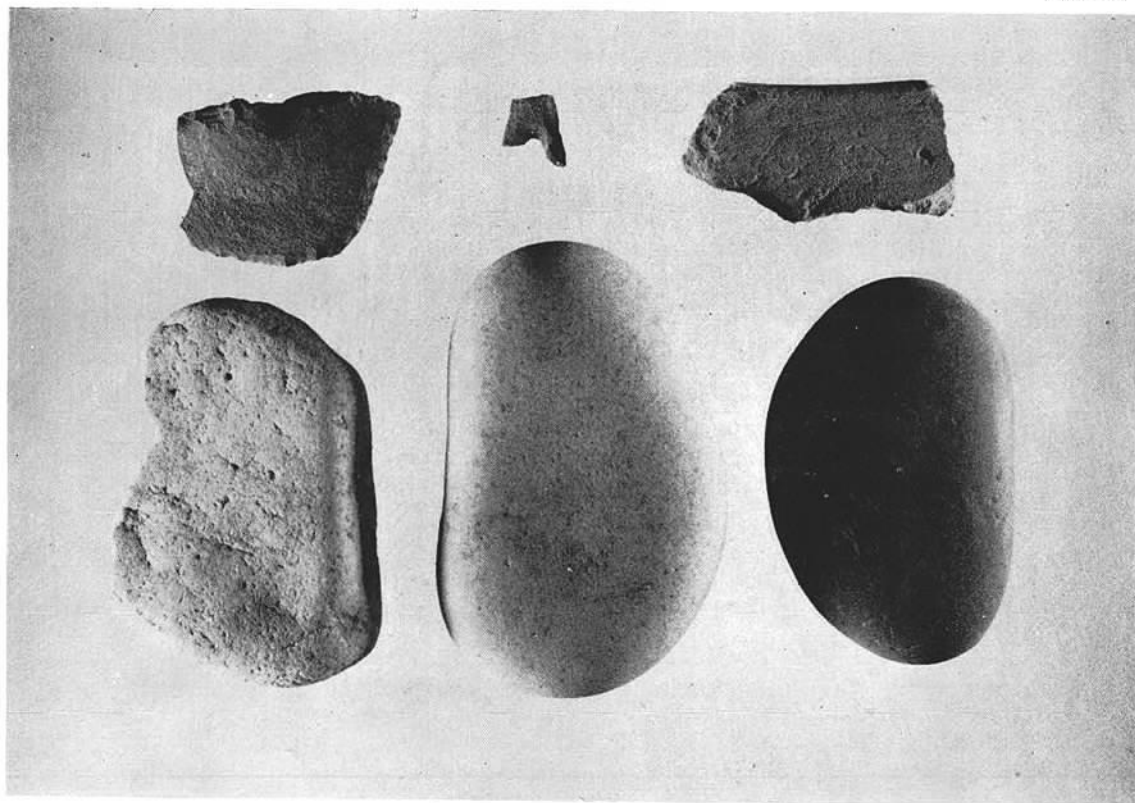
2 L~7区 溝 出土 遗物



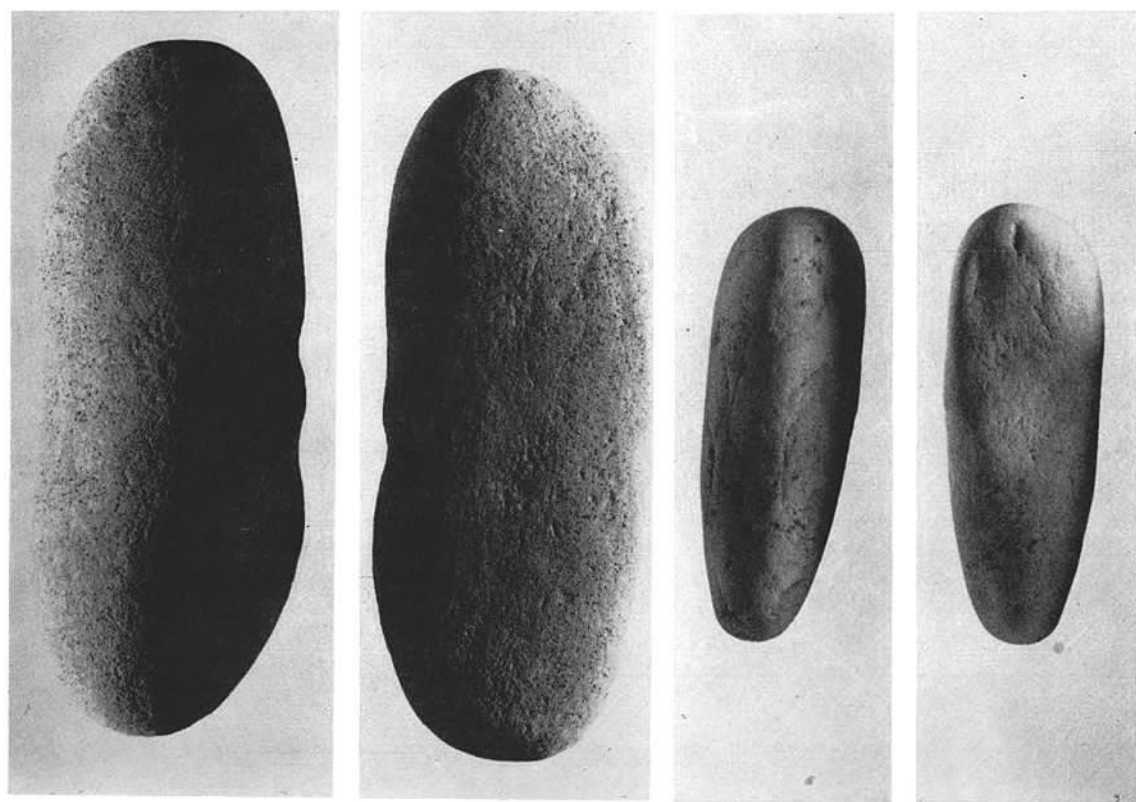
1 P~14区 出土 遗物



2 出土遗物 高 杯



1 出土遗物 石 器



2 第 4 号住居址出土砥石

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告  
—第1集—

昭和 45 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市西中洲 6 街区 29 号

印刷 正光印刷株式会社  
福岡市赤坂 1 丁目 2 の 21  
TEL ☎ 3 2 6 9